鹿屋デイズ・鹿屋ライフ

ミギー・ドン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鹿児島は鹿屋にある鹿屋基地。そこで働く艦娘たちと司令官の日常のお話です。

ご意見ご感想ありましたらよろしくお願いいたします。

目次

三周年だよ全員酩酊 1
ドッキングセンサースタンバイ・前編 7
ドッキングセンサースタンバイ・後編 16
Ｃｒｅｍａｔｉｏｎ 31
冥王計画 34
おいでませ岩川 43
ひみつ解説・艤装編 53
Ｓｕｎｄａｙ 65
サムソンティーチャー危機一髪 78
サムソンティーチャーむかしばなし・前編 88
サムソンティーチャーむかしばなし・中編 98
サムソンティーチャーむかしばなし・後編 109
師走の来訪者 120
ひみつ解説・適合者編 130
師走の風 144
助けたり、助けられたり 154
碧雷（１） 166
碧雷（２） 180
碧雷（３） 196
碧雷（４） 214
碧雷（５） 236
クリスマスだよ全員集合 263
おさいじゃったもんせ、鹿屋基地・前編 274

三周年だよ全員酩酊

三周年である、英語でいうとサードアニバーサリーでありつまりめでたい。

実際のところは、サムソンが鹿屋基地に赴任してからまだ2年半なのだが、隼鷹が「おっさん早生まれなのオ!? じゃあ宴会が早くても問題ないじゃん!」と、謎の理屈で押し切ったため、今こうして宴が催されているというわけである。

ここの提督の名は寒村先生(さむらさきお)、階級は中佐である。周りからはサムソンとかティーチャーとかサムソンティーチャーとか呼ばれているが、ここではサムソンで統一させていただくものとする。

ともかくサムソンがトイレから戻ると、もはや場は混沌と化していた。

寝る者、歌う者、飲む者食う者踊る者…艦娘の外面だけしか知らない者からすれば、「なんと羨ましい!」といった感想も出ようが、実際はさにあらず、であった。

異性の目の殆ど無い基地において、慎みや恥じらいといった概念は早晩その意味を失い、男色を趣味とした者、あるいは女性が苦手な者が落ちる地獄があるとすれば、きっとここはそれと同義であろう。

「んんんんんんｎ!!!!」

「ぶっこ…ンアアアアアぶっころされてぇかァアアアアアこのクソだけんがァアアアア!!!!」

場の中央では、高雄型重巡洋艦・摩耶と、金剛型高速戦艦・比叡の腕相撲が始まっている。

突き出された摩耶の尻はスカートがめくれパンツが丸出しで、また比叡もおよそ女子の取っていいポーズとは言えない謎の姿勢で力をぶつけ合っていた。

「こらァ摩耶ー! セクスィー! セクスィーショットじゃぞ!

パンモロ警報発令中であるぞー!」

「うるっせぇぇぇぇぇ利根てめぇエエエエエエー!」

「司令よ、摩耶のパンツだぞ。今ならなんと見放題だ。写真に撮っておいて、あとでデータでやろうか？」
「そんな事をしたら明日の夕刊に載ってしまうんじゃないかな…」
「…どういった方向性で乗りたいかにも拠るんじゃないか、事故か事件かあるいは人事か」
大騒ぎする利根型航空巡洋艦・利根と、サムソンの前のつまみをぽりぽりと齧りつつ絡んでくる陽炎型駆逐艦・磯風。利根は騒ぐだけで酒癖は悪くないのだが、こちらの磯風はあまりよろしくない。普段は真面目で物静かな娘なのであるが…
「摩耶にサンドバッグにされるか、盗撮で逮捕されるか、左遷されるかってことじゃないか！」
「いかにも左様だな…まあいい、じゃあ目に焼き付けておけばいいさ」
「そういうのいいから…」
サムソンはそう言って、グラスに満たされたハイボールを半分ほどあおる。コン、と乾いた音を立て置かれたグラスに、すかさずウィスキーを注ぐのは秋月型駆逐艦・初月であった。
「いや、あの…初月さん？　まだ残ってるよ？」
「グラスが空いたら即注ぐものだと教わったぞ。まして僕はここじゃ新入りだから、そういうの気をつけないと」
「いや、全部空いたらでいいからね？　あと序列とかあんまそういうのも気にしないでいいからね？　あとそれ炭酸水じゃなくてタブクリアだからね？」
既に酔っぱらっているのか、初月は聞く耳をもたずドボドボとタブクリアをグラスに注ぎ、傍に散らばっていたポッキーでもってかき混ぜる。しっとりとしただけん、という評を持つ初月にそうまでされては、飲まぬという訳にもいかない。
サムソンは面白い表情でもってそれを呷った。
「あああああアアア！　んだらこの金剛型がァアアアア！　高雄型ナメんなこらァアアアアア!!」
「ふっふっふ…タカオタイプがいかに優れていようと、それは重巡

でのお話ですよ摩耶ちゃん」
初めは拮抗していた力比べであったが、そこは比叡、戦艦である。摩耶の腕はもはや接地寸前であり、彼女もおよそ女子がしていいものではない表情を浮かべて耐えていた。
「うぐぐぐ…！」
負けん気の強い摩耶は、いくら宴席での余興とは言え、負けることに我慢が出来ないのであろう。そこでふと、何かを思いついたようである。
はた、裏技か、奥の手か。それともそれ以外か。
「おいィイ比叡てめェこらオイ、お前の後ろにな！　ヒゲ生やしてメガネかけたおっさんが見えるぞ！」
「なんと!?」
その言葉で十分であった。比叡は力比べの最中であるにも関わらず、体勢を変えて真後ろを見た。
次の瞬間、比叡の身体は叩きつけられた己の手の甲を中心として回転し、そして吹き飛ぶ。
「あいたー!!」
「フゥーッ、フゥーッ、ハハハッ、ぜぇぜぇ、どうした比叡ちゃんよ、知らないヒゲのおっさんはいたかよ」
「き、汚いですよ摩耶ちゃん！　あれ提督じゃないですか!!　ヒゲのおじさんはもっと雅でやんごとなき顔してましたよ!!」
「へへへ…どのヒゲのおっさんの事だと思ったんだよ、あたしは別にあのヒゲのおっさんの事なんて言っちゃいねえぜ…」
比叡の手を取って引き起こし、摩耶はギタリと笑ってみせた。確かにそうだ、と比叡も納得して笑い、そのまま座って酒を飲み始めた。あのおっさんがどのおっさんの事かはここで明言するのは避ける。
「…ちょっと胃が痛いんだけど」
「まあ、うむ…あれはギリギリだなあ…」
さて、宴もたけなわである。
寝てしまったものは適当にどけて、今度は隠し芸大会が始まろうと

していた。
「はい！　一番叢雲！　やるわ！」
「イエーーー！」
割れんばかりの拍手と歓声を受け、お立ち台に上がったのは鹿屋基地最古参の艦娘、特型駆逐艦・叢雲である。
酒を飲むと割と人当たりがよくなるので、こういう席においては大抵飲まされているようだ。
そんな叢雲は腕を組んだまま動かない…いや、身体の一部分だけが動いていく。
「あれ動くんだ」
「あぁ、アタマノウエニウイテルーノのことね。私も最初驚いたけど、これはもうオチが見えたわね」
カルーアミルクを舐めていた千歳型軽空母・千代田と、水割りを呷る妙高型重巡洋艦・足柄。比較的静かな部類に入るが、どちらも一癖ある艦艇である。
ともかくそんな彼女たちを前に、叢雲のアレ…通称アタマノウエニウイテルーノが、移動を終えて頭にくっつく。
「クワガタ！」
「…」
場が一瞬しいん、と静まり返る。
叢雲は完全に滑ったと、そう悟ったのか、アタマノウエニウイテルーノと頬を真っ赤に染めつつお立ち台から降りていく。
「叢雲ちゃんそれ前にもやったっぽい…」
「えッうそ、何時!?　マジで!?」
「二周年の時にやったな、あの時は受けたが…まあ相当酔っぱらっていたからな…」
「そ、そういうのは早く言いなさいよバカァ！」
同期の白露型駆逐艦・夕立と初春型駆逐艦・若葉に突っ込まれ、叢雲はソファの上で悶絶する。
だが今更どうなるものでもなく、次の挑戦者がお立ち台に立った。
「二番時津風ぇ、お歌を歌うよぉ」

何処から調達したのか、マイク代わりの長ネギを持って壇上に上がったのは陽炎型駆逐艦・時津風であった。
無邪気な子犬との評を持つ時津風は、部隊のアイドルと言っても過言ではない。その時津風が歌を歌うとなれば、皆が優しいキモチでもって眺めるのも無理ないことである。
「〜〜〜〜〜♪　〜〜〜〜〜〜〜♪」
ジャス何とかとかいう謎の組織に配慮した結果、その歌詞は何故か表示が出来ないが、時津風の喉からはどこか電子音めいたボーカルが流れ出てくる。
「こ、これは…」
「なぁ磯風さんや、あれはアレかね」
「アレだな…ツインテールと緑のチョッキが目印のアレ」
「チョッキて」
その歌声を聞き、跳び起きて壇上に登ったのは同じく陽炎型駆逐艦の雪風と、扶桑型航空戦艦の山城であった。
「「〜〜〜〜〜♪」」
「わはははははは!!　三人ともえーとホレ、何じゃっけ、初音？　初音ナントカの真似が上手いのー！」
「そりゃまあ、そうだけども…いや何かズルくない!?　ズルいよね？」
「僕も歌くらいなら出来そうな気がするよ、次までに練習しておこうかな」
曲が終わり、急造のユニットが頭を下げれば、否が応にも場は盛り上がる。時津風は何故か集まった同僚たちに胴上げをされ、嬉しそうである。
「まぁ、いいか…あれで作った歌って著作権とかどうなってるの？」
「それは知らん。さて、アレがいいなら私にも出来ることがあるぞ」
そう言うと磯風は手にした梅酒をかっと一息に呷り、傍にあったフランスパンを手に壇上へと向かっていく。
「三番磯風、物真似をさせていただこう」
「おっいいねー！　サンマの物真似とかどう!?」

「それはまたの機会とさせて頂く。今回はそうだな…んん、ん！」
『青いのとか赤いのとか白いのとか黒いのとか沢山いるけど大体同じ顔してる人の真似』
磯風は瞑目し、咳ばらいをいくつかすると、フランスパンをサムソンに突きつけては穏やかな声で、
「問おう、貴方が私のマスターか？」
とだけ呟いた。
だがすぐに、ブーイングの嵐が巻き起こる。
「磯風てめェー！　やめろや！　汚ないぞそれェ!!」
「それいいなら誰かしら何か出来るじゃん!!!」
「何故だ、時津風は良くて私のこれが何故いけないのだ」
「オラー提督ゥー！　何か言ってやれ何かー!!」
「あー僕ァどっちかっつーと赤毛で途中で髪型が変わる幼馴染の方をやって欲しいかな…って」
日和ったサムソンの言葉を受け、磯風はニヤリと笑う。だがその後ろから、今までおにぎりを食べていた雲龍が壇上に上がり、そしてしなを作って、口を開く。
「おはよう浩之ちゃん、今日もいい天気だね！」
「誰だよ浩之って!!!!」
誰だろう。

かくしてちょっと早い、三周年記念パーティは幕を閉じた。
協議の結果時津風と磯風、雲龍の芸はノーコンテストとなり、次回以降は禁止処分となるのだが、それはまた別の話である。
なお繰り上げで優勝した叢雲には、ボーキサイト一年分が送られた。
「意味ねぇー…」

ドッキングセンサースタンバイ・前編

朝である。英語でいうとモーニング。
鹿屋基地はど田舎ゆえ敷地面積だけは他所より大きい。基地の右側には運動場が広がっているし、裏手にはちょっとした山があってカブトムシとかクワガタがワンサカ捕れるので駆逐艦に大層人気がある。でもテレビもねぇ　ラジオもねぇ　車もそれほど走ってねぇ
「あるよ?」
「はい」

今の二人が誰かということはさておき、その運動場の真ん中で、一人体操に励む者がいた。
レディ・ガガのｔｅｌｅｐｈｏｎｅが流れているということ以外は極めて健全な風景である。
「おいっちにぃ、さんし、にぃにっ、さんしぃ」
Ｔシャツにスパッツというその手の人が見れば辛抱たまらん！な恰好で体を動かしているのは、夕雲型駆逐艦・清霜であった。
長女がアレなだけに、姉妹たちもどこか魔性めいた色気を持っており、この清霜とてそれは例外ではない。ええやんけ…なあ…夜の進撃しようや…という御仁もいようがそこはぐっと堪えていただくとして、ともかく健康的なエロスを振りまきつつ、清霜はひたすらに体操を続けている。
「おはよう、清霜ちゃん」
「いちにぃ…あ、比叡さん！　おはようございます！」
そこに現れたのは比叡であった。彼女も比較的朝の早いタイプで、その均整の取れたボディを芋ジャーで固めている。おそらくは朝の自主トレか何かをする前に、清霜を見つけたのであろう。
そんな比叡が差し出した水のボトルを受け取り、清霜はにっかりと笑った。
「ありがとう！」
「どういたしまして。朝早くから精が出るねー」

「うん！　毎日やってる！　あ、日曜日はやってない！」
「ほうほう…でもその体操…なに？　ラジオ体操とは違うよね」
比叡は持っていたタオルで清霜の汗を拭いてやりつつ、そう尋ねた。確かに、極めて個性的な動きをする体操であり、遠目に見れば単なる踊りに見えないこともなかった。それ故に、である。
「これはせんかん体操！」
「せん…せんかんって戦艦のセンカン？」
「うん。バロシッ！」
その妙に流暢なバロシッ（Ｂａｔｔｌｅ　ｓｈｉｐ）を聴いた比叡が思わず吹き出す。
それは先日、赴任したはいいが艤装調整のためすぐ本国へとんぼ返りしていってしまい、「何しに来たの…？」という評価を満場一致で獲得したクイーンエリザベス級戦艦、ウォースパイトの物真似であった。
「バロシッね…つまりアレかあ、戦艦になりたい清霜ちゃんが考えた体操ってことかあ」
「そう！　これを一日３０時間やると戦艦になれる。時間の矛盾は体操の密度を高めてどうにかする！」
どこかで聞いた理屈であるが、これはおそらく叢雲か磯風の入れ知恵であろう。比叡や足柄が、トゥーピュアピュアデストロイヤーな清霜をからかうのはやめなさい、といつもやんわりと言っているのだが、あまり効果は無いようだ。
もっとも清霜自身も心の深い部分、底の底では判っているようで、意地をはって無我夢中になっているという訳でもないのだが。
「なるほど…で、なんでレディ・ガガ…が？」
「しらない。磯風が戦艦になるならこれだって」
「加賀さんは空母だよ!!」
「えっ…ガガさんって空母がいるの？」
ステファニー・ジョアン・アンジェリーナ・ジャーマノッタ級航空母艦ガガと書けば何やら最強に見えるがそんなものはいない。ピュアすぎるあまり人の言うことを九割がた信用する清霜に、これ以上

誤った知識を植え付けてはならぬ、守護らねば…と、比叡は居住まいを正しつつも若干興奮気味に語り出した。
「加賀！　加賀です！　歌手でもイノベイターのＭＳでもないからね！　加賀百万石のカガ！　だいたい清霜ちゃん、艤装からフィードバックされる情報に、『清霜』としての知識あるでしょ？」
「しらない」
「おごぼっ、し、知らな…ちょっと待って…『加賀』…１９４２年沈没…『清霜』…１９４４年進水…そっか…知らないかぁ…いやでも…座学で学ばなかった？　『比叡』だって本来１９４２年に沈んでるから、『清霜』のことは知らないはずなんだけど、今こうしてお互いが誰か知ってるよね？」
「だって比叡さんは初めてあった時に自己紹介しあったもん」
「ド正論！　じゃ、じゃあ座学の時は何してるの…？」
リアクション芸人と言われることもあり、比叡はいちいち大仰な動きで清霜の言葉を受ける。ここら辺が特に小さな艦娘達に慕われる所以なのだが、それはまた別の話である。
ともかく比叡は、艦船としての『清霜』と、今ここにいる艦娘としての清霜を出来るだけ混同せず、平易に、筋道を立てて解説することに心を砕いた。
「いろいろ。寝てたりお絵かきしたり夕立や朝霜たちとエクソダスしたり」
「問題児たちが異世界から鹿屋にきたとでも⁉　ハァハァ、うぅむ、私は座学教えてないからアレだけど、隼鷹さんや足柄さんが困ってるだろうから、真面目にやってね…？」
おかしなリアクションを連発しつつ、それでも比叡は諦めない。知識は力となる。正しい知識が身に着けば、今よりもずっと彼女は成長できるだろう…そう考えて疑わない。
おせっかい焼きな性分だということは比叡自身も熟知しているのだが、こればかりは仕方のないことなのであろう。
「加賀さんっていうのは今は…舞鶴だったかな、ともかく舞鶴にいる空母でね、ちょっと怖いけど頼りになる人だよ」

「ふうん…でも空母なんでしょ、駆逐艦は空母になれないよ？」
「戦艦にもなれ…！　な…な…なれますん…」
そうじゃない、そうじゃないんだよ清霜ガール…と心の声が最大音量で聴こえてきそうな風情で比叡は悶えた。
「でも本当、一度でいいから戦艦の艤装を背負って戦ってみたいなぁ」
「ふぅむ…」▪
空になったペットボトルが風に流され、軽い音を立てて転がった。

「さて、今日は他所との演習ではなく、いつもの紅白戦です。メンバーは白組が比叡、隼鷹、摩耶、清霜、朝霜、磯風。紅組が山城、千代田、足柄、夕立、若葉、初月の各員ですよ」
サムソンに名前を呼ばれた者たちが、一斉に前に出る。皆朝一だというのに士気は高く、特に摩耶はノリノリで拳を突き出して叫んだ。

「よっしゃあ！　てめーら覚悟しとけよ、ここんとこ演習もご無沙汰だったからストレス溜まってんだ」
「摩耶はもう練度９０近いじゃない、イノシシじゃないんだからちょっと自重しなさい」
「るせぇ足柄ァ！　ちょうど戦艦軽空重巡駆逐と同じ数なんだ、まずはお前からぶっ飛ばす！」
「あらぁ、その台詞そっくりそのままお返しするわよ」
摩耶のやる気はいつものことで、口走る物騒な台詞も挨拶と同義であるから、もはや誰も止めない。サムソンだけは若干引き笑いをしつつ、とりあえずの指示を出して下がる。
「戦闘海域はいつもの基地近海、天候は晴れ…波の高さは…と。叢雲、記録よろしく頼むよ」
「言われるまでもないったら」
演習には仮想空間で行う、いわゆるＶＲ演習と、模擬弾を使用して行う実地演習の二種類がある。

艤装に蓄積された本人の最新データを元に再現される、「仮象艤装」に、本人たちの精神をリンクさせて行えるＶＲ演習は極めて画期的なシステムであり、更には大本営のサーバを介する為全国、どこの泊地、基地、鎮守府の艦娘たちともやり合うことができる。

データのやり取りでは実戦の雰囲気がつかめないのでは、という懸念もあったが、そこは衝撃やダメージ、果ては足下の波や風までもを精緻に再現することのできる、４ｄ映画も真っ青な機構が開発され、システムと連動しているのでさほど問題はない。

「はい、それじゃあ各チーム３０分のブリーフィングの後に出撃。あんま熱くなり過ぎないように」

とは言え、それでもやはり、実戦の空気というものはまるで別物である。シミュレータでは感じ得ない、場の空気というのか…そういったものを知らなければ、土壇場で委縮することも十分にあり得るからだ。

その為にあるのが実地演習である。今回の紅白戦はこれにあたり、模擬弾を使用するとはいえ当たれば痛いし、障壁は削られ艤装は破損する。無論、模擬弾全般並びに戦闘海域に二重三重と施されたセーフティのおかげで、命にまでは至らない。

各員のインカムから聞こえてくるサムソンの言葉を受け、それぞれが二手に別れてブリーフィング用の部屋へと向かう。ドックに併設されているため、そこからすぐ出撃することも可能だ。

「さて、まずは旗艦だけど…どうしよっか」

古くから鹿屋基地を支えるベテラン足柄が、大型モニターの前に立って言う。実戦ではないからある程度の自由度はあるが、だからといって突拍子もない布陣で行くのも憚られる。

それを各員が考慮しつつ、あれやこれやと案を出していき、結局は安パイである山城が旗艦を務めることになった。

「摩耶の性格からして、どうせイケドン単縦陣で攻めてくるでしょ。清霜も朝霜もすぐ熱くなるし、隼鷹もそれに乗っかってくれれば、比叡や磯風が仕切れるはずもないわ」

「あのう足柄さん、僕、紅白戦で摩耶さんとやるの初めてなんですけ

ど、どうなんですか」
いいでしょうか、と、足柄の言葉を遮り、初月が尋ねる。
初月は帰ってしまったウォースパイトを除けば、この鹿屋における一番の新顔なので、摩耶のことをあまりよく知らないというのも無理はないことである。
「やり合うのは初めてでも、他の紅白戦や演習なんかは見てたでしょう？　アーカイブだってあるのよ」
「まぁ足柄さん、初月はまだ慣れてないから。ね」
「そうそう、ずっと遠征ばかりだったからしょうがないっぽい！」
「す、すいません…良かったら教えて下さい」
千代田と夕立にフォローされ若干はにかみつつ、初月は頭を下げた。ちなみに若葉は目を閉じて黙考しているように見えるが実際は寝ている。
その言葉を受け、山城がふむ、と顎に指先を当てたのち口を開く。
「摩耶はね、空母や航戦からすればすっごく嫌な相手よ。彼女あんな性格だから、ただ突っ込んでぶっ放すような戦い方すると思うでしょ？　でも彼女が怖いのは、対空迎撃が物凄く上手いところよ」
「目がいいんでしょうね、こっちの航空機をばたばた落としてきますもんね…」
「初月、あなたも対空迎撃の適性は高いのだから、彼女を手本にするといいわ。まぁ性格とか素行は真似しちゃダメだけど」
「ふふ、山城も意外と言うわね…まぁつまり、対空も上手くて、近づいたら近づいたで侮れない火力を持っているし、どちらにせよ一筋縄じゃいかない相手ってことよ。だから作戦を練るってワケ。はい、じゃあ陣形だけど…」

一方で白組のブリーフィングルーム。
「作戦？」
部屋に入るなり、いきなり具申してきた清霜に対し、摩耶は意外といった表情を見せた。
指示にはちゃんと従うし、戦闘能力も低くない清霜だが、自ら作戦

の立案をしてきた事などは、これまでに一度もなかった。その清霜が目を輝かせての提案ともなれば、摩耶とて無碍に扱うわけにもいかない。

「ほォ、清霜が作戦をねー…んじゃ説明してみな。面白そうなモンならあたしも喜んで乗ってやるよ」

鹿屋基地の戦闘隊長を務め、そのヤンキーめいた口調や態度で怖がられることも多い摩耶だが、実際は裏表のない、さっぱりした性格をしている。付け加えるならば面倒見もいいので、怖がられていても嫌われているわけではない。

何故か不安そうな顔をしていた比叡であったが、快諾した摩耶を見ていい笑顔を見せる。

「はい！　合体する！」

「うｎ」

「おわり！」

「…ちょっと待て、もう一回言え」

「がったい！」

「……おい比叡、浦賀の方言は判りづれぇな、横須賀生まれのお前ならわかるか？」

怒っているのか理解できていないのか、そのどちらともとれる表情でもって、摩耶は比叡を見た。

朝のせんかん体操の一件の時、比叡に提案したある『行動』を根拠に、今の清霜が『合体』などという発言をしたのであれば、それを補佐してやるのも己の務めか…と、彼女は面白い表情を浮かべつつ口を開く。

「わかりやすく言うと、合体して戦うんじゃないかな」

「お前ひっぱたくぞ！　わかりやすくねぇよ!!　意味が全くわからねぇよ!!」

かつて艦船だった時は練習艦を務めたこともある比叡であり、物事の筋道を立てて説明することはちゃんと出来るはずであったが、彼女は上の姉と似てフィーリングでものを考える傾向にある。清霜を佐（たす）け、補ってやろうという思いは本物であろう。

だが口をついて出たのは、先ほどの清霜の提案と何一つ変わらないものだ。
摩耶はそれでもぐっと堪えながら、二人の言葉を待つ。
「まぁまぁ落ち着きなよマーヤ。あたしには大体わかったよ」
「うむ、この磯風も理解したぞ」
「あたいは全くわからないけどわかったぜ」
彼我戦力差5対1！
いや、朝霜に関しては頭数に入れてはいけない気もするが、そこはそれである。同じ夕雲型のフィーリングでわかってしまうのだろう。
摩耶はこめかみを指で突っつきつつ、磯風に説明をする様促した。
「清霜が常日頃から、早く戦艦になりターイ！　と言っているのは摩耶も知っているだろう」
「ん、ああ、まぁな」
「その清霜がだ、いきなり進歩して戦艦になる方法を思いついたというのだよ」
「マジか！　やったのか！　清霜！」
「へへ…気づいてみればいがいと簡単なことだった！」
朝霜と手を取って喜ぶ清霜を尻目に、摩耶は比叡にも説明を促す。
まさかいきなりこういった爆弾が投下されるとは思っていなかったのだろう。テンションの乱高下が目に見えてわかる。
「まぁあれこれ説明するより実際やる方が早いですよ、清霜ちゃん、はいっ」
ぱん、と手を叩き、比叡がカモン清霜！　といった感じのポーズをすれば、清霜は目を輝かせて比叡に飛びついた。
それを受け止めた比叡は若干腰を落とし、清霜を己の肩の上に乗せる。
要するに肩車であるが、言ってしまえばそれが答えであった。
「「駆逐戦艦ひえしも！　抜錨します！」」
…白組の明日はどっちだ。

次回予告

当時のことを振り返った寒村先生（３４歳・中佐）はこう述懐する

――

「艦娘の自主性ってやつを重視した結果であり指導不行届とか言われるとおじさん泣いちゃうのでやめてください。ほんとマジで。霧の艦隊だって何か合体してたじゃないですか、アレと同じですよ」

そして始まる紅白戦。飛び交う砲弾。血と汗と涙。少女たちは心と体を重ね、そして戦う。

次回、鹿屋デイズ・鹿屋ライフ第三話『ドッキングセンサーが無くなった？　ええいよく探せ』

ご期待下さい。

「叢雲、何一人でぶつぶつ言っているんだい」

「う、うるさい！　あっちいけ！」

ドッキングセンサースタンバイ・後編

前回のあらすじ
駆逐戦艦ひえしも！
それは比叡と清霜を組み合わせた全く新しい艦船である。
似たようなものとして忍法と空手で忍空、
カツとカレーでカツカレー、
ランダとバロンでシヴァなどがある。

これ以上ないドヤ顔を晒し、比叡と清霜（以下ひえしも）は摩耶と他のメンツを睥睨した。
野心である。野心がモルヒネのように羞恥心と細かい理屈その他諸々を麻痺させているのだ。
「……それで？」
怒りではなく呆れから、摩耶は言う。合体してどうなるものか、と、彼女の目はそう語っているようだ。
その目に見据えられて、ひえしも（Ａメカ）は思わず口ごもるが、上にマウントしたひえしも（Ｂメカ）はそんなものを歯牙にもかけず、早口でまくしたてた。
「比叡さんの１３７，９７０馬力＋あたしの５２，０００馬力で１８９，９７０馬力！　いつもの高さの二倍が加わって３７９，９４０馬力！　そしていつもの三倍の…えーと…何だっけ？」
「三倍の回転」
「そう！　三倍の回転を加えれば１，１３９，８２０馬力の超ウルトラスーパーすげぇどすばいパワーだよ！」
「ヒャッハーゆで理論だァー！」
「やっぱすげぇよキヨは…だがなぁ摩耶さんよぉ、これで終わりじゃないぜぇ、カモン隼鷹さん！　壁に手ぇつきなよ！」
そう、これで終わる筈がないのだ。ノリというものは恐ろしいもので、朝霜の言葉を受けた隼鷹が、「おっしゃ来いやァアアア！」と気合を入れ、ブリーフィングルームの壁に手をついて背中を見せた。

何が始まるんです？
「とう！」
「来た来たきたァア!!」
合体！
ひえしもに続き爆誕したのは軽空母と駆逐艦を組み合わせた全く新しい艦船であった。
具体的に言うと隼鷹が朝霜をおぶっただけのシンプルな構造であるが、それ故にどんな局面にも柔軟に対応することのできるマイティなフォームと言えるだろう。朝霜は隼鷹の使うスクロール式飛行甲板を受け取り、かっこいい決めポーズをとる。
「「航空駆逐艦モーニング・ファルコンホークだ！」」
「なんと…！　この磯風、今猛烈に感動しているぞ。こうなれば摩耶よ、我々も後れを取るわけにはいかんな」
「…お前らヒロポンかなにかやっておられる？」
「広島産ポンカンジュースなら今朝飲んだがよく御存知だな！
さぁ摩耶、いざ！　いざ！　カモンジョイナス！　あなたと合体したいってキャッチコピーを知らぬ世代でもあるまい」
顔を紅潮させた磯風が、摩耶に迫る。黙っていれば黒のロングヘアが美しい少女なのだが、一度こうなるとしばらくは治まらない。摩耶は全てを諦めたかのような表情でもって溜息をつき、磯風の腰に手を回した。
「あ、こ、これは予想外…もしや女子ならば誰でも憧れるお姫様だっことというものなのでグホァ!?」
夢見る少女と化した磯風の予想とは裏腹に、摩耶は磯風を器用に持ち上げては体勢を入れ替え、肩を支点として担ぎ上げた。
「うぉおおおおおこれはアントニオ・ロッカが考案しタイガー・ジェット・シンが猪木からギブアップを奪ったことでも有名なプロレス技の一つ！　アルゼンチン・バックブリーカー！」
「よく知ってるじゃねーか磯風ちゃんよ…ならこうすっか」
そう言うと摩耶は更に体勢を変え、磯風を己の両肩に担ぐのではなく、右肩のみに担ぐ形でセットアップする。

「んんんんn!!　これはカナディアン・バックブリーカー!!　し、知らんかった…摩耶がロデリック・ストロングだったなんて…」
「ようしお前ら、もう何も言わねえ…行くぞ」
そして最後に爆誕したのは重巡洋艦と駆逐艦を組み合わせた全く新しい艦船であった。
カナディアン・バックブリーカーを決められたままの磯風はそれでもサムズアップを決め、摩耶に何事かささやき始めた。
「…重駆逐艦まやかぜと駆逐巡洋艦イソマヤー、どっちがいい？」
「もっとリングネームみてぇにしてみろよオラッ！」
「おっごォウ！　よかろう！　そうだな…ザ・デストロイヤーというのはどうかな。駆逐艦だし」
「パクリっつーか実在の人物じゃねえか！　もっと真面目に考えろオラッ！」
磯風が何か言うたびゆさゆさと揺れる摩耶。その有様に清霜と朝霜と隼鷹は大はしゃぎであるが、ただ一人比叡だけはだらだらと冷や汗を流し狼狽していた。
ここまでやれば摩耶が雷を落としてなかったことにするのでは、という目論見が彼女にはあった。だが磯風のせいで…とは言い切れないが、ともかく磯風とのやり取りで摩耶に火がついたのは明らかである。
遂には回転を加え出した摩耶はもう止められないだろう。このまま出撃となれば果たしてどうなることだろうか。
だが今更やめようなどとは到底言い出せぬ空気である。比叡はサムソンに怒られることを覚悟しつつ、出撃ドックへと向かった。

『さぁ時間一杯。今日の現場実況は私矢矧、解説は利根さんと提督でお送りするわ』
「よろしくどうぞ」
「我輩じゃよー。うむ。さて今回の見どころはどうかの提督？」
阿賀野型軽巡洋艦・矢矧が戦闘海域に、利根とサムソンがオーシャ

ンビューに設えられた実況席に座り、紅白の両組が出撃してくるのを待っている。その他の艦娘たちは岸壁で応援をしたり、後学のためにと見学をしたりと賑やかである。比較的アットホームな鹿屋基地を象徴する光景と言って差し支えないだろう。

「初月がいるからなあ、隼鷹はちょっと仕事しづらいかもしれんね」

「そうじゃな。初月はまだ未熟ではあるが、対空迎撃には光るものがあるゆえ、旗艦…まあ恐らく足柄か山城であろうが、旗艦が上手く指示を出せばそうなるやもしれん」

『こちら矢矧。なるほど、では白組は初月対策を組んでくると?』

「どうかな、白組はちょっと暴れんｂ…勇敢なメンツだからねえ…それに対空迎撃なら摩耶がいるし、どっちの軽空母もこりゃ大変そうだよね」

矢矧ならびに解説席からの音声はその場にいる全ての艦娘達に送信されていて、サムソンは迂闊な事を言うたびそれを言質にからかわれるため、最近は大分言葉を選んでいるようだ。

そうこうしている内に、両側にある出撃水路を通って、それぞれの組が海上に滑り出てくる。

紅組は夕立と若葉を先頭に初月、足柄が第二列、千代田と山城が第三列を形成する複縦陣を敷いている。そしてもう一方の白組であるが、彼女らの全容が見えるにつれ、会場は水が引いたかのように静まっていく。

『うん…うん?』

何かおかしなものを見たかのような、そんな声色の矢矧と、そこにいる全ての者たちの意識がシンクロした。

「なんだアレ…なんだアレ!?」

清霜を肩車した比叡

朝霜をおぶった隼鷹

そして磯風にカナディアン・バックブリーカーを極めた摩耶

初めはただのデモンストレーションかと、皆はそう思ったようであるが、いつまでたっても白組に動きはない。

あまりの異常事態に、サムソンがマイクを通じてコンタクトを図

る。
「あー、あーこちら寒村。えーと白組の皆さん？」
「おう、なんだよ司令」
「何だよ…って、いやその…何この…なに？」
「司令官！　これは白組の作戦なの！」
「いかにも左様、心だけでなく肉体までも強固な絆で結ばれた、新たなる陣形・戦術と理解せよ。ちなみに私と摩耶のコンビ名はビッグマグナム摩耶風先生だ。よろしくな」
「いや磯風、君だけ変な結ばれ方してない!?　つらくないの!?」
「つらい」
背中や腰を極められて辛くないはずもなかろうが、磯風は健気にもサムズアップで無事をアピールしている。根性論大好きな我が国で生まれた艦たるものの面目躍如であろう。
「ごちゃごちゃうっせえんだよ司令てめぇ！　これは大体清霜のんぐッ!?」
痺れを切らした摩耶が磯風ごと体を揺らして何事か叫ぼうとしたが、比叡が慌ててその口に九一式徹甲弾を噛ませる。
咬合力ごときで爆発はしないだろうが、それでもあまりと言えばあまりな処置に、摩耶は目を白黒させて徹甲弾を吐き捨てた。
「てめェ比叡おいコラてめぇこのクソだけん！　やっていいことと悪いこともがッ!?」
「提督！　これが私たちの作戦！　作戦です！　名付けてがったい作戦です！」
摩耶の口に今度は水偵をねじ込んだ比叡の大声が、インカムを破壊せんばかりに轟いた。
そう、このままではこのお世辞にも真面目とは言えない策が、清霜の発案だということが露見してしまう。守護ると決めたのだ、ならばやり遂げるまで…もともと真面目な比叡の努力は変な方向へと舵を切り、それが開始の合図となる。何か楽しそうなことが始まるのでは、という予感からか、周囲の者たちもわいわいと騒ぎ始め、もはや事態の収拾をつけるのは困難であった。

「…提督よ、これはこれで見てみたくもあるな」
「いやちょっと利根さん…」
「よいではないか、鹿屋は皆仲が良いかもしれんが、それでもどこかで歪みは生じるものよ。適度なガス抜きは大事だと思うがのう」
ガス抜きどころか爆発したらどうすんの…と言った表情で利根を見るサムソンであったが、やがて諦めたのか、マイクを取ってため息交じりに告げる。
「あー…はい、じゃあお任せします。ただし危険と判断したらこっちで止めるからね。紅組に異論がなければそのまま開始」
「そうこなくっちゃなァ！」
「ヒャッハァー！　紅組は消毒だァー！」
モーニング・ファルコンホーク（Aメカ）と（Bメカ）が気勢を上げ、ひえしも（Bメカ）も手にした高角砲を振り回してはやる気を見せる。
黙ったまま一部始終を見ていた紅組はというとだが、これが意外なことにすんなりと了承のサインを矢矧に送ったようである。
「い、いいんですか山城さん」
「別に構わないわ。大方清霜の考えでしょうけど、考えてごらんなさい、一隻落とせばスコアは2になる計算でしょ」
「そうよねぇ、あれじゃ速度だって出ないだろうし、射程だって噛み合わないわ。何て言うか東京に憧れて出てきたはいいけどよくわからないまま帰るお上りさんみたいな感じ」
いまいちわかりづらい足柄の例えに、他のメンツが一瞬うん…？といった顔をするが、状況は既に始まっている。
お上りさんだろうが何だろうが今は倒すべき相手である。若葉は懐から広島産ポンカンジュースを取り出してはキめ、初月は己の頬を強く叩いて気合を入れる。
そして、開戦。
『さぁ始まったわよ。速度差が結構あるみたいね、紅組が白組の頭を抑えたわ』
矢矧の実況通り、反航戦から始まった戦いは、白組の進行方向に紅

組が回り込み、脇…というか側面を見せつける、丁字の形となった。火砲の威力、散布界を最大限に発揮できる効果的な位置取りだ。
「千代田！　まずは航空戦で！」
「了解！　艦戦隊、艦攻隊、出番よ！」
山城の合図を受け、千代田が絡繰式の飛行甲板を展開。手にした操具を華麗に操っては紫電改、流星からなる攻撃隊を発進させた。山城も一拍置いたのち手持ちの瑞雲を射出し、速度を落として次の展開に備える。
「摩耶、向こうの航空攻撃が来るぞ」
「心配すんな、ケツに食いつかれなけりゃどうとでもなるさ。よし、機関一杯で回避運動しつつ対空迎撃準備！　おっさんは艦載機の発進急げよ！」
「来たぜ隼鷹さん！　こいつぁあたい達の腕の見せ所だよう！」
「おっしゃー！　スクロールを射出しとくれよー！」
「任せろぉ！」
朝霜はそう叫び、先ほどから持ったままのスクロール式飛行甲板を振り上げ、くるくると回転させてから
すっぽ抜けた
「あァァァ!?」
「射出しおったー!?」
既に前方を注視し、対空砲撃の準備を進めていたひえしも、イソマヤーの各名は事態に気付くはずも無く、後方から飛んでくる筈の味方艦載機を待っている。
だが紅組の艦載機が攻撃射程内に入り、降下を開始したにも関わらず、こちらからは何のアクションもない。
「おいおいおいオイ！　おっさん！　朝霜！　何やっ…て…」
「ごめーーーーん!!　甲板がなくなった！」
「は!?」
次の瞬間、敵攻撃機の投下した爆弾が炸裂し、轟音と共に巨大な水柱が噴き上がる。
付近にいたモーニング・ファルコンホークは直撃を受け、Ａメカと

Bメカに分離して大破し、そのまま撃沈判定を食らってしまっていた。
『隼鷹、朝霜、撃沈！』
「ぶほッ…！」
「ご、ごめんよぅ隼鷹さん！」
「あはは、まぁしゃーないしゃーない！　あれ結構軽いかんなー！　それより探しておくれよ、なくなったら流石に困るからさ！」
「おう！　まかせろ！」
撃破されれば安全のため海域から離脱するのが常であるが、朝霜と隼鷹はぼろぼろになりながらもスクロールの捜索を始める。合体したが故のイージーミスにイライラ来ていた摩耶もそこはすぐに頭を切り替え、速度を上げて紅組へと突撃を開始した。
「こうなりゃ火力で黙らせるっきゃない、比叡！　後ろから援護射撃！　あたしが突っ込む！」
「ええっ、無理無理むりムリ！　向こうは山城と足柄さんが健在なんだよ!?　っていうか私たち何にもしてないよ！」
「だから今からやるんだろうがッ！」
二度目の航空攻撃まではまだ時間があるが、今度は山城と足柄の砲撃が降り注ぐ。抱えた磯風をカウンターウェイトの如く使い、摩耶は水面を滑走する。比叡もまた清霜を気遣いつつ避けていくが、どうにもじり貧なのは否めない状態だ。
そんな折に、海水に濡れ煤で汚れて何か別のモノになった磯風が口を開いた。
「私にいい考えがある」

『さぁ白組は反撃の糸口を見つけたいところ。一方の紅組は余裕をもって頭を抑え続けているわね』
「ふうむ、結局あの合体作戦とやらは、何がしたかったのかの」
「予想はつくけど黙ってるよ」
「…ま、それが良いか…」

サムソンはふう、とため息をつくと、手元にあった広島産ポンカンジュースをぐっと呷った。
すると一際大きな着弾音が響き渡る。比叡、清霜、摩耶、磯風の姿が確認できない。すわ撃沈か…皆がそう思って固唾を飲み見守る中、水柱の中から飛び出してきたのはひえしも（Ｂメカ）であった。
「分離した!?」
「元の状態に戻っただけっぽい」
いかに船足が早かろうと、万全の状態で待ち構えている相手に対して突撃するなど、無謀を通り越してもはや自決である。よせ清霜！ ギブアップせい！ アツクナラナイデマケルワ！ などといった声援が飛ぶが、清霜はどこか楽しそうに高角砲を放ち、魚雷を撒いては場を動き回る。
「一人でも負けないんだからぁア！」
健気である。だがそれを許すほど、現実は甘くない。
清霜の障壁は徐々に削られ、艤装は破損していく。
「きゃん！」
『き、清霜大破！』
絶体絶命である。あともう一発貰えば耐久値は活動限界値を下回り、撃沈判定が下されるだろう。矢矧も心配なのか、実況を忘れて清霜を見守っていた。
「…すごいな、清霜は…あんな小さいのに…でも僕だって加減はしない！」
初月は奮闘する清霜に心の中で敬礼をしつつ、長１０ｃｍ砲ちゃん達に照準をとらせ、そして砲撃指令を出す。
その瞬間――
大質量の一撃が初月の側面から直撃し、彼女は大破、撃沈判定を受ける。
「な!?」
爆炎が晴れる。
火線の向こうに立っていたのは、摩耶を肩車した比叡であった。
「あ、ちょ、まずいっぽい！」

そこに更に、既に発射されていた摩耶の魚雷が、夕立の足元で炸裂する。
あっと言う間に初月、夕立を仕留めた比叡＆摩耶が、超かっこいいポーズでもって叫んだ。
「「高速重戦艦ザ・マウンテン！」」
ザ・マウンテン爆現！
彼女らの名前の由来がそれぞれ比叡山と摩耶山から取られているのは周知の通りであり、それを急造のユニット名としているのは明らかである。だがテリーなマンに負けたあいつも似た様な名前であったので、あまり縁起はよろしくないように思える。
「なにあれズルい！　でもカッコいい！」
「磯風を盾にして難を逃れ、摩耶が比叡と合体したか。なるほど超かっこいい展開だ…清霜は上手く時間を稼いだな」
「感心してる場合じゃないでしょ！　来るわ！」
足柄の怒声に、皆が先ほどまで比叡たちがいた海上を見れば、そこにはぷかぷかと浮いたままの磯風がサムズアップをして笑っている。
『初月、磯風、夕立の撃沈判定を確認！　これはえーと…アリなのかしら…』
「まあ、明確なルール違反じゃないしいいと思うよ…しかし名前はどうにかならなかったのかな…ダブルマウンテンとかにすれば良かったのに」
「何か楽しそうじゃのう…我輩もちくまがいればやってみたかったぞ」
「筑摩さんはショートランドだから我慢して！」
与太話をするサムソンと利根をよそに、状況は動く。
彼女らの狙いはシンプルであった。
マウンテン（Ａメカ）が回転の早い副砲をばら撒き至近弾を、マウンテン（Ｂメカ）が夾叉を発生させ牽制。それを組み合わせ、動きを止めてから主砲の一撃。
無論紅組とて黙って撃たれるはずもないが、相手は実質一隻分であり更には足も速いので、狙いを付けづらいことこの上ない。足柄は位

置取りを有利にするべく魚雷を撒き、千代田にも艦載機による攻撃を指示していく。
だがマウンテンを狙う攻撃機は、対空迎撃を得意とするマウンテン（Bメカ）の効果的な砲撃によって叩き落されて効果を発揮しない。その間にもマウンテン（Aメカ）は副砲を絶えず撃ち続け、遂には至近弾で千代田の足を止めるに至った。
「うわっ…！」
『千代田、大破！』
二発目の魚雷が千代田に刺さり、大破。撃沈判定こそ出ないものの、こうなっては空母に出来ることはない。
予想外の粘りを見せる比叡と摩耶を信じられないものを見るような目で見つつ、山城は足柄と若葉に指示を出していく。
「あと3だ、比叡！　今度ァこっちが奴らのケツを取るぞ！」
「よーし！」
タービンをフル回転させ、マウンテンは海上を疾走する。摩耶の重さが加わっているにも関わらず、その足は極めて速い。
テンションもレッドゾーンに突入したのか、二人は気勢を上げながら攻撃を続け、遂には若葉をも撃破した。
だが若葉は流石に試合巧者である。直撃が避けられないと判断したその瞬間にはもう、ありったけの魚雷を放っていた。
「ち、回避だ回避！」
「大丈夫、見えて…うわっ!?」
若葉の放った魚雷は、マウンテンの直前で自爆し水柱を噴き上げる。信管をいじったのだろうが本来ならばそういった使い方はしない。しかしはなから合体などという、『合体はルールで禁止されていないから合法』といった屁理屈のような戦術を取っている白組に、それを咎めることはできない。
ともかく進路を限定され、マウンテン（Aメカ）は苦し紛れに左舷方向へと回頭した。あとは足柄、山城だけであるが、気合だけでどうにかなる相手ではない。
足柄の副砲に足を止められてしまえば、そこに山城の主砲が刺さ

る。
『比叡、中破！』
「ひえーッ！　だ、ダメ…も、もう持たない…！」
「諦めんじゃねー！　こうなりゃ最後の手段だ！」
「ま、また分離!?　もうバレてるって！」
「分離は分離でもただの分離じゃねえ！　いいか比叡、あたしが合図をしたらお前のパワーであたしを射出しろ！」
突拍子もない策であった。射出…射出と言ったか？　射出してどうするの…？　などという疑問が浮かんだものの、摩耶の力強い言葉に比叡もすぐその思いを振り払い、前を見据えて腰を落とす。
「わかった…行くよ摩耶、信じてる！」
「ああ、任せろ…よし、やれぇ！」
これ以上の言葉はいらない。比叡は腕を上げて摩耶の腰を抱き、そのまま持ち上げては上空へと放り上げた。
「分離と射出…二つのキーワードを満たす技…これだぁあああああ!!」
「は…？」
比叡はすぐさま仰向けに寝そべり、落ちてくる摩耶の足裏を全力で蹴りあげた。
そう！　ある世代以上の…ぶっちゃけ言えばおっさんならば、誰でも一度は憧れた、または試したことのある、あの技である。
一人が砲台、一人が砲弾となって相手のゴールを狙う…由緒正しきサッカーの技、それが…
「スカイラブ・ハリケーンだァアアアアアア!!」
シュポーン、と。
摩耶は比叡の力を受け、ほぼ直上に射出された。
「てめぇエエエエエエエエエエ」
徐々に遠くなっていくその声。あとは任せたぜ、相棒…と、満足げに笑う比叡。
太陽に浮き上がる摩耶のシルエットは神々しささえ感じられたが、特に状況を変えるものでもなかった。

「足柄、あれ撃っていいのかしら」
「イイワヨー」

『比叡撃沈！　摩耶も落下のダメージで大破…勝負あり、かしらね…』
「提督よ、今のあれは何じゃ？」
「おじさん世代にはなじみ深いけど…君たちにはちょっと判らないかな…でもまあいいよね、サッカー…」
決着である。
サムソンのどうでもいい独白を背に、引き上げてくる艦娘たち。演習が終われば敵も味方もない。紅白のメンツが土左衛門の如く浮く摩耶を囲み、いい笑顔で笑う。
「ははは、ガンダムW1話のラストみたいだぞ摩耶」
「ぶはァァァ！　てめぇ…てめぇ何処だ比叡ゴラァァァァァ！」
「比叡ならなんかサッカー留学するって言ってスペイン行ったよ」
「んだとォあのゴールデンレトリバーがァァァァァァァ!!!」
咆哮が響き渡る。
だが怒り狂う摩耶の前に、神妙な顔をした清霜が座り込む。
「摩耶さん、こんな結果になっちゃって…ごめんなさい」
「あァ!?　ああ…うん…まぁそれはしゃあねーけどよ…」
「あまり清霜を責めないで摩耶、たまにはこういうのもいいと思ったわ」
「そうそう、私も今度やってみるっぽい！」
皆口々に清霜をフォローし、摩耶も徐々にクールダウンしていく。と言うよりは最初から清霜に対してどうこう、というつもりも無いようだが。
しかし清霜はそうではなかった。己の言い出したことで、こんな結末になったということを悔いているようでもある。
「やっぱり、反則で戦艦になってもダメだよね」
「え、ああ…いや…」

「でもわかったんだ、やっぱ戦艦には自分の力でならないといけないって」
「そうですよ清霜ちゃん！　鍛えて鍛えて勉強もして、一杯食べて一杯寝て一杯笑って！　そうすればいつかきっと…！」
そう言った清霜の頭を優しく撫でて笑うのは比叡であった。
「うん…うん！」
優しく強い戦艦が見せるその笑顔に、清霜も満面の笑みをもって応える。
何だか知らんがとにかくよし！　という雰囲気が場を包み、比叡と清霜の朝練から始まったがったい作戦は、ここに幕を閉じたのだった。
そして。
「いい雰囲気のところ悪いんだがな比叡ちゃんよ、あっちでちょっとサッカーの話しようじゃねーの」
「ひッ！　ま、摩耶…いやあの私、実はサッカーより野球の方が好きでして…」
「じゃあ野球でもいいや、鹿屋の街にバッティングセンターあったよな、行こうぜ」
「あ、いや、ちょ、それってあのやくざ映画の…アーッ！」

「叢雲、記録は？」
サムソンは残ったポンカンジュースを飲み干し、戻ってきた叢雲にそう尋ねた。叢雲はやれやれ、といった感じで肩を竦めるが、仕事はきちんとするのが彼女のいいところだ。
「したわよ。でもこんなもの、大本営に知られたら何言われるかわかんないんじゃないの」
「ですよねー…じゃあこの一件は無かったことにしておこう…あと今後、合体も禁止しないとなあ」
「ま、いいんじゃない…あ、さっそくやってるのがいるけど…」
「ンモー！　ちょっと止めてくる！」

この後鹿屋で合体禁止令が出たのは言うまでもないことだろう。
そして清霜が戦艦になれる日は来るのだろうか。それは誰にもわからない。

Ｃｒｅｍａｔｉｏｎ

Ｃｒｅｍａｔｉｏｎ
火葬のこと

秋も深まってきたある日の午後。
基地のとある場所に、雲龍と葛城、そして磯風はいた。
「あまり置いておいては可哀想だわ。早く焼いてあげないと」
大きく重たい扉を閉め、雲龍は言った。漏れ出した冷気が肌を撫で、葛城はぶるりと身を震わせる。
「でも雲龍姉、本当にいいの？　もっと別の方法だって…」
「遅きに失し傷ませるよりも、今すぐに出来ることで綺麗なまま送ってやる方がいいと思うがな。だいたい、よその国ならともかく、この日本では焼いてやるのが最もポピュラーだろう」
感情の乗らない声で磯風が言う。生き死にに対してシビアなのは悪いことではない。戦闘行動に従事している者がいちいち感傷に浸っていては、身がもたないからだ。
葛城はその辺のさじ加減や割り切りをまだ見極めていない節があった。
「だ、だったら…せめて提督が戻ってくるまで待とうよ…」
「あれは今、横須賀にいるんだぞ。鹿屋まで戻るのにどれだけかかる？　半日か？　もっとか？」
今の時期ならばそう簡単に駄目になることも無いだろうが、それでもあの美しかった姿形が傷み、やがて腐っていくのを見るには忍びない。
葛城の肩に手を置いた雲龍は、そう目で訴えているようであった。
姉にそうまでされては、葛城とて従う他に無い。白磁の皿や箸、塩などといった『必要なもの』をテキパキと用意する。
「む…！　雲龍よ、しまったな」
「どうしたの？」
「アレが無い。アレが無ければ焼いたところで立ち行かんぞ…」

ばたん、と扉を閉め、磯風が眉根を寄せる。雲龍も察したのか、物悲しい顔をして思案にふける。
「何、どうしたの？」
「葛城、すまんがちょっと頼まれてくれんか。戻るまでには済ませておくから」
「え、い、嫌よ！　私だってちゃんと見届けたいわ！」
「そうは言うがな…処理だって必要なんだ。ちゃんと綺麗にしてやるのが礼儀であり手向けにもなる。お前にそれが出来るのか？」
駄々をこねる葛城に対し、磯風はあくまでドライな対応をする。
それに応じ雲龍もまた、葛城を促すが彼女は聞き入れない。
「…いつまでも出来ないやれないじゃ駄目なんだから！　私にだってそれくらいの事わかってる！　」
「そうか…そうだな。わかった。では雲龍、妹の指導は任せたぞ。私はちょっと出てくる」
磯風はそう言い残すと、着けていた白い上着を脱ぎ、そのまま出て行った。葛城は神妙な顔つきで項垂れていたが、やがて顔を上げると、決意を秘めた目でもって雲龍を見つめる。
「やるわ、雲龍姉」
「うん」

プツリと音を立て、刃先が白い腹を割く。既に生命の火は消えているものの、数時間前まで生きて、海にいたそれの目に葛城の顔が映り込む
血と体液が溢れ出し、やがては内臓がずるりと引きずり出された。
どうせ焼くのだから内臓はあっても無くても良く、むしろ処理する手間を考えればわざわざ切り外すこともないのだが、どうしても抵抗のある者がいることを考えればのことだ。
「ううっ…ごめん…！」
葛城は目に己を映すそれに向かい詫びた。数をこなせば慣れると雲龍は言う。事実雲龍は何の苦労も無く内臓を取り出しては除けて

いる。
「こっちは終わったわ、手伝おうか」
「ううん…大丈夫…大丈夫だから…うう…」
柔らかな感触とぬめりが、葛城の手に伝わる。微かな潮の臭いと血の臭いが混じり合って鼻腔を刺激する。
現代っ子気質の強い葛城は思わず息を止め、えづくのを我慢して涙目になりつつも、手を止めない。
あなたの命が私たちの命になって、もっと多くの命を守ることに繋がるのだから…そう言い聞かせ、葛城は刃を振るい続けた。

「戻ったぞ、準備は」
「抜かりないわ。あとは焼くだけ」
基地の中庭に置かれた、いくつもの七輪。程よく熱された炭火が、赤々と夕暮れに映える。
「お、今日は秋刀魚か！　いいねぇ、一杯つけちゃおっかねぇ」
「さんまかぁー、私苦いのやー」
「大丈夫だよとっきー！　内臓取ったのと取ってないのがあるから！　私頑張って取ったから！」
「ほんとー？　うれしいうれしい！」
はしゃぐ葛城と隼鷹、時津風の嬌声を背に、磯風はひたすらに大根をおろす。秋刀魚に欠かせぬ大根とスダチを買いに走った立役者であるにも関わらず、雲龍は彼女を焼き物係から外した。
理由は磯風自身も判っているので敢えて言うまいが、いずれはきっと、最高の秋刀魚を焼き上げてみせる…そう思いを馳せつつ、彼女は大根をおろした。それはもうおろしにおろした。
「そろそろ焼けるわ、時津風、皆を呼んできてくれるかしら」
「うんうん、わかったよぉ！」
秋の夜風はちょっと冷たかったが、秋刀魚を囲む食卓は暖かかったという。

冥王計画

月夜に虫の音響く鹿屋基地。
基地司令である寒村…通称サムソンは夕食を済ませ、事務仕事に精を出していた。
傍の机で彼を補佐し、雑務をこなすのは駆逐艦・磯風と、駆逐艦・夕立である。ここ鹿屋では、司令付きの補佐官…いわゆるところの秘書艦は、所属する全ての艦娘が日替わりで担当する形式であり、今日は夕立の担当となっていた。
だが夕立は、身体を動かすのは得意でも、机に向かっての作業はどうも不得手であるらしく、あまり効率がよろしくない。そんな折に顔を出したのが磯風であり、ならば、と夕立を手伝う事になった。ユウジョウ！
溢れる書類を項目ごとに纏め、クリップで止めては区分分けをしていく。その日のうちに上がってきた資材の出納を記録する。直近の日に担当海域を行き来する船舶のチェック。などなど、やる事はいくらでもあるが、三人寄れば片付くのは早かった。
「ぽい～…これでおしまいっぽい？」
「ああ、どうかな提督」
「うん、そうね。今日はこれくらいにしておこうか」
「ありがとう磯風ぇ、今度ジュース奢るね」
作業の邪魔にならぬよう、ポニーテールに纏めた磯風のロングヘアをわきわきと弄りながら、夕立が礼を言う。
磯風も夕立のプラチナブロンドを指に絡め、くんくん嗅ぎながら、「なに、気にするな」と笑った。寒村はその様子を若干気持ち悪い表情で眺めつつ、湯沸かし器を掲げて尋ねる。
「お茶を淹れようかね、君らなに飲む？」
「カフェオレ！」
「ジントニックを。カットライムはいらないぞ」
「カフェオレ二つね！」

湯気の立つカップを吹いて冷ましつつ、夕立はしんみりとした口調で磯風に尋ねた。
「やっぱ戦闘だけじゃ駄目っぽい？」
新聞を読んでいた磯風はその目を夕立に向け、しばしの沈黙の後口を開く。
「ま、人には得手不得手というものがあるからな。一概にそうとは断言出来ないが…」
「磯風はどっちも上手で羨ましいかなって」
「や、そうでもないさ。私は事務仕事では叢雲や足柄には及ばないし、戦闘ではそれこそ夕立、君には及ばないだろう」
「そうかなァ…？」
「そうさ」
冷ましすぎてぬるくなったカフェオレを飲み干し、窓の外の月を見ながら磯風は言う。
どちらも上手にこなせれば、それが一番いいのだろうが、現実とはそう上手く行くものでもない。
だからこそ、出来ることを出来る範囲で、周りと助け合ってやるしかない…と、寒村はしつこいくらい皆に言っている。磯風は寒村について、そこだけは素直に尊敬出来ると感じているようだ。
夕立はなるほど、と頷き、カフェオレをぐっと飲み干した。
「じゃあさじゃあさ、最強の艦娘って例えばどんなのかな？」
「いきなりだな。そりゃもうあれだろう、こう…」
そこで司令室のドアが開き、喫煙ルームへ行っていたサムソンが戻ってきた。手には大量のみかんを携えている。
「みかん！」
「昨日業者さんから貰ったんだ、忘れてた。君ら食うだろ」
「いただこう。さて提督よ、今ホットな話題があるのだが…」

「ふーむ？　最強ねえ…でも、艦種ごとに役割も違うんだし、あんま意味無くないかね」
「ノンノン…そういうみんな違ってみんないい、おてて繋いで仲良くゴール的な話をしているんじゃあないんだよ提督…今！　まさに！　最強の！　艦娘を！」
「提督さんはそういう話興味ないっぽい？」
「そういう訳じゃないけどさ…何をもって最強とするのかってことよ」
「だから今から決めるんだろう提督！　それをわかるんだよ！　はい！　まずは動力源！」
磯風は何処からともなく取り出したフリップとマジックペンを各々に配り、何が「まず」なのかすら説明せずに囃し立てる。
まあ仕事も終わったし、明日は休みだしいいか…といった風情で、サムソンはペンを取った。
そして僅かな沈黙、みかんの匂い。
コトリと置かれるフリップ。
『燃料電池』
『次元連結システム』
『縮退炉』
「おいちょっと待て君ら。それって今の科学力で作れるものじゃないよね？　っていうかフィクションの世界だよね？」
「出来るか出来ないかじゃあないんだよ提督…やるかやらないかだ」
「人間だけが神を持つっぽい」
「そんな壮大な話はしてないよ！　ああもういい、じゃあこっちも変えるよ…」
澤野弘之のＢＧＭが流れてきそうな空気の中、サムソンはぐしぐしと消しては直しを何度か繰り返し、そしてフリップを置いた。
『シズマドライブ』
「欠陥システム過ぎる…」
「三本揃った状態だよ！」

「でもまあ提督さんも同じ土俵に立ったっぽい！　じゃあ次は…名前？」
何にでも名前はある。まずそっから行かんかい…とでも言いたげなサムソンをよそに、夕立と磯風はさらさらとペンを走らせた。
『†殲滅の漆黒天使ノワアル†』
「ちょっと待て磯風ェ！　それもう艦娘の名前じゃないだろ!?　それに漆黒とノワールって同じじゃないか！　あと変な風評被害を被りそうな子が出そうだからやめてやれよ！」
「やめてくれないか言葉の洪水をワッと浴びせるのは。それにノワールではない、ノワアルだ。あと野分は関係ないだろう、奴は今タウイタウイにいるからな」
頭ごなしに全否定されちょっと癇に触ったのか、磯風がふくれっ面で反論する。そんな彼女を見て勝ちを確信したのか、夕立が不敵に笑いながらフリップを置いた。

「ふっふっふ…磯風のセンスはちょっとイタいっぽい！　ここは安定のかっこよさを誇るドイツ語がマスト！」
「まあ同じ枢軸側としてはわからんでもないが…見せて貰おうじゃないか」
『†ゲヴェルクシャフト†』
「ほうドイツ艦ですか…って！　だから何だよその十字架マークは!?　あとそれでいいの本当に!?　意味分かって書いてる!?」
「意味は知らない！　でもカッコイイでしょう!?」
ギャギィ、と親指を立て、夕立はこれ以上ないドヤ顔で二人を見た。
ちなみにゲヴェルクシャフトは独語で『労働組合』のことだが、サムソンは敢えて教えなかった。
磯風のは論外としても、独語にコロリと騙される層は少なからず存在する。もし夕立の案が優勢になったら、さり気なくバラすことで一気に蹴落とす算段であろう。まことセコい男である。
「じゃあ提督のはどうなんだ、当然カッコイイんだろうな？」
「だから何でカッコよくないと駄目なんだよ…はい」

『鶴見』
「つる…み？」
「うん。僕の実家のそばにある一級河川だよ。艦船の名前にはなってなかったような気がするからね」
「脳汁が漏れてきそうな艦娘だな提督よ。しかしいかにも優等生の考えそうなことで！」
「全滅の漆黒堕天使ノワールよりはマシだろう!?」
「？殲滅の漆黒天使ノワアル？だ二度と間違えるな」
名前は一旦保留となった。動力源も決まっていないがそんなことを覚えているものは誰もいない。
夜は更けていき、みかんも無くなっていく。夕立が部屋から持ってきたお菓子や何やらをつまみつつ、最強艦娘会議は新たなるステージへと昇っていく。
「排水量はこれでいいか…はい、じゃあ次は主兵装だな」
「ふふふ…これは自信があるっぽい！」
「君らもう真面目にやる気無いだろう…？」
などと言いつつ付き合うあたり、サムソンも意外と楽しんでいるようである。艦娘たちの士気が上がるのであれば、それでいいと思っているのだろう。
そして三人が同時にフリップを出す。
『重力子放射線射出装置』
『重力子放射線射出装置』
『重力子放射線射出装置』
言葉は要らなかった。三人は無言で頷きあい、手を重ねては満面の笑みをもってフリップを下げる。
「やはりこれだろう。声に出して読みたい武器Ｎｏ．１（国勢調べ）過ぎるからな」
「威力も申し分ないっぽい！　禁圧解除して深海連中の本拠地にぶっ放すっぽい！　終戦！」
「ぼかぁ弾体加速装置と迷ったけどね…ってか僕の部屋のＢＬＡＭＥ！無くなってるんだけど誰が持ってるの」

「…」
その言葉に磯風はぷいと顔を逸らした。

午前2時。
みかんの皮はゴミ箱から溢れ、お菓子も底をついた。夕立はハッピーターンの粉を中毒患者の如く舐めているし、磯風はねじり鉢巻きでスルメをしゃぶっている。
いちいち喫煙ルームに行くのも億劫になったのか、サムソンは窓の傍で煙草を吸っている。叢雲や摩耶がいたら怒るだろうが、今この場にそれを咎めるものはいない。
「さて、大分固まってきたな…あとは容姿か？」
「前世も能力も決まったっぽいし…一旦まとめておいた方がいいっぽい！」
まとめてどうするのか、という最大の問題は見えていない。問題はそこではない。ここまで来たら中途半端は出来ないのだ。
未完の大作より完成した凡作に価値があるのだ。
三人は己にそう言い聞かせて、磯風が広げているＢ４のコピー用紙を見た。彼女の上手いともさりとて下手とも言い切れない、非常に味のある絵が所狭しと描き殴られている。
「まずオッドアイは外せないだろう」
「眼帯を付けてて、それを外すとぴかーん！　天龍さんと古鷹さんを合体させたみたいな感じっぽい！」
「それは天龍と古鷹でよくないか…アイデンティティを奪うような真似はよくない」
「いやー僕は眼帯より、ターレットレンズがガシャンガシャンって回って標準ズームと広角と赤外線を切り替え…」
「そういう高橋良輔的なものは若年層にウケが悪いと言ったろうが！」
この言い方だと何処かへ発表するのではないかという疑念もつきまとうが、眠さとみかんとハッピーターンで朦朧とした三馬鹿にそこ

まで考えが回るはずもない。要するにその場その場のノリだけで今この瞬間を楽しんでいる。それが大事なのである。
「もう何て言うか超美少女！　オッドアイ！　感情が昂ると色の変わる頭髪！　アルビノ！　おっぱい！　柳腰！　おしり！」
「帰国子女もつけるっぽい！　頭脳明晰でドイツ語と英語とフランス語とタガログ語とアラビア語に堪能！」
「こうなったら低血圧も入れよう」
「いいねいいね、あと昔から続く討魔士の家系の娘で、主人公に命を助けられて以来ベタ惚れ！　当然処女だ」

午前７時。
「出来た…出来上がった…！」
「やり遂げたっぽい…」
「おじさん徹夜はきついよ…んで、これどうするの」
ブラックコーヒーを力なくすするサムソンを、磯風と夕立が見る。

「まぁ落ち着け提督よ。では発表するぞ」

第九次元最強戦艦『？殲滅黒死天使ノワアル・ゲヴェルクシャルト・鶴見？』
艤装動力源　次元連結システム
排水量　たくさん
はやさ　光速の４５％
パワー　ゲッターエンペラー１４台分
防御力　Ｌ．Ｅ．Ｄ．ミラージュと同等
主兵装　重力子放射線射出装置（長砲身ｖｅｒ．）
副兵装　安全核ミサイル　浸食魚雷　ハドロン砲　地球破壊爆弾
月光蝶　白兵戦用ＤＸ鶴見ブレード　Ａ．Ｔフィールド　ゼロシフト
前世　鎮西八郎為朝

声優　川澄綾子
絵師　イソ☆ウインド
プロフィール　ユーチューバーから成り上がり一代で財をなした鶴見財閥総帥・鶴見光士郎の長女。生まれつきアルビノで体が弱く、小学校に上がるまで一度も屋敷の外に出なかった。小学校に入ってからは何とか体調を回復させ、主人公である皇・マンダム・九郎と出会って色々あった。中学に入っても色々あった。中学校を卒業すると同時に見聞を広めるためフランスへと留学し色々あった。一年間で大学卒業資格と博士号と通信空手の黒帯を取得し帰国して色々あって艦娘として覚醒し色々あって呉第零鎮守府へと配属になり色々あった。

「色々ありすぎる…」

「これはまあ後々設定を練っていくからいいんだ。よしまずはこれを渋にアップしてだな…」

「ツィッターで拡散するっぽい！」

「まずそっからなの!?　やめとこうよ、こういうネタって下手すればネットに一生残るんだよ」

「いちいちうるさいぞ提督！　今更止まるかこの冥王計画（プロジェクト）が！　うるさいをいちいち五月蠅いとかふざけるなを巫山戯るなと書いちゃう世代をナメるなよ」

「ここまで来てビビッてんじゃねーっぽい！」

目の下の隈でおどろおどろしくなった磯風と、八割がた寝ている夕立が一斉にサムソンに噛みつく。身内で済ませていればただの笑い話で済むが、これが一度電子の海に放たれたらどうなってしまうのか。鹿屋基地に地味に危機が迫るのではないか。

寝なさすぎて逆に冴えてきたサムソンの頭脳が惨劇を予測していると、不意に司令室のドアがノックされ、そして開いた。

「おはよう提督、起きて…起きてるわね。磯風と夕立は何してるの」

朝食の乗ったプレートを持って入って来たのは叢雲であった。日曜日の朝は大体彼女がそうしてくれる。

叢雲は充満するタバコとコーヒーとみかんの臭いに顔をしかめ、卓

上にあるコピー用紙の束を見る。
「何これ」
「ああ叢雲、丁度いい…三人で寝ずに考えた最強艦娘のプランだ。忌憚のない意見を聞かせて欲しいな」
「最強…？　どれ…」
叢雲はそれらに目を通していたが、やがて無言でサムソンに近づくと、彼の胸ポケットからジッポライターを取り出し、何の躊躇も無しにそれに火を点けた。
「あああああああ!?!?」
「ぽいいいいい!?!」
「…あんたらそこに座りなさい」
「な、何をするんだ叢雲！　まだコピーも取っていないしネットにだって…」
「傍若無人っぽい!!」
「正座ァ！」
鹿屋基地成立以来、全ての艦娘の管理をしてきた叢雲にそう怒鳴られては、いかな磯風、夕立とて逆らうことは出来ない。そればかりかサムソンも思わず並んで正座をし、神妙な面持ちで裁定を待つ。
「こういうのは中学校で卒業するもんでしょ。それをいい年しておっさんと仮にも軍属のあんたらが率先してやって恥ずかしいと思わないワケ？　そこんとこどうなの、とりあえず朝ごはんは遅くなるけどいいわよね…？」
アタマノウエニウイテルーノを攻撃色に染め、叢雲はサムソンの使う椅子にどっかりと腰を下ろした。
この後約2時間ほど説教を食らう羽目になるのだが、それは正に自業自得と言えよう。
そして最強艦娘？殲滅黒死天使ノワアル・ゲヴェルクシャルト・鶴見？は起工すらされぬまま轟沈の最後を迎えることになった。
これが良かったのか悪かったのかは、後の歴史が証明してくれるであろう。

おいでませ岩川

鹿児島県は岩川基地。

その設立は意外と古いものの、鹿児島湾にほど近い鹿屋基地とは違って内陸部にあるため、哨戒機や輸送機の発着基地として使われていた。しかし次第に苛烈さを増してゆく深海棲艦との戦いに、懸念と危機感を抱いた大本営が増設、改装を決定。

その結果、鹿屋をはじめブルネイやタウイタウイ、リンガ泊地など、主に南方の戦場に赴任させる艦娘たちの訓練基地として生まれ変わることとなる。

立地上当然ながらドックを持たない基地であるため、短距離のリニアラインを敷設し、鹿屋へと直通運転をさせることでこの問題を解決。所属の艦娘たちは鹿屋のドック施設を借りて出撃する形となっている。

基地司令を務めるのは阿曇忠良（あどん・ただよし）少佐、３２歳である。彼は嘘か誠か、かつて薩摩を治めた島津の分家筋の家系の出であるらしく、その名前も島津中興の祖である島津日新斎（じっしんさい）こと忠良から付けられたという。

ことの真偽は置いておくとして、彼は横須賀海軍学校において、現・鹿屋基地司令である寒村中佐の後輩であった。

背が高く眉目秀麗な偉丈夫であるが、その実はかなりエキセントリックな人物であり、彼が新生・岩川基地に赴任すると知ったサムソンこと寒村は、露骨に嫌な顔をしたという。

そんな岩川基地に、今サムソンはいた。

ここは訓練所という名目であるから、近隣の基地、鎮守府から手練の艦娘達が出向してきている。例えば佐世保からは高雄型重巡洋艦・愛宕と川内型軽巡洋艦・川内が。呉からは球磨型重雷装巡洋艦・木曾と飛鷹型軽空母・飛鷹。そして鹿屋からは朝潮型駆逐艦・霞が…といった具合にである。

サムソンがここを訪れたのは、霞の任期である三か月が経過し、次の教導担当である初春型駆逐艦・若葉と交代させるためであった。姉

妹艦である飛鷹を訪ねるという名目で勝手に着いてきた隼鷹、そして若葉と共にリニアを降りたサムソン達を、十一月の寒風が出迎える。
「寒いなあ…」
「鹿児島が暖かいなどというナイーブな考え方は捨てろ。私は薄着でも大丈夫だぞ」
「若葉はちんまいから風に当たる範囲が狭いんだよぉ。ほれほれ、近う寄れ」
鹿屋から数百キロ離れている訳でもなく、外気温や風向なども同じである筈だが、暖かい車内との温度差効果は抜群であった。
上着の前をはだけた隼鷹が、若葉をくるんでボタンを留める。胸元から顔を出した若葉は、隼鷹の豊かなバルジを枕に、そう満更でもない表情だ。
「ふむ…これはこれで」
「ヒャアあったけえー！　若葉めっちゃ体温高い！　提督ぅ、提督も入る？」
「悪いな提督よ、ここは一人用なんだ」
二人羽織状態でのそのそ歩くヤングリーフ・ファルコンホークを尻目に、サムソンは基地施設へと歩を進める。
叢雲とは違ったベクトルで口やかましい霞も、いなければいないでどこか物足りないものだ。それは他の艦娘達も同様で、今夜はちょっとしたお帰りパーティでもしようね！　と張り切っていた。
「若葉はパーティ出れなくてかわいそうだねえ」
「問題ない。代わりに提督の部屋から色々持ってきたからな」
「え、ちょ、マジすか…それ返ってこないやつだよね!?」
サムソンが振り返り困り顔をするが、若葉はどこ吹く風である。施錠をしないのが悪い、というのが鹿屋所属の艦娘達の一般的な見解であった。とは言えサムソンもサムソンで、見られて困るようなものは置いていないため、あえて施錠をしていない。
持っていかれるのは主に書籍や映像メディアなどであり、財布などから金を抜かれるようなことは起きていないのが救いである。
「まぁいいけどさ…君たちは僕の部屋をブックオフか何かと勘違い

しているフシがあるよな」
「失礼な、ブックオフで万引きしたら捕まるだろう。青空文庫みたいなものだよ」
「許可した覚えはないんだけどね！」
わいわいと騒ぎながら歩いていけば、寒さも忘れる。そうしている内に、一行は岩川基地の正門へ到着した。
オートメーション化された門はおいそれと侵入できるものではないが、番所を訪ね中にいる妖精さんに要件を伝えれば、すぐに門は開く。
実はリニアの駅と基地は地下で繋がっていて、すぐに基地の施設内へと入れはする。しかしそうしなかったのは、これから三か月の間会えなくなる若葉と、少しでも話をしておきたいという、サムソンのちょっとしたセンチメンタリズムでもある。
こういう処に艦娘たちは敏感である。能力は平凡、容姿も平凡で魅力的とは言い難いサムソンであるが、それでもどこか憎めず捨て置けないと思わせるのには、その辺の人徳のようなものがあるからだろう。
「あたしゃここ来るの初めてだよ」
「そうだっけ？　鹿屋から１０分もかからないんだから、休日は遊びに来てもいいんだよ」
「まー今回は飛鷹がいるってんで来たけどサ、ここの子らってみんな小さくて、酒飲めないだろう」
今現在岩川で訓練を受けているのは、殆どが駆逐艦種の艦娘たちである。艤装を纏ってしまえば年齢の差などはあまり意味を為さないが、普段の暮らしともなれば話は別で、いかな酒豪の隼鷹といえど一升瓶片手に乗り込むのは気が引けるらしい。
ならば教官筋の連中と飲めばいいんじゃないの、というサムソンの言葉にも、あまり気のりはしていないようだ。
「ま、よそ様の基地でハメ外すのはよくねっしょ」
「それもそうだが」
「む、提督よ。誰かいるぞ」

隼鷹を脱ぎ捨てた若葉が、立ち止まって指をさす。
基地の入り口に、背の高い男がいるのが見えた。
「あれが阿曇少佐かい？」
「そう。リニアの中でも言ったけど、大分おかしい奴だから注意しとくように。悪い奴じゃないんだけどね」
一行はそのまま進み、男の前に立つ。
軍服の上に風雅な模様の羽織をひっかけ、ウェーブのかかった髪の毛を風に遊ばせているその男こそ、岩川基地司令の阿曇忠良少佐であった。
阿曇はサムソン達にとびっきりの笑顔を見せ、「チャオ」、と挨拶をしてみせる。
「ようアドン君、しばらく」
「と言っても三か月ぶりですけどねぇ。忙しくてお伺いも出来ずごめんなさいね。しかし…あんらァ～サムソン先輩、お会いになる度丸くなってらっしゃらない？」
「うるさいよ」
「ぶほっ」
敬礼を返しつつも飛び出た、予想外のオネエ言葉に隼鷹がたまらず吹き出す。だが阿曇は気にすることもなく、隼鷹の周りをぐるぐる回っては、その切れ長の目を輝かせた。
「ンマー！　あなた飛鷹型の…隼鷹さん？」
「え、あ、うん。そうだよぉ、飛鷹がここで世話ンなってるって聞いたからサ」
「ンマー！　飛鷹ちゃんからよくお話は聞いているわ！　一度お会いしてみたかったのよぉ！　私は阿曇忠良、気軽にアドンって呼んでちょうだいね！」
「あ、そ、そう…そりゃどうも…」
ニコニコと笑いながら乱射してくるオネエ言葉に、流石の隼鷹もペースを乱されているようで、時折助けろ、といった目線をサムソンに投げてくるが、サムソンは敢えて知らないフリをしている。
次にアドンは若葉の前にしゃがみ込み、目線を合わせてにっこりと

笑う。顔の造りは極めて端正で、サムソンとは比べるべくもないイケメンである。だが面食いでない若葉にそれは通用しないようで、彼女はいつもの様に「若葉だ」とだけ返して笑うのみだ。
「んんん～！　初春型の子と会うのは初めてだけれど、とってもラブリーだわねぇサムソン先輩！」
「若葉は照れ屋だからね、あまり近いと噛みつかれるよ」
「変な情報を吹き込むんじゃないぞ提督よ、噛みつくぞ」
「あン、当岩川基地内での喧嘩は御法度なんだからね！　さ、ここじゃ何だし中でお話と引き継ぎをしましょうか。霞ちゃんも待ちくたびれてるでしょうし」
アドンはそう言って立ち上がり、若葉の手を取って歩き出す。微妙な顔のままの隼鷹とサムソンがそれに続くが、隼鷹の足取りはどことなく重い。
「なぁ提督、アレってアレか？　オカマちゃんか？」
「本人曰くオネエ系らしいが僕も詳しくは知らん。ＬＧＢＴでいう処のＴかと思ったが違うみたいだし」
提督という位には、必要な能力と実績があり、人柄さえ良ければ誰でもなれてしまう…とまでは言わないが、ともかくそこまでハードルの高い挑戦ではないらしい。
また大本営にセクシャルマイノリティを排斥する傾向が無いというのは、このアドンを見ればわかる。
ちなみにサムソンも海軍学校を出てからしばらくは、横須賀で輸送部隊の一つを任されていた。それが何故提督となり鹿屋に赴任したのか、というのはまた別のお話となるのだが。
「要は出来るオカマちゃんってことかぁ」
「頭はいいし人当たりもいいからね。僕は正直あんまり付き合いたくないけれど」
「あらァサムソン先輩、ちょっとつれないんじゃなァい～？」
「耳もいいな君！」
玄関から入り、司令室へ向かう。新調されて時間が経っていないだけはあり、床や天井、調度品などはどれも真新しい。

廃校になった小学校を増改築し使っている鹿屋とはえらい違いである。
「たっだいまぁ～」
「おかえりなさい司令官！」
司令室へ入ると、中で待機していた三名の艦娘が、敬礼をしつつ一行を出迎えた。元気よく挨拶をしたのはつい最近になって艤装が顕現（けんげん）した、睦月型駆逐艦・水無月。そしてその傍らに立つのは、和装に身を包んだ水上機母艦・瑞穂と、鹿屋のかーちゃんこと霞であった。
「さっそくだけどミーナちゃん、全員を招集してくれるかしら。ミズポンはお茶お願いするわね」
「はい、わかりました！」
「かしこまりました」
水無月は初めて見るサムソンと隼鷹、若葉をちらちらと気にしつつ、部屋の外に出ていく。隣にあった通信室へ向かったのだろう。そして瑞穂はすっと離れてお茶の用意を始め、霞はその様子を腕組みしつつ伺っている。
「ま、立ち話もなんだし座って座って。カスミンもほら、サムソン先輩と会うの三か月ぶりでしょお？　もっとスマイルスマイル」
「別に、基地に戻れば嫌でも毎日顔合わせるんだしいいわよ。それよりアンタちょっと太った？」
「ええー…」
「私がいないからってどうせ毎日毎日揚げ物やらお肉やら酒やら馬鹿みたいに飲み食いしてたんでしょ、叢雲もあれで甘やかすしほんっとダメな大人だわね」
一度こうなるとしばらくは治まらない。とは言え見方を変えれば久々に主人にあって嬉しさを爆発させる子犬のようでもあり、それを理解している隼鷹と若葉はにやにやとその小言を受けるサムソンを見ている。
助けろ、といった目線を二人は無視しつつ、席に座った。
「さて若葉ちゃん、まずは改めてご挨拶ね。私はここの司令官、名前

は阿曇忠良よ。阿蘇山のアに曇天のドンでアドン、忠良は島津忠良の忠良よ」
「島津というとひえもんとりで有名な戦闘民族か」
「あンらァ～よく知ってるわねぇひえもんとり！　そうそう、島津忠良っていうのはねぇ、あの有名な島津兄弟の祖父でね。日新斎の号が有名よね、戦国以降の薩摩では日新大菩薩って崇められていたのよぉ。他にも島津いろは歌っていうのを遺して…」
「提督、若葉さんが困っていますよ」
「あら、ごめんなさいねぇ、つい熱くなっちゃうのよ。それでまず…」
そこに瑞穂が割って入り、紅茶と菓子をそれぞれの前に置いた。▪
にこりと微笑んだ瑞穂に目を奪われていたサムソンの脇腹を、霞が肘で突く。
「ありがとう瑞穂、あなたの焼いたクッキーが食べられなくなるのはちょっと寂しいわ」
「そんな、霞さん。近くなんですからいつでも食べにいらして下さい」
「そォよ～！　鹿屋とは目と鼻の先なんだから。ああ、出撃のついでにお届けするのもいいわねぇ」
確かに、地理的にもそれは容易に出来るのだが、あまりお互いに干渉しすぎるのもよろしくない。共同作戦ならともかく、いずれ岩川基地単体でも任務を請け負うこともあるだろう。そういった状況になっても、鹿屋がいるからいいや、という気概を持たれては困るのだ。
それは叢雲や摩耶、足柄がサムソンに進言していることでもある。
「ま、休みの日に来るくらいなら丁度いいでしょ。それより引き継ぎだけれど…ン、皆来たみたいね」
沢山の足音に気付いた霞が、ティーカップを置いて立ち上がる。
すぐにドアがノックされ、「入ります」という声が響いた。
「失礼しゃーす。岩川基地所属、旗艦加古以下六隻、参上しました」
「教導隊も来たわよぉ～」
古鷹型重巡洋艦・加古を先頭に、陽炎型駆逐艦・初風、白露型駆逐

艦・江風と海風。そして祥鳳型軽空母・瑞鳳と、潜水母艦大鯨、そして水無月が一斉に敬礼をした。軍に入ってからまだ日が浅い、というのはどこか硬いその立ち居振る舞いをみればわかる。いや、旗艦の加古だけはそうでもなく、どこか眠そうな目でサムソン達を見つめてはいるのだが。

一方の教導隊は高雄型重巡洋艦・愛宕を筆頭に、川内型軽巡洋艦・川内、飛鷹型軽空母・飛鷹、球磨型重雷装巡洋艦・木曾の四名である。これに霞を加えた五名が、ここで指導を行っているベテランたちとなる。

「や、どうも。鹿屋基地司令の寒村中佐です。よろしくどうぞ」

「こちらこそよろしくどうぞぉ。霞ちゃんってばちっちゃいのにビシビシ厳しく指導してて、とてもかっこよかったのよぉ」

サムソンが立ち上がって敬礼を返し、一同を見回してそう言った。

ふわふわとした雰囲気のお姉さん重巡、愛宕がニコニコ笑いながらそう返せば、首に巻いた長いマフラーが何処となく忍者を思わせる軽巡、川内も肩をすくめて笑う。

「おかげで私は楽できたけどねぇ」

「お前はだらけすぎだ川内、神通のヤツと替えてもらいたいよ」

「そんなことしたらここの子たち死んじゃうよ！」

「隼鷹もしばらくね、元気そうで何よりだわ」

川内、木曾、飛鷹がそれぞれ会話を始めるものだから、たちまち収拾がつかなくなる。アドンがまぁまぁ、と手で制し、場はとりあえず静かになった。

「ま、そういうワケなんで、今日…いえ、明日からはこの若葉ちゃんが、カスミンのかわりに教導隊としてビシバシやってくれるからね」

「何だか眠そうな奴だな、加古の親戚か？」

木曾がふふんと笑いながら若葉を見るが、そんな威圧に怯える若葉ではない。おー、と手を挙げ、「若葉だ」とだけ述べてまた座り込む。

「はい、じゃ、そういうことなんで、岩川のみんなはカスミンと若葉ちゃんにご挨拶！」

「はい！」

顔合わせと引き継ぎを済ませ、岩川の艦娘たちは再び訓練に戻っていき、若葉は川内に案内されて出ていく。
司令室にはサムソンとアドン、霞、隼鷹そして飛鷹が残っていた。
「姉妹艦と会えたんですもの、今日は鹿屋へ行ってハメを外してきてもいいのよォ」
「ほら飛鷹、司令さんもそう言ってんだしさぁ。鹿屋の方でもちょっとした宴会みたいなん用意してるから」
「どうせアンタに絡まれてついでに後始末もさせられるんでしょう。そういうのわかっちゃうな」
「だっはー！　そんな事ねーってさあ！　いい芋焼酎があんだよぉ、やっぱ薩摩は焼酎だよなぁ」
その会話に参加はせず、霞は二人の司令官を見て口を開く。
「気になったんだけど、ここの子達でほぼ出そろったのかしら、艤装って」
「うん？　ああ、どうだったか…まだいくつかサルベージされてない船もあったよね。信濃は難航しているみたいだし」
「そうねぇ、それにサルベージされても舟魂（ふなだま）が目覚めないパターンもまだあったでしょう？　ほら、あのシブヤン海で沈んだ…」
その時である。
司令室にあるスピーカーから、緊急入電を知らせるアラートが鳴り響いた。
何だなんだとざわめく一同、そしてサムソンが持つ携帯端末から、これまた緊急を知らせるアラートが鳴り響く。
「はァいこちら司令室よん、エマージェンシー？」
「もしもし、ああ、叢雲か…うん、大本営から…？　わかった」
そして、鹿屋・岩川から離れること約４００ｋｍ。長崎県・佐世保

鎮守府。
最新鋭の施設と、最精鋭の艦娘達を揃える、九州地方及び南方方面を含めた中で最大の拠点である。

『波形パターン解析完了。大本営にデータ送ります』
『艤装出力・並びに成型完了まで…8建造単位時間と算出』
『データきました。これは…大和型超弩級戦艦2番艦…!』
「武蔵…か」
おそらくは司令官であろう、五十絡みの男が、上がってくる報告を前に、複雑な表情を浮かべる。
この件がまた新たな物語の一頁となるのだが、それはまだ少し先の話である。

ひみつ解説・艤装編

アドンに別れを告げ、サムソンと隼鷹、霞は鹿屋へと戻っていた。
叢雲からの連絡によれば、佐世保の大型建造炉から、未確認の艤装が顕現する、との知らせが大本営からあったらしい。
「前の時も思ったけどさぁ、これって福引とかパチンコ屋みたいじゃない？　佐世保鎮守府大当たり！　大当たりでございまーす！　みたいな感じでさぁ」
「言うなよ、僕も同じこと思ってるさ。艤装についてはまだまだ謎が多いしな、大本営も士気高揚に繋がればいいな…程度の認識なんだろう」
「でもめぼしい戦艦、空母は大体出揃っていたわよね？　あとは武蔵、ビスマルク、大鳳…伊４０１がまだなくらいで」
霞の言葉を受けて考え込みつつ、サムソンは司令室のドアを開けた。中では叢雲に加え比叡、摩耶、足柄、雲龍の年長組が待機している。
「おかえり霞、しばらくね」
「ちょっと背、伸びた？」
「胸は育ってねーみたいだがな」
「うっさいわよ！　親戚のおばちゃんかアンタらは！」
「はいはいそこまでそこまで。で、叢雲？」
後になさいあとに、と小言を吐き、霞の頭や背中、胸など触りまくる年長組をかきわけ、叢雲がヘッドセットとウェットティッシュを投げてよこす。
「オンラインで会議があるみたいよ。さっさと支度なさい、ヒゲ剃ってる暇はないからそのテッカテカの顔だけでも小奇麗にすることね」
「はいはい…しかし艤装からのアプローチか…一年以上ぶりの話だねぇ。どの艤装が出るかって話は出てるの？」
「何でも武蔵だそうよ。これまた豪華な話だわね」

そもそも艤装の建造は、まず先の大戦で活躍した『軍艦』の遺物があるか、あるいは船体そのものがサルベージされていることが前提となる。サルベージ技術の目覚ましい発展により、海の底で眠りに就いていた彼女らは再び陽光のもとへと戻ってきて、今は大本営直轄の『墓地』とも言える場所に安置されている。

そこで採られた詳細なデータは膨大な処理能力を持つスーパーコンピュータのもとで一元管理され、目覚めの時を待つ。

そして目覚めるのに必要なものが、艦の遺物あるいは船体そのものに記憶された情報…言い換えるならば『魂』である。遺物、船体…そして沈んだ海域などに揺蕩う、起工から進水、就役。轟沈、解体までの記憶は、目に見えないが、たしかに『ある』のだ。

これまでばかりはいくらデータがあろうともどうすることも出来ない。日本独特の『付喪神』という概念をもとに構築された、古から連綿と続く儀式でもって、その『魂』を呼び起こし、慰め、労い、再び戻ってきてもらうことが肝要となる。

この一連の技術の詳細は当然ながら最高機密となっており、現場の指揮官である提督はおろか、その上の大本営幹部ですら知る者は少ない。

ではどうするか、という事であるが、これには二つのパターンがある。

一つは『魂』を呼び覚ますことに成功し、船体または遺物と一つになったもののデータを各地の鎮守府、基地、泊地に送信し、現地での資材を使って出力するパターン。

例えば高雄型重巡洋艦のネームシップである高雄の艤装を出力したいのであれば、まずは大本営に具申をする。それを受けた大本営が査定、審査に入り、見事クリアすれば高雄のデータと出力キーコードが送信されるという仕組みになっている。

これにより高雄の艤装は顕現し、『適合者』に着装されることによって、再び戦うことになる。

そしてもう一つが、『何らかの要因で』深海棲艦たちに捕縛された『魂』を、その深海棲艦を撃滅することによって『解放』するパターン

である。艤装のブラックボックスには秘かにその為の術式が仕込まれており、『解放』された『魂』はそこにいる艦娘の艤装を通してデータ化され、大本営へと転送される。

これについては謎が多く、何故深海棲艦に囚われてしまったのか、という事に関しては不明瞭な部分が相当に多い。沈んだ場所が関係しているのでは、という見方が今のところ有力であるが、目下のところ研究中である。

ともかく、解放され転送された『魂』は『墓地』にある己の船体（からだ）へと戻り、そこで初めて艤装の設計図として完成する。だが解放したところで船体がサルベージされていない場合はどうなるのか、という意見も当然ながらあって、こちらについても研究の進捗を待たねばならない。

鹿屋で言うならば、例えば摩耶は前者のパターンである。

レイテ沖からサルベージされた『摩耶』は、『魂』との融合も果たし『墓場』で眠っていたところを、火力不足に悩んだサムソンからの「火力の高い艦船を回して欲しい」という具申を受け、大本営が許可を出して出力された。そしてすぐにリストアップされた幾人かの『適合者』…これについてはまたの機会にするが、ともかく適合者が鹿屋に派遣され、艤装とのリンクを経て艦娘『摩耶』となったのである。

そして後者の代表が雲龍である。昨年に実施された大規模作戦の折、鹿屋の部隊はマニラ近辺で、雲龍の『魂』を解放した。

基本的に、解放され融合を果たした艦船は、その『魂』を解放した部隊に、まず所属させるか否かの権利が与えられる。言い方は悪いが早い者勝ち、あるいは当たりくじのようなものだと思っていただければよい。

当時の鹿屋には、航空母艦の戦力は軽空母隼鷹と千代田の二名しか在籍しておらず、戦力拡大を必要としていたサムソンは迷うことなく雲龍を部隊に受け入れた。

余談ではあるがこの翌年…つまり今年になるが、サムソンは雲龍の姉妹艦である葛城の魂も解放し部隊に受け入れている。冴えない風体とは裏腹に、意外と運の強い男でもあった。

ここで佐世保に話を戻す。
以上のことから、艤装の顕現はまず具申、あるいは敵性体の撃滅ありきということになるが、極まれに、『軍艦』の方からアプローチがなされることがあるという。これについては全くの詳細が判明しておらず、過去にも数件の前例しかない。
何の具申もしていないにも関わらず、建造炉に出力の兆候が発生するとのことだが、詳しいことは秘匿されている。
早い話が「さっさとシャバに出せこの野郎」といったところであろうが、基地側の都合などは当然無視されるため、資源に余裕のある基地、鎮守府でなければ対処できないのも当然のことである。
もっともその際に消費した資材は大本営が保証してくれるので、もしそうなった場合はタダで戦力の拡充が図れることになるため、現場からは天祐の如しと有難がられることもあるようだ。
過去の事例として、まず最初に発生したのは横須賀であった。大本営の喉元、正に最後の砦である鎮守府に顕現したのは、大和型のネームシップ、大和である。何分初めての事であるから、大きな混乱が起きたが、戦力になるのであれば受け入れぬ手は無いという事で、大和はめでたく横須賀の象徴となった。
その次が舞鶴である。ここに顕現したのは翔鶴型航空母艦・瑞鶴であり、その名が示すように、瑞なる『鶴』が『舞』降りたとあっては、否が応にも全軍の士気は高まった。事実、直後の大規模作戦『渾』においては何処の基地、泊地、鎮守府も獅子奮迅の活躍を見せている。
そして今のところ最後の事例が、大湊警備府である。ここに顕現したのは阿賀野型軽巡洋艦のネームシップ、阿賀野であった。それ相応の実力を持った艦艇であるが、大和や瑞鶴と比較した場合どうしても一段劣るのは否めなかった。だがこれらの陰口を聞き及ぶことになった大湊の司令官、佐々木が激昂し大本営に殴り込んでからというもの、誰も阿賀野について何かを言及するような真似はしなくなったという。
そして今回、正に今…佐世保である。
霞が言った通り、残る大型艦はそう多くない。大和型二番艦武蔵、

ビスマルク級ビスマルク、装甲空母大鳳、そして伊号潜水艦伊４０１のいずれか…という予想は、どこの拠点でも酒の席、余暇の話題に上がること事欠かない。
そしてどの艤装が顕現したとしても、大幅な戦力増になることは間違いないのである。

大本営からの通達により、各地の司令官達は会議用のチャンネルを開いて一同に会した。
サムソンもヘッドセットを装着し、神妙な面持ちで待つ。カメラ並びにシステムによって、全ての司令官達の顔がＶＲ空間に映し出される様は壮観でもありむさ苦しくもある。先ほどまで一緒にいたアドンがウィンクをしてくるが、そこは当然無視をするサムソンだ。
『佐世保鎮守府司令、疋田（ひきた）です。皆さんご多忙のところ申し訳ない』
軍帽を被った五十絡みの男がまず敬礼をし、口上を述べる。
『やりましたな疋田さん、武蔵だとか。久々の天祐だ』
『あぁ丸目（まるめ）さん、もうご存知でしたか。いやはや日吉（ひよし）の方々はせっかちですな、気持ちはわかりますがね』
その言葉に場は笑いに包まれる。堂々と『佐世保鎮守府、武蔵！武蔵でございます！』と宣言したかったのだろうと、サムソンもつい笑顔になった。ちなみに日吉というのは現在、海軍の本拠地…俗に大本営と呼ばれるもの…が置かれている場所であり、横浜市と川崎市の境目にほど近い土地である。
まず祝辞を述べたのは、横須賀の司令官である丸目であった。ついで呉、舞鶴、大湊と、大手の基地司令がそれに倣うが、疋田の顔はどうにも複雑である。
『どうなさったのです疋田司令、浮かない顔に見えますけど』
誰もがおかしいな、と思い始めたころ、アドンがそう尋ねた。昔から単刀直入なところがあるが、それがかえって重用されることもある。疋田はふ、と笑い、口を開いた。

『ご存知の様に、武蔵の顕現…それ自体は大変喜ばしいことだ。これにより奴等に対して更なる優位性を確保できる…のだが、我が佐世保には既に、長門とＩｔａｌｉａ、霧島の三隻と、翔鶴、飛龍の二隻を基幹とし組成した艦隊が揃っている』

『それが何か…』

『率直に言えば、大仰すぎる。この五隻にあとは北上、鳥海、島風などといった各艦種のエース級を加えて連合艦隊を編成すれば、大抵の相手は黙らせることが出来るからだ』

佐世保はその規模、所属する艦娘たちの練度、どれをとっても最強クラスの鎮守府である。その事はここにいる誰もが理解しているし、それ故に大本営も重要な作戦を幾度となく任せてきた過去がある。

『つまり武蔵が加入したとすれば、逆に持て余す可能性があると?』

『有体に言えばそうなるな。贅沢な悩みだということは判っているつもりだが、こう、素直に諸手を挙げるわけにもいかないというのが正直なところでね』

『なるほど。では話は早い、武蔵の艤装が出力されたら、他所へ回せばいいだけのこと』

佐世保とは常に競い合い、比べられることも多い呉の司令官である塚原が、若干シニカルな笑いを浮かべつつそう言うが、疋田の表情は晴れぬままである。

『そこですよ塚原さん。私もそれはすぐに考えましたがね、武蔵自身がこの佐世保を選んで産まれてくるというのなら、私は彼女の親のようなものだ。産まれたばかりの子を追い出す親が何処にいましょうか』

『ロマンチストな疋田さんらしい考えだ。それに艤装は艤装でしかない。魂があれどものを言うわけでもあるまいに。適合者があなたの娘だというのならともかく、それはちと考えすぎなのではないですか』

疋田と塚原は海軍学校の同期であり、それ故にお互い遠慮なしに意見をぶつけ合う間柄でもある。他の司令官たちは黙ってそのやり取りを聞いていたが、やがて丸目が二人を制するように口を開いた。

『うちには大和がいるのでわかる事だが、ぶっちゃけて言うと、あれはとにかく燃費が悪い。もともと決戦用の兵器だからだというのは勿論判っているが、どうということの無い作戦…いや、実地演習に出しても、他の者の数倍から数十倍の燃料弾薬を消費する』

『それは仕方のないことなのでは』

『そうだ。だが更に言ってしまえば、だ。大和一隻と、うちの金剛とＲｏｍａを足して比べた場合ですら、もたらされる戦果は同等であるにも関わらず、消えていく資材は大和の方が多い』

そこまで黙って会議を傍聴していた比叡たちであったが、丸目のその言葉を聞いて、ひそひそと何かを話し始める。

「何か雲行きが怪しくないかしら」

「あァ、確かにな…」

「大手には大手の悩みがあるってことかー…」

「佐世保も呉も横須賀も、保有戦力は十分みたいだしね」

『つまり、失礼を承知で言わせていただければ、武蔵は持て余す、と』

『大和型は、と言った方がよいだろう。彼女らの力がどうしても必要、という局面が今までにあったろうか？』

丸目の問いに、その場の司令官達は皆押し黙ってしまう。丸目は話がそれたな、と前置きし、シガーカッターで葉巻を切っては銜え、火を点けた。

『まぁこれは横須賀の意見としてであり、他の方々がそう考える必要はない。あの忌々しいレ級にぶつけたい、と思う方もいようが、あれは特定の海域から出てはこんからな』

『ふむ…では丸目中将、失礼を承知でお聞きしますが、そちらでは大和はどうなっているのです』

大湊の司令官である佐々木が、紙巻のタバコに火を点けつつそう尋ねた。男だらけの海軍を、己の才覚のみでのし上がってきた女傑である。

丸目はふうっ、と紫煙を吐き出し、佐々木を見る。

『観艦式に出して、周辺住民や企業への広告塔代わりにしているよ。大和ここにあり、深海棲艦なにするものぞ、と…そう思わせられれば、

フェミニスト団体や反戦派の胡散臭い宗教団体なんかもひとまずは黙るのでね』
『彼女はそれで納得しているのですか』
フェミニスト、という単語が引っ掛かったのか、佐々木の声が一段低くなる。だが丸目は意に介さず、続ける。
『納得はしておらんだろう、彼女とて軍艦（いくさぶね）たる矜持はあるだろうからな。だが先ほども言った通り、費用に対する効果が優れているとはとても言えん存在だ。日々訓練とコマーシャルだけで、まるでアイドルの如しさ…』
『我々は広告代理店ではありません』
『いかにも左様。戦って勝つ、奪われた海を取り戻す、国民…いや、人類を守る。その為の組織である。だが活動をする為には当然ながら金が、資源が要る。国民が納めた血税がな。無駄遣いをすれば叩かれる、揚げ足を取られる。そして今のところ、大和が必ずしも必要な局面がない…となれば、取るべき道は自ずと見えるだろう』
『強くある為に気を遣わねばならないというのは、政治屋が考えればよいことです。我々現場の人間は、使えるものは何だろうと動員して、一刻も早くあの深海棲艦どもを、一匹残らず地獄に叩き落してやるのが第一だと考えますが』
「要するによ、大和は金かかるから滅多に使えねーってことだろ？」
「要しすぎだけどまぁそういう事よね。金剛とＲｏｍａで同等の戦果を上げられて、なおかつかかる費用はトントンでないと来れば、大和をわざわざ出す必要なんてないもの」
当然ながら摩耶、足柄の会話は拾っていないが、おそらくは何処の司令室でも同じような会話がなされているのだろう。
サムソンも複雑な表情で、叢雲の淹れてくれたほうじ茶を啜った。
『まぁまぁ佐々木さん、丸目さんとの議論はまた後日にしてですな』
関係のない方向へ舵を切っていくその議論を押しとどめ、場をリセットしたのは舞鶴の司令官である上泉だった。
予備役からの復帰であるのと、一番年上でなおかつ温和な人物であるため、皆から慕われている老将である。上泉は湯呑をコトリと置い

て、口を開いた。
『今は武蔵をどうするか、ということに心を砕きましょう。手元のデータによれば、適合者は幾人かに絞れてはいるものの、まだ決定はしていない。疋田さんが武蔵をどうするかは、それからでも遅くはないと思うのですがね』
『いやその前に疋田さん、佐世保は武蔵を引き取らないということでいいのですか』
『…それはこれから、部隊の皆と話し合って決めますよ。上泉大佐が言うように、まだ時間はあるのですから』
そう、時間はまだあるのだ。今現在、深海との状況は緊迫しているわけではなく、また侵攻を許している訳でもない。結論を急いだところで益はないだろう。
そこで上泉は、ずっと黙ったままのサムソンやアドン、柱島や佐伯湾、辺境、それに海外の基地に赴任している、比較的若い司令官達に視線を投げた。蚊帳の外だな、と思っていたらしく、顎髭をいじっていたサムソンは叢雲に背中をぶっ叩かれて我に返る。
『若い方々はどうですかな、疋田さんの仰られた意見に何かあれば、発言するといい。ここはそういう場なのだから』
『岩川は訓練基地ですし、資源や設備もまだまだこれからですからねぇ…武蔵を下さい！　なんて事は逆立ちしたって言えませんわぁ』
『つまり欲しいという気持ちはあるんだなアドンさん』
『キモチはキモチよぉ鐘捲（かねまき）さん、現実はちゃんと見えてるから安心して頂戴』
単冠の司令官である鐘捲とアドンが絡む横で、サムソンは天井を見上げた。ＶＲ空間の会議室ではなく、鹿屋基地の天井である。ここがかつて学び舎であった頃の子供たちが悪戯をしたのか、微かに残るチョークの後が見える。
『疋田さんは先ほど、艦娘は我が子のようなものと仰いましたが、それは私も同じ思いです。やもめで結婚の予定もない私ですが、こう長いこと彼女らと付き合っていると、たまに思うんですよね、「娘がいればこんな感じなのだろうか」と』

『おや寒村さんは独身でしたか、何でしたら縁談の一つや二つ、お力になりますよ。いや、私でなくうちのカミサンがですがね』
どっ、と場が沸く。上泉の細君は、その世話焼きっぷりが殊に有名で、現に疋田と塚原の両名は、どちらも上泉を仲人として現在の妻と結婚をしている。
『ああ、これは失敗失敗。失礼したね寒村さん、続けて下さい』
『え、ええ。ともかく、彼女らにはキモイだの鬱陶しいだの思われるかもしれませんが、それを含めて父親というのはこういった心持であるものか…と、たまに考えます。だからコストがどうとか、持て余すだとかそういった話はさておいて、まずは武蔵がこの世界に何事もなく還ってこれるように準備してやるのが大事かと』
『まぁそれはそうよねぇ』
黙って聞いていた疋田や塚原、丸目などもそこに異論は無いようである。
とは言えやはり、どうしても付きまとうのが運用にかかるコストであり、そこを蔑ろにする訳にもいかない。サムソンの意見はただ己の感情を述べただけであるし、大勢に特に影響を与えるというものではなかった。
そして武蔵の扱いについては、適合者が見つかってから改めて考慮する、ということで会議は終了した。

「ふーっ。僕ぁ会議ってのがどうしても苦手だな」
「何かキモイこと言ってたし顔もキモかったわよ」
「勘弁しておくれよ…僕だってやらかしたな、とは思ってるけど、でも武蔵が何かちょっとかわいそうだなってのは本心だよ」
父親だの娘だのの発言はしっかりと聞かれていたようで、サムソンもそれについてあれこれ言われるのは覚悟をしていたようだ。しかし摩耶、足柄、雲龍の誰もがそれに触れず、かといって不快であるといった態度も見せずに、霞のお帰りパーティの手筈などを確認するに留まった。

そして武蔵の一件は、やがて鹿屋に大きな転機をもたらすことになる。

「はイッ！　霞先輩お帰り記念パーティ隠し芸大会！　一番葛城！物真似をさせて頂きます！」

「いよっ葛城！」

「えー、『戦車に乗っててちょっと愛が重くて蟹座で無線の免許も取っちゃう女の子の真似』」

「ふざけんな帰れ!!!」

「やだもー！」

大騒ぎの宴席の外れで、一人ハイボールをなめるサムソンの横に、スルメと清酒の小瓶を持った雲龍が座る。

二つもった猪口を差し出されれば、サムソンとて受けない訳にもいかない。注がれた清酒をかっと呷り、一息つく。

「どしたの雲龍」

「さっきの会議のことなんだけど」

「え、あ、うん…あれはちょっとカッコつけすぎたと思ってるから言わないで…」

「別にそんなこと思ってないわ」

少し酔っているのか、頬を紅潮させた雲龍という珍しい絵面である。

ちぎったスルメをサムソンの口に指ごと突っ込むあたり、少しではなく相当に酔っぱらっているようにも見えるが、どこか嬉しそうでもあった。

どう反応したものかと戸惑うサムソン。ただ笑う雲龍。

「ちょっとだけ嬉しかったかなって。こんな大きな娘がいられても困るでしょうけど」

「あ、ああ…？　う、うん」

「それだけ。武蔵、無事に還ってこれるといいわね」

そう言うと雲龍は立ち上がり、今度は葛城のもとに歩いていく。そして、禁じ手の物真似を披露したはいいが例によってアレだったため

ブーイングを浴びる妹を助けるかのように、「二番雲龍、物真似をします」と宣言して壇上に上がった。

「えーでは、大淀の真似をするわ」

「帰れや!!」

宴の夜は更けていく。

Ｓｕｎｄａｙ

なるほどＳｕｎｄａｙじゃねーの、と誰かが言った。

熾烈な戦いの日々を送る艦娘や提督にも休日はある。今回は鹿屋基地司令である寒村先生（さむらさきお）、通称サムソン、独身３４歳中佐の一日を追ってみよう。むさ苦しくてむせる。

午前７：００

起床。休みだから昼まで寝ていてもいい。自由とはそういうことだ…しかしそれを許さない艦娘がいる。

「朝食の時間よオラァ！」

”!?”

「」

司令室とは地続きになっているサムソンの部屋の扉が、勢いよく開かれた。

現れたのは叢雲である。鹿屋付きの艦娘第一号であり、サムソンとは最も付き合いの古い駆逐艦だ。着任してからこの二年と半年、日曜日の朝は彼女だけの時間となる。と言っても色っぽい話ではない。

自堕落な生活を送られてはサムソン本人にも、また周囲にもよくない影響を与える。休日だからといって昼まで寝るなどという生活態度は絶対に許さないデストロイヤーは、叩き起こすというムチと、お手製の朝食というアメをもってサムソンを調教した。

結果サムソンは休日と言えど普通に目覚めるようになったし、健康体といって差支えの無い体調を維持することに成功している。

「おはよう叢雲…」

「はい、おはよう。雨も上がっていい天気よ」

ぼーっとしているサムソンを足先で小突き、朝食のトレイをちゃぶ台に置くと、叢雲は部屋のカーテンを勢いよく開いて、ついでに窓も全開にした。

言葉通り昨日までの雨は止み、抜けるような青空と、潮の臭いが混じった風がサムソンの視覚嗅覚に訴えて覚醒を促す。

「今日はあったかいな」

「そうね、昼間はもっと気温が上がるんじゃないかしら」

トースターに食パンを突っ込み、ポットからコーヒーを注いだ叢雲が言う。端から見れば年の離れた兄妹、あるいは叔父と姪…にも見える。夫婦とは敢えて言わないが、そう見える趣も少なからずはある。
「今日、外出申請出てるのは誰だっけ」
「えーと…葛城、アサキヨ、雪風時津初月くらいじゃないかしら。あと隼鷹は岩川に行くとか言ってたわね、昼から飲むつもりなんじゃないのアレ」
「どうかな…まぁ隼鷹もそこまではしないだろうけど」
「だといいけど」
叢雲の言葉と同時に、ぽん、と。トースターから食パンが飛び出した。

午前０９：００
食事を済ませ身支度を整えたサムソンであるが、何処かに行くという訳ではないようだ。基地の一階にある食堂で、コーヒーを啜りながら新聞、雑誌などに目を通している。
そこに雪風と時津風が通りかかり、サムソンに挨拶をする。
「しれぇ！　おはようございます！」
「おはよーしれー」
「おはようさん。今日は出かけるんだっけ、気を付けて行くんだよ」
隙あらば登頂しようとする時津風を引っぺがしつつ、サムソンは言う。とはいえ二人ともまだ出ない、とのことであり、しばらくの間会話をすることとなった。
「しれぇは最近、まんがのざっし買ってこないからつまらないなー」
「買ってきてもすぐ無くなるからね…！　持ちだして戻さない悪い子は誰なんだろうね…！」
「はい！　雪風は知ってます！」
「ほう…大体予想はつくけど一応聞いておくよ」
それを受けた雪風はニタリと笑みを浮かべ、突然椅子の上に立ち上がっては「ぱんぱかぱーん！」と叫んだ。
対面のテーブルでぼーっとしながらそれを見ていた千代田と初月

が、びくりと身を震わせる。
「パンツが見えてるぞ雪風、降りなさい」
「ここで問題です！　しれぇの漫画を持っていく人は誰でしょう！
『い』で始まって『ぜ』で終わる人です！」
「えーだれだろー？　い…ぜ…い…ぜ…いいぜ…お前が何でも思い通りに出来るってなら…まずはそのふざけた幻想をぶち殺す…ぜ…」
「ぶー！　時津風アウトー！　上条さんではありまーせーん！」
「えー、じゃあだれー」
「磯風でしょ！」
「千代田さん、カミジョーさんって誰だい」
「ＴＯ―Ｙの作者じゃないの」

午前１０：００
外に出ていく雪風時津風コンビやアサキヨコンビなどを見送り、サムソンは喫煙室へ。
そこで足柄と鉢合わせる。
「あら提督、おはよう」
「おはよう足柄、一服かい」
「そんなところ」
足柄は鹿屋基地所属の艦娘で、唯一の喫煙者である。肩身が狭いと同じ喫煙者であるサムソンに陳情した結果、この喫煙室が出来たという経緯がある。
ちなみに大本営からの支給品にも煙草はあり、希望すればすぐに納入される手筈になってはいるものの、「官給品はうまくない」という理由から、二人は自腹を切って外へと買いに出ている。
サムソンがジッポライターを差し出し着火すると、足柄はありがと、と呟いて顔を寄せ、火を点けた。
「佐世保は武蔵の件、どうするのかしらねぇ」
「さてね、疋田さんのことだから悪いようにはしないと思うよ。ただし呉には行かせないだろうなァ」
「どうして？　仲悪いって感じでもなかったけど」

キャビンマイルド…ウィンストン・キャビン・８ボックスとか言う小賢しい名前になってしまって久しいが、ともかくキャビンマイルドの甘ったるい匂いを纏い、足柄はサムソンにそう尋ねた。
「あの二人は同期でね、昔から…まぁ、トムとジェリーみたいな感じなのよ」
「仲良く喧嘩しな、ってやつね。でもいいんじゃない、そういうのって案外刺激になったりするし」
「まぁね、そこはもう皆わかってるけど…」
足柄はこじゃれた動作で灰を落とすと、改めてサムソンの目を見る。
「うちに来る、ってことは？」
「んー……」
その問いにすぐには答えず、サムソンはマイルドセブン・スーパーライト…こちらもメビウス・スーパーライトなどという必殺技めいた名前になっているが、ともかく二本目のマイルドセブンを銜えた。
足柄がすぐにターボライターを取り出しては火を点ける。コォオ、という独特の音を浴びながら、サムソンは顔を寄せた。
「どう、かな。足柄はどうだい、もし武蔵が来たら」
「そうねぇ…とりあえずトンカツパーティでもやりましょうか。めっちゃ揚げるわよ」
「なるほど…って、答えになってないよ」
「それもそうよね。あはははっ」
日曜の朝が叢雲の時間ならば、喫煙室でのこういった時間は足柄の時間である。二人は備え付けの消臭スプレーとブレスケアで臭いを取り払ってから別れた。

午前１１：１０
サムソンは軍服の上に薄手のジャケットを羽織り、鹿屋基地の駐車場にいた。
釣りに行く、という初月を、やや離れた場所にある海浜公園まで送ってやるという算段である。鹿屋基地は広く、敷地内でも釣りは楽

しめるが、初月は釣り場の雰囲気が好きなのだという。
「僕ァ釣りには全く詳しくないんだけど、今の時期は何が釣れるんだい？」
「そうだね、僕もまだ始めて間もないんだけど…アジとサバかな…たまにイカもかかるよ。仕掛けがあればチヌもいけるけど僕にはまだ無理かな」
「ちぬ～ん…」
「えっ」
「いやなんでも…」
軍用車でなくサムソンの車であるが、ＳＵＶなので釣り竿やクーラーボックスなども余裕を持って積み込める。初月は助手席に座り、シートベルトを着けると、サムソンが乗り込むのを待つ。
「じゃあ今夜はアジフライとか期待出来るんじゃないの。足柄に言っておこうか」
「それはよした方がいいかな…正直あまり自信がない」
エンジンをスタートさせ、車はゆっくりと走り出す。基地からしばらくは、官給品の納入や食料品などの業者以外は誰も使わない道なので、サムソンも遠慮なしにスピードを出す。
だが初月はそれがどうにも怖いらしく、７０ｋｍを超えたあたりで「もうちょっとゆっくり…」と懇願した。
「君ら、海の上を高速で進むのにな」
「海と陸（おか）じゃ勝手が違う…！　それにタヌキとか出てきたらどうするんだい！」
「タヌキはいるかなァ…ハクビシンかもしれない」
「どっちでもいいよ、ああほら、もう市街地だよ。スピード落として落として」
休日だけあって車の量は多い。世界が一丸となり深海棲艦たちと戦っているとはいえ、経済の流れや人の往来にまでは制限はかけられないということだろう。
サムソンは有料のパーキングに入り、車を止めた。
「帰りは歩いて帰るから大丈夫だよ」

「あらそうなの、大漁になったらどうするのさ」
「その時は…その時は連絡するから迎えに来てくれると嬉しいかなって」
「わかった。さて、せっかくだし…僕もちょっとそこらを見てくるかね。初月、お昼はどうする？」
若干風は強いものの、気温は高めである。サムソンは上着を小脇に抱えて、そう初月に尋ねた。
初月は笑みを浮かべて背負ったリュックを見せつける。おにぎりを作ってきた、とのことであった。
「そか。それじゃあ気を付けて」
「うん、ありがとう提督」

午後１３：００
港湾関係者や納入業者などへの軽い挨拶回りを済ませ、サムソンは昼飯がてらショッピングモールを歩いていた。茶や菓子を振舞われたせいかお腹はそこまで空いていない。
大型のショッピングモールには食品から衣服、家電、本、スポーツジムなどのテナントが入り、フードコートも家族連れでごった返している。
「何を食ったもんかな…」
松重豊のような顔をしつつ、サムソンは周囲を見回す。独り身であることに苦痛は感じないが、それでも同年代の男が家族連れで楽しそうにしているところには、あまり近寄りたくないらしい。
一人でもあまり違和感のない…と勝手に判断したうどん屋を選び、月見おろしうどんなる若干奇妙なものといなりずしのセットを買い求め、サムソンは端っこの席についた。
「ふー…」
基地のそれとはまた違った種類の喧騒を背に、サムソンは無言でうどんをすする。関ケ原以西ということもあり、薄い色のつゆのうどんであるが、関東で育ったサムソンにとっては若干物足りない。
まずくはないんだけどな、もうちょっとこう…な…と納得させつつ

ずるずると啜る。すると対面に、同じようなメニューを持った、一人の女性が着席した。
背筋をぴんと伸ばし、整った所作でうどんを一本ずつ啜るその様は何処となく食に対して真摯であるようにも見え、背中を丸めて食べていたサムソンも釣られて背筋を伸ばす。
ちらりと目が合うが、女性は特に気にするでもなくいなりずしを口に運んでいく。食事の時、他人の所作やマナーを気にしてつい注目してしまうのはサムソンの悪いクセで、彼は慌てて目を逸らした。
「よし…と」
ゆっくりと食べ進む女性を残し、サムソンはそう短く呟いて席を立った。

午後１３：４５
「ありがとうございましたー」
喫煙具を取り扱う店で、サムソンはジッポの石とオイルを買い求めた。世は完全に分煙が成り立ち、それ自体はよいことであるが、喫煙者達はやはり肩身が狭く、喫煙具を扱う店も減ってしまった。
すぐ横にあった完全隔離されてまるで実験室のような喫煙スペースに入り、煙草を銜える。
「あれ、鹿屋の提督さんじゃねッスか。こんちは」
「あ、平田さん…どうもどうも」
そこで声をかけてきたのは、鹿屋基地の養生やリフォームなどを請け負ってくれている工務店の若旦那であった。
前述の喫煙室の施工や大浴場の改装など、何度か世話になっていることもあって、酒なども飲んだことがある仲だ。サムソンはどうも、と手でジェスチャーをして、差し出された１００円ライターに顔を寄せた。
「買い物っすか？」
「ええ、ちょいとね。平田さんは？　家族サービスですか」
「いンやぁ、うちのお袋と嫁が、七五三がどうとかでね」
「あァ、息子さんの…」

「ああいうのは本人や親より、ジジババ共が盛り上がっちゃって困るもんスわ」
「はは、なるほど。うちの親父も兄貴の娘にはとことん甘いですからね」
そういう季節か…と思いを巡らせ、サムソンは煙を吐く。平田もサムソンが独身ということは知っているのでそれ以上の家族話はせず、他愛のない世間話などを振ってくる。
基地ではすることのない、男同士の会話をひとしきりした後、サムソンは平田に別れをつげて喫煙スペースを出た。時刻は１４時を回っていたが、まだ帰るには早いように思えた。

午後１４：５０
「ん…？」
様々なテナントを冷やかして回っていたサムソンが、最後にたどり着いたのは書店であった。本当はそのまま帰るつもりであったのだが、先ほどフードコートで見たあのうどんレディが、エプロンを着けて働いているのを目にしたからである。
女性にしては背が高く、白のスキニージーンズに包まれた長い脚と肉感的なお尻が映える。女体など毎日見すぎて感覚が麻痺しているサムソンであったが、だからと言って性欲が枯れた訳ではないしホモセクシュアルでもない。
彼は尻が好きなのだ。
「む…！」
脚立に乗って高所の作業をするうどんレディをちらちらと見つつ、サムソンは最適のポジショニングを探す。部下たちに知られればただでは済まない所であるが、幸いにして今は基地の外である。
赴任してすぐの頃は、ちちしりふとももをこれでもかとアピールするような制服を身にまとう艦娘たちに囲まれていることもあって、理性との戦いの日々が続いた。
しかし今は、菩薩のような境地に到達した…と思いこむことでその下半身的な問題をクリアしているところがある。だがこうして市井

に出てみれば、魅力的な尻…いや女性は多くいる。おじさんと化したサムソンの目が吸い寄せられるのも無理ないことであろう。
『対徳川決戦兵器・真田丸の謎に迫る！』と銘打たれた謎のムック本を手に取り、ぱらぱらとめくっては目を落とし、うどんレディの尻を数秒眺めてまためくる。完璧に不審者のそれである。
そうやって過ごしていたが、至福の時間はそう長くは続かない。うどんレディは脚立を降り、話しかけてきた老婆を笑顔で案内して、店舗の奥の方へと消えてしまった。
「（ありがとう、うどんの人…）」
極めて気持ち悪い表情を浮かべ、サムソンはお礼とばかりにムック本を抱え、レジへと向かった。そんな彼の前に、さっと割り込んできた者がいる。
「提督！」
「はおッ!?」
長い髪の毛を一つにまとめ、細身のシルエットを七分丈のジーンズとパーカーに包んだその声の主…葛城である。
「や、やあ葛城くん…相変わらずいい動きをしているね」
「どこのおじさまよ！　それより何その本、買うの？」
まさか今まで、尻をロックオン…即ちＡＳＲＯＣしていた己の所業を…!?　とサムソンは生きた心地がしなかったが、葛城は今しがたこの書店に入ってきたようで、何かを追及してくるようなことはなかった。ちなみにＡＳＲＯＣは艦載用対潜ミサイルのことなので尻は関係ない。
「か、葛城はどうしてここに？」
「どうして…って、私も朝から、ここの一番上の漫画喫茶にいたから」
「あ、そ、そうなの…」
「なぁに？　うろたえちゃって…あ、ま、まさかその…えっちな本とか…探して…？」
「違うよ！」
えっちな、という文言に反応し、サムソンは中学生のような反応を

する。尻とか興味ねーし…見てねーし…といった風情の思春期オーラをまとった大きい声だったせいもあり、周囲の注目を集めてしまう。葛城はかっと赤くなり、サムソンの尻を蹴飛ばしてはレジに急がせた。

午後１５：２０
ショッピングモールの一階にある喫茶店。サムソンはアイスコーヒーを啜りながら、行き交う人々に目をやった。１１月も半ばで、もう少しすれば年末である。こうして休日を満喫できるのもしばらくはお預けだろうか…と、サムソンが若干のセンチメンタリズムに浸っていると、葛城がじっとりとした目つきで彼を見て口を開く。
「なぁんかさっきから、目がいやらしいのよね」
「それはアナタの心が汚れているせいですよ、葛城や…」
「ぶっ、何それ…まぁいいのよ？　提督だってその、男の人なんだし？　雲龍姉をそういう目で見てることだってあるの、知ってるし」
「おいおいちょっと待ってくれ、僕が雲龍をそういう目で見るのは、風邪をひきやしないかという母心からだよ」
「へぇー…じゃああたしもそういう目で見ることもあると」
ご存知の通り雲龍型の制服はもう何と言うのか、大層薄手で布面積も少ないため、それ寒くないの？　という感想がまず出てくる。実際は艤装をまとっている間は、内臓されたヒーターによって零下の海上でも問題ないのであるが、そんなものは本人たちにしかわからないことだ。
葛城はモンブランをちょっとずつ削っては口に運び、更に追及を始める。やれ視線がどうにもいやらしいだの、ローアングルに何かしらのこだわりを感じるだの、駆逐の子たちがヨクボーのハケグチになってやしないかだのと、様々な詰問をサムソンはのらくらとかわしていく。
もっとも葛城も本気でどうこう言っているわけではなく、茶飲み話のつもりであるのだろうが。
「ま、考えてみれば提督にそんな甲斐性はないわよね」

「随分だなァ…そんなに心配せずとも、葛城はいつも元気で病気知らずだし、見てもあまり嬉しくないから安心してよ」
「は、はァア!?　嬉しくないってどういうことよ！　今のセクハラよセクハラ！　ハラスメント・オブ・セクシャルエネミー（性敵嫌がらせ）だわ！」
欺瞞である。葛城は確かに雲龍のような規格外の胸部装甲こそないものの、引き締まった腹、背から腰、そして尻にかけてのラインは芸術的なもので、サムソンも彼女が艤装と制服の状態でいると常に理性との戦いを強いられることになる。
キーキーと怒る葛城をなだめては連れ出し、サムソンは外に出た。

午後１５：４５
「葛城は歩いて来たのかい？」
「うん。大した距離でもないからね」
「そか。僕は車だから一緒に帰ろう…っと、その前に」
サムソンは携帯端末を取り出し、初月にコールをする。基地所属の艦娘たちは、外出時にはインカムか携帯電話の所持が義務付けられているので、連絡するのも容易い。
『提督かい？　参ったよ、大漁ってもんじゃない』
「そりゃ何よりだ。こっちも帰るから、駐車場まで来れるか？」
『ああ、そろそろ連絡しようとしていたところさ。じゃあこれから向かうよ』
通話を終了し、そのまま葛城と並んでパーキングまで歩いてゆく。そんな二人の後ろから、自転車が来てはベルを鳴らした。
片方に寄ってそれを通過させたサムソンの目に、先ほどまで凝視していた白のスキニージーンズ…と尻…が飛び込んできた。
「…？」
休日に終わりにいいものをありがとう…といった感じの、気持ち悪くなおかついつくしむ目でそれを見送るサムソンを見て、葛城が怪訝な顔を見せる。
「キモイ！」

午後１６：１０
ずっしりと重いクーラーボックスを荷台に突っ込み、初月が後部座席に乗り込んでくる。
今夜は刺身に煮つけにアジフライじゃん、と嬉しそうな葛城と、釣果に大満足な初月の可愛らしいやりとりを見て、サムソンもふ、と笑ってエンジンをスタートさせた。

午後１８：３０
「どんどん揚げるわよ～！　はい、葛城はキャベツ刻んで！　夕立は雲龍が捌いた切り身を叩く！」
大食堂の厨房は大賑わいである。平日は基地付きの妖精さん達が調理をして出してくれるのだが、日曜日は彼女らも基本的にお休みなので、日曜日に限って言えば、艦娘達が自主的に料理をする。
足柄を筆頭に雲龍、叢雲、山城といった料理上手な艦娘たちがまず仕切り、それ以外の者は手伝ったり、賑やかしたりと賑々しいことこの上ない。
地元の農家へ手伝いに行っていた朝霜、清霜が持ってきた果物や薩摩芋なども加わって、今夜はちょっとした宴会である。
「それにしても凄いわね初月、これチヌだっけ、よく釣ったじゃない」
「親切なおじさんが色々教えてくれたんだよ。仕掛けも貸してくれて…そしたら釣れたんだ」
魚を捌く山城の言葉に、初月は至極嬉しそうだ。
各々休日を過ごしていた他の艦娘達も集まってきて、場は更に盛り上がりを見せていく。サムソンはそれを遠くから見て、父親のような笑顔を見せ…るのではなく、先ほどの白いスキニージーンズを思い出し、やはり気持ち悪い笑顔を浮かべていた。

午後１９：５５
「ハァ…ハァ…　今起きた」

磯風起床！

サムソンティーチャー危機一髪

　力を合わせて戦わねば、生き残れない。綻びは不和を生み、不和は惰弱をもたらす。
　そうなればかの深海棲艦どもと渡り合うことなど到底不可能である。そしてそれは、滅びを招く。
　昔の人は言った。
『みんな　仲良うせんといかんよ』
　ではどうするか。
　サムソンは考えた。艦娘達が皆、過不足なく過ごせる環境をまず整えよう…と。
　鹿屋基地の建物は、廃校になった小学校を改装、増築してリノベーションしたものである。それ故に最初はあちこちで不満が挙がった。トイレが暗い。部屋がかび臭い。夜中に変な音がする。裏山から変な虫が飛んでくる…などと、枚挙に暇がなかった。
　サムソンがまず手を入れたのは風呂であった。艤装を修理する入渠ドック…艦娘たちが『お風呂』などと呼ぶ施設…は新造したものの、基地の浴場、つまり本物のお風呂はお世辞にも広いとは言えず、一つの艦隊…即ち６名が入ればそれで一杯になってしまう。
　サムソンは地元の工務店と相談し、基地の地下階、物置と化していた区域を、そのまま大浴場へと改装した。予算を口八丁で取り付け、当時所属していた全ての艦娘の希望を叶えた結果、６名で一杯だった浴場は４艦隊を受け入れてもなお余裕のある、メイクイットポッシボーなスーパー大浴場へと変貌を遂げたのだった。
　サウナにジャグジー、電気風呂に岩風呂など、どれを取ってもゴージャスな出来である。
　そしてその大浴場で今、サムソンは窮地に陥っていた。
　話は３０分ほど遡る。

「ジェーナイジェーナイなさけ～むよ～」

アステロイドベルトのアウトローも震えだす感じの歌を口ずさみつつ、サムソンは軍服を脱ぎ、ネイキッド提督へと生まれ変わる。大変お見苦しいところであるがそこはご容赦いただきたい。

サムソンの部屋にも小さなバスルームがあり、普段はそこで日々の垢を落としているのだが、今日は初月の釣ってきた魚でパーティが開かれ、その後に艦娘達は皆風呂に入ってしまったので、地下の大浴場を使うものはもういなかった。

叢雲に何度もそれを確認し、更に先客がいないか何度も確かめて、そこで初めてサムソンは脱衣（クロス・アウト）したというわけである。

「コズモレンジャージェナァーイ…」

広がるプラズマな感じの歌は2ループ目に突入する。

普段は当然ながら使えない大浴場であるから、その特別感は格別だ。まとめた衣服をカゴに入れて隅っこに放り投げ、キンキンに冷えたビール3本と、ジップロックに入れたタブレットを手に、サムソンは扉を勢いよく開く。

２４時間いつでも入れる仕様になっているため、常に清潔に保たれている大浴場は、近所の源泉から湯を引き、かけ流しが実現している。そこらのスーパー銭湯にも引けをとらない、鹿屋自慢の施設であった。

「フフ…フハハ！　貸し切りじゃないの！」

日曜の最後を飾るにふさわしい、たった一人の贅沢を前に、サムソンのテンションは爆上げである。ビールとタブレットを湯船の縁に置き、手桶に湯をくんで頭からかぶる。

「アーーーー！　よし！」

サムソンはそう叫ぶと、気持ち悪いポージングを決めたのち、湯船に飛び込んだ。いくら人がいないとはいえ、行儀の悪い３４歳児もいたものである。

そうしてタブレットを手に取り、まずはタイマーをセットする。風呂に酒を持ち込む際、酔っぱらって寝てしまわないための小賢しい工夫であった。そしてビールを拝むように掲げると、一気呵成に栓を開

け、飲む。飲む。

「ナーーーーーー!!」

なにがナなのか、もう判ったものではない。だがこういうのは理屈でないのだ。熱めの湯にさらされ、温度の上がった体内を、つい先ほどまで冷蔵庫に入っていたビールが駆け抜けていく爽快感は、筆舌に尽くしがたいものがあった。

「フォービューテフォーヒューマンラァイフ!」

次にサムソンはタブレットを手繰り寄せ、ＹｏｕＴｕｂｅを開いては壁に立てかける。彼は特定のジャンルではなく、本当にその場のノリで見る動画をチョイスする。

今回チョイスしたのはハンティングの動画であった。アメリカ人のハンティングというものは大変にワイルドで、銃で撃つ、罠にハメる、爆破する…どれをとっても日本ではあり得ない、エクストリームな代物が揃っている。

ここで誤解の無きように言っておくが、彼は別に野生動物を殺傷する趣味がある訳ではない。しつこいようだが、「なんでもいい」のである。アニメだろうとドラマだろうとスポーツだろうペット動画だろうと、それこそ何でもよい。時間を潰せればそれでよい。

「オイオイオイ死ぬわイノシシ……死んだわ」

餌で釣られた大量の猪達が、爆破によって吹っ飛ばされるという害獣駆除のシークエンスに、ビールはすすむ。体はほぐれる。酔いは回る。あっという間に２０分ほどが過ぎ、彼は体と髪を洗うため、湯船から出た。

そして彼はアルコールと湯でもってすっかり赤くなった体に冷水をぶっかけ、備え付けのボディソープを手にとった。

「スッシタッベタイ　スッシタッベタイ」

オレンジレンジの怪曲、ＳＵＳＨＩ食べたいｆｅａｔソイソースを口ずさみつつ、顔を洗い、体を洗う。そしてシャンプーを手に取り、お次は髪だ。早い者なら３０を超えるとそろそろ怪しくなってくる生え際や頭頂部であるが、サムソンのそれは幸いにして１０代の頃と大差がない。

「よし…」
泡を洗い落とし、再び冷水を浴びたサムソンはぬうっと立ち上がり、再び湯船に浸かる。垂れ流していた動画は猫ＶＳ熊の対戦動画となっていて、サムソンは2本目のビールを開けては一気に飲み干す。
「んんんんんーーーー!!!!」
正にフリーダム。正にパラダイス。明日からの活力へと変わる全てのものに感謝しつつ、サムソンは湯船の縁に体を預けて目を閉じる。寝てしまっては危険だが、そのためのタイマーである。
「また明日から頑張りますかぁー」
そう呟いた瞬間である。彼の耳は何かの物音を捉えた。
「うん…？」

「いンやァー遅くなっちまったよぉアハハハハ」
隼
鷹
？
それは隼鷹の声。
「今日は皆でお魚パーティだったのに」
「いやァ、岩川でもピザ食わしてもらったよぉ～あとビールな」
「あまり迷惑かけたらダメよ」
雲
龍
？
それは雲龍の声。

「なんで…？」
なんてこった、航空母艦のエントリーだ！
体内に回ったアルコールは、肝臓の急速稼働と共に排出され、冷や汗となる。
そしてリラックスしていた脳細胞は、通常の三倍のスピードで演算を始める。

サムソンは考える。
そうだ。隼鷹は岩川へ行っていたのだ。姉妹艦の飛鷹と酒でも飲んでいて、今戻ってきたのだろう。
当然寝る前に風呂に入る。叢雲もそこは忘れていたのか、隼鷹については触れなかった。
そしてもう一人は雲龍である。彼女もとっくに休んだものだと思っていたが、起きて隼鷹を待っていたのだろう。感情をあまり表に出さない雲龍だが、仲間を思う気持ちは強い。ついでに言うと相当なオフロスキーでもあるから、隼鷹を迎えるついでに一っ風呂、という算段なのであろう。
だが問題はそこではない。彼女らは脱衣所で服を脱ぎ、ネイキッド空母としてサムソンの領海へ侵入してくるのだ。航空戦力こそ持たないが、かわりに全裸（フル・フロンタル）というクラスター爆弾やデイジーカッターも真っ青な大量破壊兵器を引っ提げた彼女らは、正にワンマンアーミーと言っても過言ではない。
それが二人である。隼鷹も雲龍も、その豊満なスタイルは鹿屋…いや全ての鎮守府の中でもトップクラスを誇っている。
言うなれば全盛期のチャック・ノリス（アメリカ人の死因第二位）とジャン・クロード・ヴァンダム（御存知ヴァンダミングアクション）が攻めてくるようなものだ。ハッスル空母二倍ニバーイである。木曜洋画劇場かよ。
領海侵犯っ…！　国際問題っ…！　提督の沽券っ…！　露見っ…左遷っ…！
サムソンは頭を抱えた。三倍に高まった脳の演算速度が、バッドエンドだけを投影し始める。だが彼とて男である。このまま座して死を待つ訳にはいかない。死ぬなら前のめりになって死ね、と昔の人は言った。
彼は今しがた開けたばかりのビールを手に、浴場の端にある岩風呂へと隠れた。
正に間一髪、次の瞬間にはもう扉が開き、真っ裸の隼鷹と雲龍が入ってくる。

「岩川で風呂借りてくりゃーよかったかなァ」
「あっちのお風呂はどうなの？」
「おぉ、ちょっと見たけど綺麗だったよ。あそこのオカマちゃんも福利厚生にゃ大分気ぃ使ってるみたいでさ」
「へぇ」
普段は遊戯王みたいな髪型をした隼鷹だが、今はタオルを巻いて纏めている。そのかわり体には当然、何も巻いていない。サムソンがいるなど露ほども思っていないのだから当然といえば当然だ。
一方の雲龍はタオルで体の前を隠し、やりすぎなくらい長い三つ編みは頭の上でとぐろを巻いていた。
「……！」
状況が判らなければ撤退も出来ない。それ故にサムソンはこっそりと二人の様子を伺っていたが、そのあまりの破壊力に思わず声が出そうになる。
歩くたびに震度7である。震える山とはよく言ったものだ。それに加えて長い脚と暴力的な尻。白い肌、くびれたウエスト。こんなものをタダで見てしまってよいのだろうかとサムソンは唾を飲んだ。
だがここで露見するわけには行かない。狙いは二人が髪を洗うその時…隙を見つけて脱出すると、サムソンはそう決めた。
だが当然と言えば当然のこととして、サムソンの体に変化が起きた。男ならば誰でも、心に銃を持っていると言ったのは誰であったか…と、そうではない。
変化が起きたのは、どんな男であろうと生まれつき持っていて、多彩な用途と無限の可能性をもつ、股間の銃である。いや、ここ海軍では単装砲と言うのが適当であろうか。
その単装砲に稼働命令が出たのである。
※イメージ映像をお楽しみください。
「4時ノ方向ニ敵影見ユ！　ソノ数2！」
「了解セリ！　単装砲ニテ迎撃ヲ開始スルモノ也！　仰角一杯！」
「了解！　単装砲、仰角イッパーイ！　目標、敵空母胸部バルジ！4ツ！」

～おわり～

「……!!」

股間の４６㎝単装砲（一部誇張表現を含む）が、サムソンの意思を無視して臨戦態勢を取る。これはもう危機というより緊急事態である。国家存亡の秋である。彼の３４年の人生の中でも一二を争うエマージェンシーであった。

「それでさー、若葉が…」

「そうなの、ふふ、おかしい…」

おかしいのは僕の股間だよ、主に君らのせいでな…！　と言わんばかりに聞き耳を立て、サムソンはただ待つ。薬室内の圧力はとうに１２０％を超え、あとは理性というトリガーを引くだけだ。だがそれをすれば本当に終わりだ。サムソンは拳に歯を食いこませ、ただ耐える。

永遠とも思われる時間が過ぎていき、ジャグジーに浸かっていた二人が洗い場に向かう。

好機。今しかない。だがこの単装砲はどうする。もし万が一があったとして、状態が仰角と俯角であった場合、どちらがダメージが少ないか。三倍速で稼働しすぎてオーバーロード寸前の脳細胞が出した結論は『冷却』であった。

サムソンは握りしめていた缶をひっくり返し、ややぬるくなったビールを股間にぶちまけた。

※イメージ映像をお楽しみください

「撤退!?　撤退デアリマスカ!?」

「左様。現在ノ状況ヲ鑑ミ、ココハ撤退セヨト提督ハ仰セラレタ」

「馬鹿ナ！　アト一歩デ敵艦ヲ討チ果タセシトコロデ！」

「砲身冷却セヨ！　繰リ返ス、砲身冷却セヨ！」

～おわり～

「～～～～～ッッ?!?!?」

あなたがもし好奇心旺盛かつ健康な男子であるなら、最大仰角になった単装砲に炭酸飲料をかけてみて頂きたい。多分びっくりする

ことが起きるだろう。
なおどうなっても作者は責任を負わないものとする。
サムソンはバチバチと明滅する視界をそれでも出口へと向け、歯を食いしばり進軍を開始した。岩風呂から扉までの距離はそう長くないが、油断は禁物だ。
二人とも髪が長いので、洗うのには結構な時間を要する。サムソンは一歩また一歩と進軍し、冷却されしょんぼりしていく単装砲をいたわりながらも状況を進めていく。
ゆっくりと、だが確実に近づく勝利を前に、彼は安堵の息を漏らした。あとは服を着て何事もなかったかのように出ていくだけだ。勝った、勝ちまくった…長かった戦いよさらば…！　サムソンは一抹の寂しさを覚えつつも、ドアに手をかける。
その瞬間である。
タブレットにセットされたアラームが鳴り響く。
川井憲次　Ｇｕｎｄａｍ００　ＯＳＴ２より　Ｔｒａｃｋ２０
―Ｆｉｇｈｔ―
目覚ましに使うと非常に効果が高い。お試しください。
「うん？　誰かＴＲＡＮＳ―ＡＭした？」
「ん…」
二人がそれに気づいた時にはもう、サムソンの姿はなかった。
アーアアアー　アーアアアー　アーアアアー
ＴＲＡＮＳ―ＡＭを発動させたサムソンは、ＧＮ合唱団のコーラスを背に赤変、人生最速のスピードでもってパンツを履き、脱衣場から離脱していた。ありがとう太陽炉。ありがとうＧＮ粒子。ありがとうイオリア・シュヘンベルク。
なお人間にそういった機能はない。
「ハァ　ハァ…」
口からぽわぽわを吐きつつ、サムソンは何とか司令室へと辿り着いた。疲労を癒すための風呂が、地獄に変わるとはまさか思うまい。筋違いではあるが、叢雲に明日文句を言おう…そう心に決めたサムソン

であった。

「ンモー誰のタブレットだよう。空き缶も置きっぱなしにして」
「磯風か葛城のかしら…？　でもあの子たちお酒はほとんど飲まないし…」
湯船に浸かりつつ、タブレットをいじる隼鷹と雲龍。プライバシーに配慮してメールフォルダや個人情報などは見ないものの、ホーム画面の背景には一枚の写真が表示されていて、それが誰の物であるかということを明確に語っていた。
「…写真のここの人、提督よね？　他の人は…海軍の人かしら」
「あ、ホントだ。んじゃこれ提督のか…ここ使ったんだ」
「ひょっとしてニアミスしてたかも…明日、返しておくわ」
「空き缶も片付けろって言ったれ言ったれ」
雲龍はそう言って、タブレットの電源を切った。

翌朝。
「おはよう提督、今週もまた頑張りましょう」
「あ、ああ…それより叢雲…体温計あるかな。何だか熱っぽくて…」
「ン…ちょっと待って」
叢雲は戸棚の片隅にあった救急箱を開き、電子体温計を持ち出してはサムソンに渡す。何やらぼーっとしたまま、サムソンはそれを脇の下に突っ込んで、椅子に座り込む。
「…八度四分…!?　大分高いじゃないの、風邪？」
「そ、そうかも…頭もぼーっとするし」
「そうかもじゃないわよ！　寝てなさい！」
「い、いやでも…大丈夫だよ」
大丈夫ではない。叢雲はサムソンをぎっと睨みつけ、無理矢理に立たせては部屋へと押し込んだ。
２０ｘｘ年１１月中旬、サムソン今年初の風邪にかかる。
誰が悪いというわけではない。運が悪かったのだ…サムソンは朦

朧とする意識の中で、そう結論付けた。

サムソンティーチャーむかしばなし・前編

叢雲はサムソンを部屋に引きずりこむと、そのままベッドに寝かせて、仕方のない人だわね、という風情の笑顔でもって布団をかけ、胸のあたりをポンと叩いて

「今日は一日、安静にしてなさいな。仕事は私たちでやっておくから」

と、そう言い残して部屋を出て行った。

そこまでされては逆らう訳にもいかず、叢雲が用意してくれた風邪薬を飲んだサムソンであるが、すぐに効き目が出てくるものではない。

目を閉じている内に、彼の朦朧とした意識はいつしか、まどろみの中に落ちていった。

◇

――波の音がする。

――月が輝く。

――星が瞬く。

「星野艦長、そろそろ交代です」

「ン…ああ、もうそんな時間か。それより寒村は硫黄島、初めてだったか？」

「いえ。学生の頃に一度、見学には来ました。それからええと、一昨年に航海訓練で一度…それ以来ですね」

「なるほど。さて、寝る前に一服といくか…付き合え」

「はい」

日本海軍横須賀基地所属の輸送艦『しまばら』は今、八丈島近海を通過し、硫黄島へ向けて進んでいた。

特に緊急の事態というわけではなく、平時の輸送任務である。何度

も繰り返してきた仕事だけあって、無駄な緊張は艦長の星野にも、副長の寒村にもない。とはいえ久々の寒村にとっては気が抜けないようで、どこか言動は硬い。
　そんな寒村を伴って喫煙室に移動した星野は、胸ポケットから煙草を取り出して銜えるが、火を点ける様子はなかった。寒村は喫煙をしないのでライターを持っていないし、他に誰がいるでもない。
「…艦長？」
「ああ、いや…煙草、止めた方がいいかな？」
「は？　いえ、自分は気にしませんが」
「じゃなくてな、嫁さんが…な」
　そう言うと星野は、お腹の辺りで手を上下させる。
「おめでたですか」
「あァ」
「そりゃめでたいです。おめでとうございます」
　子が出来たら煙草をやめよう、と考えるのは、常識的な感性がある者ならば当たり前のことだ。星野は一日に二箱を空けるヘヴィスモーカーであったが、その彼がそうまで言うのだから、親になるということがどれほどのことかわかる。
「まぁ、知ったのはつい最近でな。その時からやめようやめよう、とは考えちゃいたんだがね」
「なるほど。そう言えばうちの兄貴も、娘が生まれてからは吸うのやめましたね」
「そうなるよなァ…だがこれが中々やめられんもんでな…」
　カキン、カキンとジッポライターをいじる星野。火を点けるか、点けまいか…そんな逡巡が見てとれる。
　寒村はそんな星野を見て、少し笑ったのちに口を開いた。
「兄貴が言ってましたが、煙草かライター、どちらかを手放すんです。持っていなければ、自然と吸わなくなるものだと、そう言ってましたよ」
「ふむ…」
「いい機会ですから徐々に減らしていって、お子さんが生まれたら

完全にやめるってのはどうです」
吸わない者には吸う者の葛藤などはわからないから、どんな事でも簡単に言えてしまうものだ。だが星野は寒村の言葉に怒ったり腐ったりするでもなく、やがて立ち上がると、銜えていた煙草をぷっとゴミ箱に吐き捨て、胸ポケットからも箱を取り出して、ジッポライターと一緒に寒村へと手渡した。
「よし決めた。お前が持っていてくれ」
「自分がですか」
「そうだ。どうしても吸いたくなったらお前からもらうことにする。だがあんまり数が多かったり、しつこかったりしたら遠慮なくそれを捨てろ。副長の務めってやつだ」
「なるほど…しかしそんな服務規定があったとは知りませんでした」
「当然だ、今考えたからな」
メビウス・スーパーライトの青い箱と、黒く光るジッポライターが、窓から差し込む月光を受けて、鈍く輝いた。

◇

「う…」
時刻は正午を回っていた。サムソンはずっしりと重い瞼を開け、周囲を見渡す。
自分の部屋である。カーテンは閉められ、エアコンと、恐らくは叢雲が持ち込んだであろう加湿器の稼働音が低く響いていた。
「うー…」
ゆっくりと上体を起こし、キャビネットの上に置いてある水を手に取り、半分ほど飲んではまた横になる。
寝汗がひどい。昔の夢など、ここに来て一度も見たことはなかったサムソンだが、風邪の症状か何かだと、己を納得させることにした。
キャビネットの上には黒いジッポライターと、メビウス・スーパーライトの箱がある。部屋で吸うことは叢雲が許さないので、灰皿はな

い。サムソンはライターを手に取ると、カキン、と蓋を開いて、しばらく眺めたのちに、またまどろみに落ちていった。
「提督…」
それから一時間ほどして、部屋のドアがゆっくりと開く。入ってきたのは叢雲と雲龍であった。叢雲はおかゆと半熟卵を乗せたトレイを、雲龍はペットボトルの水と、昨夜浴場に置きっぱなしになっていたタブレットを携えていた。
「寝てる？」
「寝てるわね。叩き起こすのもアレだしどうしよう」
「んー…そうね」
そう言うと雲龍はタブレットと水を置き、サムソンのベッドに腰かけて、彼の顔に己の顔を寄せた。
まさか…と、アタマノウエニウイテルーノを複雑な色に染めた叢雲だが、彼女が思うようなことは起こらない。雲龍はただ彼の耳に、ふっと息を吹きかけただけである。
「ううん…？」
「おはよう提督」
「ああ、雲龍か…おはよう。迷惑をかける」
「気にしないで」
サムソンは上体を起こし、頭をがりがりと掻きながら二人を見た。半分ほどしか覚醒していないのか、目はまだうつろで、額には汗が浮いている。
だが少しして、やれやれといった表情をしていた叢雲が、サムソンの左手にジッポライターがあるのを見て、表情を強張らせる。先ほどいじった際にそのまま寝てしまったのだろう、サムソンはジッポを手放すでもなく、大きくあくびをした。
「…っ、あんたねぇ、それ…まさか煙草吸うつもりだったんじゃないでしょうね！」
「え、ああ…いや、違うよ」
持ったままのジッポに気付いたのか、サムソンは曖昧な笑みを浮かべつつ弁解した。だが叢雲の怒りは収まらない。風邪っぴきの人間

が、しかもベッドの上で寝煙草など、もっての外である。叢雲は素早く歩み寄ると、サムソンの手からジッポを奪い取った。
「…吸わないって…だから返してくれよ」
「ダメよ！　少なくとも風邪が治るまで、これは預かっておくわ！」
「そりゃ、困る…返してくれ」
「しつっこいったら！　捨てたり隠したりしないだけありがたいと思いなさいよ！」
「かえして…」
「だーかーら！　聞き分けのないことを…」
次の瞬間、キャンキャンと怒鳴る叢雲のうなじに手を回したサムソンが、思い切りその身体を引き寄せた。
こつん、と、額と額がぶつかる。しかるべき時にしかるべき場所でやったのであれば、ときめくシチュエーションである。
だが、そうはならなかった。
「おれは、それを、かえせといったんだ」
今までに聞いたことのない低音で、サムソンが言った。
叢雲の目を覗き込むその目は、いつもの情けなく、だが心優しいサムソンの目とは明らかに違っている。何かどす黒い、昏い感情のようなものが渦を巻いて、光すら消えているようにも思えた。
「聞こえなかったか叢雲。それをかえせ」
「あ、う…」
それは言いようのない恐怖であった。
着任から二年半、どんなに叱ったりからかったりしても本気で怒ることのなかったサムソンから、明らかに自分に向けて放たれている殺気。それを受けた叢雲の体は震え、怯えの表情が広がっていく。
叢雲は身をよじってサムソンの手を振りほどき、ジッポを投げつけるように手放すと、二、三歩後ずさって、そのまま部屋から走り出ていってしまった。
「…っ、むらく…」
呼び止めようとする声も詰まる。
あまりの出来事に茫然としていた雲龍であったが、それでも気を取

り直し、深く深呼吸をすると、サムソンの前に立った。
「…何だ？」
ぱしん、と。
乾いた音が部屋の中に響く。
サムソンの頬を張った雲龍が、珍しく表情を露わにして、彼を見下ろしている。敵との戦いにおいてのみ発現する、碧の雷光が、ほんの少しだけ髪の毛にまとわりついてパチ、パチと爆ぜていた。
「…あんな言い方はないと思う」
「……」
「叢雲はあなたの事を考えてああした。それを…」
「……ごめん」
サムソンは雲龍が今までに見せたことの無い表情をしていることで、自分が何をしたのか、すぐに気付いたようだ。握りしめた拳でもって、己の頬骨のあたりをガツン、と殴りつける。
しかし雲龍も雲龍で、そのジッポライターがサムソンにとって、何か特別なものなのだという事は気付いているようで、それ以上の追及はせずに、その拳をそっと手で包み込んだ。
しばらく無音の時間を過ごしたのち、雲龍はおかゆの乗ったトレイをサムソンに手渡し、ベッドの縁に腰かけて、「ぶっちゃって、ごめんなさい」と、詫びた。
その表情はどこか悲し気で、サムソンも全てを察したのか、小さな声でもう一度、ごめん、と呟いた。
「……ああ、やっちまった…阿保だ僕は。大馬鹿の最低野郎だ」
「それ、大切なものなのね」
「…叢雲に謝ってくる」
トレイをどけようとしたサムソンを、雲龍が制する。何故だ、という表情を浮かべたサムソンの肩に手を置いたまま、雲龍は首をふった。
「少し時間を置いた方がいいわ。それにお腹も空いているでしょう、冷めて美味しくなくなる前に、食べて」
「しかし…」

「私が後で連れてくるわ。提督はまだ休んでいて…、ね」

司令室のある三階から、階下へと繋がる階段の踊り場で、叢雲はぼーっと外を眺めていた。部屋から逃げ出して小一時間は経つが、頭に浮かぶのは、浴びせられた殺気と、初めて見たサムソンの顔である。

自分は悪いことをしていない、したつもりもない…という思いと、平凡で情けなく、しかし穏やかで優しい男の、本来ならば見るはずのなかった、見たくもなかった一面を引き出してしまったという思いがぶつかって、言いようもない不安に襲われる。

そしてそれは、涙という出力をもってあふれ出す。踊り場の床にぽつぽつと、涙の染みができる。

「あれ、叢雲…どうしたの、こんなところで」

そんな折に通りがかったのは、比叡であった。そして比叡は、振り返った叢雲の目に浮かぶ涙を見て、慌てて駆け寄る。

「ど、どど、どうしたの!? お腹痛いの!? 誰かにいじめられたの!? あ、ああ、叢雲いじめる子なんてここにはいないか…え、えーと、どうしよう、どうすればいい? 私に何かできる? メイアイヘルプユー?」

「比叡…」

気丈で強気で面倒見がよくて、誰からも頼りにされる叢雲が泣くなど、ただ事ではない。主を心配する大型犬の如く、比叡は叢雲の背中をさすったり、頭を撫でたりと忙しい。

「大丈夫よ、大丈夫。ちょっと司令官を怒らせちゃっただけで」

「な、なぁんだそっか……って、うn? 司令が? 司令をめっ! したんじゃなくて、司令にめっ! された? で、でもでも、そんな事ってある? 勘違いじゃなくて?」

叢雲の周りをくるくる回りつつ、比叡は大混乱に陥っているようだ。それはそうだろう、比叡と叢雲の付き合いもかなり長いが、その間、このような事は一度もなかったのだ。

慌てふためく比叡を見て、叢雲はずっ、と鼻をすすって笑顔になる。

そしていつもの強気な口調で、もう一度「大丈夫よ」と告げた。普段ならそれで終わってしまうところであるが、比叡は納得がいってない様子で腕を組み、首をひねり、やがては階段を上っていく。
「…司令に話を聞いてみる」
「あ、ちょ、やめて。大丈夫だから」
「大丈夫じゃない。叢雲が泣くなんて絶対におかしいと思うし、司令が叢雲が泣くくらい怒るだなんてこともおかしいと思うから」
「いいって…！　私が悪いの」
慌てた叢雲が比叡の袖を掴んで止めようとするが、比叡は止まらない。もともときっぱりさっぱりとした性格な比叡だけに、事の真相を知らないままでいるのは嫌なのであろう。ただそれが、当事者たちにとっていいことか悪いことか、までは考えが及んでいない節もあるのだが。
そこに、空の器を持った雲龍が現れた。
「…何してるの？」
「あ、雲龍。司令は？」
「部屋で休んでるけど…丁度いいわ、叢雲、来て」
「え、あ…うん」
「私は？」
比叡の言葉に雲龍はふむ、と考え、「器を置いてくるからここで待っていて」と言い残し、階段を下りていった。
残された二人は並んで外を見るだけで、言葉はない。
海上に、岩川の艦娘たちが、霞を筆頭とした部隊に訓練を受けているのが見える。
「きっとたぶん、お互い勘違いしてるんだよ。きっとそうだよ」
きっと、を強調するように比叡は言った。
叢雲は何も言わず、少しだけ頷いた。彼女とてサムソンとの間に軋轢が残ることなど望んではいないのだろう。

「ごめん叢雲！」

部屋に入ってきた叢雲の顔を見るなり、サムソンは９０。近くまで腰を折り、大声で詫びた。
余計な言葉は一切発さず、動こうともしないその姿を見て、叢雲は初めぽかんと見ているだけであったが、やがてふ、と口元に笑みを浮かべると、自分も頭を下げて
「ごめんなさい」
と謝った。
「君は悪くない、僕の不徳のせいだ」
「違うわ。考えてみたけど、灰皿もないのに吸う訳ないもの…そのライターが、アン…司令官にとって大事なものだってこと、まるで考えてなかった」
「誰にも話してないことなんだから当然だ。つまり僕が全面的に悪いんだ」
「そうじゃないわ、私が…」
「はいはい、もうおしまい」
この手の和解劇にありがちな、オレガワタシガを始めた二人を見て、雲龍がやんわりとそれを止める。
こうなるときりがないので、いい判断だろう。落ち着いた二人は若干照れくさそうに笑って、その場は収まった。
雲龍がカーテンを開ける。穏やかな午後の陽光が眩しい。
「あれ、比叡」
「最初からいましたよう！　もー、司令が叢雲を泣かせたって聞いて、事情によってはぶっ飛ばすつもりで来ていたんですけど」
「さらりと怖いことを言わないでおくれよ…」
「あはは、冗談ですよ。それより体調はどうなんです」
拳を掌に打ち付け、比叡が笑う。朝よりはましだよ、と返すサムソン。
そのサムソンを再びベッドに押し込め、そこで雲龍が口を開いた。
「…そのライター、大事なもの、ってことだけれど。それって私たちが聞いても、知ってもいいことなのかしら」
お互いの非礼は、謝罪によって解決したが、その原因となるものに

ついては、明かされていない。
とは言えこういうものはデリケートな事情があり、おいそれと尋ねられるものではない。雲龍は言葉を選ぶように紡ぎ、そしてサムソンの目を見た。
サムソンは瞑目し、深呼吸をひとつすると、うん、と頷いた。
「あ、じゃ、じゃあ私は外しますね」
「…いや、比叡にも関係がある事…とも言える。聞いて貰ってもいいかもしれない」
「え？」
そう言うとサムソンはライターを手に取り、一度だけ蓋を開閉してから、比叡を見た。席を立とうとしていた比叡は改めて着席し、次の言葉を待つ。
そしてまるで見当がつかない、といった風情の叢雲もまた、雲龍が用意したお茶を手に、ただじっとサムソンを見つめていた。
「これはね、形見なんだ。そして、僕がここでこうして話していられるのは比叡、君のお姉さんに助けられたからだ」
「……金剛お姉さまに…？」
意外なところから飛び出たその名前に、比叡が思わず身を乗り出す。
サムソンは再びうん、と頷くと、ぽつぽつと昔のことを語り始めた

サムソンティーチャーむかしばなし・中編

「あれは今から４年半前…か。深海棲艦が侵攻を始める一年前の話になるんだ」
サムソンは茶をずずっと啜り、ゆっくりと語り出す。椅子に座った比叡と叢雲、座椅子に座る雲龍は黙ったまま、続きを待つ。

◇

「お疲れ様です。寒村副長」
「やぁお疲れ様。と言っても大半がオートメーションだし、計器類を見てるだけで張り合いはないけどね」
ブリッジに入ってきた当直の士官が、確かに、と言って笑う。寒村は再び手元に目を落とし、作業を再開する。
この『しまばら』に限らず、科学技術の進歩は艦艇に乗り込む人員の数を大きく減らすことに成功していた。かつては１５０人を超える人員が勤務していたこの艦も、今では１／３ほどになっている。やがてはワンマン運転も可能になるのではないか、というジョークも、そう現実離れしたことではないと、船乗りたちの間では頻繁に語られていることだ。
「…煙草、ですか？　副長は確か吸わないものだと存じていましたが」
「うん、僕はね。これは艦長に預かってくれって頼まれたんだ」
ジッポロックに煙草とライターを入れ、それを更に防水加工の小袋に入れる。何かあっても、これなら濡れて使えなくなることはない。
部下の言葉に寒村はそれを持ち上げては眺め、うん、と頷いた。
「なるほど。艦長、また禁煙ですか。何度目ですかね」
「過去にも挑戦してるのかい」
「ええ、自分は学校を出てからずっとこの艦ですが、覚えてるだけで１０回は禁煙宣言をしていますよ」

「そんなに。あー、じゃあこれも無駄になるかもしれないか…」
彼…白土（しらと）二等海曹は寒村より若い士官であるが、艦長である星野とは寒村より付き合いが長いようで、若干のあきれ顔を見せつつそう言った。
とは言え寒村とて、直々に頼まれた仕事…仕事と言っていいものかどうか判断がつきかねるが、ともかく仕事に手を抜くわけにもいかない。
寒村は密封した煙草とライターの入った袋を上着のポケットにねじ込み、窓から見える海面と月を眺めては大きく伸びをした。時刻は午前二時を少し回ったところである。
「白土、コーヒーでも飲もうか」
「おごっていただけるのであれば！」
「わかったわかった、君らも飲むだろ、買ってくるよ」
いただきます、という声を背に、寒村と白土はブリッジから出て、気晴らしの散歩がてら艦内下部の食堂にある自販機コーナーへと向かう。
紅茶やらコーヒーやらを買い込み、持参したビニールへと詰めていく。部下たちにおごる義務などありはしないが、叩き上げの海士たちを差し置いて副長になった寒村は、どうしてもこういうところで気を遣ってしまう。情けないと言えばそれまでだが、性分というものは中々変えることはできないものだ。
「二月だってのに結構暖かいですね」
「そうだね、赤道にちょっとずつ近づいてるからかなあ…まさかね」
食堂から甲板に出た二人を、生暖かい風が迎える。確かに、本土から乗り込んだ時は寒風が吹きすさんでいたが、今は上着を脱いでもいいのではないか、と思わせるほどに暖かかった。
「白土は吸わないんだっけ」
「自分は海の上では吸いませんね。陸では吸いますが」
「そうか、それもいいな…」
笑いつつ階段を上がっていき、救命艇が並ぶ区画へと差し掛かったその時——

◇

「司令が輸送部隊にいた、っていうのは前に聞きましたけど、副長って結構偉い立場なんでしょう？」

「うん…まぁ、そうだよ。ただ君らも知ってると思うけど、今の艦艇はオートメーション化が進んで、そんなに人員がいなくても航行が可能なんだ。軍に入る人も少子化の影響で年々減っててね、ある程度実力があれば、それなりに上の立場に就くこともできる」

叢雲が新たに淹れた茶を皆に配る。比叡の問いに答えつつ、サムソンはそれを啜った。

人口比率や少子化など、現在の日本についての情勢についてサムソンが語ることはなかったが、それは比叡たちに説明するまでもないことであると、そう判断したからであろう。

サムソンはあくまで、四年半前に起きた事実のみを語る腹積もりであり、それに付随するあれやこれやについて、艦娘たちも聞こうとはしなかった。

「ま、僕が副長になれたのは運だよ運。色々あったけどそれは今回の話には関係ないから…で、どこまで話したっけか…」

「コーヒー買って戻るところ」

「あァ、そうだ…」

◇

凄まじい揺れが、船体を襲った。

寒村と白土は思わず身をかがめ、傍にあった手すりに身を委ねる。

「うわッ!?」

「爆発!?　何処だ！」

突然のことに狼狽しつつも、周囲を見回す二人。その時、左舷方向の空から飛来した『赤熱したなにか』が、ブリッジに突き刺さるのを、寒村は見た。

そして、再びの爆発。
「ほ、砲撃…!?」
「砲撃!? 馬鹿な、そんな、いや、馬鹿なことが!?」
馬鹿げた話と思うのも無理はない。
今現在、日本と戦争をしている国などはない。ひと昔前であれば、海賊やテロリストの可能性もあっただろうが、今の世界情勢において、そういったものはほぼ根絶されているのだ。
では一体何が…砲撃に見えたものは隕石? 落雷? 何処かの国の新兵器実験? それとも特撮やアニメーションに出てくる怪獣か何かか? 寒村の頭にはそんな可能性が生まれるが、すぐに否定されては消えていく。
ここは日本の領海内で、おまけにこちらは武力行使や他国の支援にいく艦でもない。攻撃したところで何の得があるというのか。
「ブ、ブリッジが…!」
震える声で白土が言う。
完全に破壊されたブリッジはごうごうと炎と黒煙を噴き上げ、『しまばら』の船体はゆっくりと傾き始めた。
「バイタルパートからの爆発なのか?」
「わ、わかりません! わかりませんが! 副長、これはエマージェンシーなのでは!?」
「それは、そうだ!」
寒村はそう言うと、やや離れた場所にあった艦内放送の受話器を取り、緊急コールを発令した。
サイレンが響き渡り、先ほどの爆発に気付いて飛び出してきた海士たちが、状況を把握しようとそこらを駆け回る。
「落ち着け! まずは状況報せ!」
「揚陸艇収容デッキで火災発生!」
「ブリッジ、ＣＩＣともに連絡取れません!」
「艦体左舷に破孔確認! 隔壁封鎖しろ! なに、電気系統が? おい!」
「怪我人が出てる、誰かこちらを手伝え!」

怒声が飛び交う中、寒村はそれでも階段を上っていき、ブリッジが一望できる甲板へと出た。
それは正に悪夢のような光景であった。
「そんな…」
爆発によって完全に吹っ飛んだブリッジ。傾斜によって海に落下していく甲板上の物資や車輌。船首方向からも爆発があったのか、炎と煙が噴き上がっては夜空を汚していく。
「副長！　指示を！」
「あ、ああ…」
しかしブリッジが吹っ飛んで、更に各所で爆発や火災が起きているとなれば、もうこの艦は助からないのではないか、という疑念が寒村の頭をよぎる。
だが、だからといって何もしない訳にはいかない。寒村は両の手で頬をバチンと叩いて気合を入れ、上がってきた海士と共に艦内へと入ろうとした。
その矢先…である。
空を切り裂くような音が響いて、寒村たちは思わず身を伏せる。
ずどん、と。
更に艦体が大きく揺らいだ。そして、爆発。
「まただ…！」
「副長ッ！　攻撃です！　攻撃を受けているんですよ、我々はァ！」
海士たちは皆、様々な状況を想定し、訓練を積んできた。
だが実際に、日本の艦艇が直接攻撃を受けるという状況など、それこそ先の大戦前後にまで遡らないといけない。破損のチェック、傾斜回復、隔壁の閉鎖、火災の消火、周囲との連携、連絡、救命活動、索敵、脱出…などなど、やることは山積みだ。
だが現在、それらは基本的に、オートメーション化されたシステムがこなしてくれるものだ。無論何もかもやらずに上げ膳下げ膳とはいくまいが、それでもマニュアルによる負担は可能な限り軽減されているのが現状である。
ではその大本、システム自体が死んで…いや、瀕死となっている今、

何をどうすればいいのか。どうしたらいいのか。どうすれば助かるのか。
寒村は自問した。
そして結論を下す。
「…退艦だ」
艦長である星野とは連絡が取れない。死んだとは思わない、思いたくもないが、次に指揮を執るべき立場にいるのは自分である。
この艦はもう、おそらく駄目だ。寒村はそう確信した。何者かが明確な悪意、殺意をもってしてやってきているのだ。ならばどうする。
「生存者を捜索、その後救命艇下ろせ、総員に退艦命令！」
そして再び、爆発が起きる。

◇

「それって結局、深海棲艦だったのよね？」
「うん。砲撃の外に雷撃も食らってて、転覆しないのが奇跡だったくらいでね…」
任務報告受領やら他の艦娘たちとの連絡、指示などを出してきた叢雲が、戻りしなにそう聞いた。サムソンは窓の外、徐々に暮れ始めた景色を見つめてそう答える。
「敵の数は？」
「駆逐艦が3、軽巡か雷巡が1、重巡が2だった…と思う。何せ、この事件に関する詳細は、生き残った当事者たちでさえ気軽に閲覧できるものじゃなかったからね。どうしても記憶だけが頼りになる」
「そ、そんなこと話しちゃっていいものなんでしょうか」
「無論、よくはないと思う。だから黙っててくれよな」
大きくため息をつきつつ、サムソンは言った。こういった惨事の記憶を話すというのは、精神的な負担も大きいのだろう。
雲龍が持ってきたお香に火をつけ、部屋はよい香りに包まれた。
「…それで、脱出は出来たの…？　いや、出来たからこうしてここにいるんでしょうけど」

「ああ、救命艇や緊急用のゴムボートなんかは、マニュアルで使えるからね…でも、こうして生きていられるのは、さっきも言った通り、比叡、君のお姉さん達のおかげなんだ」

◇

「くそッ、何だって通信機が使えないんだ！　救命艇のメンテナンス担当は何やってんだ！」

そんな怒声を聞きつつ、寒村は周囲を見回した。爆発し炎上している『しまばら』が後方に見える。

当然のことながら、彼は最後まで甲板に残り、生存した海士達が全て脱出してから、己も脱出をした。

点呼をとった結果、脱出に成功したのは乗員６８名のうち２１名だけであった。その殆どが宿直のため起きて各所にいた者たちであり、残りの者は呼びかけにも応じず、また火災と破壊のため捜索も困難を極めたため、寒村は断腸の思いで脱出を決断したのである。

「副長、駄目です。通信も繋がりません」

「ＧＰＳは？」

「ＧＰＳは辛うじて反応があります。現在地…北緯２５。０１，２３．１”　東経　１４１。１４，３２．３”」

読み上げられた緯度と経度をもとに、備え付けの地図とコンパスなどでおおよその位置を照合する。

「北硫黄島と硫黄島の間か…南下すれば硫黄島だ、とりあえずそこまで行こう」

「了解です」

発光信号によりその旨が伝達され、救命艇ならびにゴムボートはゆっくりと、硫黄島への進路をとる。

「しかし、通信が出来ないというのはどういうことでしょう。これじゃまるで、本当の意味での孤立だ」

「通信障害か、ＥＣＭ…通信機の故障、色々考えられるが…しかしだからって、何もしないわけにはいかない。皆、頼む」

「はい」
理解を超える事態に直面し、それがあれこれ騒いでもどうにもならない、ということを理解すると、人は案外落ち着いてしまうものだ。多くの人命と艦も失われたが、寒村の心は今、びっくりするくらいに冷え切っている。
どこの誰があんなことを。何のためにあんなことを。何故。どうして。
わからない。
それならば、今は今出来ることを全力でするだけだ。寒村の本能はそうすることで、己の心を守るはたらきとした。
「…ダメですね、ＧＰＳも応答しなくなりました。やはり何かの力が働いていることは間違いないでしょうが…」
「戦争でもおっ始まるんですかねえ…」
「日本と…何処の間で？」
数名の海士たちも、もはやオールでもって漕ぐ以外、打つ手なしと諦めたのか、思い思いの雑談を始める。
通信が出来ずとも、生きてこうしているのだ。硫黄島までたどり着ければ、どうにでもなる。ふうっ、と息を吐くと、ポケットにねじ込んだままの煙草とライターを取り出した。脱出する際に海水をしこたま浴びたが、これは無事であった。
「あ、それはさっきの…」
「うん。星野艦長の……形見になっちゃったな。奥さんに渡さないと」
「そう、ですね…」
この事態が現実味を帯びてくるのはこれからだろう。寒村は一度会ったことのある、星野の細君の顔を思い浮かべつつ、煙草とライターを再びポケットにねじこんだ。
その時である。後方についていた救命艇から、大声で叫ぶものがあった。
「右舷方向、３時の方角！　発光体らしきものを確認!!」
その声を受け、寒村達は一斉にそちらを見た。

何もない海上に、確かに浮かぶ赤い光。それはゆらゆらと揺れ、こちらにゆっくりと近づいてきているようでもあった。
「漁船か何かでしょうか？」
「わからない。けど…こちらからのアプローチは待て。『しまばら』をやった奴らが、まだここら辺にいるとすれば…」
「それはそうですが…向こうはもう、こちらに気付いている可能性も…あ！」
そこまで言いかけて、白土が叫ぶ。後方の救命艇、更にその後ろにつけていたゴムボートから、懐中電灯による光が投射され、更には備え付けの救命炎が使用されたのだ。
「おい待て！　命令は出ていない！」
白土が叫ぶがゴムボートまでは届かない。
そして次の瞬間、比較的若い海士たちが乗り込んだゴムボートは、その人員ごと、文字通り『弾けて』消えた。
「え…？」
ぱんっ、という、風船が割れるような音と共にゴムボートは跡形もなく消滅し、ほんの少し前まで人間だったものたちは、赤い霧となって散っていく。
「な…」
「全員伏せろ！　明かりの類は一切使うな！」
寒村の怒声が響き、辛うじてそれが聞こえる範囲にいた救命艇の乗員たちもそれに従う。しかし無駄なことであった。
海の上の赤い灯火は、その速度を増して、こちらに接近してくる。小型の船舶か、それに準じたものであると推測できるが、詳細はわからない。
寒村は顔だけを覗かせ、その正体を確認しようとじっと凝視する。
月明りに照らされたそれが、見える範囲に入ったとき、寒村はこの世の全ての常識を疑った。

◇

「それはそうだろう。人間と同じカタチをしたものが、海の上を進んでくるんだから」
「人類が初めて、深海棲艦と会った…ってわけですね」
比叡の言葉はある意味では正しい。しかしサムソンは首をふって比叡を見た。
「どうだろうね。僕が知らないだけで、同様の事件は別の場所でも起こっていたのかもしれない…僕たちが初めて、ということは断言はできないよ」
「な、なるほど」
「日本海軍が、というくくりなら？」
「それは僕たちが初めてだろうね。まったく運が悪いにも程があるよな…」
ジャスミン茶をすすり、サムソンはため息をつく。語り始めてから何度、彼がそうしたかはわからない。
進んで語らなかったことから、それはとても辛い思い出なのだろう、それはここにいる比叡、叢雲、雲龍たちにも痛いほどにわかっていた。
しかし彼は語ることを止めはしなかった。叢雲の手前もあるのだろうが、彼自身、語ることで…共有することで、「救い」を欲しているのだと、誰もが理解している。
そしてそれを受け止めて、少しでも彼の苦悩を和らげてやろうとも。
「そこで、金剛お姉さまが？」
「……ああ。正確には、金剛と…あと二人」

◇

「こちら輸送艇1号…北硫黄島を通過。大破炎上中の『しまばら』を目視で確認しました。司令部、重金属粒子反応は？」
快速輸送艇が波を切り裂き、夜の海を進んでいく。
余計な兵装はオミットし、代わりに簡易的な出撃ドックを備えた、

海軍が作り上げた新たな艦艇である。
「了解しました。以降の作戦はこちらで預かります…通信終わり」
「横須賀はなんと？」
「こちらに一任するそうよ。それはそうよね、戦えるのは私たちだけ…バックアップは陸でしてくれればそれでいい」
ウェーブがかった栗色のロングヘアをかき上げ、背の高い女性が笑う。
そしてその正面で椅子に座る、銀髪の少女もまた笑って、飲んでいたペットボトルの紅茶をテーブルに置いた。
「と、いうことじゃ。汝（なれ）にとっては初陣になるが…今更逃げ出したくなったりはしておるまいな？」
「ノープロブレムですお姉さま…訓練は死ぬほどやりました。覚悟だって決めています」
「いい顔ね。それでこそ次世代型艤装の適合者です…じゃ、行きますわよ」
輸送艇の後部ハッチが開き、誘導灯がともる。
『進路よろし！　発進どうぞ！』
「了解。では行きましょう…敷島型戦艦一番艦・敷島！　出撃いたします！」
「続くぞ。敷島型戦艦四番艦・三笠！　出撃する！」
オペレーターのアナウンスを受け、暗い海にまず躍り出たのは二人…いや、二隻の『艦娘』たちであった。
それは絶望の海を切り開くための力。
ひとの世を、未来につなげるための力。
そして最後に、すさまじいタービンの音を轟かせて、一隻の『艦娘』がスタンバイに入る。
前の二人とは明らかに違った艤装が、誘導灯の光を受けて輝いた。
「すぅーッ…はーっ…よし。金剛型高速戦艦一番艦・金剛！　出撃ですッ！」

サムソンティーチャーむかしばなし・後編

「重金属粒子濃度は中程度と言ったところね。『しまばら』の生き残りがいるとすれば、無線が使えずさぞ絶望しているんじゃないかしら」

「かッ、女々しい男は好かんのー！　オールでも信号弾でも使って、最後まで戦うような輩はおらんのか！」

「Ｏｈ…明治の頃とはもう違いますよ、三笠お姉さま」

「なんじゃなんじゃ、儂を年寄り扱いか金剛！『三笠』は１９００年進水、『金剛』は１９１２年進水じゃ！　一回りしか違っとらんわ！　見よこのぴっちぴちの玉の肌を！」

『Ｅｘｅｃｕｔｉｏｎ』（執行）と刻印された軍刀を振り回しながら、三笠が騒ぐ。

艤装に宿った魂…即ちその艦が経た年数と、それを纏い戦う適合者の年齢は、当然ながら異なっている。敷島や三笠に至っては一世紀以上も前の艦であるから、いかに勤勉な適合者であっても、詳細な記録までは把握しきれるものではない。

しかし適合者はあたかも、その『艦』そのものになりきった言動をし、また当時の知識を披露したりすることが確認されている。

いずれ説明させて頂くが、これは『記憶の融合』と呼ばれ、艤装を纏うことになった適合者全てに起こる、副作用のようなものである。

「お喋りはそこまでになさい三笠。奴等を目視で確認したわ」

先頭を進む敷島が、声のトーンを一段落としてそう告げる。

網膜に投影された映像に、かのバケモノ達が、救命艇の群れを前にして舌なめずりをするのを、敷島は確かに捉えていた。

「敵性体『イ』が三…、あとは見たことのない新型が一と二…ね。二隻の方はヒトのカタチをしているわ…驚いたわね…それと、救命ボートも三隻ほど見えるわ」

「ヒトガタじゃと…ふむ、了解した。しかし敷島姉（あね）よ、それについては後ほどということでな。それよりも、じゃ。こちらの射程まであと…三十秒といったところか。金剛よ、汝は最大船速で飛ばし

て、『しまばら』の連中を曳航、安全な場所まで退避させよ。儂らが牽制をするでな」
「Ｙｅｓ，Ｍａ，ａｍ！」
「牽制と言わずアンブッシュでもいいわよ三笠、数を減らせれば」
「それもそうよな…よし金剛、行け」
その言葉を皮切りに、金剛が速度を上げ、単縦陣から離れていく。トップスピードを出しているであろう敷島、三笠よりもずっと早い船足は、正に次世代のスペックと言えるだろう。
それを確認すると敷島、三笠は若干速度を落とし、己の側面を見せる体勢になって艤装を稼働させた。
そして黒い鋼の砲門が、月の光を受けて鈍く輝いた。

こちらに向かってくるものは、数える限り六体。うち二体は人間とほぼ同じ大きさと形で、右手に巨大な鉄の塊を装着している。先ほど、漁船と誤認したのはその双眸に浮かぶ赤い光であった。
残りの三体は、あえて例えるならばイルカ、あるいはクジラのような、海棲生物のように思える。グロテスクな口腔と不揃いな歯をガチガチと開閉させ進んでくるその様は、意思の疎通など絶対に不可能と思わせる説得力があった。残る一体もどこか人間のようにも見えるが、やはり意思のようなものは感じられない。
それを確認した寒村は、自分がとうの昔に死んでいて、ここはいわゆる地獄なのではないか、と思い始めた。
先ほど、海士数名をボートごと消し飛ばしたのを見るに、あの海の上を進んでくる異形の者どもは、おそらく一撃でこちらを殺せる武器、武装をもっているのだろう。
何のことはない。悪魔や妖怪、そんな類のものだ。人間同士の戦争などでは決してない。
そう考え、合点がいったとばかりに寒村はポケットから煙草とライターを取り出し、蓋を開けた。
「白土、斎藤、荒木、山口。僕たちは腐っても日本海軍の軍人だ…せ

めて、見苦しくないように死んでいこうじゃないか」
自分たちがもう助からないな、という思いは、そこにいる全ての人間が共有しているようで、寒村のその言葉に異を唱えたり、泣き叫んだりする者はいなかった。
白土は煙草を一本受け取っては銜え、差し出されたライターで火を点ける。他の者は吸わないということで、手持ち無沙汰になった寒村は、もう一本煙草を取り出すと、慣れない手つきでそれを口に運ぶ。
「生まれて初めて吸うんだ」
「そうなんですか。副長、今お幾つで？」
「２９だよ。来月で３０だ」
「ハハハッ、真面目だったんですねえ。俺ァ高校の時、兄貴のを隠れて吸ってたらお袋にぶっ叩かれましたよ」
震える手で火をつけ、口元に持っていくが火は着かない。煙草というものは息を吸いながらでないと着火しないので、生まれて初めて吸うという寒村が、こんな状況で一服する、という最後の願いはなかなか叶わない。
「息を吸いながら火をもってくんですよ」
「そうなのか…ああ、本当だ。ついた。生まれて初めての煙草が人生最後の煙草になるなんて、結構オツなもんじゃないげぇっほげほ！」
「わはははは！　あるある！」
盛り上がる寒村達に向け、人型のバケモノは右腕を向ける。それは殺意という砲弾が込められた砲塔であり、そしてバケモノは、悪意という引き金に指をかけた。
「ありがとう。君たちと仕事ができて、よかった」
「あの世で会えたら、思う存分酒でもやりましょうや」
「階級なんて無視の無礼講ですなァ」
「まぁ俺、下戸なんですけどね！」
「わはははは！」
が、しかし。
一秒経っても、十秒経っても…寒村達の体は霧散しないでいた。

「なんだ、やるならひと思いにやりやがれ！」
「そうだそうだ、今更びびってんじゃねーぞ！」
だが、明らかに様子がおかしい。
バケモノどもは罵声を飛ばす寒村達など、まるでどうでもいいと言わんばかりに、左舷方向に目を向けていた。
何かを警戒しているのか、動きすら止めている。
「…なんだ…？」
そして次の瞬間。
人型のバケモノ共の後方に位置していた、海棲生物の如きバケモノが、大爆発を起こして木っ端みじんに吹き飛んだ。
「う……っ!?」
凄まじい衝撃と轟音に、ボートは木の葉の如く揺り動かされ、波をかぶる。
転覆だけは免れたが、事態を理解出来ているものはそこにはいなかった。
否、バケモノ達だけは違う。加えられた攻撃に対し、怒りをむき出しにした人型が、さっと手を上げる。
生き残った海棲生物型が二匹、そして残りの人型がボートから離れ、左舷方向に突撃していくのを、寒村は茫然と見送ることしか出来なかった。

「命中。『イ』の数が2になったわ」
「さすがは敷島姉じゃ、見事な手際よ」
「あなたもね、三笠。さぁ、踊るわよ！」
「応よ！」
その言葉を合図とし、敷島は三笠の前に出て、『Ｓａｎｃｔｉｏｎ』（制裁）と刻印された三十年式歩兵銃を高らかに掲げ、そして発砲する。
射出された弾丸は中空でぱあっ、と弾け、凄まじい光量を以て周囲を照らし出した。

「儂が前に出るゆえ、敷島姉は後方から援護を頼む」
「了解したわ。ただ無理はせぬよう」
「是非もなし！」
そう言い放った三笠は軍刀の峰を噛んで銜えたのち、足元の海面を爆発させ、急加速。背負った艤装が変形し、それまで前方に向いて固定されていた主砲がサブアームと連動して展開し、広い射角を獲得していく。
そして更に、三笠は体勢を前傾させ、ほぼ四つん這いと言ってもいい、まるで獣のような姿勢で疾走し始めた。
「――！」
三笠の双眸に宿り、接近してくる、まるで鬼火のような燐光を『敵』と認識し、回避運動と迎撃行動を開始したヒトガタ二体の水平砲撃が、彼女の頭上を掠めて彼方へと消えていく。
そこで三笠はチラリと斜め後方を見て、敷島の支援砲撃の発火炎を確認すると、四つ足のまま大きく舵を切ってヒトガタの側面へと回り込んだ。
そこに敷島の砲撃が着弾。後続の『イ』と呼ばれた海棲生物型は分断され、吹き上がった水柱に翻弄されていく。
「!?」
そこに、三笠の艤装の背面から射出された銀色のチェーン・アンカーが、『イ』の胴体に突き刺さって食い込んだ。そして三笠は他の敵性体に注意を向けつつ、アンカーを巻き戻していく。
『イ』は食い込んだアンカーを外そうと必死にもがくが、戦艦のパワーに引きずられては、その抵抗も空しい。そのまま三笠は主砲を真後ろに向け、水平射で『イ』を粉々に打ち砕いた。
更に三笠はその反動を利用して、悪あがきと言わんばかりに副砲らしきものをばら撒くヒトガタの間合いに一瞬で飛び込む。
「――ァ」
人間でいう処の腎臓の位置から突き入った軍刀の先端が、ヒトガタの体を貫通して、喉のあたりから突き出る。
ビクビクと体を痙攣させつつも離脱を試みるヒトガタであったが、

容赦なく捩じりを加えられれば、もはや助かる術はなかった。
「貴様らの最期を訃る刀じゃ、せいぜい味わって死ね」
そうは言うが、かなりの速度で踏み込まれたため、ヒトガタは恐らく最後まで、自分がどう死んだか認識していなかっただろう。
軍刀を引き抜いた三笠はそのまま主砲を接射して、その場から離脱した。

「Ｉｌｌｕｍｉｎａｔｉｎｇ　ｆｌａｒｅ（照明弾）！　これで仕事がしやすくなった…！」
両名の砲撃で開かれた戦端。金剛もそこに混ざって戦いたいという思いはあった。
しかし遭難者を巻き込むわけにはいかない。これもまた戦いであると、彼女はすぐに頭を切り替え、全速でボートへと近づく。
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｏｋａｙ!?　Ｄｏｎ’ｔ　Ｗｏｒｒｙ！　私は日本海軍横須賀基地所属、ＲｉｇｇｉｎｇＤｒｉｖｅｒ：　いえ、『艤装適合者』金剛です！」

◇

「司令、現役の敷島お姉さまと三笠お姉さまともお会いしたんですか!?」
辛抱たまらぬといった表情で、比叡がサムソンに詰め寄った。
敷島、三笠は金剛の姉にあたるため、その金剛の妹分を自称する比叡にとっては、正に雲の上の人であると言えるだろう。
サムソンは食いつかんばかりの比叡をなだめつつ、ゆっくりと頷いた。
「ああ。と言っても、その時は戦ってるところをかなり遠くから見たくらいで、正体については戦闘詳報と空撮映像。それに引退した後の二人と会って知ったんだけどね」
「日露戦争の頃の艦よね、その二人って」
「うん。二人が艦娘になった経緯や、何故戦っていたか…というこ

とは機密扱いで今でも知らないし、話す内容はあくまで僕の推測、私見が含まれているから…そこはあまり、真に受けすぎないよう注意してくれ」
比叡は興奮冷めやらぬといった風情でうろうろと歩き回っていたが、やがて叢雲に注意されて再び着席した。
だがその顔は、さっさと続きを話せと言っているようでもある。
「何度も言うけど、この件の大半は機密扱いでね。公開されているのはごく僅かな部分でしかない…だからあの二人がどうやって奴らを撃退したとかそういう部分は、詳報と、あとは推測だ。しつこいようだけど」
「はい」
「で、だ。二人が戦っている間、僕は君のお姉さん…そう、金剛に曳航されて、安全な場所にまで退避することができた」

◇

「き、君は…!?」
その少女は和洋折衷の装束、巫女や神職といった風情のそれに身を包み、巨大な鉄の塊…ともすれば戦艦の主砲や舳先、マストなどを模しているようにも思える『装備』を背負っている。
そんな少女が、英語混じりの日本語でそう尋ねてくれれば、ここは果たして地獄なのか、と寒村は首を傾げた。
地獄の鬼にしては可愛らしすぎるし、責め苦を与えてくるでもない。それに先ほどから聴こえる砲撃音も気になるところだ。
では、一体何者だろうか、と。そんな疑問が声になって紡がれ、それを受けた少女は海風にロングヘアをはためかせて叫んだ。
「詳しいことはお話出来ません！　出来ませんが！　あなた達を安全な場所まで退避させます！」
「さっきの爆発も君がやったのか!?」
「いやちょっと待て、金剛…？　こんごうと言ったのか!?　護衛艦の!?」

「かわいいな君ィ！　ここってひょっとして天国的なアレか!?」
言葉の洪水をワッと浴びせられた金剛は目を白黒させ、他のボートと寒村達を見比べていたが、やがて埒があかぬと踏んだのか、身に纏う『装備』からワイヤーアンカーを引き出しては、それを全てのボートへと接続していく。
「曳航する気か、無茶だ！　三隻で１６名の人員だぞ！」
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ！　戦艦のＰｏｗｅｒなら容易いことです！」
「せん…かん…？」
ごうん、と低い音が轟いたかと思えば、金剛とともに、ボートがかなりの速度で急発進する。
たまらず転げる寒村達であったが、ボートの縁に掴まっては何とか体勢を立て直した。先頭を行く金剛は振り返りもせずにスピードを上げていくので、海士たちは文句の一つも言えずにただ状況に身を任せる。
「硫黄島だ！」
やがて海の中に浮かぶ硫黄島の灯りが見えれば、否が応でも気勢があがる。ここは地獄などではなく、いまだ此岸であると、そう実感できることは、生きているということに他ならないからだ。
金剛は速度を落とし、慣性に乗ったボートを先行させると、ワイヤーアンカーを外してはその『装備』へと収納させた。
「ここまで来れば、おそらく安全です！　硫黄島には連絡が行っている筈なので、救助を待って下さい！」
「待ってくれ、通信障害が出ていないか!?」
「ここまで離れていれば影響はないはずです。では、私はこれで！」
「あ、ちょ…待って…君は！　君は、なんだ!?」
寒村は聞かずにはいられなかった。人の身でありながら巨大な鉄塊を背負い、海の上に立ち、進み、多くの人員を助けた、そのものの正体を、知らずにはいられなかった。
「Ｓｏｒｒｙ　私が開示することを許されているのは、所属と名前のみです。ですので先ほどお伝えした通り、横須賀の金剛、とだけ覚

え置きくだされば結構です」
「金剛ってのは戦艦か、護衛艦の名前だ！」
「その通りです。これ以上はお答えすることはできません…それでは失礼いたします」
有無を言わさず、金剛は波しぶきを立て、今きた海の上を戻っていく。
取り残された一行は、ただそれを見送ることしか出来なかった。

◇

「その後僕たちは硫黄島に辿り着いて、何とか事なきを得た。だが死んだ人間も沢山いたし、生き残った面々も殆どが軍を辞めてしまったんだ」
話し始めて2時間は経ったろうか。
ライターの話からだいぶ膨らんだスケールの大きさに、若干の戸惑いを覚えつつも、艦娘たちはふうっ、とため息をつく。
「そ、それでお姉さま達はどうなったんですか!?」
「どうもこうも…深海棲艦たちを倒して、そのまま帰ったんじゃないか」
「それはわかりますよう！　サインとか貰わなかったんですか！」
不完全燃焼といった感じの比叡に詰め寄られ、サムソンは困り顔を見せる。
現在敷島と三笠の両名は、完全に引退して、軍で別の仕事に就いているため、その現役時代を知るのは恐らく金剛とサムソンだけなのだ。
「無茶言わんでくれ。…比叡は引退した二人には会ったことがあるんだっけ」
「いえ…ですが去年の大規模作戦の時、金剛お姉さまに会った際に色々お聞きました」
「そうか…だが比叡、君は少なくとも、三笠さんとは一度会っているはずなんだ」

「え…？」
茶を飲みすぎたせいか、サムソンが一度席を外してトイレへと消える。
残った叢雲、比叡、雲龍は何を語るでもなく、ただお互いの顔を見つめるばかりだ。
「平々凡々だと思ってたサムソン先生に、そんな過去があったなんてね」
「そう、ね。人に歴史ありってことね」
「いいなァ、その戦闘詳報って今でも見れるのかなァ」
そしてトイレから戻ってきたサムソンは、語り疲れたと言ってベッドに横たわる。忘れていたが、彼は風邪っぴきの病人なのだ。
「司令のこと、少しでも知れてよかったわ。ライターの件は本当、ごめんなさい」
「いいんだ。この事は君たちの間で留めておいてくれると助かるよ」
「それは、そうですけど。まだ聞きたいことが…」
言いかけた比叡を雲龍が止める。そして雲龍はキャビネットにあったタブレットを指さして、口を開いた。
「お風呂にアレ、忘れていったでしょう？」
「あ、ああ。君たちが使ってなかったからつい、ね」
「その時、ちょっとだけ画面を見ちゃったの。あの写真、『しまばら』の人たちなんでしょう？」
「うん」
そこで話はおしまいになった。
サムソンは風邪薬を飲み、再び眠ることになる。
三人が司令室から出る頃にはもう、日は傾いていて、夕暮れの気配が迫っていた。
「しかし、私が三笠お姉さまに会っているだなんて、何であんなことを」
「さぁ？　艦娘になる前にでも会っているんじゃないの、政府のお役人が訪ねてくるでしょ、適合者のところに…」

「あ…まさか…!?」
しかし比叡はそれ以上何も言わず、三人はそこで各々の仕事へと戻っていく。
そして鹿屋基地に、いつもの日常が戻る。

師走の来訪者

暮れも迫りつつある十二月。鹿屋では比較的暖かい日が続いていた。

風邪をひいて寝込んだサムソンも、何とか週末にまでは回復し、鹿屋基地はいつも通りの日常を送っている。

そして、明日は日曜日であった。

「提督ゥ！　明日ショッピングモールに行きたいんだよぅ」

「ショッピングモールって何？　生き物？」

元気よくそう申請してきたのは、朝霜と清霜の通称アサキヨコンビであった。

シャングリラがどうこうという作戦もあるにはあったが、距離から何から離れている鹿屋基地の面々が招集されることはなく、横須賀の部隊があっさりと片をつけたと報告があった。

何でもＭＳ諸島Ｂ環礁における作戦であったらしいが、艦であった時、かのクロスロード作戦に関わった艦娘は鹿屋にはいない。

不測の事態に対し備えておくべし、という通達も来てはいたが、それでも基本的には蚊帳の外であった。

そしてこの作戦において多くの艤装が顕現し、横須賀はその大所帯っぷりに拍車がかかったという。いずれ養い切れなくなった艦娘たちが全国に散らばることになるであろうが、それはまた別の話である。

「モールってのはベンチとか並木のあったりする遊歩道のことだよ。で、買い物かい？　そりゃ構わないけど、何か言いたそうだね朝霜くん」

「おう！　荷物が多くなりそうだからさ、車出して欲しいなって」

「あたし達クリスマスの飾りつけ担当なんだ！」

そう。世界平和、人類守護の砦たる基地、鎮守府にも、季節は平等にやってくる。十二月と言えばまず思い浮かぶのがクリスマスであり、例に漏れず鹿屋でもそれなりに大きな宴が開かれる。

ケーキとチキン、飲む者にはシャンパン。そしてプレゼント交換といった、心躍る催しを楽しみにする艦娘たちは多い。
「ああ、今年はそうだったね。確か…千代田と矢矧もそうじゃなかったか」
「そうだぜ。でもあの二人はおっぱいでっかいからダメ」
「は？　…は？　つまりどういうことだキバヤ霜」
「司令官はおっぱいが好きだからなー！　おっぱいを車に乗せたらよそ見して事故るじゃん！」
腰に手を当て、清霜がニヤニヤと笑いながら言うが、あまりにも突拍子の無い言い分過ぎるため、サムソンも納得は出来ないようで狼狽しつつも食い下がる。
「なんでだよ！　大体僕がおっぱい星人だって誰が言ってんのさ」
「隼鷹さんと磯風」
「あいつら…！　誤解だ誤解！　そりゃあ多少はそういうことだってあるさ僕だって男だからねでもね僕はどっちかって言うとお尻の方が好きなんだよ大体おっぱいおっぱい日が暮れるーなんて中学生マインドはもうとうの昔に投げ捨てたよだからそこんところ変に誤解して年頃の娘さんみたいな反応でやだー司令官サイテーとか言わないで下さい泣いちゃうからお願いします」
あいつ女体のことになると早口になるの気持ち悪いよな、といった表情を一瞬だけしたアサキヨであったが、すぐに持ち前の能天気さと純粋さがそれを打ち消し、けらけらと笑いだす。
端から見れば微笑ましい光景ではあるが、サムソンからすれば沽券に関わる。だがそんなことはお構いなしに、アサキヨはサムソンの背中をばんばん叩いては笑い続けた。
「ひー！　おっかし…エロだー！　司令官、エロかもしれん！」
「摩耶さんや葛城のケツばっか見てるのあたし知ってるかンな！　そんなにケツがいいなら壁に手ぇつきなよ！」
この二人が揃うともはや手がつけられない。壁に手をついて可愛らしいお尻を振る清霜と、それを長い髪の毛を鞭のように振ってひっぱたく朝霜。そのやり取りを黙って聞いていたサムソンであったが、

やがてこめかみに指を当てつつ、苦虫を噛み潰したような表情で口を開いた。
「…車は出さないけどいいかな」
「ハァ!? なんでだよ! あたいは司令が乳派でも尻派でもどうでもいいんだよ!」
「そーそー、オトコのヒトってそういう生き物だって言ってたもんね」
「誰が」
「隼鷹さんと磯風」
「あいつらァァァァァァ!!!」

そして翌日の昼。基地の駐車場に、アサキヨと千代田、矢矧、そしてサムソンの五名はいた。
夕雲型の制服は学生服に見えないこともないという利点があり、アサキヨの両名はそのままの恰好である。比較的暖かかった前日とは違って、風が強いが、二人は特に苦もないようである。
一方の矢矧はタートルネックのセーターにジャケット、そしてジーンズとコンバットブーツいうスタイル。千代田は黒のブラウスとカーディガン、ロングスカートに、厚手のダッフルコートを羽織りニット帽まで被っている。
「やあ皆、おはよう。つってももう昼だけど」
「おはよう提督、車出してくれるんだって?」
「うん。朝霜と清霜に頼まれたからね」
「デキる男は違うねー!」
「こら、からかわない」
ボトル入りのブラックコーヒーをサムソンに手渡し、矢矧が笑う。
彼女も免許を持っているので、サムソンがいなかった場合は基地の車…と言っても軍用のトラックであるが、ともかくそれで街に繰り出すつもりであったようだ。
「荷物、積めるかな?」

「それなんだよな。５人も乗ったら荷台にしか荷物は積めないし」
「やっぱり矢矧がトラック野郎になるしかないんじゃない？」
ふかふかの肢体に反して寒がりな千代田が、ポケットから手を出さぬまま矢矧を見た。当の矢矧もふむ、と思案するが、何か思うところがあるようで、すぐに答えは出さない。
そして少しして、矢矧はコーヒーをするサムソンを見て口を開いた。
「ね、提督。ＳＵＶってどう？」
「どう…って、僕は別にカーマニアじゃないからなァ。これだって鹿屋のディーラーさんがお安くしてくれたから、それじゃ有難く、って感じで買ったわけで」
「ふーん…ね、私にこれ運転させてくれないかしら」
「あァ、そういうこと…いいよ。じゃあ僕がトラック野郎になるよ」
そう言うとサムソンはキーを矢矧に渡し、代わりにトラックのキーを受け取ってそのドアを開けた。
「こっちには誰か乗るのかい？」
「アタクシが乗るわ」
「うわあ！」
そそくさとＳＵＶに乗り込もうとしていた四人が、サムソンの悲鳴に気付いて振り向く。
その者は身にまとったハンチング帽、ピンクのコートと、ラメ入りサルエルパンツでもって、これでもか、と言わんばかりに己のセンスを主張しており、むしろ一種の清々しさすらあった。
「おいこらアドン君、いきなり出てくるんじゃないよ」
「あらァ、相変わらず冷たいわねぇサムソン先輩…でもそういうドライなとこ、嫌いじゃなくてよ」
「あ！　オカマちゃんだ！　ちょりーっす！」
「ボンジュール、キヨシにアサシー！　相変わらずプリティだわねぇ！　そしてそっちのレディは矢矧ちゃんと千代田ちゃんねぇ、岩川の司令の阿曇忠良よ！　よ・ろ・し・く・ね！」
「よ、よろしくお願いいたします！」

バチンとウィンクをかまし、アドンはしなを作っては二人に近づいていく。
初対面であるはずの矢矧、千代田は若干引きつった笑みを浮かべながらも、略式ではあるが敬礼をしてそれに答えた。
「あン、今日はオフなんだから堅苦しいのはノンノン！　それよりアナタ達、鹿屋の街に行くんでしょう？　アテクシもご一緒してよろしいかしら？」
「オッケーオカマちゃん！　アイスおごってくれるならいいよ！」
「アタイはホットケーキな！」
「交渉成立だわね！　そうと決まれば話は早いわ、サムソン先輩、アタクシ運転するからさっさとデッパツしましょう！」
勝手に話を進めるアドンとアサキヨをよそに、サムソンは運転席に乗り込み、エンジンをスタートさせる。
それを見たアドンは慌てて矢矧からキーを受け取ると、ＳＵＶの運転席に颯爽と乗り込んだ。
「君が運転するんかい！　事故んないでくれよ！」
窓から顔を出したサムソンが困惑した様子で叫ぶが、アドンはどこ吹く風でエンジンをかけた。そしてアサキヨがわあっと嬉しそうに後部座席に乗り込むと、所在なさげに立ち尽くしていた矢矧と千代田が、トラックへと乗り込んでくる。
「…なんかごめん」
「ちょっと狭いけど、あの人と一緒よりかはいいかなって…」
「霞から聞いてたけど、強烈だわ…それじゃ提督、行きましょ」
「ああ。それじゃ出発」
サムソンはそうつぶやくと、アクセルを踏み込んだ。

「オカマちゃんとこの子たちは来ないの？」
ショッピングモールの地下駐車場に車を止め、外に出たところで清霜がそう尋ねた。アドンはウフフ、と笑うと、「あの子たちは訓練なのよ」と返し、ポケットに入っていたマフラーを清霜に巻いてやる。

「んじゃ街には何しにきたんだい？」
「ここんとこずうっとお休みがなかったからね、アタクシだって羽根を伸ばしたい時もあるわぁ」
「なるほど、じゃあさじゃあさ、あたし達が付き合ってあげるよ！こういうの何て言うんだっけ、エ…エス…」
「エースコンバットだな。アタイは詳しいんだ」
きゃっきゃとはしゃぐ児童二名とオカマのパーティをよそに、サムソン、矢矧、千代田のパーティはエレベーターへと向かう。目指すはホームセンターであるが、このメンツであるからすぐに任務完了、とはいくまい。
置いて行かれまいとオカマパーティがエレベーターに乗り込み、一先ず上へ。
「まずは何処へ行くんですサムソン先輩」
「そうさな、昼飯…は混んでるからちょっと外そうか。先に用事を片付けて、荷物積み込んだらでいいだろう」
「そうね、そうしましょ」
「岩川ではクリスマスパーティやらないの？」
モフモフとマフラーを弄びつつ、清霜が訪ねた。アドンは顎に指先を当てて何事か考えている様子であったが、ぱっと笑顔を咲かせると、「それもいいわね」と目を光らせる。
「君のとこだって福利厚生はしっかりしてるって聞いたぞ、そういう気遣いも必要なんじゃないか」
「そうですねェ、岩川はまだ初年度だからその辺失念してたわ…鹿屋では去年も一昨年もやったんです？」
「一応ね。彼女らだってそういう息抜きは必要だろ」
なるほど、とアドンが答えたあたりで、ドアが開いた。
「さて、とりあえず清霜と朝霜は矢矧と千代田の言う事きいて、大人しくしてるように」
「そうは言うがな提督ゥ、ホムセンってめっちゃテンション上がるじゃん！」
「そーだよ！　何か意味もなく防犯グッズ買ったりとかさー！」

「軍の施設に盗みに入る度胸のある泥棒なんているかな…ともかく、ここは基地の外なんだから、常識ある行動をするように。出来なかったらお昼ご飯は無しだ、いいね」
「はーい」
店内に消えていく四人を見送り、サムソンは傍にあったベンチに腰掛ける。アドンも隣に座って一息つくが、端からみればアゴヒゲの男と奇妙な恰好をしたオカマのカップルであるから、周囲の目はどうしても集まってしまう。
「先輩も大変ですねえ」
「は…？　あ、あー…そりゃあね。けれど僕らは所詮、彼女らがいなけりゃとっくに滅亡してたかもしれない種族なんだ…出来得ることはすべてやらないと」
「それは、そうでしょう」
「言い方は悪いが、彼女らの機嫌を損ねぬよう、蝶よ花よと持て囃す仕事でもある。けどそれでこの世が救われるなら、僕のプライドやら気苦労なんてのは、安いもんだよ」
ポケットに入っていたブラックコーヒーの蓋を開け、サムソンはそれを一息に飲み干した。
実際のところ、提督業というものは、大本営から降りてくる大まかな作戦指令を、己の基地の人員でどう攻略するか、というところから始まり、担当海域の治安維持、資材の管理や出納、艦娘たちの管理、そして港湾関係や漁業関係への説明や要請なども請け負う、言ってみれば何でも屋めいたところがある。
ある程度は政府が肩代わりしてくれるとは言え、やはり基地責任者自らが出向いてやるのとやらないのとでは、与える印象も違ってくるというものだ。
印象が悪くなればそれだけ、艦娘たちも息苦しくなるだろう。彼女らがこうして笑って過ごしていられるのも、彼女ら自身が体現している、『人類の守護者』たる働きと、それに隠れたサムソンの根回し、努力があってこそのものだ。
サムソンはそれを、鼻にかけるような真似はしない。あくまで裏

方、黒子に徹するべきだと、彼の控え目な性格はそういった苦労をものともしない節がある。
「僕は作戦指揮や策を考えたりするのがあまり得意じゃないからね、それならそれで持ち味を活かすしかないだろ」
「不得意というより、先輩はちょっと優しすぎるきらいがあるのではなくて？」
「……」
「実際指揮を執っているところを見た訳ではなくて、鹿屋の戦果や詳報を見た限りでの話ですけれど、彼女らがちょっと劣勢になったくらいで、すぐに帰投させているイメージがあるわねえ。悪い言い方をするなら、臆病」
臆病であると言われれば、サムソンにそれを否定することは出来なかった。無論アドンとて、彼の方針を非難することはしまいが、言下にそういった含みがあるのは、サムソンとてわかる。
「彼女らを気遣うのは当然、そうでしょう。けれどそれも行き過ぎると、彼女らとて自分たちは先輩から信頼されていないのではないかって、思うこともあるかもしれませんね」
「……彼女らは大事な戦力で、仲間で、部下だ。無理はさせたくないと思うが、いけないかな」
「いけなくはありませんよ。それで成り立っているのだから、それはいいんじゃないかしら。だけど彼女らにだって、口には出さないけれど、戦う存在としての矜持があるんじゃなくって？　先輩が気遣うから、それも言い出せないというだけで」
アドンはさっきから、サムソンの痛いところを突いてくる。もともと言いたいことはあまり我慢しない質であるから、それも当然といえばそうなのだが。
「僕が彼女らを信頼してないってことか」
「と言うより、大事にしすぎて、お父さんみたいな心境になっているんじゃないかなって…まァ、アタクシも基地司令になって、どこかそんな心境になりつつあるのは否定しませんがね。目覚める父性！みたいな…」

そこまで言うと、アドンは立ち上がり、ちらりと顔を見せた清霜に手をふった。
「まぁガラにもなく、こんな話をしたのは、やっぱり基地では出来ないからですねえ」
「基地の子らとは…しないか」
「あの子たちはまだまだ、雛鳥ですから。余計な心配や気苦労はかけたくないんです」
そうか、とだけ返し、サムソンは立ち上がった。

その後は清霜たちが買い込んだ荷物をトラックに積み込み、昼食をとって、しばらく自由行動することになった。
アドンとアサキヨコンビはアミューズメント施設に行ってしまったし、矢矧と千代田は洋服やコスメティックなどを見るということで、サムソンは手持無沙汰になってしまった。
まずは一服するか、とポケットから煙草を取り出し、喫煙スペースに歩いていく。途中で以前見たうどんレディが働く本屋にも顔を出したが、生憎うどんレディは不在のようで、サムソンは苦笑いをする。
そんな時、彼の端末にコールが入る。サムソンはポケットの端末を煙草と入れ替えようとするが、手が滑ってライターが落下、乾いた音を立てて転がった。
「あァ、叢雲か…どうした？　うん、うん…？　そう、わかった。戻ったら詳しい話を聞くよ」
手短に通話を済ませ、サムソンは端末をポケットにしまう。ライターを拾わねば、と足元を探すが、見つからない。
そこで、彼の背を後ろから叩くものがいた。振り返ってみると、そこにいたのは長い銀髪をカチューシャとリボンでまとめた、背の小さな少女であった。
「あ…!?　み、」
少女は手にしたライターをサムソンの頬に押し付ける。冷たい感触が、紡がれる言葉をせき止めようとするが、それは叶わない。
「三笠さん…！」

それは艦娘だったもの。
そして今は、艦娘たちを導くもの。
かつて敷島型戦艦四番艦・三笠と呼ばれた存在であった。

ひみつ解説・適合者編

「たわけ。もうその名で呼ぶでないとあれほど言ったろうが」
三笠は割と本気のデコピンをかまし、ライターを押し付ける。
サムソンは目を丸くしつつもそれを受け取り、一歩下がって三笠をまじまじと見つめた。
小さな体を紺色のコートに包み、肩から小さなショルダーバッグを下げるその出でたちは、ちょっとおしゃれして街に出てきた中学生といった風情であり、サムソンと対比するとまるで親子のようでもあった。
しかしその態度は尊大で、とてもではないが親子には見えない。従者とどこかのお嬢様、といった感想がしっくり来るだろうか。
「す、すいません…庚（かのえ）さん」
「うむ…で？　ここで何をしておる」
「何…って、基地の子らと買い物に来ています。庚さんはどうしてここに」
三笠…いや、庚と呼ばれた元艦娘はふふん、と笑うと、場所を移すぞ、と呟いてどんどん先に歩いていく。
サムソンはジッポライターをポケットにしまうと、速足でその後についてゆく。確かに、往来の真ん中で会話というのも迷惑な話であるから、この判断は正しいだろう。
庚はフロアの隅にあったコーヒーショップへと入り、荷物を置いてカウンターへと戻ってきた。
「儂はそうじゃの、キャラメルモカふらぺちーのを所望じゃ。この中は結構暑いでの」
「あ、は、はいはい。ええとすいません、ブレンドのMをホットで。あと…」
注文したコーヒーを受け取り、サムソンは庚の待つ席へと着いた。
テーブルに携帯電話を置いた庚は、キャラメルモカを受け取り、さっそくストローでクリームをすくっては舐め始める。

「ここに来たのは偶然で、お主を見つけたのもまた偶然じゃ。ホテルがすぐそこにあるでな…それはそれとして、鹿屋には連絡が行っておるはずじゃが」
「ええ、さっき連絡がありました。しかし明日来客がある、としか聞かなかったもので」
「まァ、そうじゃな。何処の誰が来る、とは敢えて言わなんだ。まぁ叢雲の奴めは儂の声を聞いて察したようじゃが…アレは聡い子よな、汝も相当に助けられておろうが」
「ええ」
ちょいちょい、とストローでサムソンを指し、庚はすらすらと言葉を紡ぐ。
弁が立たねばやってられない仕事に就いているせいもあろうが、サムソンに会えて嬉しい、という雰囲気も多少なりとは感じられる。しかし当のサムソンはまだ状況をよく理解していないらしく、質問をしようとしては遮られを繰り返す。
「で、だ。儂がこうしてここにおる、ということは、大体わかっておろうが」
「『適合者』と会ってきた帰り、あるいはこれから会いに行く…ってところですか。まさか休暇でわざわざ鹿屋まで来るとは思えませんし」
「いかにも左様。ほれ、先月に武蔵の艤装が目覚めたじゃろ、佐世保を逆レするような感じで」
要請があって出力される、通常の仕儀とは違い、武蔵の艤装は自らこの世に生まれ出でてきた。それが先月の話である。
逆レなどという過激な言葉が、その小さく可愛らしい口から出たことに面食らいつつも、サムソンは二度三度頷いた。
「武蔵の『適合者』は最終段階にまで絞られたと聞いていますが」
「そういう事よ。儂は一昨日まで、タウイタウイやらブルネイやらの泊地を回って、カウンセリングをしとったのじゃが…その一連の仕事の〆として、鹿児島に来たというわけじゃ」
「では、遂に…武蔵が？」

ここで説明をさせていただく。
敷島型戦艦四番艦・三笠は、今から三年半前に起きた、深海棲艦どもの侵攻開始…その数か月前に、姉である敷島と共に艦娘を引退している。
理由は一つ。敷島型の『艤装』があくまで試作機であるということ。
六年前から侵攻開始の三年半前までの二年と半年の間、世界各地、特に日本近海で散発的に起きていた『正体不明、所属不明の敵性体による船舶襲撃、並びにシーレーンへの接触』…以下『接触』と呼ぶが…ともかくそれを受け、海軍はそれに対抗する手段として、のちに『艤装』と呼称されるものの雛型を完成させていた。
その『艤装』の大本は現在のそれと大差なく、かつてこの海を縦横無尽に駆け、戦い、そして散っていった『軍艦（いくさぶね）』の船体や遺品をサルベージした上で、その『軍艦』の『魂』と融合させ、現在の最新技術で精製し生み出されている。
正体不明の敵性体…当時は深海棲艦などという呼び名ではなかったが、ともかくそれらが持つ強固な『障壁』を打ち破ることの出来る『艤装』は、大いなる期待と祈りを受けて、奴らを駆逐せしめてきた。
しかし、まだ艤装を大量かつ速やかに量産するほどのノウハウは培われていなかったこともあり、どうしてもそれを纏い戦う、『プロトタイプ』とも言える『艦娘』たちには、ハードワークどころではない働きが課されていた。
精神を病むもの、体を壊すもの。そして力及ばず、倒され、殉職してしまうもの。
そんな中で敷島と三笠は、姉妹艦である朝日、初瀬を喪失しながらも必死に戦い抜いてきた。
だが彼女らの血と汗と涙、そして侵略を防いで得た時間、情報はやがて実を結び、更に強力な…具体的には太平洋戦争で活躍した艦の『艤装』を作成することに成功した。
そしてその方法論並びに量産体制は瞬く間に確立され、明らかなパワー不足に悩まされていた『プロトタイプ』、あるいは『第一世代』と

呼ばれる艦娘たちは、その役目を後進に譲ることになる。
これが三笠の引退した理由である。

「わざわざ鹿屋に来た、ということは…つまり鹿児島や近隣の県のどこかに、その『適合者』がいるということですか」
「本来ならば機密事項じゃが、まあよい。武蔵の『適合者』候補は全部で三名おってな、うち二名は関東と東北にいるので、敷島…じゃない、壬（みずのえ）姉が訪ねたのよ。儂と壬姉が、『適合者』への折衝を行う仕事をしているのは、まぁ言わずとも知っておるな」
「ええ、敷島さんはお元気ですか」
「相変わらずじゃがまぁ元気元気。って、だから敷島ではない」
庚はそこで話を区切り、財布を持ってカウンターへと向かった。いつの間に飲み干したのか、キャラメルモカはとうに空になっているので、お代わりを頼む腹積もりであろう。
サムソンは全席禁煙の看板を見て、そして天井を見上げてはふうっ、とため息をついた。
艦娘を引退した敷島、三笠の両名はその後、海軍の研究施設に入って、後方支援に力を注ぐことになる。
要するに、『適合者』のもとに赴き、軍に入って『艦娘』となって戦ってくれるようお願いする仕事だ。

『適合者』は、六年前に起きた敵性体と人類の、初めてとなる『接触』の後に、厚労省と文科省が急ピッチで法整備し義務付けた、『満年齢１０歳から３０歳までの女性全てが受ける健康診断』を隠れ蓑として洗い出されることになる。
簡単に言ってしまえば、脳のある領域に、『艤装』のコアから発せられる特殊な信号を受信し、また脳からの信号を『艤装』に送信することを可能にする『神経叢』（ファクター）があるかないか、それだけである。

その『神経叢』は鍛錬や学習、または外科手術などといった方法では得ることはできず、完全に生まれつき…先天的なものであった。
政府と海軍はまずこの『神経叢』を持つ女性を血眼になって探し始めた。
何故女性か、という点については、それこそ船というものの歴史から始めねばならないので割愛するが、ともかくである。
健康診断と称し膨大な予算を計上し、全国四十七都道府県で行われた最初の検査の結果、その『神経叢』を持つ１０歳から３０歳までの女性…『適合者』候補…は、僅か五千人にも満たない数であった。
その中から更に、『艤装』を装着し、『艦娘』となって、訳のわからないバケモノ共と戦ってくれる人間を探さねばならないのだ。
こうして始まった『艦娘』の選抜は、前途多難どころの話ではなく、政府もなりふり構わずの体で捜索範囲、方法を拡大してゆく。
まず候補に挙がったのが、陸海空軍、いずれかの組織に属する者…つまり『軍人』の親類縁者、そして娘である。国防に人生を捧げた者の関係者とあれば、説得するのもいくらかは容易かろうという目論見であった。
実際それは成果を得て、数十名ではあるが『適合者』を確保することに成功する。
しかし、それだけではまるで足りない。半年に一度の『健康診断』は継続させつつ、次善の策として行ったのが、日本に就労ビザあるいは永住権を得て生活をしている、『外国人』たちへと、捜索の裾野を広げることであった。
しかしこれは殆ど成果を上げぬまま失敗に終わった。日本人と同じ条件で検査をしたにも関わらず、『神経叢』を持つ者はほぼ０であったためだ。
これについてはアメリカをはじめとした世界各国との連携をとって探すものとし、政府は再び国内に目を向ける。
『神経叢』は一度の検査で見つからないことも多く、また加齢と共に出現あるいは消失をする特性を持つため、根気強い捜索が続けられた。

その甲斐あってか、国内における『適合者』候補の数はおよそ一万人を数えるまでとなった。
しかしここで、再び問題が浮上した。
軍関係者を除外してしまった時点で、また最初から『戦ってくれる』ものを探すことになる、ということである。
実際問題、『神経叢』を持つにも関わらず、保護者が頑として首を縦に振らず、諦めざるを得ないケースが大半であった。
再三の説得や積まれた札束にすら見向きもせず、ただ我が娘の将来と安全を思っての拒絶とあれば、いかに国とて無理強いは出来ないものだ。
しかしそれでも、幾らかの成果は得られ、戦いに臨む決意をした『適合者』は、少しずつではあるが増加していくことになる。
だが、まだまだ足りない。
そこで、である。
関係者が拒むのであれば、最初からそんなものがいない者たちを当たればよい、と。

「今度はホットココアにしたのじゃ、腹が冷えたでな」
「ええ」
「えーと、何じゃっけ…」
「敷島、いや、壬さんの話です」
「ああそうそう…それより、儂らがかつて艦娘だったことを知っておるのは、軍の上層部とお主ら提督たる立場の者だけなんじゃぞ、そこのところ、よく肝に銘じておけよ」
ついでに買ってきたパウンドケーキをサムソンに手渡しつつ、庚はそう釘を刺す。それにしては声が大きいな、とサムソンは思ったが、賑やかな店内でわざわざ彼らの会話に耳を立てるものもいない。
「比叡があなたに会いたがっていました」
「比叡が…あやつ、儂が説き伏せて艦娘になったのじゃぞ、会いたいというにはまだ、そこまでご無沙汰しておるわけでもないが」

「いえその…ちょっとした弾みで、あなたが…その、『三笠』だった時のことを話してしまって」
「かッ！　口の軽い男じゃのー！　何じゃ、閨（ねや）での睦言か？　主、ああいうのがタイプであったか」
「違いますよ！」
再び飛び出た過激な文言に面食らいつつも、サムソンはしっかりと否定する。艦娘は女性、サムソンは男性であるから、そういう仲にならないという確たる保証はない。しかし、風紀を提督自らが乱すことなどは許されない。サムソンが艦娘たちのちちしりふとももを視姦するだけに留まり、それ以上の関係を持たないでいられるのも、そういった確固たる信念のたまものである。
風呂場での一件は結構危なかったが、それは黙っておこう。
「冗談じゃ、冗談。身持ちが固いのはいいことよ」
「当然ですよ…ええ…」
「ま、知っての通り…『適合者』には、事故や事件、止むにやまれぬ事情で、親から何から、親類縁者のいない者が多いでな…心のどこかで、愛情を欲しがっているのもまた事実」

そう。政府が次に目をつけたのは、身寄りのない女性たちであった。
生まれてすぐに様々な事情で捨てられたもの。痛ましい事故や事件で両親を失い、不憫にも引き取り手のつかなかったもの…他にも悲しい事情を持つ女性たちを集め、保護、養育している施設…孤児院と言い換えてもよいが…ともかくそんな施設で育てられているもの…そして年齢制限からそこを出てもなお、一人困窮した暮らしをするもの…から、重点的に捜索する方針へと切り替えたのである。
極めて悪い言い方であるが、これが功を奏した。
『神経叢』が脳に生成されるのは、あくまで先天的なもの、と述べたが、それが発現する女性たちにはある『傾向』があった。
簡単に言ってしまえば、『愛情を知らないもの』『愛情に飢えるもの』

『心に深い傷を負ったもの』たち、である。
人間というものは、常識的な感性を持つ両親の元に生まれれば、例外はあれど大抵は愛情を注がれて育つものだ。
しかし彼女らには、注がれるだけの愛情はなかった。たとえ施設の職員や善意の活動家などが無償の愛を向けたとしても、それはあくまで他人である。育つにつれ、そして己の置かれた環境を理解するにつれ、自分には両親が、家族がいない、本当の愛情なんてものはこの世にはないのではないか、ということを嫌でも意識するようになる。そして苦悩する。
その行き場のない感情が脳にストレスを与え、結果として『神経叢』を開花させるのだ。
逆に言えば、これを利用することで、『神経叢』を持つものをある程度コントロールし、後天的に生み出すことへの指針が出来るのだろうが、そんなことは人道的にも、また時間の観点から考慮しても、到底許されることではない。
故に、捜索を開始した時点で１０歳以上。そして身寄りが無いという事実…この二点を重視して、『適合者』の捜索は新たな段階へと進んだ。
通常の捜索と並行して、全国津々浦々の孤児院に政府の役人が訪れては、『適合者』候補への説得を行うわけだ。
この捜索のことを、大多数の国民は殆ど知ることはなかった。政府が巧妙に、厳重に隠した、ということもあるが、自分が、あるいは家族、娘が…訳の分からない脳の病気なのでは、という疑念は、想像以上の重荷となって、当事者たちを黙らせる効果をもたらした。
また、日本を脅かす相手と戦わねばならない、などという曖昧な情報だけで、はいそうですかと納得するものも極めて稀であったからである。冗談と思われた、ということもある。
そして結局のところ、二年の歳月を経て集められたのは、軍関係者から５１名、民間から１９７名、そして前述の身寄りが無いものから２５２名…合計５００名の『適合者』候補たちであった。
これら５００名を『神経叢』の持つパターン毎に分け、更には健康

状態や身体能力など、あらゆる要素を加味し区分して、『艤装』とのすり合わせを図っていく。
無論その段階でも振り落とされる、あるいは自らの意思でやめていくものは出る。政府はそれでも捜索を続けて、全国に着々と『適合者』候補を見つけていった。
今サムソンの前でココアを飲む、『三笠』こと庚逸花（かのえいつか）も当然ながらその『適合者』の一人である。
庚、という姓は彼女がいた国営の施設に割り当てられた、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸…即ち十干（じっかん）の名から取られている。
彼女は生まれて間もなく、シングルマザーだった母親に捨てられた。そして長野県上田市にあった『庚愛育園』に引き取られて、15歳までを何事もなく過ごした。しかしそこで、『接触』が起きたのである。
彼女も当然ながら『神経叢』を見つけ出す為の検査を受け、そして『適合者』であることが発覚する。
政府は彼女の説得を始め、『艦娘』として戦ってくれるのであれば、彼女の今後の人生を、国が責任をもって面倒を見るという条件を提示した。
そして支度金という名の命銭。毎月の手当。住居。様々な優遇措置。他に望むのであれば何であっても。
逸花がどういった条件を提示し、そして『艦娘』になったかは不明であるが、ともかく彼女は自らの境遇と素質を受け入れ、『三笠』の『艤装』を纏って、後に『深海棲艦』と呼ばれるもの達との戦いに身を投じたのである。
家族のいない庚が、『敷島』こと壬燈子（みずのえとうこ）を『姉』と呼ぶのは、なにも『三笠』が『敷島』の姉妹艦だからというだけではなく、燈子もまた孤児院の出身であり、その高潔な人間性でもって逸花を導いたことに起因している。
血のつながりはなくとも、燈子は逸花にとって、命よりも大事な姉であった。

「愛情を知らぬがゆえ、欲するがゆえ……多くの艦娘たち…特に『施設』の出の者たちは、身近な大人にせめて見限られぬようにと、精一杯の愛情を向ける。それが打算や媚態の裏返しであっても、歪んだ形であっても……誰も彼女らを責めることは出来んじゃろ」

ほうっ、とため息を一つつき、空になったカップをカチカチと弾きながら、庚はサムソンにそう言った。

サムソンとてそこまで鈍感ではない。この立場に就いて、それは十分すぎるほど思い知らされてきた。

『艦娘』の中には『施設』の出でなく、十分な愛情を受けて育ってきたものも、当然ながらいるのだが、そういったもの達でさえ、サムソン…いや、全ての提督たちに、どこか媚び、へつらうような節があるのは否定できないことだった。

それは人並みの青春や暮らしを奪われ、戦いに身を投じることになった己の境遇ゆえか、あるいは別の何かか…それは誰にもわからない。本人たちにさえも、明確な答えはないのだろう。

だからせめてサムソンは、自分に出来ることならば何でもしようと、そう心に決めていた。

あの冬の海で拾った命が、『艦娘』に救われた命であるならば、それは彼女らのために使うのが正しい道だと、彼は心の奥底からそう信じている。

「だからと言ってなァ！　駆逐艦をやっとるような小さい子に手を出したりするような真似するでないぞ、寒村」

「な、え、ちょ、しんみりした話しておいてそれですか!?」

身を乗り出すように庚が言えば、さすがに周囲の目を集める。サムソンは庚をやんわりとなだめつつ、席を立っておかわりのコーヒーを買い求めた。

「儂と西日本の艦娘の間にはの、秘密のホットラインがあるんじゃ。酷いことをされたり言われたりしたら、２４時間いつでも相談するのじゃぞ、と言い聞かせておる」

「それは初耳です。庚さんはカウンセラー兼憲兵といったところですね…ですが、僕とて彼女らには敬意を払って接しています。心配されるようなことはないと思います」
「ふふ、甲斐性が無いとも言えるの…まぁ冗談じゃ、あまり気にするな」
「それはともかく、適合者の話ですが」
戻ってきたサムソンは流れを変えるべく、別の話題…最初に話していた、武蔵の『適合者』の話題を庚に振った。それはサムソン自身も知りたいことであった。
パウンドケーキをもそもそと齧っていた庚は目を光らせ、前のめりになってサムソンを見る。
「そうそう、壬姉がまず先に、会いに行ったのよ」
「関東と東北…どこです？」
「一人は埼玉、もう一人は青森じゃ。しかしのー……埼玉の方は断られた。持病があるそうでな」
いかに逼迫した状況であるとはいえ、病人を戦場に送り込むわけにはいかない。これは洋の東西、どんな時代でもそうだ。しかし今より更に戦況が悪くなれば、どうだろうか…と、サムソンは苦い表情をする。
庚はそれを見ずに続ける。
「そして青森の方はの……」
「ええ」
「これよ」
そう言って庚は、己の下腹部のあたりで、半円を描くように手を上下させた。
身重、ということだろう。
「そう、ですか…」
「だから言ってしまえば、もう武蔵のなり手は、一人しかおらぬ。候補者もまだおるにはおるし、今後『戦艦型』が見つかる可能性も無い訳ではないが、これを逃せば武蔵の顕現は更に遅れることは間違いない」

あまり表情を変えない庚であったが、さすがにこればかりは責任が重すぎる仕事だ。それに辟易したのか、眉根を寄せては席を立った。まだ飲むつもりであるらしい。
「庚さん、まだ飲むんですか。お腹たぽたぽなんじゃ」
「やかましい、甘いモノは別腹じゃ」
カウンターに向かった庚の後ろ姿を見ていると、サムソンの端末からコール音が響いた。
いつの間にか一時間ほどが経過している。サムソンは慌てて画面をタップする。
「ああ矢矧か、うん。今ちょっと人と話してるんだ。帰るなら先に戻っていてくれて構わないよ、僕は歩いて帰るから……え？　キー…ああ、そうか…わかった。もう３０分ほど待ってくれるか」
サムソンは通話を終了させ、ポケットからトラックのキーを取り出す。
庚から色々聞いておきたい気持ちはあったが、だからといってサムソンが、彼女がこれからする仕事に介入できるわけではない。
「基地の娘らからか？」
「ええ。もう少ししたら帰ります」
「左様か。まぁ儂は明日、武蔵の『適合者』候補に会いに行くでな、その後基地に顔を出すつもりよ。叢雲にもそう伝えた」
そう言ってマドレーヌの封を切った庚の目をまっすぐに見て、サムソンは口を開いた。
「庚さん、お聞きしますが…『適合者』候補の方は、協力してくれるでしょうか」
「どうかの……わからん。わからんが、儂とて全力を尽くす」
「はい。今更、戦わずに済めば、などと綺麗ごとは言いません。しかしせめて、何の憂いも無く戦えるようにはして欲しいと思います」
「わーかっておるわ。しかしじゃな寒村よ、晴れて武蔵が顕現したとして、鹿屋に来るわけでもあるまい？　あれはとりあえず佐世保預かりだし……や、待てよ。これも機密事項じゃが」
庚はマドレーヌを置くと、テーブルに両肘をついて、そして両手を

己の口の前で組み合わせた。どこぞの司令官のようなポーズであるが、その眼光は鋭い。
サムソンはその目に見つめられ、思わず背筋を伸ばした。
「明日、会いにゆく『適合者』候補な。鹿屋市内に住んでおるのじゃ」
「え……？」
「無論、素性は明かせん。だがこれくらいはよかろ、昔のよしみじゃ」

「司令、遅えぞー！　寒くなってきたしさっさと帰ろうぜ！」
「お腹もすいたよー！」
相変わらず賑やかなアサキヨコンビと、矢矧、千代田、そしてアドンがサムソンを出迎える。つい数時間前に昼食をとったというのに、清霜は相変わらず元気が有り余っているようだ。サムソンはポケットからマドレーヌを取り出し、清霜に渡した。
「提督、誰かと会っていたの？」
「ん？　ああ、そうだよ。明日になればわかる」
「明日…？　ふぅん、よくわからないけど……さて、それじゃ帰りましょうか」
「今度はアタクシがトラック乗るわ！」
「んじゃ任せた。僕は助手席だ」
シートに体を預け、シートベルトをかけると、サムソンは深く、息を吐いた。
おや、という表情を浮かべたアドンが、何事か聞こうとするが、目を閉じてしまっていてはそれも憚られる。そして発進するＳＵＶに続いて、トラックもゆっくりと走り出した。
「先輩、誰とお会いに？」
「……君は、軍研の庚逸花さんを知っているかな」
「ん？　ああ、『適合者』候補との交渉を行っているちっちゃいレディ」
「今、鹿屋に来てる。さっき偶然会った」

「へぇ…彼女、艦娘たちのカウンセリングもやってるんですよねぇ、鹿屋基地と岩川にも来るのかしら」
その疑問には答えず、サムソンは窓の外を見る。
そして一言、「忙しくなるかもな」、とだけ呟いた。

師走の風

サムソン達がクリスマス用の飾りを買いに出た翌日。
そう、月曜日である。様々なことがあったとはいえ、新しい一週間は待ってはくれないのだ。
サムソンは身なりを整え、司令室の椅子に腰を下ろした。本革シートの光沢が美しい、お高い椅子である。そしてタブレット、並びにＰＣを立ち上げてログインし、仕事の準備を整える。あとは秘書艦が来るのを待つだけだ。
鹿屋基地においては、秘書艦は日替わりである。どんな状況でも、誰であっても、必要最低限の仕事は出来るようにしておくべきだというサムソンの考え方から、この方式となって久しい。
ちなみに順番は簡単で、あいうえお順となっている。基地所属の艦娘は全部で二十名、そして先週土曜の担当は時津風であった。
「二日連続であの喋りを聞くことになるとはね…」
と、あれば、今日の担当は利根であった。
昨日ショッピングモールで会い、重要な話をした『三笠』こと庚逸花と、利根の喋り方はよく似ているので、サムソンも混乱しやしないかと、要らぬ心配をしているようだ。
そうこうしている内に、時刻は０８００となる。早いものならばとうに司令室に入ってサムソンと駄弁ったり、仕事の準備をしていたりもするのだが、生憎利根はそういう質ではない。
３分ほど経過したところで、ドアが開く。
「おはよう提督」
「おはよう利根。今週もよろしく」
航巡となってから衣替えをし、特に下半身周りの布面積に不安が残る制服を身に着ける利根。その衣装がどういう構造になっているのか、上司であるサムソンもいまだに判っていない。
見えてもおかしくない筈の下着のラインは見えないし、さりとて履いていないという訳でもない。書類やら筆記具やらを揃え、脇のデスクに着く利根をチラチラと見ながら、サムソンは口を開いた。

「今日は来客がある…はずだね」
「ああ、叢雲から聞いておる。何時かの？」
「それがまだわかってないんだ。まぁおそらく、事前に連絡はあると思うんだけど」
サムソンの言葉を受けた利根が、ふむ、と頷いてはタブレットに何事か入力していく。アバウトなように見えるが仕事はキチンとする利根のことなので、来客アリ、とでも書き込んでいるのだろう。
「了解じゃ。それでは仕事と行こうか提督、月曜は久々じゃのー」
「ああ、よろしく」

落ち着きのない駆逐艦たちを秘書にしている日とは違って、仕事はすいすいと進む。磯風や霞、叢雲などといった落ち着きのある駆逐艦ならばよいが、時津風や雪風、アサキヨコンビなどが秘書官につくと、これが中々大変なのである。
無論そうなった場合はサムソンの仕事の割合が増えるだけであるが…。
ともかく、今週の予定を立てるところから始まって、各方面への連絡や担当海域を往来する船舶のチェック、護衛要請などの確認。実地演習の段取り、ＶＲ演習の予定など。そして所属する艦娘らの訓練メニューの調整、遠征艦隊の組成、出撃海域に対する下調べから、出撃艦隊の編成など。
やる事は多いが、どれも順調だ。そうこうしている内に、部屋にかかった鳩時計が、正午を知らせる。
「ふう…とりあえず休憩にしよう。利根、僕は食堂に行くけど」
「ああ、今終わった…我輩も行くぞ」
書類の束をトントンと整え、利根が立ち上がっては腕をぐるぐると回す。窓の外ではグラウンドで走りこみをする山城、初月、夕立の三名が見える。彼女らもすぐに食堂へと来るだろう。
「今日は何じゃろうな、肉の気分じゃなー我輩は」
「僕は…日替わり定にする」

「嫌いな物だったらどうするのじゃ」
「僕ァ好き嫌いはないよ」
「ほんとかー？　バラムツとかシュルストレミングとかでもかー？」
「小学生かい！」
基地の一階にある大食堂へと向かう道すがら、摩耶と比叡をパーティに加えてサムソンと利根はゆく。彼女らは午後から演習の予定であり、たくさん食って力をつける、という旨の会話が頼もしい。
「相手は呉の連中だ、手加減しなくていいのが有難いぜ」
「摩耶は手加減してるんだか、してないんだかいっつも判らないのよね、岩川の子らとやった時なんて泣かせちゃったじゃない」
「あ、ありゃあ別にそういうつもりでやったんじゃ…ねえよ…」
「まー厳しくするなとは言わんが、摩耶はちいと血の気が多すぎるやもしれんのう」
標的となった摩耶が、助けろ、といった感じの目線を向けるので、サムソンもまぁまぁ、と取りなしつつ、一行は歩いてゆく。
程なくして食堂へと着いたが、何やら人だかりが出来ているのが見てとれた。
「なんだ？」
「まぁた雪風か清霜あたりが馬鹿やっとるんじゃないのか、こおら！　何を騒いでおるか！」
入り口に立った利根が、腰に手を当て大声で諌める。集まっていた艦娘達が一斉にこちらを向いては、そして笑いだす。
「そっくりだ！」
「そっくりだな」
「ヒャッハー！　そっくりじゃーん！」
「何を…なにを言っておるのかわからんが、何じゃ、我輩と誰がそっくりじゃって？　ちなみにイン何とかさんの真似は我輩結構うまいぞ、とーまー！　ほれどうじゃ」
「そういう問題じゃないでしょ…。ともかく誰か来てるんですか？　どれ…」

比叡が人垣の合間を進み、テーブルの前に立つ。
そこには銀色の髪の毛をカチューシャとリボンで纏めた、背の小さな少女がいて、天ぷらうどんをすすっていた。
「あ……」
「む、比叡か。しばらくじゃな」
「みか……庚お姉さま！」
そこにいたのは日本海軍・軍事研究所…略して『軍研』所属の元艦娘、庚逸花であった。
確かに昨日、基地宛てに「明日訪問する」という旨の連絡はあったが、何時何分、とまでは言っていなかった。大方夕方くらいだろう、と高をくくっていたサムソンは面食らいつつも、大型犬と化した比叡にじゃれつかれている庚の前に立つ。
「どうも庚さん……鹿屋のうどんのお味はいかがです？」
「うむ、うまい…おいこら比叡、離れんか！　離れ…お座り!!」
「それは何よりです…しかしですね！　来るなら来るで連絡を下さいよ…」
「昨日したし、何より直接言ったじゃろ」
「時間は仰いませんでしたが…」
「止まった時計もな、一日に二度、正しい時間を指すのじゃ。わかったか？　っだから比叡！　ステイ！」
よく判らない屁理屈を述べた庚が、隣に座る雪風の差し出したいなりずしを頬張る。もっちゃもっちゃと咀嚼し、そばつゆをひと啜り。その一連の動きを見ていた摩耶たちが、何故か感嘆の声を上げるが、サムソンには届かない。
部下たちの前ではせめて毅然としていたいらしいが、今回ばかりは相手が悪い。サムソンは諦めた様子で一旦その場を離れると、丁度入ってきた山城たちの後ろについて順番を待つ。
「提督は何にするっぽい？」
「あー…何がいいと思う？」
「私らに聞くんですか……じゃあ天ぷらうどんとかどうです、私は親子丼だから真似しちゃダメですよ」

「しかしいつもより騒がしいな、誰か来ているのかい提督？」
初月のその問いにサムソンは人だかりの方を指さしては、「庚さんだよ」と、答えた。

「さて食事も終わったことだし、寒村よ」
「はいはい。えー全員いるね。はいそれじゃ注目……こちらにいるのが、軍研の庚逸花さんだ。会ったことのある人もいるだろうし、去年の春先に一度ここに来ているから、大体の人は知っていると思う」
サムソンの紹介に、一部の艦娘を除く面々がうんうん、と頷く。
一方で葛城、朝霜、そして初月の三人だけはどこか不安そうな面持ちで、隣にいる者にこそこそを庚の素性などを訪ねている。
それを察したのか、庚は比叡の膝の上から離れ、立ち上がっては腰に手を当て、大きな声で自己紹介を始めた。
「今寒村から紹介があったが、儂が庚じゃ。庚というのは十干の内の一つであり金の兄、結実・形成・陰化の段階を本義とする。まぁそれは特に関係ないので忘れてよい。去年の春先にもここに来たので、今更言う事ではないが、儂は艦娘になれる者の元へ赴いては、艦娘として戦ってくれるようお願いする仕事をしておる」
「敏腕スカウトマンですよ！　庚お姉さまは！」
「我輩とキャラが被っておるがの」
「はいそこ利根ェ！　儂！　儂が先だから！　あーそれはまぁともかく…この中で儂が話をつけたのは比叡、雪風、時津風、磯風か。主に西日本出身の者達じゃな。それでお初にお目にかかるのはそこな胸がグロ画像な空母と、じっとりした全身タイツ。そして片目隠れの三名…葛城、初月、朝霜か。まぁよろしく頼む」
思い切りディスられた葛城が、憤懣やる方なし、といった様子で庚を睨みつけて机をたたく。
「ちょ、ちょっと！　エライ人かもしれないけど、いきなりそれはないんじゃないの!?　大体アナタの胸だって私とそう大差ないじゃない！　私がグロ画像ならアナタはＬｉｖｅｌｅａｋってとこ!?」

「Ｌｉｖｅ…！　くッ、上手い『返し』じゃな葛城！　さすがは敗残兵を故国に『帰す』ことを全うした『葛城』の魂を持つだけのことはある」
「ふふン…わかればいいのよ。褒めたって何もでないんだからね」
「おい雲龍、お前の妹ちょろいな」
「知ってた」
庚はそこで咳ばらいをすると、改めて一同を見回す。彼女は武蔵の『適合者』候補を訪ねたはずであるが、それにしては来るのが早い。可否はともかく、相手が即決したのは間違いないのだろう。
サムソンは結果を聞きたくなる気持ちを抑えつつも、茶を啜りながら彼女の言葉を待つ。
「今日ここに来たのはの、武蔵の件があったからでな」
「ああ、そういや艤装はもう出来てるんだっけ」
「そうっぽい！　佐世保の時雨から聞いた！」
「つまり、武蔵になれる人のところに行ったんですよねお姉さま！」
「左様」
頷いた庚は再び比叡の膝の上に座ると、腕を組んで押し黙る。結果を言っていいものかどうか、といった逡巡が見て取れるが、実際のところはわからない。
そうしていると、霞が口を開いた。
「で、結果はどうだったんですか」
「うーむ…さて、どうするか。日吉にはもう知らせておるし、いずれ判ることじゃが…」
「勿体ぶらずに教えて下さい、庚さん。基地の中なんだし外には漏れませんよ」
矢矧の一声がダメ押しになったのか、庚はうむ、と手を叩き、そして言う。
「主らとりあえず今日の任務が終わって、夕食の時間になったら、再びここへ集合せい。武蔵の件はともかく、儂が訪ねて来た目的は他にもあるでな」
「えー、今じゃダメなのー？」

「そう焦るでないわ。大体午後の任務やら何やらもあるのであろ？
今夜はここに泊まるつもりであるし、時間はたっぷりとある」
「いけずー！」
「えぐれ胸ー！」
「ロリババア！」
「やかましいわ！　あと今えぐれ胸言った奴は叩く」
この場ではもう語ることはないと、庚はサムソンを見てそう言った。
ならば仕方なし、とサムソンは立ち上がり、手をぱんぱんと叩いては号令をかける。
「はいはい、それじゃあ解散。それぞれの仕事に戻るように！」
「りょうかーい」
「うっし、初月、霞、足柄、山城、千代田は演習だ、行くぞおらッ」
「今日は呉が相手ね、腕が鳴るわ」
「お姉さま！　また後で！」
武蔵の件について興味があるのかないのか、それはいまいち掴みかねるが、艦娘達は割とあっさり引き下がり、午後の任務に向けて食堂を出て行った。
残ったのはサムソンと庚、そして利根だけである。
「で、庚さんはこれからどうなさるおつもりで」
「そうさな、まァお主らの仕事っぷりを見させて貰おうかの。前回来た時は殆ど見れなかったでな…摩耶も言っておったが、これから演習じゃろ？」
「そうでしたね…。しかし、僕が介入する余地はありませんよ。作戦から陣形から、摩耶達が決めますので」
サムソンのその言葉に、庚が怪訝な顔をする。
ＶＲであろうと実地であろうと、まず提督が陣形を選び、そしてそれに準じた作戦を立てるのが常である。と言うか、提督とはそういうものである。
それが全くの放任と来たのだから、庚の表情も至極当然といえるだろう。

「ハァ？　お主、指揮は執らんのか」
「そりゃ勿論、実戦なら執りますよ。ですが摩耶や足柄、叢雲や霞なんかは僕よりずっと上手く立ち回りますので」
「……利根よ、こやつひょっとして、ナメられておるのではないか」
「それは無いのう…なんだかんだで尊敬はされておるよ。それに、これだって放任とはちと違ってな」
茶を啜りつつ、利根が言う。サムソンは若干照れくさそうにしてはいるが、満更でもないといった様子である。
「こやつは褒めるとすぐ調子こくから、あまり褒めたくはないがの…。まぁ何じゃ、アレよ…信頼して任せてくれてると、皆そう思っておる。そして何かあれば、きっちりと責任を取るのでな」
「ふむ……地味な見た目に反して能力は高いと」
「そうでもない」
「そうでもないんか！」
「あぁ、もういいよ利根。こっ恥ずかしいから…じゃあ庚さん、折角ですので演習見に行きますか」

そして数時間後。
「お主も色々大変じゃなあ」
「おわかりいただけたようで…女子校の教師ってこういう感じかなとは思います」
「確かに……しかしじゃな、他所の提督と比べて、お主は明らかに威厳が無いぞ。呉や佐世保の…塚原と疋田の両名がここの指揮を執っていたとすれば、昼から今まで、何度雷が落ちたか」
外部の人間だけあって、庚はずけずけと物を言う。『適合者』候補との折衝のほか、艦娘達のケアをするという役柄上、そういった所も気にしておくあたり、彼女の能力は高いようだ。
サムソンもそれについては省みるところがあるようで、神妙な面持ちで庚の言葉を聞いていた。
「優しくするのも大事じゃとは思うが、甘やかすのはいかんぞ。軍

隊というものは規律で成り立っておるわけでな…」
「それは、そうです。しかし、」
「性分とは言わせんぞ。優しさと甘さは似て非なるものじゃ、それを忘れると必ず綻びが生じる…そしてそれは、手痛い結果となって、お主に、そしてここの娘らに帰ってくることもある、ということを努々忘れるな」
正論であった。サムソンは返す言葉もなく押し黙り、さすがの利根も所在なさげに口をつぐむのみだ。
和気あいあい、アットホームな職場です！　という雰囲気は、それ自体はよい。しかしここは職場でなく、戦場であり前線なのだ。命のやり取りをするところである。
甘さは油断を生み、油断は失敗を、敗北を生む。そしてその時、無事に還ってこれるという保証はない。
「…寒村よ、利根も聞け」
「…はい」
「はい」
「『適合者』はの、『艦娘』になることを承諾した」
その言葉に、二人は庚を見る。大和級戦艦二番艦『武蔵』が、遂に顕現するというのだ。
日本に生きる者にとって、その名には特別な何かが宿っている。サムソンは唾を飲みこみ、続く言葉を待つ。
「ただ、幾つかの条件を提示された。知っておろうが、『艦娘』になってくれる者の希望は、出来得る限り叶えてやるのが政府の、海軍の方針だ」
「はい」
「…例えば利根、お主にも心当たりがあるだろう。寒村の手前言わんが、どうだ？」
「……確かに」
服の裾をぎゅっと掴み、利根が頷く。
極めてプライベート、かつ繊細な問題ゆえ、庚がこの場でそれを言うことはしない。そしてサムソンもそれを問いただしたりはしない。

『艦娘』になる前、ただの一般人として過ごしていた人生のことは、例え上司であっても聞かないのが約束でありマナーであるからだ。優しい性分のサムソンは、どれだけ彼女らと打ち解けても、それだけは、そしてそれに繋がるような事柄を尋ねたことは、一度として無い。

「武蔵の『適合者』が出した条件の一つに…」

「待って下さい、それは僕らが聞く訳にはいきません」

「プライベートなことではない。それは儂も言うつもりは無い……彼女が鹿屋市に住んでいるとは言うたな？」

「え、ええ」

庚は残っていたコーヒーをぐっと飲み干すと、サムソンと利根の二人の目を見て、そして言った。

「鹿屋からは離れたくないと、彼女はそう言った」

「……え」

「つ、つまり…？」

「判らぬか？　佐世保や呉、舞鶴、横須賀、そしてそれ以外の基地、泊地…そのいずれにも配属しないのであれば、『武蔵』として戦うと、彼女はそう言ったのじゃ。その理由はそれこそ、言えんがの」

利根が察したのか、目を丸くしながらも口を開く。

「……武蔵が、鹿屋に来ると、そういう訳か」

「そういう訳じゃ。つまり寒村、武蔵を活かすも殺すもお主次第ということよ。甘やかしては、ろくな結果にならんだろう…それだけは肝に銘じておけ」

「そ、それは……はい…しかし…武蔵…武蔵が…」

新しい風が、鹿屋に吹く。

それは追い風か、はたまた逆風か…それは誰にもまだ、わからない。

助けたり、助けられたり

「…で、庚さんは君達に何を聞いて帰ったんだい？」
武蔵が顕現し、そして鹿屋で戦うことを望んでいる…その衝撃的な報せをもたらした庚は、昼すぎにはもう帰ってしまっていた。
そして帰る前の夜…即ち昨晩であるが、彼女は基地所属の全ての艦娘を集めて、何かをしていたようであった。
前回来た時も同じことをしていたようであるが、サムソンはその場から退出するように言われていたため、詳細はわかっていない。
「それは…答えなくていいと庚さんは言ったよ。提督が…提督という立場を盾に、無理矢理にでも聞いてくるようであれば、すぐに連絡をくれとも言っていたよ」
本日の秘書艦である初月が、申し訳なさそうに目を伏せる。
女性たちでしか話せないようなこともあるだろう。サムソンに嫌がらせや理不尽な扱いをされてはいないか、という旨の質問などであるなら、確かに彼がその場にいては意味がない。
前回庚が訪れた際に、そのようなことを聞かれたと…サムソンは叢雲から聞いているので、初月に対してもそれ以上の詮索はしない。彼女らがどう答えたのかは興味がないわけでもなかったが、だからといっておいそれと聞けるものでもないだろう。

「なるほど、ガールズトークってヤツだね。僕がその場にいたら、アウェーすぎて倒れてしまうかもしれないな」
「あ、安心して提督。決して提督のことを悪く言ったりとか、そういうのじゃあ、ないから」
「わかってるよ。さて、庚さんは帰ったけれど、それはそれだ。仕事をしよう」
「ああ、そうだね」
鹿屋に武蔵が来る、というのであれば、彼女を万全の態勢で受け入れられるようにしておくのが、今すべきことだ。

いずれ佐世保、そして大本営からも色々と指示連絡が来るだろう。その時泡を食わないようにしておかなければならない。サムソンは改めて鹿屋基地全ての備蓄や戦力などを見直し、そして最適化する作業を開始した。

それから一週間。

２０ＸＸ年も残り二週間となった。様々なことがあったが、皆無事に過ごしてこれたという事実はサムソンにとって何物にも代えがたい好事である。

だが年末年始といえど気を抜くことは許されない。やることは相も変わらず山積みである。

まず庚が帰ったあとに、大本営直々に連絡があった。

『戦艦武蔵を鹿屋にて運用せよ』という、既に知っていた事例がひとつ。

そしてそれに伴い、四つ目の入渠ドックの建造指示。これは一朝一夕で出来るものではないが、政府の依頼を受けた専門の技師たちと作業員たち、地元の建設業者や工務店、そして妖精さんたちが総出でかかることになった。

その一方で、通常の任務も並行して行われる。鹿屋基地は正に多忙を極めた。

「はぁー……」

サムソンは机に突っ伏し、大きく息を吐いた。

朝から晩まで働き詰めであるから、どうしても疲れは溜まる。本日の秘書艦である雲龍が、サイドボードにお香を置いて、火をつける。よい香りが立ち込め、サムソンの気力も僅かではあるが回復してゆく。

「佐世保との会議はどうだったの、提督」

「ああ、武蔵は艤装のフィッティングも上手くいって、今は基礎訓練を始めた段階らしい。こっちでやる、って言ったんだけど、忙しいだろうからって請け負ってくれたよ」

出された茶を啜り、サムソンは言った。
『適合者』が『艦娘』となり、すぐに戦える状態になるかと言うと、そうではない。それまで普通の人間であったものが、いくら脳波でコントロールできるからといって、巨大な艤装を背負って海の上を進む…いうことは、それはもう並大抵のことではない。
いきなり自転車を補助輪無しで乗れ、と言われて乗れる子供がいないように。
バイクをその機能も機構も判らずに乗れ、と言われて乗れる高校生がいないように。
自動車を教習所に通わず乗れ、と言われて乗れる大学生がいないように……『艤装』を思いのままに動かすことは、本人の素質もあるだろうが、一か月から二か月はかかると言われている。
佐世保の司令官である疋田は、それを含めて、武蔵を万全の状態で鹿屋に送ると約束してくれた。
「武蔵とは顔を合わせた？」
「…いや、まだだよ。本来なら様々なデータが送られてきてもいいはずなんだけど…顔写真の一つですら送られてこない」
「……何か、理由があるのかしら？」
「さぁね…でもまぁ、正直今は忙しくてそれどころじゃないから、落ち着いてからの方がいいと思う」
「そうね……さ、お仕事の続きしなくちゃ。遠征部隊がそろそろ戻って…」
雲龍がファイルをいくつか抱え、席に着こうとしたその時である。
緊急の入電を知らせるエマージェンシーコールが鳴り響いた。
「緊急…？」
サムソンはそう言うとすぐに隣接する通信室へと入り、受話器を取った。モニターには鋭い目つきをした壮年の男…呉鎮守府司令、塚原が映し出される。
「こちら鹿屋基地司令、寒村です。塚原司令、どうなさいました」
『あァ寒村君、急にすまんな。単刀直入に言うが、うちの遠征艦隊が沖縄近海で襲撃を受けた』

「……沖縄で、ですか？　昨日の哨戒では異常はありませんでしたが…」
沖縄近海は鹿屋基地の担当海域でもあり、基地から近いこともあって常に哨戒の目が光っている。
それが襲撃を受けたとあればこちらの責任にもなる。忙しさにかまけて手を抜いた、ということは無いはずだが、目が届かなったということはあるかもしれない…サムソンは居住まいを正し、モニターの向こうに映る塚原の目を見る。
『こちらもそう認識しているから、比較的経験の少ない艦娘達を遠征任務に回したのだ。だが報告によれば、敵の部隊は『急に』出現して、襲い掛かってきたらしい』
「早期警戒並びに哨戒機ですら察知できなかった、と……いえ、言い訳はいたしません。それで、被害状況は」
『幸いにして、何とか逃げ切った。戦死者は出なかったが、損害は大きく、追撃があればそれこそおしまいだ。そこで君の部隊に、撤退支援を頼みたい』
沖縄から敗走してくる艦隊を、おそらくは柱島近辺まで護衛する任務である。サムソンは是非もなく頷いて、作戦要綱の打ち合わせを始めた。
『柱島にも要請を出したから、恐らく八島のあたりで護衛を引き継げるだろう。そこまで頼めるか』
「了解です。すぐに出撃の準備をさせます」
『ついでに言うとだな、部隊の中には新兵もいるから、そちらの艦娘達にも気を遣うように言ってくれると助かる』
「わかりました。では通信終わります」
『すまん、頼む』
サムソンは送信されてきたデータをプリントアウトし、雲龍とともにそれを読む。
川内型軽巡洋艦・神通を旗艦とし、飛龍型航空母艦・蒼龍、陽炎型駆逐艦親潮、綾波型駆逐艦綾波、同じく敷波。そして白露型駆逐艦・山風の六隻は呉を発したのち宮古島までの航路を取り、沖縄で補給を

受けたのち帰路に就いたという。
雲龍が彼女らのとった航路と、襲撃を受けた地点のデータを壁面の大型スクリーンにマッピングしていくのを見つつ、サムソンは基地全体のオープンチャンネルを開いて、六名の艦娘達を招集した。

「司令、霞以下五名、入るわよ」
「ああご苦労様。そろそろ日も暮れるが、緊急出撃だ。呉の遠征部隊が、沖縄近海で襲撃を受け敗走している。君達は急ぎ向かい、撤退支援…いや、護衛だな。護衛の任務に就いてほしい」
呉の、という言葉に反応し、一同がざわつく。
西日本においては佐世保か呉か、とまで言われる練度の高さが自慢であるはずだが、その呉の部隊が敗走とは、にわかには信じがたいのだろう。
しかし嘘を言ってどうなる場面でもなく、霞はすぐに頷いて、サムソン並びに雲龍と任務内容の確認をしては、後ろで待機する葛城、初月、朝霜、雪風、時津風に指示を出していく。普段は落ち着きのない朝霜や雪風、時津風も、任務とあればふざけたりはせず、やる気に溢れた表情でもって霞からの指示を聞く。
「親潮ねえさん、大丈夫かな…」
「神通さんが旗艦、蒼龍先輩、綾波、敷波が護衛…で、この山風と親潮って子が新兵ってことかぁ」
葛城がそう呟けば、サムソンもその通り、と返しては、含みのある表情を見せる。
それを見た雪風が、「何です？」と尋ねる。彼女は人の表情を読み取るのが抜群に上手い。サムソンはアゴヒゲを二度三度撫でて、そして口を開いた。
「呉の部隊には悪いが、葛城、初月、朝霜を呼んだのは、経験を積ませるためだ。君たちはまだ、他の面子と比べて経験が少ないからね。こういう機会は活かさないといけない」
「ま、そんなこったろうとは思ったけど。でも、だからって手を抜いたらダメだからね！」

「わかってるわ、全力でやるわよ！」
「あったりめえよ！」
「僕も頑張るよ」
「うん。向こうの新兵さんには、特に気をつかってやってくれ」
「わかったよしれー！」
それから最終的な打ち合わせを終え、霞たちは出撃ドックへと向かう。
そこで雲龍が霞を呼び止め、大型のテルモスを手渡した。
「…これは？」
「今日は気温も低いし、波も高いわ。全速で逃げてきたのであれば、冷え切って、疲れてるでしょうから…」
「なるほど、そうね。わかった、ありがとう雲龍」
「うん。気を付けて」
その言葉に霞は手を上げてこたえ、司令室を後にした。

「さむッ！」
12月の海上は、例え南国であろうと寒い。葛城は艤装のヒーターを最大稼働させ、ほっと一息つく。
日が暮れてしまえば戦闘能力を失う葛城ではあるが、大破した艦の曳航くらいならば問題ない。艤装背面にあるワイヤーアンカーを出し入れしては確認し、葛城は初月を見る。
「初月はあったかそうね…」
「そ、そうかな…」
「ヒートテックみたいでいいと思うな。私はほら、これだからさぁ」
誰がデザインをしたのかは本人たちですら知らないが、艦娘の着る制服は多種多様を極めている。同種の艦がお揃いの制服を着ているかと思えばその限りでもなく、自分なりに着崩したり、アレンジしたりと、女性らしい出で立ちは見目麗しいものがあった。
しかし葛城…というか、雲龍型の制服はとにかく露出が多い。夏な

らばそれでもよかろうが、こういった冬の海においてはマイナスにしかならないものと思われる。
だが葛城の姉妹艦である雲龍は、夏だろうが冬だろうが、雷雨であろうが雪であろうが特に弱音を吐いている様子はない。
「葛城は寒がりなのかい」
「そうねぇ、やっぱ春とか夏の方がいいわよねぇ」
「そうか…。僕はやっぱり梅雨の時期が嫌だな」
「だよねぇ？」
お喋りをしながら進む葛城と初月のインカムに、霞の怒声が響いたのは、それからすぐの事であった。

鹿児島県、徳之島近海――。
「見えたわ、あれね」
霞が指さす先に、小さく見える艦娘達の影。夕暮れの海に浮かぶ彼女らの姿は、弱々しく、今にも倒れそうなくらいに疲弊しているようであった。
網膜投影型望遠鏡を通常モードに切り替え、霞は速度を落とすよう指示を出した。
そして、合流。複縦陣を敷いていた呉の部隊は、その場で止まって一息ついている。
「鹿屋から来たわよ！　塚原司令からの要請を受け、八島近辺までそちらの護衛に当たるわ…神通さん、久しぶりね」
「霞、さん…。援軍、感謝します……！」
旗艦である神通が姿勢を正し、敬礼をもって応える。彼女自身は無傷であるようだが、後続の艦娘達のダメージは大きいようだ。
霞はすぐに大破している親潮、並びに蒼龍に対して二隻ずつ直掩につくよう指示すると、鹿屋へと連絡をとった。
「提督？　霞よ。呉の部隊と合流したわ」
『ご苦労様。状況はどうだい』
「こっぴどくやられてはいるけど、何とかなるでしょ」
『わかった。無理せず遂行してくれ』

「了解。通信終わり」

「蒼龍先輩!!」

「あ、ああ…葛城かぁ。かっこ悪いとこ見せちゃったね」

葛城にワイヤーアンカーを接続され、蒼龍が力なく笑う。しかし葛城は首を振り、煤で汚れた蒼龍の顔を、ハンカチで拭う。

「そんなこと言ってる場合じゃないですよ！　私が引っ張りますから、楽にしててください！」

飛行甲板は保持しているのがやっとな程に破損し、手持ちの和弓は弦が切れて、折れかかっている。

尊敬する先輩である蒼龍の惨状を目の当たりにして、葛城は明らかに動揺している…かと思えば、そうではなく、きっと前を向いて、彼女を曳航し始めた。

「肩を…」

脇についた初月の申し出を受け、蒼龍は笑う。どれほどのダメージを受けたかは判らないが、相当に疲弊もしているようだ。

初月は破れた胸元から覗く豊満なバストを見て、若干ではあるが羨望の眼差しを向けるが、すぐに葛城同様真剣な顔つきでもって、彼女を支えた。

「ありがとうね」

「気にしないで下さい。困った時はお互い様、艦娘は助け合いだって…うちの提督がよく言ってます」

「……うん、そうだね。君、名前は？」

「秋月型、初月です。呉では姉がお世話になっているそうで」

「秋月の妹さんか……今回も君達がいれば、ここまで被害は大きくならなかったかも、しれないねぇ」

「え……」

「親潮ねえさん！」

「あ……雪風…時津風も」

「大丈夫!?　だいじょうぶなの!?　死んだらやだよ！」

ぼろぼろの艤装、服装を見て、たまらず時津風が親潮に抱き着く。彼女は死というものを極端に恐れる気質を持っており、己や仲間が傷つくと、すぐに戦意を失ってしまうという問題を抱えている。
サムソンもそれは承知の上であるのだが、だからといって基地で大人しくさせている訳にもいかないため、時津風とは違って勇敢な雪風を世話係として当てがっている節があった。
気は遣うが、戦う存在である以上、それは仕方のないことでもある。
「大丈夫よ、命には届いてないから…大丈夫。それよりも、会えて嬉しいわ二人とも…」
「基地には磯風もいますから、生きて帰って、遊びにきて…くださいっ！」
雪風はそう言うとアンカーの接続を終え、親潮を時津風に任せて曳航を始めた。彼女とて姉妹艦である親潮と会えて、嬉しいのではあろう。しかし今はそういう状況ではない。『軍艦』だった時同様、幾多の戦場を生き延びてきた雪風は、為すべきことを理解し務めることのできる、優秀な艦であった。

「ありがとう、霞さん…」
「お礼はいいわ…それより、状況を詳しく知りたいわね」
朝霜を最後尾で警戒する綾波に合流させ、霞は神通の横につく。
受け取ったココアの湯気がたなびき、消えていく。
「本当にわからないんです。沖縄を左舷に見つつ進んでいたら、にわかに空が曇って……重金属粒子反応はまるでなかったのに」
「スコールかなにか？」
「雨は降っていませんでした。ただ、雷は鳴っていたけれど」
霞は顎に手を当て、ふむ、と呟く。
深海棲艦らが呼吸や排熱、排水などと共にまき散らす黒い霧のようなもの…『重金属粒子』と呼ばれるそれは、電波の攪乱や光の屈折、雷雲の招来などをもたらすことが広く知られている。
これによって通常の船舶などは、電子機器や通信機器などに重大な機能障害を受けるため、彼女らと遭遇した場合はまず助からない。各

メーカーもそれを上回るべく日夜研究に励んでいるが、その成果はいまだに芳しくないのが現状である。
今の所、唯一これに対抗しうるのが、艦娘が纏う艤装に備わった『障壁』と呼ばれる防御機構である。これもまたいずれ説明をさせて頂くが、深海棲艦たちと相対しても通信を可能とする機能が、その防御機構の役割の一つでもあった。
そして深海棲艦の中でも特に強力な個体が、膨大な重金属粒子でもって周囲の空間に働きかけ、局所的な天候操作をすることが、今までの戦いにおいて確認されている。
しかし沖縄近海には、人類がその海域を奪回して以来というもの、そういった特異な個体が出現したという事例はない。神通はココアを飲み込むと、ほうっとため息をついた。
「なるほどね……ま、ここで考えてもどうにもならないか。神通さんごめん、他の子達にもこれ、配ってくるわ」
「はい、霞さん…本当にありがとう」
「お礼なんて要らないったら」
霞はにっ、と白い歯を見せて笑うと、テルモスを抱えて艦隊の後ろへと回っていく。

「敷波、山風」
「あ、霞ちゃん…こっちは大丈夫だよ」
中破しながらも、敷波は気丈であった。敵がいないにも関わらず、どこか怯えた目つきを見せる山風を支え、彼女が態勢を崩さないよう気を遣っているのがわかる。
「二人とも中破か。さすがに曳航はしてやれないけど、平気そうね」
「うん。でも山風がちょっと、参っててさ。ほら、霞ちゃんだよ山風…鹿屋のかーちゃん」
「あ、く、呉鎮守府の……やま、風です…」
「……霞よ。敷波、ちょっとこれ持ってて…ココア入ってるから、飲みなさいな」
霞はそう言うと、アルミのカップにココアを注いでは、残りを敷波

に手渡し、彼女とポジションを入れ替えた。
「わお、ありがたい！」
「ほら山風、あなたも飲みなさい。熱いからゆっくりね」
「あ、ありがとう……」
しかし山風の手は震え、前歯がカチカチとカップにぶつかる。寒さもあろうが、彼女の怯え方は正に新兵のそれであった。
いくら『軍艦』の記憶と魂を受け継いでいるとは言え、それと融合する適合者にもそれぞれ個性はある。勇敢なもの、能天気なもの、大人しいもの、活発なもの。
山風にどういった事情があって艦娘となったかは判らないが、戦う以上は怯えを切り離さなければならない。
しかしそれには、時間と周りの理解がいるということを、霞は知っていた。
「戦うのって、怖いわよね」
「え…」
「私も最初は、そうだったわ。けどね、戦えるのに戦わないのは…力があるのに逃げるのは、もっと怖いって気付いたから」
霞の言葉を聞いた山風が、彼女の目を見る。迷いや恐れなどがあったとしても、それを見せない、強い眼差しである。
霞はそれだけ言うと、敷波からテルモスを受け取り、蒼龍と綾波の方へと行ってしまった。
「あったかいモン飲んで、ちょっと元気でた？」
「え、あ…うん…」
「霞はさ、口は悪いけど、いいヤツだよ。うんうん。さてそいじゃ、柱島まで頑張っていこうかぁ」
敷波はそう言うと両の手で顔を叩いて、気合を入れた。
もちもちの頬っぺたが、おもちの如く揺れて、寒風を弾いてゆく。

それから少しのち。
豊後水道を抜け、伊予灘へと入った一行の前に、柱島から来た部隊が姿を現した。

「ありがとうございました、鹿屋の皆さん」
神通が深々と頭を下げる。
引継ぎを済ませ、各々が別れを惜しみつつも、無事に還ってこれたことの喜びを噛みしめながら、鹿屋と呉の艦隊はゆっくりと離れていく。
いくつか気になる情報を得もしたが、とりあえずは上々の結果であろう。霞は空になったテルモスを肩から下げると、腰に手を当てて、咳ばらいをひとつ。
「それじゃ、帰るわよ。夕食には間に合うでしょ」
「お腹空いたよー」
「アタイもだぜ、今日は何かなァ」
そんな言葉を交わしつつ進んでいく時津風たちを見ながら、初月が葛城に問いかけた。
「ねぇ葛城。蒼龍さんが言ってたんだけど……今回呉の人たちをやったのって、ヲ級だって言うんだ」
「ヲ級、ねぇ…不意打ちとは言え、対応出来ない相手じゃないでしょうに？」
「うん…けど、おかしいんだよ。物凄い数の艦載機で攻撃してきたって…」
空母である葛城は、同じ空母であるヲ級の弱点も、攻めるべきも知っている。きっと油断しちゃったんだよ、年末で忙しいからね…と、初月の言葉をあまり真剣に聞いている風でもない。
それを受けた初月も、それ以上は話を進めることなく、黙ってしまった。
しかし、その気の緩みが、葛城に手痛いしっぺ返しをもたらすことを、まだ彼女は知らない。
昇った月は冷たく、鹿屋の面々を照らすだけであった。

碧雷（1）

「攻撃隊用意ッ！　加速……！　往け、箒星！」

海面にしっかと立ち、正しい姿勢でもって放たれた一矢は、流星（六〇一空）へと姿を変え、既に至近弾で動きを制限されていた敵旗艦、足柄へと襲い掛かる。

優勢であった制空権の助けもあって、流星は敵対する白組の対空迎撃を潜り抜け、足柄の直上から爆弾を投下した。

「やばっ……！」

さすがの足柄と言えど、無防備な状態でそれを受けては一たまりもない。爆発に巻き込まれ、そのまま轟沈判定を受ける。

『旗艦足柄、戦闘不能！』

「おっしゃあ！　ぶっ飛ばすぞてめーらァ！」

「ヤイサホー！」

審判をしていた叢雲の声を受け、紅組は一気呵成に攻撃に出る。

旗艦を失った白組は、摩耶を始めとした艦艇の攻撃を受けて、そのまま崩れてしまった。

『勝負あり！　紅組の勝利よ！』

おおっ、という歓声が上がり、次いで、制空権争いや攻撃などで八面六臂の活躍を見せた葛城が、ＭＶＰに選出された。

相手方の千代田、隼鷹と干戈を交え、尚且つ一歩も退かないその姿勢は正に、正規空母の面目躍如たる務めであった。

旗艦を務めていた霞が、葛城の背を力強く叩いては「やるじゃない」と笑えば、他の者も口々に葛城の働きを賞賛する。

「あ、ありがとう……！」

「いンやァ、大したもんだよ葛城イ！　あたしらもそっちは葛城一人だからって、艦爆や艦攻多めに積んだのが裏目に出たなァ」

「紫電改じゃなくて烈風を積んでくるとは思ってなかったもんね……いつの間に使えるようにしてたの？」

「あ、あはは…雲龍姉とこっそり特訓してたんだ…」
真面目にやってはいても、これまでさほど活躍していなかった葛城に、先輩格の二人が手放しの賞賛を浴びせれば、彼女とて嬉しいのであろう。顔はゆるみ、上気してゆく。
『あーこちら寒村。水を差すようで悪いが、午後もＶＲ演習が一件入ってるからね。各員すぐ戻って体を休めたら、選出されているメンバーは備えるように』
「おっと、そうだったわね。午後は大湊の連中が相手よ、あんた達！　さっさと風呂に入ってお昼ごはん！」
サムソンの声を受け、霞が手を叩いて周囲の者を促す。
演習で破損した艤装は、深海棲艦どもの汚染の影響が無いため、すぐに修復できる。昼食が終わる頃にはもう、万全の状態で出撃することが可能となっているはずだ。
それぞれが引き上げて行く中で、葛城は拳をぐっと固め、掴んだ手ごたえを脳内で反芻するかの如く、リフレインさせていた。

そして午後、ＶＲ演習。
「初月！　対空！」
「ああ…見えてる！」
高速で動作する初月の眼球、その網膜に投影されたロックオンマーカーが、飛来してくる敵艦載機を捕捉していく。そこからもたらされる、敵機の種類、速度、降下角度、更には足下の波の動きなどを全て計算し、初月は艤装の左右にマウントされている長１０ｃｍ砲ちゃんズに砲撃指示を出した。
ヴン、という剣呑な音が響いたかと思うと、都合４門の対空砲が火を噴いては、上空の敵機を叩き落していく。
防空駆逐艦たる初月の、正に真骨頂とも言える働きであった。
「よーし、こっちもやるわ！　エンジン回せ！　烈風隊、発艦用意！」
そして、続けて射出された葛城の烈風が、残った敵機と交錯し、次々

に撃墜すれば、相手はもうその制空権を取り戻すことは出来かった。
「制空獲ったわ！　比叡さん！」
「よーし！　弾着観測よろしく！」
「我輩も続くぞ！　時津風は比叡、初月は葛城、夕立は我輩につき、警戒態勢を取りつつ備えよ！」
「了解っぽい！」
「わかったよー！」
戻ってきた瑞雲を回収しつつ、利根が大声で指示を出す。時津風、夕立、そして初月はそれに従い、態勢を整えた。
制空権を奪ってしまえば、向こうの行動にも大きく制限がかかる。その機を逃すほど、鹿屋の面々も甘くはない。

そして比叡の放った一撃が、残っていた旗艦、伊勢に直撃して、決着はついた。
『やられたぁ……流石ね比叡、私たちもまだまだだわ…』
「いえ！　今回は初月と葛城が特に上手いことやってくれたから、勝てました！」
ＶＲ空間とは言え、勝負が終わればまるで本当の体のごとく近づけて、会話を交わすことが出来る。
伊勢は人の好さそうな笑顔を浮かべながら、初月と葛城を見た。
『なるほどねぇ…うちは航空戦がまだまだ発展途上だからね、そりゃ敵わないか』
「い、いえ…僕もまだまだ、訓練が足りていないから…必死でした。伊勢さん、皆さん。今日はありがとうございました」
「ふふーん！　葛城の実力、見てくれた!?」
『…はは、そうだね。いつか戦場で一緒になったら、頼りにさせて貰うわ』
「は、はい！」

「皆、ご苦労だった。特に葛城、君はここんところ、随分と活躍して

るな。僕としても鼻が高いよ」
「べ、別にそんなこと……ちょっとはあるけど…頑張ってるから…」
「以前、呉の部隊を襲撃した深海棲艦どもが、また姿を現すかもしれない。葛城に限らず、各員しっかりと備えておくように」
サムソンの言葉に、皆が表情を強張らせる。
そう、依然として例の敵部隊は発見されていないのだ。無論、この海のどこかにある、本拠地に帰ったという可能性もあるが、だからと言って放置しておけば、また新たな被害者が出る。
大本営はこれを重く見て、鹿屋をはじめとした南方の基地、泊地に対し、警戒を強めるよう指示を出していた。
「大丈夫よ提督、初月が聞いた話によれば、敵は空母ヲ級を軸とした機動部隊だっていうじゃない？」
「ああ、呉の部隊からもたらされた情報にも、そういう記述があったね」
「だったらいくらでも、打つ手はあるわ。私と初月、それに雲龍姉と摩耶さんを討伐部隊に入れれば、十分対抗できると思う」
薄い胸を張りつつ、葛城は言う。しかしサムソンはすぐにそれを肯定したりはせず、あくまで部隊全体で取り組むべき問題だ、として、その場は終わりとなった。

「ちぇー、つまらないの」
「別に今から出撃する訳じゃないんだから…」
「そうだけどさ！　でもいくら強いったってヲ級だよ？　姫とか鬼が出てくるんでもないんだから、さっさと討伐に…」
「葛城よ、調子が良くてノリノリになるのは良いが、あまり功を急ぐでない。急いては事をなんとやら、じゃぞ」
利根の言葉に一旦は大人しくなる葛城であったが、どうにも納得はいっていないようだ。彼女は踵を返すと、梓弓をくるくると回しながら、練習場へと消えていった。
「……葛城は確か、軍艦であった時は、殆ど実戦をしておらんのだったな」

「復員船としての方が有名だもんね。それが何か？」
「今の状況はそれこそ、『葛城』が望んでいたことであるとも言える。しかしのー…」
傍らにあったウォーターサーバーから水を汲み、利根は一息にそれを飲み干して、続ける。
「浮足立った者が足元を掬われるというのは、いつの時代、どんな戦場でもあり得ることよな」
「あー…なるほど」
「ま、本人のやる気を削ぐような事は言わんでもいい。比叡、ちゃんと見ててやるのじゃぞ」
「うん」

心地よい音を立て、矢が的へと突き刺さる。
葛城の姿勢は一分の隙も無く、美しい。矢をとり、つがえ、引き絞り、そして放つ。この一連の動作だけ見れば、彼女が尊敬してやまない先輩、瑞鶴のそれと比べても、決して見劣りするものではなかった。
「私はやれる。できる。私は強い…負けない」
的が剣山のようになった時点で、葛城はふと我に返った。一矢として外した矢はなく、全て的に収まっている。
もはや誰が相手であっても、引けを取らない。彼女はそう思った。
「お疲れ様」
そんな葛城の後ろから、声がかかった。
水とタオルを持って微笑んでいるのは、姉妹艦である雲龍であった。
「あ、雲龍姉」
「私もあっちでトレーニングしてたの」
「へぇ、そうなんだ。気付かなくてゴメン」
「あなた、集中していたもの。調子、いいみたいね」
あっち、と指さした先には、書庫と基地内神社しかないのであるが、葛城は取り合えずそれをスルーして、受け取ったタオルで汗を拭き、うん、と嬉しそうに頷いた。

調子に乗るな、と諭されれば、確かにその通りだと考える節もあるが、一番身近な雲龍に褒められるのであれば、その考えもどこかへ飛んでいってしまう。
期待に胸を膨らませ、葛城はまるで子犬のように、続く言葉を待つ。雲龍型…というより、最後に竣工した空母というだけあって、葛城はかなりの末っ子気質を持つ。良く言えば甘え上手、悪く言えば我慢のきかない質である。
しかし雲龍が紡いだ言葉は、そんな葛城に冷や水をかけるかの如きものであった。
「……けど、慢心はいけないわ」
「…えっ」
「演習はあくまで演習で、命のやり取りにまでは至らない。実戦とは違う」
ペットボトルの蓋を開け、雲龍は葛城にそれを手渡す。そして続ける。
「どんなに上手くやれても、死なないってわかった上での結果でしょう。けど、実戦はそうじゃないわ…演習で出来ていたことが出来ないことだってある。予想の上を行く事態が起きることだってある」
「……何が言いたいの、雲龍姉」
「浮かれることなく、あくまで謙虚でいなさい。最後の最後まで、それこそこの戦いが終わるまで…決して気を緩めず、常に考えて、生き延びることを」
笑顔から憮然としたそれへと変わっていく葛城の表情を知ってか知らずか、雲龍はとくとくと彼女を諭す。
血の繋がりはなくとも、魂は姉と妹である。彼女が現れた際、手放しで褒めてくれる、喜んでくれる…葛城は初め、そう思っていた。
しかし、そうではなかった。他の者が次々に口にしてくれた賞賛の言葉は、ついぞ雲龍の口からは出てこない。
明らかに声のトーンを下げ、葛城は雲龍に尋ねた。
「…雲龍姉は、私が調子に乗って浮かれてるって、そう言いたいの？」

「いいえ。例え調子がよくても、それで慢心するのはいけない。そう言いたいだけよ」
「…ッ！　おなじ…同じことじゃない！　なに、私は活躍しちゃいけないの？　喜んだらいけないの!?　艦隊の一つの部品として働いていればそれでいいって!?」
「……？　そこまでは言っていないでしょう」
しかし葛城は、眉を吊り上げて、雲龍を見た。睨みつける、とまではいかないものの、爆発寸前の感情が、震える拳から見てとれる。雲龍は落ち着いて、と彼女を諭すが、その声は届いていない。
「そりゃあ、早くからこの部隊にいて、活躍してた雲龍姉から見れば、私がまだ未熟だなんてことは判ってるわよ！　けど！　だからって！　ちょっとくらい褒めてくれたって……いいじゃない！　私だって！　必死に頑張ってるのに！」
「それは知っているわ。だからこそ、油断して欲しくく…」
「もういいわよ、お説教なんてうんざりだわ！　わかった、わかったわよ！　まだ活躍が足りない、修行が足りないって言うなら、もっともっと戦って、あいつらをぶち殺してやればいいんでしょう！　それこそ油断も慢心も無いってくらいに！　そうよね！　そう言いたいのよね、雲龍姉！」
「ちがう…」
「もういいッ！」
激昂した葛城はタオルを叩きつけるようにして返すと、梓弓を引っ掴んで、練習場の外へと出ていってしまった。
「……はぁ」
残された雲龍はため息を一つつくと、反対側にある射撃練習場に目を向け、そして口を開いた。
「ごめんなさいね、うるさくして」
「え、あ、う…？」
物陰に隠れていた初月が、狼狽しつつ姿を現す。手にはペットボトルの水が二つ、握られている。
「ぬ、盗み聞きするつもりは無かったんだ…雲龍さんと葛城が話を

始めてたから、出るタイミングがわからなくて、それで」
「うん、こっちからはチラチラ見えてたわ。盗み聞きだなんて思っていないから安心して」
初月は水を傍にある冷蔵庫へと突っ込むと、雲龍の隣にちょこんと座る。姉妹喧嘩ともとれるそのやり取りを見てしまって、ばつが悪いのだろう、何かを喋ったりすることなく、ただ黙っているのみだ。
「提督は、私たち空母を運用する際、必ず摩耶かあなたを同じ艦隊に入れるわよね？」
「えっ、あ、ああ…そうだね。摩耶さんも僕も、対空迎撃が出来るから、でしょう」
「うん。結果、私たちの仕事がやりやすくなる。そして、艦隊の被害も抑えられる」
「けど、僕はまだまだだよ。摩耶さんには及ばない」
謙遜する初月に対し、雲龍は何も言わず首を振る。そして彼女の目をじっと見ては、口を開く。
「葛城が軍艦だった時のことは知っている？」
「うん。葛城だけじゃなく、鹿屋の皆のことは大体学んだよ」
「あの子ね、焦っているのよ。手柄を立てなきゃって……そうでなければ、存在している価値が無いって思っているのかも、しれない」
葛城の艦歴に関しては割愛するが、ともかくである。
自分を無価値、無意味と思い込んでしまうことは、多かれ少なかれ、誰にでもあることだろう。
戦いもせず、訓練に明け暮れ、戦いが終われば復員船という道しか残されていなかった葛城が、この世界に顕現し、再び戦うことになったにも関わらず、大した活躍も出来ないまま日々を過ごしているというのであれば、己の存在意義について疑念を抱くのも無理のないことと言える。
そしてその疑念を払拭せんと、躍起になるのもまた、無理のないことだろう。
「そんなこと…」
「そう。誰もそんなこと、思ったり言ったりしない。少なくとも鹿

屋の皆はそうだと、私は思う」
「葛城は、それをわかっているのかな」
「わからない。私が言っても、無理かもしれない。だから、自分で気づくしかないのだと思うわ……でもね、それまでに、死んでしまっては元も子もないでしょう」
慎重なサムソンの性格を考えれば、死ぬ…轟沈するような事態にはならないとは思える。しかし戦場において、絶対、ということはない。雲龍はそれを憂いているのだろう。
雲龍は初月の手を取り、その金色の瞳でもって、改めて彼女の目をじっと見つめた。
「葛城を守ってあげて。もちろん、私が一緒に出ていれば、そうする。けどそう何もかも、思い通りにいかないのが普通でしょうから」
「雲龍さん…」
「そしてあなたも、ううん…私は、誰一人欠けることなく、最後まで戦えればいいなって、そう思ってる」
「それは、僕もだ」
「そうね。勝手なお願いだけれど、あなたは葛城と特に仲がいいし、頼むわね…本当に、手のかかる妹で、ごめんね」
初月は雲龍の手を力強く握り返し、頷く。
「言われなくとも、そうするさ。最後まで…僕が守ろう。それが駆逐艦の役目でもある」

一夜明けて。
クリスマスも目前に迫り、皆がそわそわした空気になりつつある鹿屋基地に、大本営からの命令が下った。
「あーみんなお早う。全員いるね。さて朝っぱらからいきなりだが、以前呉の部隊を襲撃した、例の空母機動艦隊が、哨戒の網に引っ掛かった」
「なんと！　昨日その話をしたばかりではないか」
「フラゲってヤツだな。アタイは詳しいんだ」

「フラグでしょ」
「えッマジか！　クラゲみたいでかっこいいなって思ってたのに…」
「うるせぇぞ朝霜、黙って聞いてろ！」
摩耶の怒声が飛び、朝霜ははいッ！　と叫んで居住まいを正した。
それを確認したサムソンが、苦笑いを浮かべつつ、本日の秘書艦である隼鷹に指示を出す。
あいよ、と応じた隼鷹が装置をいじれば、大型のスクリーンに鹿屋基地の担当海域と、その周辺の地図をが映し出された。
「今朝、空軍の高高度偵察機が奴等を捉えたのは、ここだ」
サムソンは手元のタブレットとペンタブを使い、マップに当該海域をチェックする。
それは台湾とルソン島の中間にある、バシー海峡付近であった。
「バシー海峡…ですか。あの辺はとうに奪還していますよね？」
「ああ。ブルネイとタウイタウイの部隊、そして我々も当然ながら哨戒任務に就いているが…散発的に敵勢力が出てくることはあっても、強力なものではなかった」
サムソンは次に、呉の部隊が襲撃を受けた地点…沖縄本島と、その東に位置する南大東島の間の海域にチェックを入れた。
そしてレーザーポインターを取り出すと、バシー海峡とその襲撃地点含んだ部分をぐるぐると指し示す。
「我々は東シナ海からフィリピン海までの、このあたり…を、重点的に哨戒することになる」
「なるほど。しかし、フィリピン近海や南シナ海に出没する可能性もあるのでは？」
「それはもちろん、そうだ。なので、そちらの方はブルネイ、タウイタウイの部隊が哨戒にあたる。偵察機もいまだ上空で索敵を行っているが、最初の一回から、次の発見には至っていない。潜航しているか、あるいは何らかの方法でレーダー網から隠れているんだろう。雲も多いしね」
その言葉に、艦娘たちは様々な反応を見せて、傍の者たちとあれこ

れと議論を始める。
サムソンは少しの間それに任せ、タブレットに目をやる。
「三つの部隊を出して、それで捜索するって感じになるんですか？」
やがて喧騒が収まると、山城が手を挙げてそう言った。
サムソンはいや、と首をふると、一歩前に出て口を開く。
「まず、二つの艦隊を編成し、哨戒に当たってもらう。そして残ったものは、いつでも出撃出来るように待機していてもらう。相手の戦力はまだ不透明だから、自由に動ける艦隊は一つ残しておきたい」
「心得た。では哨戒にあたる人員…都合十二名を、これから選ぶというわけじゃな」
「そういうこと。まぁ、粗方目星はつけている。名前を呼ばれた者はそれぞれ準備に入ってくれ」

第一艦隊　旗艦摩耶　山城　利根　夕立　千代田　雲龍
第二艦隊　旗艦比叡　初月　霞　隼鷹　葛城　足柄

「とりあえず、この編成で行こうと思う。何か意見はあるかい」
「いいんじゃねーの。しかし意外だな、呉の連中が意趣返しに出るもんだと思ってたが」
摩耶の意見ももっともである。しかし軍隊というものが、一時の感情で動いては意味がない。呉から当該海域までは大分距離があり、いざ戦闘となった時に、燃料が不足していては元も子もないからだ。
輸送艇を出せばいいのでは、という意見も出るには出たが、輸送艇に乗っている際に不意打ちを受ければ、一網打尽にされる恐れがあるということで、今回は見送ることになった。
「意見が無ければ作戦会議は終わりだ。それぞれ準備に……うん？　葛城、どうした？　体調でも悪いのかい？」
一言も発さず、隅っこで険しい表情をしていた葛城を、サムソンは見逃さなかった。
しかし葛城はその心配をよそに、「問題ないわ」とだけ返すと、そのまま立ち上がって、ブリーフィングルームから出ていってしまう。
「…叢雲、ちょっと」

「うん？　何？」
サムソンは叢雲を呼ぶと、耳打ちをするようにして尋ねる。
「…セクハラだと思わんでおくれよ？」
「何よ、今更。誰もそんなこと言わないから安心なさい」
「…葛城、もしかして、女の子の日か？」
艦娘と言えど全身鋼鉄で出来ているわけではない。普通の女性と同じように、月経というものがあるのだ。
当然そうなれば、体調にも影響が出る。不調にもなる。戦場に立つことすらままならなくもなる。
それが大事な作戦行動の前であれば、なおさらよろしくない。それ故、司令官たる立場のサムソンは、たとえ男性であっても気を配らねばならない。
普段は叢雲に任せっきりにしてはいるが、今の葛城の様子は普通ではない。サムソンが気にするのも無理はないことだろう。
「いや、違うわね。あの感じは誰かと揉めたか、そんなとこじゃないかしら」
「なるほど…それは気になるね。しかしどうする…編成から外すかな？」
「葛城、戦闘の方は調子いいんだし、様子を見てから決めましょう。とりあえず、足柄や隼鷹にはそれとなく言っておくわ」
「わかった、頼んだよ」
叢雲は頷くと、持ち場へと赴く艦娘たちに混じって、部屋を出ていった。
サムソンは腕組みをしてしばし黙考をしていたが、やがて両の頬をぱしんと叩くと、よし、と気を吐いて、司令室へと戻っていく。

「第一艦隊、点呼取るぞ。山城ー」
「はい」
「利根ー」
「いつでも行けるぞ」

「夕立ィ」
「ぽい！」
「千代田ァ」
「頑張るよ！」
「雲龍ー」
「……」
名前を呼ばれた雲龍だが、隣の出撃ドックを気にしているようで、返事をしない。
摩耶は怪訝な顔をしつつも、咳払いをしてもう一度、雲龍を呼んだ。
「あ、はい」
「アッハイじゃないよお前。どうした、ぼーっとして」
「ごめんなさい、ちょっと」
「具合でも悪イのか？　アレだったら変えてもらうけど」
タブレットでつんつんと肩のあたりを突かれ、雲龍が笑う。そして一言、大丈夫、と。
「そか？　ならいいがよ。夕立、お前雲龍の直掩に着け、いいな」
「了解っぽい！」
「大丈夫よ摩耶、本当、何でもないの」
「るせぇ、もしヲ級の相手をすることになったら、お前と千代田がこっちの生命線だ。温存すんのは定石だろうがよ。はいそんじゃもう一度点呼。雲龍！」
口調は乱暴だが、怒っている訳ではない。摩耶も鹿屋草創期からの古参なので、そこのところは皆判っていて信頼している。
雲龍は若干照れくさそうに頷くと、きっと摩耶の目を見て、「はい」と力強く答えてみせた。
一方、第二出撃ドック。
「はーい、全員いるね。体調悪い人はいない？　いたら言ってね。トイレ行きたい人は今のうちだよ」
点呼を取り終え、いつもの調子で仕切る比叡。彼女は戦場であっても明るさを失わず、それがかえって皆の力を引き出すことが多々ある。

当然ながら、今回も皆の士気は高い。
そうこうしていると、足柄が葛城に近づいては口を開いた。
「葛城、あなたちょっと体調悪いんじゃない？」
「え、な、何で…？」
「いや、何となく。いつもならもっとこう…しゃいしゃいしゃーす！　みたいな返事するから」
「そんなこと、そんなことないよ！」
足柄に尋ねられ、葛城は若干うろたえつつもそう答える。既に叢雲から個人回線で連絡を受けていた足柄は、訝し気に葛城を眺め、ふむ、と頷いた。
確かに、先ほどまで浮かべていた険しい表情ではなくなっている。生理が始まった訳でもない。ではなんだろう…と、足柄の目はそう訴えているようでもある。
「心配要らないったら！　それにほら、確実に戦うってワケでもないんでしょう？　哨戒、哨戒」
「それはそうだけど。だからって絶対に戦わないってこともないのよ」
「それは判ってるけど。とにかく、私は大丈夫！　艤装も艦載機も万全なんだから」
足柄はちらりと比叡に目配せをし、やがて軽く笑っては、葛城の肩を叩いた。
「そうね。頼りにしてるわ、葛城」
「任せておいて！　隼鷹さんと一緒にめっちゃ頑張るから！」
「おっ、頼もしいねェ。んじゃ比叡、そろそろ行けるんじゃないか」
「そうだね、あとは司令からの合図待ちって感じかな。霞、初月もいいね？」
拳を二度三度繰り出し、比叡が言えば、霞と初月の両名も力強く、頷いてみせる。
午前９：０５――
鹿屋の長い一日が、始まろうとしていた。

碧雷（2）

『あーこちら第一艦隊、摩耶だ。準備は出来た、いつでもいけるぜ』

『第二艦隊も準備完了です！』

インカムから聴こえてくる摩耶と比叡の声に、サムソンは頷き、傍にいて各艦隊のオペレーターを務める叢雲と矢矧に、出撃ドックのゲートを開くよう指示を出した。

「それじゃあ第一艦隊から順次出撃。第二艦隊は第一の5分後に出撃…予定されたルートをゆっくり進んでくれ」

『摩耶了解！　んじゃ行くぜ！』

「進路クリア、第一艦隊発進いいわよ」

海面に面した岸壁にある、重厚な鉄の扉が開いたと思うと、第一艦隊が勢いよく飛び出してくる。

陣形は単縦陣。基本的ながらも攻撃力に優れた陣形で、とりあえずこれを選択しておけば間違いはない。しかし今回は戦闘というよりは哨戒任務であるから、必ずしもこの陣形を選ぶ必要はないのであるが…そこはイケドンな摩耶の性格ゆえだろう。

「さて、どうなるかな…」

「提督はいきなり会敵出来るって思ってるの？」

椅子に腰かけ、誰ともなしに呟いたサムソンの言葉を、矢矧が拾う。案外率直に物をいうタイプの矢矧ゆえ、ともすれば遠慮なしと思われることもある。

しかしサムソンもそんな事はとうの昔に理解しているので、腹を立てるようなことはない。

「どう、かな。何もかも、全て上手くいくだなんてことはないと思う」

「そりゃそうでしょう」

「だからまァ、色々考えなきゃいけないよね。叢雲、空軍からの報告は」

「今のところ無いわね、あちらさんも本気でやってんだか、どうか」
ややあって、出撃して行く第二艦隊を見送りつつ、サムソンは席を立った。
「ちょいと一服してくる。すぐ戻るよ」
「はいはい」
画面から目を離すことなく、叢雲が返した。

「ふー…」
喫煙ルームの窓から見える空は、薄曇りである。予報によれば午後からは雨だという。
サムソンは肺一杯に吸い込んだ煙をゆっくりと吐き出しつつ、アゴヒゲをいじる。彼が考え事をする時のクセである。
呉の部隊が襲撃を受け、敗走した。相手はヲ級という報告が上がってきている。しかし正規空母まで擁した部隊が、そう簡単に負けるだろうか。雷が鳴っていた。バシー海峡付近に出現した。その意味はなんだ。過去の事例と関係があるのか。
などと、考えてはみるが、まとまらない。優秀な指揮官ならばもっと、うまく立ち回れるのだろうが…とも考える。
しかしサムソンはそれを引きずるようなタイプではなかった。出来ないならば出来ないなりに、やり方を考える。周囲に助力を仰ぐ。情けないと思われる節もあるが、そのような事は彼にとって些末なものであった。

「万が一には備えないとダメか」
聞くものなどいないが、サムソンはそう口にした。それは己自身に言い聞かせるためでもあり、ことの重大さを改めて認識するためのスイッチでもあった。
サムソンは半ばまで吸った煙草を灰皿でもみ消し、消臭スプレーを体に吹きかけると、喫煙ルームを出た。
「すまん、戻った。状況に何か変化は？」

「たかだか5分である訳ないでしょ」
「はは、それもそうだ。さて、ちょいと通信室に行くよ、何かあったら呼んでくれ」
「了解」
タブレットを片手に、サムソンは司令室の隣にある通信室へと入った。
そして、呉との回線を開く。
『はい、こちらは呉鎮守府。秘書艦の陸奥です』
「おはようございます。鹿屋基地司令、寒村です」
『あ、寒村中佐。おはようございます。この前はうちの子達がお世話になりました』
「いえいえ、とんでもない。当然のことです……して、塚原少将はおいでですか」
『はい、少々お待ち下さい』

鹿児島県は中之島、その南西の海上。
「うぅ、寒い～！」
「アホか夕立ィ！　ヒーター使えヒーター！」
「点けてるよぉ！　私の艤装、ヒーターあんま効かないっぽい～……夏はめっちゃ涼しいのに～」
「帰ったら見てもらえ！　とにかく凍えて戦えないなんてなァ、ただの馬鹿のすることだぞ」
先頭を進む摩耶と、その後ろにつく夕立の会話を聞きつつ、雲龍は空を見上げた。
彼女はその名が示すように、雲の流れを『読む』ことが出来る。雨や雪が降ったり、雷が鳴ったり…というのは、気象予報でも判ることであるが、その雨や雪がどれくらい降るのか、どの程度で止むのか、ということまでを瞬時に理解できるのは、艦娘多しと言えど雲龍ただ一人である。
しかし何故そんなことが出来るのか、という疑問については、彼女

自身、まるで覚えていない。
実のところ、雲龍は鹿屋へ来る前の記憶を保持していなかった。
マニラ沖でたゆたっていた『雲龍』の魂は、鹿屋の部隊に解放され、既にサルベージされていた艦体に戻って、『艤装』として出力された。それ自体は特におかしな事ではない。
しかし、雲龍には…正確に言えば、雲龍になった『適合者』の記憶であるが…ともかく、それが『ない』のである。
空母としての『雲龍』が辿った記憶や知識はある。しかし、肝心の中の人の記憶が『ない』。
サムソンに頼んで閲覧させて貰った、己自身のデータによれば、艤装の目覚めと共に、大本営を訪ねてきたのが、『適合者』であると記されているだけであった。戸籍や出生地、両親などのデータはまるで残っておらず、それこそ雲のように、突如として発生したかのようでもあった。
そして艤装を纏って、『雲龍』となってからのことについては、彼女もしっかりと記憶を保持している。
「雲龍さんは寒くないっぽい？」
「……え、ああ。平気よ。寒いのには慣れてるの」
「そんな薄着なのにねぇ」
寒がりな千代田が、ポケットに手を突っ込んだまま笑う。絡繰式の飛行甲板は艤装腰部のハードポイントにマウントされ、まるで行商のおばあちゃんみたいな出で立ちである。
「私、案外、スウェーデンとかの生まれだったりして…」
「あぁ、確かにそんなところあるわね…服装は中華っぽいけど」
「ってか雲龍、お主実は記憶あるんじゃないのか」
インカムから山城や利根の声も入ってきて、艦隊はにわかに賑やかになる。艦娘になる前にどのような人生を送っていたか、ということについては、口にしないという不文律もあったが、本人からそんな言葉が出れば、それに乗らないというのもかえって付き合いが悪い。
しかしそれもつかの間のこと、摩耶の声で艦隊は静まり返る。
「ヒトマルマルマル、定時連絡だ。叢雲か？　こちら第一艦隊だ。

異常はないぜ」
『こちら司令部、現在位置は中之島沖ね。空軍からも今のところ発見報告は無いわよ。そのまま哨戒を続けて頂戴』
「第二艦隊の方はどうだ？」
『そちらと同じよ』
「そうか、わかった。以上、通信終わり」
摩耶はそう言うと一同を見回し、先頭を切って海原を進み始めた。
風は強く、気温も低いが、士気は低くない。もし接敵したとしても、万全の状態で戦うことが出来るだろう。

「あーこちら比叡。ヒトヒトマルマルの定期連絡です。現在位置は奄美大島近海。司令部どうぞ」
『はい、こちら矢矧。何か異常はあったかしら』
「今のところそれらしきものは無しだねー。空軍さんはどう？」
『これから南下するそうよ。そちらの航路と被り気味になるけど、まぁ仕方ないわね』
「そっか、わかったよ。それじゃあ通信終わり」
比叡はそう言って通信を切ると、腰に手を当てながら振り返った。
「特に異常なし。それじゃあ皆、このまま進むよ！」
「あいよ！　に、しても寒いなァ、一杯やりたくなるねぇ」
「それはわからないでもないけど…とりあえずそのスキットルはしまいなさい」
足柄に注意され、隼鷹がへいへい、と笑いつつスキットルをしまう。
呑兵衛な彼女は常にそれを持ち歩いており、隙あらば飲もうとする。
酔っぱらって事に当たるなど、普通ならば許されることではないが、隼鷹はかの酔拳の如く、酔えば酔う程に戦果を上げる、というデータがあった。
比叡は苦笑いをしつつも前を向き、そして波を蹴立てて進み始めた。

午後１２：０６
「叢雲、最新の天気図をこっちに回してくれないか」
「いいわ、ちょっと待って…はい」
「すまない。矢矧は先に昼食を」
「正午の定時連絡も済んだし…そうさせて貰うわ。すぐに戻る」
ヘッドセットを外し、矢矧は席を立つ。代わりにサムソンがその席へと座り、手にしたタブレットとにらめっこを始めた。
先ほどから彼は、哨戒圏内の過去数年分の天気図を眺めては、何事かを考えているようであった。
「天気がそんなに気になる？」
「ああ…いやね、霞から聞いたんだが、呉の神通さんは『雷が鳴っていた』って言ってたらしいのよ」
「近くに雷雲が発生していたんでしょう？」
「そう思うんだけどさ、でもその日時の天気図や、過去の同じ時期の天気図を見ても、雷雲が発生していたなんて記録はないんだよな…だから、ちょいと気になってさ」
アタマノウエニウイテルーノを深緑に染め、叢雲が黙考する。そしてすぐに、手を叩いた。
「深海共が意図的に、ごく短時間だけ発生させてたってこと…？」
「可能性はなくもないだろうね。だから注意だけはしておきたくてさ…雷雲でなくても、雨になれば空母部隊は戦いづらくなる」
「なるほどね……けれど、雷雲を発生させるだなんて、それこそヲ級なんて目じゃない強力な…」
その時、叢雲の言葉を遮るように、緊急の通信を告げるアラートが鳴り響いた。
サムソンはすぐにチャンネルを開き、モニターを凝視して受け答えを始める。
「こちらは鹿屋基地司令部です」
『海軍総司令部です。空軍の哨戒機から連絡が入りました』
「ええ、何か異常がありましたか」

『そちらの第二艦隊の進路上に、急速に発達している雲があるとのことです。画像並びにデータをお送りしますので、お役立て下さい』
「……了解しました。こちらでも確認します」
『ご武運を。通信終わります』
ふうっ、と息を吐き、サムソンは険しい表情で、キーボードを操作し始めた。
「沖縄に近いわね…案外、当たりだったりして」
「ただの雲であればそれでいいんだがな。あーこちら寒村、第二艦隊応答せよ」

「曇ってきたなァ」
「雨、降りそうね…空母部隊は雨、嫌いでしょう？」
「別に、関係無いわ。竜巻や霰が降るってんならまだしも」
足柄の問いに、葛城はにべもない。
やはりどこかおかしい、そう感じたのか、足柄が葛城の傍につけて口を開いた。
「もしかして、だけど」
「……うん？」
「あなた、雲龍と喧嘩したでしょう？」
その問いに、葛城の表情に翳がさす。図星か、と言わんばかりに足柄は苦笑して、風に乱れた髪を整えた。
鹿屋基地における年長組…いわゆる二十歳以上の女性は三人いて、ややスパルタな面のある摩耶、とぼけているようで意外と老獪な利根、そして足柄は包容力のある姉、といった立ち位置である。
そんなだから、足柄はおとなしめの艦娘達から、よく相談を持ち掛けられていて、それに対するアンサーの引き出しも多い。葛城の様子を見て、どこかおかしいなと察したのも納得のいく話である。
「ちょっと、だけ」
「やっぱりね。お姉さんそういうのすぐわかっちゃうな」
「か、からかわないでよ」

「んふふ、ごめんごめん。どうして喧嘩したとか、そういうの聞きたいんじゃないから安心して……基地帰ったら、仲直りするのよ？」
和解を促す足柄だが、葛城は無言のまま、首を縦にも、横にも振らない。
思いつめた目はどこか悲し気で、それが足柄の庇護欲に火をつける。
「なにか、理由があるのね」
「……それは」
「ま、いいわ。そういうのって、一朝一夕で解決するようなものでもないし……ン」
足柄は言葉を遮り、インカムに人差し指を添える。
基地からの緊急連絡であった。
「こちら比叡、司令？」
『第二艦隊は一旦その場で停止。現在位置は沖縄近海だね…ところで、周囲に異常は無いか？』
「いえ……今のところありません。何かありましたか？」
『空軍から報告があった。そちらの進路上に、急速に発達している雲があるらしい』
その言葉に、皆が一斉に前方を注視する。どんよりと曇った空であるが、それらしき雲は見当たらない。
比叡はその旨を告げるが、サムソンの口調は明るくはない。
『ともかく、何か嫌な予感がする。十分に注意して進んでくれよ』
「はい、了解です。第一艦隊の方はどうですか」
『あちらは特に異常は無いようだが…何かあれば指示を出すよ』
その時。
サムソンからの通信が終わる間際……その瞬間、である。
「あ、あれ！　あれ見て！」
初月が大声でそう叫んだ。
彼女が指さす先には、低い位置で急速に形成されつつある、渦状の黒雲が見て取れる。
「！　司令！」

『どうした』
「重金属雲……でしょうか？　過去の大規模作戦で、同じようなものを見ました！　映像送ります！」
比叡が艤装の高精密カメラを起動し、その映像をリアルタイムで基地へと送信し始める。
初月と霞が前に出て、即応体制を取れば、残る面々も各々の艤装を戦闘コンディションへと移行させてゆく。発達する黒雲は、やがてゴロゴロと音を立て始め、それに呼応するかの如く、霧のような雨が舞っては落ちてくる。
「司令、これはおそらく戦闘になるかと思います」
『そのようだね。第二艦隊は原速で接近、警戒しつつ戦闘態勢を取ってくれ』
「了解です。艦隊、複縦陣に変更！　対空警戒を厳として！」
午後１２：１０
第二艦隊、接敵予測。

「摩耶了解、通信終わり」
「向こうが当たりを引いたっぽい？」
「あァ、そうみたいだな。確定ではないからこっちも哨戒は続けるが…進路を少しばっかり、第二寄りに変えるぞ」
艤装のチェックをしつつ、摩耶が指示を出す。第二艦隊とて強者揃いであるから、そう簡単に後れを取るとは思えない。しかし、だからといって、何も対策を打たない訳にもいかない。
「今の通信内容から察すると、やっぱり敵は何かしらの天候操作が出来るみたいね？」
「そうじゃのー、厄介な相手やもしれん」
山城がそう言うと、利根も拳を掌に打ち付けてそれに同意する。こちらの思惑を上回る何かがいる、という考え、それ自体はよいが、確認が取れている訳ではない。思い込むことは危険だ。
摩耶はそれを危惧したのか、強い口調でそれを諌めた。

「だから確定じゃないってんだろ。温暖化が進んで、気象にも影響が出てるなんてなァ、ガキの頃から学校で習ってるじゃねえか」
「でも、だからといって、何も無いところからいきなり雷雲が発生するだなんてこと、ある？」
「さァな、あたしゃ別にお天気博士じゃねえからよ。その辺は雲龍に聞いてくれ……ともかく、第二の連中がヲ級の顔を拝んで、その他の証拠が出そろうまでは、他の可能性もあるってことを忘れるな」
摩耶はそう言い切ると、第二艦隊のいるであろう方角を一瞥しては、きっと前を向いて進み始めた。
不安はあれど、ここから何かを出来る訳でもない。

「見えたわ！　1時の方角、距離２０００！」
「了解！　全艦戦闘準備！　葛城、隼鷹の両名は航空戦の準備を！　初月、霞はまず対空警戒！」
霞からの報せを受け、比叡は各員に指示を出す。
葛城は梓弓をぎゅっと握りしめ、『十万四千度御祈祷大幣』と刻印された矢筒から矢を数本取り出しては、身構える。
来るならこい、といった気概が迸り、葛城の美しい黒髪の先端が、余剰なエネルギーを放出しては蒼く輝いた。
「空母部隊了解！　葛城！　あたしは今回、攻撃寄りのセッティングだからね、制空の方はあんたがメインだよ！」
「わかってる…！」
そして奴等は、黒雲を頭上に抱き、その姿を現した。
「戦艦ル級確認…数、2！　他には…輸送ワ級1、駆逐ロ級3！」
隼鷹が放った彩雲、並びに己の零観から上がってきた報告と、目の前の状況を擦り合わせ、比叡が首を捻る。
呉の部隊、強者である蒼龍すら凌駕したという、問題のヲ級が見当たらなければそうもなろう。
「あれ？　ヲ級がいないみたいだけど？」
「まさか、陽動…？」

「けど、奴等があんな雲を起こせるとは思えないわ。重金属反応もそこまで高くないし…」
「それは、そうだけど…ともかく！　艦隊、攻撃開始！」
議論をしている暇などない。艦隊は速度を上げ、大きく迂回しながら交戦状態に突入する。
敵に空母がいないのであれば、例え戦艦がいようとどうにでもなる。葛城は複雑な表情を浮かべつつ、手にした矢を番え、引き絞った。
隼鷹もスクロール甲板を展開し、袖口から取り出した式神に呪（まじない）を込めて、その上を滑走させて射出する。
隼鷹の流星並びに天山と、葛城の流星改が射出され、敵部隊に突撃してゆく。向こうには艦戦…というより航空機がいない為、制圧することは容易い。
「制空権確保したわ！」
「あちらさんの対空迎撃も大したことないね！　このまま仕掛けるよぉ！」
言うが早いか、敵艦隊に大量の爆弾が降り注ぐ。水柱が噴き上がり、ついで爆炎が炸裂する。
盾になって前に出ていた駆逐艦どもが、断末魔の咆哮を上げて海中に没していく。
「駆逐ロ級撃沈を確認…数、２！」
観測していた霞から、戦果報告がもたらされると、比叡は更に速度を上げて、部隊を直進してくる敵艦隊の右舷側につける。
「反航戦！　距離は…やや遠いか。霞と初月は警戒態勢のまま！　比叡、砲撃戦いけるわよ！」
「よし！　よーく狙ってぇ……撃てぇ！」
艤装を展開させた比叡、並びに足柄の主砲が火を噴いた。
午後１２：３４
第二艦隊、戦闘開始。

「始まったわ、今のところ優勢ではあるみたい」

「第二艦隊はそのまま戦闘続行。第一艦隊はどうだい」
「相変わらず、ね。しかしヲ級がいないのが気になるわね…」
顎に手を当て、叢雲が言う。複数の部隊が遊弋していたのであれば、おかしくはないが、他に敵影は見当たらない。時折入ってくる、ブルネイやタウイタウイのからの報告にも、交戦している部隊はない。
空軍からもたらされた発見報告に誤りがあったか、あるいは別のヲ級であったか…サムソンも叢雲と似た様なポーズで考えを巡らせる。
「陽動か、あるいは…」
「ともかく、警戒するに越したことはないわね。天気も荒れてきてるし…」
「そうだな。第一艦隊にはその旨伝えてくれ」
「了解」
午後１２：４６
「第二艦隊は優勢みたいだな」
叢雲からの通信を受けた摩耶が、若干嬉しそうに告げる。ヲ級がいないので、本命の部隊ではない…という報せももたらされてはいたが、それと戦友たちの活躍は別腹である。
もし発見、交戦に至らずとも、無事に帰ることが出来れば、機会はまたくるのだから。
「けど、進路は変えないっぽい？」
「あァ、もう少しすりゃあ台湾だ。バシー海峡の哨戒が終わるまでは気を抜くな」
「了解」
「葛城のこと、心配か？」
不意に、摩耶がそう雲龍に尋ねた。
ただでさえ口数の少ない雲龍が、先ほどから発するのは、『了解』のみである。それ以外は空を見上げたり、遠くを見つめていたりと、どこか様子がおかしかった。摩耶はそれに感づいたのだろう。
「少しだけ、ね」
「葛城と何かあったか？　あいつ、朝からちょいと様子ヘンだったもんな」

「……ちょっと、言いすぎちゃったみたいで」
三つ編みの先をくるくるといじりながら、雲龍は言った。その表情はどこか寂し気で、申し訳なさそうでもある。
「口喧嘩でもしたかよ。でもお前から仕掛けるとも思えねーし、葛城に何か言われたのか」
「ううん。私の言い方がよくなかったみたい」
「ほー…まぁお前ら二人、仲いいもんな。だけど喧嘩の一つや二つ、まるでしねぇってのもおかしいだろ」
足柄や比叡としょっちゅうやり合ってる摩耶が言うと、妙な説得力がある。雲龍はそうね、と笑って答えた。
「葛城も葛城でよ、強気なようで案外素直だからな。誰かと言い合いしてるのなんざ見たこともねーよ、提督にゃ割ともの言うけど……ともかくさ、殴り合いつかみ合いの喧嘩したってんならともかく、口喧嘩なんざ、普通に生きてりゃ誰だってすんだろ」
「うん…」
「向こうだってお前と同じように、言いすぎたなって思ってるかもしんねーだろ。戻ってちっと話してゴメンナサイすりゃいいって話だよ。言いづらいってんならあたしが付いてってやっから」
旗艦として、コンディションのよくない僚艦を気遣うのは当然のことと言える。しかし摩耶は例え旗艦でなくともそうしていただろうし、もっと言えば鹿屋にはこういった気風の者達が多い。
艦娘は助け合いだと、サムソンは何処かで聞いたような文言をよく口にするが、それが多かれ少なかれ、彼女たちの心に影響を与えていることは間違いのないことだろう。
雲龍は照れくさそうに笑うと、ゆっくりと頷いて「ありがとう」と、摩耶に言った。
「よぅし！　んじゃーさっさと台湾方面、終わらせちまうか！　艦隊、速度上げ！」

午後１３：１５

「ル級撃沈！　残りは戦艦1に輸送が1！」
初月の緊張した声が響く。航空機が進行ルートを制限したところで足柄が副砲で足を止め、比叡が必殺の徹甲弾で相手を射抜く、単純ながら強力な戦術の前に、ル級と言えど一たまりも無い。
残りは二隻、こちらは隼鷹が流れ弾で小破したものの、他は健在とあれば、もはや勝負は見えている。
比叡は艦隊の速度を落として調息しつつ、空を見上げた。
「本降りになる前でよかった」
「輸送ワ級大破！　あとは戦艦だけよ！」
「おっと…！」
気を抜きかけた比叡が、霞の声に姿勢を正す。魚雷が刺さったのか、黒煙を上げながらワ級がゆっくりと下がっていく。その上空に張り出した黒雲がどこか不吉だが、こうなってはどうすることもできないだろう。戦艦を倒したあと、雷撃で処分すればいい。
比叡は装填の済んだ主砲の先をル級に向け、照準装置とリンクさせる。
が、発砲の必要はなかった。
葛城の放った一矢が再び流星改となって、ル級の直上から突入してゆく。薄暗い空を切り裂いて降下していく様は、正に流星の名に相応しい。
そして、爆発。ル級は金切り声を挙げつつ海中に没し、葛城はふんっ、と鼻息を荒くする。
「ル級撃沈！　比叡、あとはワ級！」
「よーし、艦隊原速に速度落として！　雷撃で処理するよ！」
「初月了解。僕がやる」
言うが否や、初月は背を向け、背中の魚雷発射管をワ級に向けた。
そして発射された魚雷が、もはや浮いているだけのワ級の足下で炸裂する。
「よし…」
「戦闘終了、ね。はぁ、うまく行ってよかったわ」
葛城の言葉に、足柄や隼鷹も同様の反応を見せる。

他の艦艇より一回り以上大きなワ級が、炎に包まれてうめき声を上げる。いくら敵と言えど、それは聴いていて気分のいいものではない。比叡は残弾や燃料のチェックを指示しつつ、進むべき方角を見据えて、進行命令を出した。

その瞬間。

何か、凄まじく速いものが、艦隊の背後から飛来しては、列からやや外れた位置にいた隼鷹の背中に直撃した。

「え？」

大爆発を起こし、隼鷹が転がる様にして海面を跳ねる。

「……え？」

艤装から発せられ、彼女らを護る『障壁』には、自動で防御をする機能もあるにはあるが、意識の外からの攻撃に対しては、さすがに脆い。

鳴り響くアラートと、その爆発に、比叡達は一斉に後ろを振り向いた。

ワ級の大きく膨らんだ腹が裂け、そこから、まずどす黒い血にまみれた手が。

そして一度見たら忘れない、あの頭部のユニットが姿を現す。

「な……!?」

更にその下の、人とそう違わないつくりの顔が。

胴体が。

「ハァァ……使エナイ奴等ダ。モット数ヲ減ラシテクレルモノダト、思ッテイタンダガナ」

「ヲ級……！」

金色のオーラを身に纏い、全身に付着したワ級の血を蒸発させながら、空母ヲ級が誰ともなしに呟く。

頭上の雲は時折、ゴロゴロと音を立て、今にも雷を発しそうである。

そしてヲ級は、目の前にいる比叡達を確認すると、歓喜とも、殺意ともとれる感情を宿らせた表情を見せた。

「マァ、イイカ。サァ、始メヨウジャナイカ……」

「艦隊戦闘準備ッッ!!」

比叡の怒声が、空気を切り裂いて轟いた。

碧雷（3）

午後13：22

「霞は隼鷹を救助、そのあと退避しつつ司令部に連絡！　初月は葛城を護衛しつつ対空迎撃準備！　足柄は副砲！」

「了解！　あンの酔っ払い……世話が焼けるったらありゃしないわ！」

比叡の指示が飛ぶ。足柄はそれを受けつつ、初月と共に、後退していく霞の前に立って、副砲を構える。

まさか、ワ級の腹を裂いて、中からヲ級が出てくるなどと、誰が予測できただろうか。最初から姿を現していれば、また違った結果もあったろうが、残念ながら今この状態は、その限りではない。

ヲ級は首をガクンガクンと振り、口の端を歪め笑うと、頭部の生体ユニットを開口させ、そこから大量の艦載機を吐き出し始める。

「……なんて数…！」

人間とそんなに変わらないサイズであるにも関わらず、射出された艦載機は明らかにおかしな数であった。そしてそれは雲霞の如く拡散し、ヲ級の周りを回転するように飛び回る。

辻褄がまるで合わないその様子を見て、葛城がごくりと唾を飲みこんだ。梓弓を携える手が震えるのを、必死に抑え込む。

ヲ級など、過去に何度も戦ってきた相手であるから、たかが知れている。葛城は心の奥で、そう思っていた。しかし実際はどうだ。隼鷹は一瞬で沈黙し、相手の力はまだ未知数である。

仲間がいるとは言え、予想だにしていなかった強力な敵に対して、己がどこまで太刀打ち出来るのか、と、心が弱さに囚われていくのが、表情、振舞いから見て取れる。

しかし。

「葛城！　発艦用意！」

足柄に背をぶっ叩かれ、そこで葛城は我に返った。

「そうだ…！」

葛城は昨晩、雲龍に切った啖呵のことを思い出していた。もっと

もっと戦って、奴等を皆殺しにするくらいに戦えば、と。
今がその時ではないのか。大本営から命令が出るほど危険な相手を倒したとあれば、誰だって己を認めざるを得なくなるだろう。そう、あの姉ですら。
今がその時ではないのか、と。すんでの処で戦意を取り戻した葛城は、野心に満ちた目でもって、ヲ級を睨みつける。
怯えている場合ではない。恐怖と動揺を、戦士としてのプライドと、そして燃え上がった野心で包み込んで、丸ごと飲み下す。あとはやるだけだ。
「烈風隊、発艦用意……回せぇ！」
言うが否や、葛城は矢筒から矢を引き抜いては番え、力の限り撃ちだした。ＲＡＴＯ（ロケット補助推進離陸）試験型を模したと言われるその矢は、空気を切り裂いて、艦載戦闘機・烈風へと姿を変える。
「フン…レップウ…カ。馬鹿ノ一ツ覚エッテ言ウンダロウ、ソレッテサァ…」
ヲ級は吐き捨てる様にそう言うと、手に持った歪な形の杖を振り上げ、己の周りを旋回している艦載機を、飛来する烈風目掛けて突撃させる。
これもまた、物凄い数であった。一機一機でのスペックは烈風に劣るかもしれないが、その分を数でカバーする算段なのだろう。
殺意が形になったかのような、歪な形のそれに迫られ、葛城は思わず目を閉じかけた。
しかし、それをさせる初月ではない。
葛城を護る様に飛び込んできた初月は、長１０ｃｍ砲をフル稼働させ、対空迎撃を開始する。
「やれると思うな…！」
「初月！」
昨日の演習で見せた迎撃よりも、更に精度の高い対空砲火が、ヲ級の艦載機を叩き落しては海の藻屑に変えてゆく。
制空権など絶対に取らせるものか、と言わんばかりの気迫を纏い、彼女の肉体、艤装はフル稼働する。

まだそこまで練度の高くない初月が、普段以上の実力を発揮出来ているのには、昨夜雲龍と交わした約束が、彼女に力を与えているからだ。

ここで不甲斐ない働きをすれば、艦隊は更なる被害を被るだろう。敗北した挙句、怪我人が、あるいは死人が出るかもしれない。

そんなものは、軍艦（いくさぶね）であった頃だけでもう、十分だ。

だから、護ると決めた。初月は海面を縦横無尽に疾走しながら、立て続けに艦載機を落としていく。

「ナンダ…オマエ……！」

「覚えておけ……僕は初月……防空駆逐艦・初月だッ！」

余裕をかましていたヲ級の顔から、笑みが消える。先だって襲撃した呉の部隊にはいなかったタイプの相手を前に、思うように事の進まないが故か、次第に表情は苛立ち、そして怒りへと変わっていく。

更には、対空迎撃を潜り抜けた己の艦載機も、葛城の放った烈風に駆逐されていくのだから、ヲ級の心中たるや穏やかではないだろう。

そして、そこを逃す比叡ではない。

狙いを付けず、牽制目的でばら撒かれていた足柄の副砲の合間を縫って、４１ｃｍ砲が火を噴く。

その砲弾は正確な狙いでもって、ヲ級の頭部に炸裂した。

「やった……!?」

九一式徹甲弾の直撃である。例え撃沈は免れても、大ダメージは避けられないだろう。艦隊に若干ではあるが、安堵の空気が流れる。しかし。

その台詞はよくない、と軽口を飛ばそうとしていた足柄であったが、すぐにそんな状況ではない、ということを理解する。

「殺ッタトデモ……思ッタカ？」

爆炎が晴れ、風に消えていく。

その中から、ヲ級の声が響く。

「う…嘘…！」

バラバラと砕けて落ちていくのは、艦載機であったもの。

ヲ級は己の周囲を旋回させていた艦載機を、シールドの如く使っ

て、徹甲弾の直撃を防いだのである。
「オマエラノ艦載機ト、同ジダト思ウナヨ……」
「ちッ……それなら、全部叩き落してやるまでよ！」
闘志の衰えない葛城が、更に矢を番え、引き絞っては狙いをつける。
ヲ級は再びにたりと笑うと、頭部ユニットから、先ほどよりも大量の艦載機を吐き出しては、己の周りに展開させてゆく。それはさながら、黒く渦を巻く竜巻のようでもあった。
更にはそれに呼応するかの如く、頭上の黒雲が拡大してゆく。ヲ級がこの行動をすることで、まき散らされた重金属が、何らかの効果を及ぼして、雲を呼ぶのだろう。
「まだ、あんなに…!?」
「同じことよ！　初月が撃ち落として、私が抑え込んで！　比叡さんと足柄さんがその隙をつけばいいってだけじゃない！」
「残弾はまだある…けど、あいつ、どれだけ艦載機を出せるの…？」
腰を落として構えつつ、足柄が吐き捨てるように言う。初月と葛城が落とした艦載機は、十や二十ではきかない。しかし今再び、ヲ級の周りを飛び回る艦載機の数は、その何倍もいるように見えた。
「オ喋リハ終ワリカ…？　ジャア、コッチカラ…仕掛ケルゾ…」
竜巻の中心にいるヲ級は、足元に浮いたまま口をぱくぱくさせているワ級に腰を下ろすと、手にした杖を比叡たちに向ける。
それを合図とし、竜巻を形成していた艦載機の一群が、物凄い速度でもって、突撃を仕掛けてきた。
普通、攻撃機や爆撃機というものは、機体に懸架した爆弾を投下して、攻撃とする。これは艦載機の違いこそあれど、艦娘側と深海側に共通する攻撃パターンだ。
しかしヲ級の放ったそれは、機体そのものの質量を爆弾として「ぶつかって」くるのだった。
先ほど隼鷹が食らった一撃も、おそらくそれであろう。
「くッ…!?」
「アハハハァ、コウイウノ、何テイウンダッケ……？　オマエタチガ、大昔ニサァ……追イ詰メラレテ、自棄ニナッテサァ……ヤッタヨ

ナァ…？」
　飛来する艦載機を撃ち落とし、あるいは避けながら、艦隊は徐々に分断されてゆく。間隙を縫って砲撃を敢行するものの、狙いのつけづらい状態での攻撃は、ヲ級が殆ど動いていないのにも関わらず、まるで命中しない。そして運よく命中コースに乗っても、艦載機のシールドに防がれる。
　通常のヲ級では考えられない、攻防一体のその戦術は正に、脅威であった。
　ヲ級はわざとらしく考えるフリをしていたが、やがて嘲るような笑みでもって、口を開く。
　その言葉は電波に乗っているのか、艦娘たちのインカムにもはっきりと届いていた。
「ナァ、教エテクレヨ……物資モ人間モ足リナクナッテサァ……少シデモ道連レニシテクタバッテヤルツモリデサァ……デモ、結局大シテ効果ガ無クッテサァ……」
「あいつ、何を……！　くそっ、三式弾は山城が積んでるんだったわね……！」
　対空迎撃に効果のある三式弾は、鹿屋には一つしか存在していなかった。そしてそれは、第一艦隊にいる山城が装備していて、こちらには無い。
　しかしそれでも、普通の相手であれば摩耶と初月、そして他の空母達で事足りていたのだから、これは装備開発をそこまで重要視していなかった、サムソンの失態であろう。
　こうなってしまった以上は歯噛みしても仕方ないと、足柄はとにかく副砲でもって、迫りくる艦載機を迎撃し続けていた。
「タシカ…ソウ…カ・ミ・カ・ゼ…ダッタッケ？」
「！　お…まえ…お前えええッ!!」
　そんな折、ヲ級が下卑た笑い顔を見せながら、とうとうその言葉を口にする。
　それを受け、比叡の怒号が轟く。ヲ級が何を言いたいのか、ということは、そこにいる誰もがわかってはいた。しかし改めて、嘲笑する

ような口調で言われたとなれば、これを看過することは出来ない。
砲撃音すらかき消すようなその叫びに、空気がびりびりと震える。
神風――特攻という作戦の是非はどうあれ、命をかけて戦い、散っていったかつての勇士達に対する思いは、全ての艦娘…いや、艤装の中に宿っている。それを馬鹿にされ、あまつさえ模して仕掛けてくるのだから、比叡の怒りは正に天を衝く勢いである。
主砲四基八門が一斉に火を噴き、迫りくる艦載機を破砕してゆくが、どうしてもヲ級にまでは届かない。だが比叡はそんなものに構いもせず、凄まじい勢いで攻撃を続けた。
「アハハハハハ!! 怒ッタ、怒リヤガッタ!! 人間ガ怒リヤガッタナァア! ダッタラ、ドウスル? ドウスルンダ? エエ? 教エテクレヨ、ナァ!」
「その顔面、桜島の火口みたくしてやるッ!」
相手の言葉に乗ってしまう比叡ではあるが、その怒りは本物であった。
主砲を再装填する際の隙を副砲でフォローしつつ、目の前に飛んでくる艦載機を、障壁を纏わせた拳で叩き落していく様は、正に戦艦と名乗るに足る、極めてパワフルな戦い方である。初めて見る比叡のその表情と、普段の明るく温厚な彼女とのギャップに、葛城と初月はぶるりと背を震わせる。
それに対して、足柄は極めて冷静であった。かつて自分たちが行ったこと、それを揶揄されたことに対して、忸怩たる気持ちはある。
比叡のように熱くなることが悪手であるとは言うまいが、全ての者がそうなれば勝利は危うい。誰かが、冷めた頭で全体を見ていなければならない。
そしてそれは、己の役目であると、足柄はわかっていた。
「比叡……あれじゃ、長くはもたない……!」
足柄はそう呟くと、ちらりと後方に目を向ける。
そこには嵐のような艦載機攻撃を潜り抜け、回避することしか出来ずもがく葛城がいた。
「やはり、空を抑えないことにはね…!」

やれやれといった具合で足柄は笑い、ＦＣＳのコントロールパネルを呼び出し、魚雷の信管設定をいじってはセットした。
そして葛城の前に滑り込むように立つ。颯爽と現れた足柄に対し、葛城が若干ではあるが安堵の表情を浮かべ、問いかけた。
「足柄さん!? ど、どういう作戦……？」
「撃ちなさい！ あいつの意識は今、比叡に向かってるけど、すぐにこっちにも攻撃してくるわ…だから今がチャンスってわけよ」
「で、でも！」
俄かには信じがたいその言葉に、葛城が異論を唱えた。確かにこちらへ飛来する敵艦載機の密度は、比叡が激昂する前よりは薄くなっているように思えたが、だからといってゼロではないのだから。
発射の意思を伝えるだけで済むタイプの砲とは違い、艦載機の発艦にはいくつかの手順がある。そしてその間は、数瞬とは言え無防備な状態をさらす事になる。
葛城はそれを恐れているのだろう。無論直撃を貰ったとしても、障壁が機能して、即座に撃沈することはないが、艤装が破損してしまえば、空母というものはただの的となる。
「心配しなくていい。私があなたを守るわ…一発ないし二発くらいなら、耐えることは出来る」
「けど、それじゃ足柄さんが……！」
頭上を掠めていく艦載機に怯えつつ、それでも葛城は足柄の身を気遣う。しかしそれは、逃げでもあった。
「落ち着きなさい！ 今さっき、アンタ言ったわね!? 全て叩き落してやるって！ それは単なるハッタリだっての!?」
「ち……違う……でも…」
自分をかばって、足柄が大破してしまえば、あとはもうジリ貧となるだろう。比叡がいくら強くても、あのヲ級を倒しきれるかどうか怪しいというのは、誰の目にも明らかであった。
つまりここで失敗すれば。自分が責務を果たせなかったら。葛城はその重責に囚われて、心が逃げそうになっているのだった。
「デモもストライキもあるかッ！ それに、初月を見なさい、必死に

艦載機を落としてる！　私たちを護るために！　それすら無駄にするってえの!?　したいっての!?」
足柄は徐々に口調や態度をヒートアップさせつつ、発射管を前方に向けて、大量の魚雷を撃ち出した。
そしてそれは、ヲ級を狙ったものではない。
「……っ」
感情の浮き沈みが激しく、また経験の乏しい葛城にとって、目まぐるしく変化していく今の状況は、想定外のものであった。
先ほどまで抱いていた野心、闘志は、簡単なことで萎んでしまう。軍艦であった頃、苛烈な戦闘を経験していないというのもそれに影響を及ぼしている。
早い話が、彼女は着任以来、『ピンチらしいピンチ』に陥ったことがないのだ。
戦闘こそすれ、いつも傍には誰かがいた。フォローしてくれた。無理をさせないサムソンの指揮もあいまって、そうなる前に撤退することもできた。
だが今は違う。一手誤れば、ただでは済まない。
その事を威勢と虚勢でごまかしてはきたが、それも圧倒的な暴力の前には限界がある。
「そ、そう！　に、逃げる！　撤退するって手もあるんじゃないの!?」
「隼鷹がやられた時点で、そのことは司令部に伝わってる！　けど、撤退命令は来ない！　来ないってことは、恐らく通信障害が発生してるのよ！　つまりここであいつを倒して距離を取らない限り、逃げるなんて事は出来やしない！」
副砲で艦載機を落としては行くが、それでも限界はある。足柄の障壁はじわじわと削られ、艤装も損耗してゆく。
比叡の攻撃を受けながらもなお治まらないヲ級の暴風。規格外の業に対して打てる手は、もう殆ど残っていない。
そんな折、足柄の放った魚雷が、何もない位置で爆発し、巨大な水柱を噴き上げた。

それは、こちらへ向かっていた艦載機を数機巻き込んで、壁となる。
「だ、第一艦隊が救援に……！」
「そんなものが間に合うかッ！　黙って死にたくなけりゃ、腹ァ括んなさい！」
そこまで言われてようやく、葛城は震える手で、矢筒から矢を取り出す。ヲ級の近くには比叡、その背後に付いて必死に迎撃をする初月。そして己の前に立って盾となる足柄。
そして大破し人事不省の隼鷹と、それを退避させて下がる霞。
この五隻の命運が、まだ無傷といっていい己の双肩にかかっているとすれば、その責任は重い。葛城には荷がかちすぎる。
「わ、私の力じゃ……」
「やるだけやって、それでも無理だったとしても！　例え死んでも…誰もあんたを責めたりなんてしないわ！　けど、やりもしないで逃げるのは……戦ってる仲間を裏切るようなことは…するんじゃない！　あんただって！　艦娘でしょうが！　空母なんでしょうがッ！」
二射目の魚雷が炸裂し、再び壁となる。しかし、もはや限界であった。
「何シテンダヨ……水遊ビナンテシチャッテサァ……！」
「くっ……!?」
散らせていた艦載機を半分に分け、ヲ級は片方を比叡に集中、そしてもう片方を、足柄と葛城の方へと差し向けた。「避けて！」という、初月の必死な声が届く。
『努力に憾みなかりしか』って、私、座学の時に教えたわよね。あなたが必死に訓練して、努力してたの、知ってるわ。私だけじゃない、雲龍だって、ちゃんと」
「あ……しがら、さん…」
「あなたなら、やれる。艦だった頃のことなんて関係ない。あなたはちゃんと強い…できる。そうでしょう、なら……しっかりと前を向いて……撃ちなさい……葛城ッ!!」
足柄の叱咤が、葛城の耳朶を打つ。だが次の瞬間、足柄の障壁は弾け飛び、彼女は大爆発に巻き込まれて海面を転がった。

仲間のステータスを表示するウィンドウに、大破の文字がおどる。魚雷が噴き上げた海水を浴び、葛城はうなだれたまま、歯を食いしばった。
「当タリデゴザイ……ッテナァ……ジャ、次ハオマエダ、弱ッチイ空母サンヨ……」
「葛城、逃げろ！　第一艦隊と合流……くうっ！」
比叡について援護をしていた初月が、悲痛な声をあげる。しかしすぐに艦載機に追われ、その対応を余儀なくされる。
比叡もまた、何も言わないものの、葛城を見ては、悟ったような笑顔を浮かべた。
それを見て、葛城は飛び出してくるのではないか、とすら思える心臓を抑え込むように、思い切り胸を叩いた。
そして。
「う…う…うううう…あああああああッ!!」
艤装の排気口、排熱口、その全てから、青白い蒸気が噴出し、葛城の姿を隠す。
そして矢筒からは全ての矢が飛び出し、葛城の周りを旋回し始める。葛城はそれを手に取っては番え、腹の底から、鬨の声を上げた。
恐怖を、不安を、忘れるために。
恐怖を、不安を、今この時だけでも忘れられるように。
共に戦う仲間と、生きて帰るために。
「あああああああッッ!!」
積み重ねてきた修練は、彼女の波立つ心とは裏腹に、正確な姿勢、力の配分をもって形となる。
体が覚えた正射必中の構え。
そして左腕を覆う、甲板模様の手蓋から発生する蒼のオーラが、鳥居のような紋様を投影しつつ回転を始め、上腕部にある甲板型木符から伝達されるエネルギーの大きさを物語る。
「葛城は……葛城は空母なんだからッ!!」
放たれる矢には何の区別もない。
烈風も、流星改も。彼女の持つ全ての艦載機が、猛烈な勢いで攻撃

を開始した。
全ての矢を撃ち出した葛城は、変貌した艦載機のコントロールを、搭乗員たる妖精さんによるオートマチックから、全てをマニュアルに切り替えて、ヲ級の目だけを睨みつけている。
髪の毛から迸る、蒼いオーラがぱちぱちと弾け、ヲ級の纏う金色のオーラと対照的な色合いを見せていた。
「来い、クソ野郎ッ……！」
「チッ……アイツ、ビビッテルンジャナカッタノカ……マァイイ、ソッチノ方ガ楽シイモンナァ……」
比叡と初月を処理しようとしていたヲ級が、大量の艦載機を移動させ、飛来する艦載機部隊に突撃させた。
戦艦の攻撃にだけ注意していれば、あとはどうとでもなる。そんな意識が透けて見える。急に退いていく敵機を前に、初月は追おうとするものの、流石にダメージは無視できないレベルで蓄積していた。
「くそっ、動け……！」
初月はがくがくと震える己の足を叩きつつ、そう叫んだ。そんな折、初月のインカムに、ノイズ混じりではあるが、通信が入る。
『……ら、…応答……、そちらに到着……10分……』
「通信…!?　え、何だ…!?　こちらは鹿屋基地所属、初月…よく聴こえない、応答…！」
『……こち……、救援要請……呉……すぐに……』
「呉!?　呉の部隊が来るのか……!?」

午後13：40

「もっとスピード上げるっぽい！」
「うるっせえぞ夕立！　全艦一杯でブン回してんだ、ガタガタぬかすな！」
「でも、でも！　隼鷹さんがやられたって…！」
司令部から入った通信を受け、第一艦隊は今、第二艦隊が交戦して

いる海域へと急行する最中であった。
艦娘のステータスは、常にモニターされて、司令部に届く。ただそれは、通信状態に左右されることが多い。救難信号や撤退要請などといった、重要度の高い通信は、特に強い電波で発信される上、艤装に備わる障壁には、電波を安定させる働きもある。しかし今回、ヲ級の形成した重金属雲は、それすらも阻んでいた。
そこで、通信障害が出る前に大破し、司令部に伝わった隼鷹のことを受けて、サムソンは第一艦隊に対し、現場へと急行するように命令を出したのだ。
しかし当然ながら、距離はある。航路を第二のそれに寄せていた摩耶の機転で、いくらかの時間は短縮出来たが、それでも全速航行で数十分はかかるだろう。
ともすれば飛び出して行きかねない夕立を必死に制しながら、摩耶は苦虫を噛み潰したような表情でもって、前方を見据えた。
黒い雲が広がる、その海の上で今、比叡たちは戦っているのだ。
「あの酔っ払いが簡単に死ぬようなタマかってんだ！　おら提督ゥ！　状況はどうなってんだ！」
『落ち着け摩耶、手は打ってあるんだ』
「あァ!?　第三艦隊でも出してるってのか！　だが間に合うってのか！　どうなんだ！」
『違う。君達のプライドもあるから、悪手だとは思ったが…』
中々結論を言わないサムソンに対し、摩耶が遂に痺れを切らしたのか、艤装をガンガンと叩きながら声を張り上げる。
「あたしらの事なんざァどうでもいいんだよ！　あいつら助かるってんなら何でもいい！」
『摩耶ならそう言ってくれると思ったからね。呉の部隊に援軍を頼んだ』
「呉ェ…？　マジか…呉の部隊が向かってんのか!?」
『そうだ。向こうにも都合はあるだろうから、ダメ元で頼んでみたんだが……それは要らない心配だったみたいだ』
しかし、皆が安堵の表情を浮かべる中、摩耶はすぐに苦い表情へと

戻り、更に声を張り上げる。
「だがよ提督！　呉から間に合うってのか!?」
『だから落ち着け摩耶。呉の部隊は快速艇に乗り込んでる……あそこには明石さんがいるからな、魔改造された超快速艇だよ』
「明石…そうか、なるほど…だがそれだって完璧じゃあねえだろう、途中でポッと出の敵部隊に襲撃されたらどうなんだ！」
快速艇は主に、遠方の海域に赴く際に使われる、大型の輸送艇である。速度と航続距離を重要視し、また深海棲艦には通常兵器が通用しないという観念から、余計な武装は装備されていない。
それゆえ重金属粒子でレーダーを欺いた敵が、不意打ちを仕掛けてきた場合、どうしても対応が後手になる。摩耶はそのことを危惧しているのだろう。
『だから、第三艦隊を出した。呉の部隊の進路上を先行させて、哨戒に当たらせている』
「お、おう！　それならそれでいいんだ。けど……それなら、第三艦隊を救援に回してもよかったんじゃねえか？」
『オペレータの叢雲、矢矧を除くと、艦隊を組めるのは朝霜、清霜、磯風、雪風、時津風の五隻だけだ。彼女たちが頼りないと言うつもりは毛頭ないが、それでも不安は残る。だから、呉に頼んだんだ。意趣返しをしないまま黙ってるんですか、ってね』
大本営がどうと言うかは判らない上に、他力本願とも言えるサムソンの策であったが、そんなものは現場の艦娘達には関係の無いことだ。上と交渉するのは責任者たるサムソンがやればいい。
「大体わかったぜ。だが万が一ってなァいつだって気にしておくべきだ。あたしらはあたしらで全速で向かう」
『今回の相手、予想以上みたいね。あなた達も十分に注意して』
「ああ、わかってる」
叢雲の言葉を受けて、摩耶は通信を終了させた。
「よし、んじゃあこのままぶっ飛ばすぜ！」
「ぽい！」
「了解！」

「心配するな雲龍、葛城はきっと上手くやっておる」
第二艦隊のいる方角を、不安げに眺めていた雲龍を、利根が励ました。隼鷹が戦えなくなったとあれば、必然的に彼女の仕事が増える…その重圧に負けていなければ良いが、という思いは、そこにいる誰の心にもあるのだから、利根の言葉は雲龍に対してというより部隊の皆に対しての言葉だろう。
「葛城もそうだけど、初月が心配だわ」
「むう」
「対空迎撃の必要性から考えて、隼鷹を退避させたのは霞でしょう。いくら初月の迎撃が上手いからって、一人でやれることには限界があると思う……けど、私……あの子に、言ってしまったの」
雲龍は視線を落とし、昨夜、初月と話したことの内容を、ぽつりぽつりと語り始めた。
葛城の慢心を諌め、それで言い合いになったこと。葛城を護るよう、初月に頼んでしまったこと。
「軍隊という括りであるなら、確かによくないことだとは思う。個人の感情を、作戦行動に反映してはならぬからな。しかし、敢えて言えば…それは、姉として当たり前の感情ではないのか？　例え我輩がお主の立場だったとして、頼んでしまわぬという保証は無いと思うがのう」
「……初月は真面目で責任感の強い子だわ。自分のことより、私の言葉を優先するかもしれない。私は、それが怖い」
初月が葛城を護ろうと傾倒するあまり、他のことが疎かになるのではないかと、雲龍は恐れているのだろう。
駆逐艦の務めであるとはいえ、自分の命すら投げ出して、葛城を護ってしまうのではないかと。
「もし、万が一、初月に何かあれば……」
「それは自分のせいだ、とか言わないでよね」
「そうだよ雲龍さん！　うまく言えないっぽいけど、あたし達だってそれぞれ役割があって、それぞれ頑張ってるんだから。雲龍さんに言われなくたって、初月は葛城を…ううん、皆を護ろうとするんじゃ

ないのかなあ」
「足りない部分を補いあって戦うのが、私たちでしょ。その結果がどうあれ、納得するしかないと思うけど」
摩耶が拳を掌に打ち付け、更に続ける。
「あたしらは確かに、戦って殺して、勝つ為の道具かもしれねぇがよ。でもだからって、自分の心まで殺して、ただ命令に従うだけの道具にまで落ちるこたァねぇと思うんだわな。そうしないと勝てねぇってんなら、勝てるようにまとまって、助け合って行くしかねえんだよ。だからお前が初月に言った事が、間違いだって否定する事ぁできねえよ。そんな奴がいたら、あたしは誰だってぶっ飛ばしてやるよ」
「それは……うん。そう、ね。そうよね……」
摩耶、夕立、山城、利根、千代田の言葉を、雲龍はぐっと噛みしめるようにして、頷く。金色の瞳に宿る意思には、衰えは見られない。
利根はふふん、と笑うと、声を張り上げた。
「ほれほれお主ら、お喋りはこれまで！　全速全速！　摩耶、船足が落ちておるぞ、我輩が旗艦になってもいいが？」
「るせぇ！　余計な心配だってんだよ！」
「摩耶さんはお尻が大きいからなぁ」
「はァ!?」
「確かにそうよね、これからクリスマスとお正月で、もっと油断しちゃうんじゃないの」
夕立と山城の口撃に、摩耶が赤面して拳を振り上げる。
尻に関してはどうやら図星であったらしく、騒ぎが落ち着いたあとでも、尻を妙に気にする動作がそこここで見られた。
ちなみに千代田はもっと尻が大きいが、それは周知の事実なので、指摘するものはいない。
ともあれ、第一艦隊は全速でもって、現場へと急行する。

午後１３：５０

「比叡さん！　燃料は!?」
「まだいける。足柄の様子はどう!?」
「気絶しちゃいるけど、呼吸はあるし、命にかかわるケガも無いみたいだ」
葛城の支配下に置かれた艦載機と、ヲ級が操る艦載機。その群れが先ほどから、凄まじい空戦を繰り広げている。
その交戦高度は極めて低く、下手に砲撃をしたり、雷撃で海水を噴き上げたりすれば、葛城の艦載機にも命中する可能性があるため、比叡と初月はその攻防を見守ることしか出来ないでいた。
それでも初月は足柄の様子をチェックし、比叡に対して燃料を融通できる程の余裕はあるようだ。
更に初月は、ヲ級に聞かれないよう、小さな声で呉からの増援についても報告していた。
ポーカーフェイスというものが出来ない比叡だが、ガッツポーズをしようとするのを何とか抑えつつ、初月の肩を抱き寄せて言う。
「今のうちに呼吸を整えておくよ」
「うん……！　葛城……頑張れ…！」
葛城は両の手を広く開いて、ただ一点、ヲ級の目だけを睨みつけている。
お互いに移動はしない。ヲ級はワ級の残骸の上に立ち、葛城を苛ついた表情で見下ろしていた。
烈風が敵機を落とし、防御に穴が開けば、すかさずそこに流星改が突撃し、爆撃を仕掛けようとする。そこに更に、ヲ級の艦載機がカバーに入る…といったやり取りを、両者一歩も譲らずに繰り広げているのだから、どちらにも余裕はない。
艦載機と艦載機が交錯し、ぶつかり、墜落してゆくが、その殆どはヲ級のものであった。数で勝るとは言え、覚悟を決め、恐怖を抑え込んだ葛城の艦載機は、凄まじい機動でもって相手を翻弄する。
このまま戦いが進めば、おそらくはヲ級の防御も薄くなるだろう。そうなれば、比叡と初月が攻撃を仕掛けることが出来る筈だ。
「忌々シイ奴ダナ……オマエ……葛城……ッテイウノカ……確カ、

ソンナ名前ノ艦ガイタッケナァ……」
深海棲艦たちの出自については、殆どが判っていない。言語をある程度解する個体がいることと、艦娘たち同様に、過去の記憶を保持している、ということだけは、これまでの戦いで判明してはいる。
しかし、それだけである。
ヲ級が葛城を知っているのか、という事について、初月が息を飲んだ。
「ロクニ戦イモセズ、訓練バッカリシテテ、空母ナンテノハ名前ダケ……」
直上に侵入してきた流星改を追い払いつつ、ヲ級が挑発めいた文言を口にし始める。
比叡はショートの髪の毛を艤装からの熱で逆立たせつつ、それでも拳をぐっと握りしめて耐える。今ここで再び挑発に乗れば、それは迂闊ということが判っているからだ。
「挙句ノ果テニハ復員船……ダッケ？　ソンナンデ使イ潰サレテ、オシマイノ一生ダ…ソンナ情ケナイ艦ダロ、オマエハサァ」
「……だから？　だからどうしたクソ野郎。その情けない艦相手に、防御一辺倒で何も出来ないのは誰？　目の前にいるアンタじゃないの？　笑わせるわね、結局不意打ちでしか私たちと戦えない、情けないやつ」
しかし葛城は冷静であった。突撃してくる艦載機を、落ち着いた表情でもって叩き落す。
明らかに押しているのに、その艦載機の操作に慢心はまるでない。あまつさえ、挑発を挑発で返せば、ヲ級の表情が見る間に歪んでいく。
「ソノ口引キ裂イテ、魚ノ餌ニシテヤルヨ」
「その口引き裂いてぇ～～？　魚の餌にしてやるよぉ～～？」
間延びした声と、嘲るような動きで、葛城がオウム返しに言う。煽り耐性の低い葛城とは思えないほどの、狡猾な返しだ。彼女の頭は今、完全に冷めきっているようである。
それが決定的だったらしく、ヲ級は杖をワ級の残骸に突き刺すと、最低限の防御だけを残し、艦載機を突撃させた。

「死ネ、死ンデ沈メェエ！」
ヲ級の叫びを受けた葛城が、腰を落として身構えた。手蓋の鳥居紋様が更に光を帯びて、艦載機たちに力を伝達する。飛び回っていた烈風は方陣を組み、流星は高く舞い上がって旋回し、降下に備える。
この一合で、勝負はつくのだろう。比叡と初月は舞い上がった流星を目で追っては、タービンの回転数を上げていく。
だが、それが災いした。
比叡達は気付いていなかった。杖を突きさされたワ級の残骸が、徐々に溶解し、黒い霧となってヲ級のユニットに吸い込まれていくのを。
「来い、クソ野郎ッ！」
そして葛城の、凛とした声が、戦場に響き渡る。

碧雷（４）

午後１３：５５

雨が降り始める。上空では、雷が轟く。

その空の下、葛城の艦載機と、ヲ級の艦載機がぶつかり合い、火花を散らす。

交錯の度にヲ級の艦載機はその数を減らし、徐々に防御の層が薄くないっていくのが見て取れた。

だが葛城とて無事ではない。攻撃によるダメージは無いものの、彼女の鼻腔からは止め処なく血が溢れ出て、胸元を赤黒く染めている。

「葛城ッ…！」

本来オートマチックで動く艦載機を、単機ならばともかく、全て脳波によるマニュアル・コントロールに切り替えたのだから、その負荷が体に与える影響は計り知れないものがある。

遂にはその右目も真っ赤に染まり、やがて血涙が堰を切ったように流れ出す。

だが、葛城は微動だにしなかった。今ここで気を失おうものならば、これまでの働きが無駄になる。そんな思いが、血と共に溢れて、海面に消えてゆく。

「葛城、もういい！　あとは僕たちがやる！」

血に染まり、酷い見た目になり果てた葛城の姿を見て、初月が悲痛な叫びを上げる。しかし、それは届いているのか判らない。

最後の一合、それは彼女にもわかっているのだろう。だからこそ、やり遂げたいのだろう。

「だい……じょう、ぶ……負けない……負けて……たまるかァアアアアアア!!」

「来ヤガレ、薄ッペライ泥船ガァアアアアッ!!」

お互いの意地が咆哮となり、混ざりあう。

烈風はその名の通り烈しい風となって、ヲ級の艦載機を吹き飛ばし、そして消えていく。

次に、流星。宙を流れ、死を訃る星は、高く舞い上がったのち、ヲ

級の直上から侵入、そして爆弾を投下した。
勝った。おそらくは。
だがそこで、初月はある事実に気付く。抜群の動体視力を誇る彼女の視界、そこに映るもの全てはスローモーションとなっていたが、今正に必殺の一撃を貫わんとするヲ級の足元……
ワ級の残骸が、影も形も無くなっているということに。
「かつ……！」
だが、もう遅い。
ヲ級のユニットが口を開き、己の上空を覆うように、黒い霧を吐き出す。そしてそれは、コンマ数秒の早さで新たな艦載機となって、爆弾を受け止めた。
凄まじい威力の爆発が巻き起こり、圧と衝撃、そして爆風が周囲に広がっていく。
「やったッ！」
「うううう……ッ」
比叡の嬉しそうな叫びをよそに、初月は唸り声にも似た威嚇の声を絞り出す。
それに気づいたのは恐らく、自分だけであろうという直感が、彼女の本能に訴えかけて、肉体がそれに付随して動く。
葛城の様子から察するに、彼女にはもう、戦う力は残っていない筈だ。頼みの烈風ももうない。だとすれば。
護れるのは己だけだ。初月は吠えた。友のため。そして勝利のために。
「葛城ィイイ!!」
だが次の瞬間。
爆炎の中から、ヲ級の艦載機が飛び出し、初月の脇腹の辺りに直撃した。障壁などまるでなかったかのような、強烈な一撃である。伝わった衝撃は艤装を紙のように破壊し、被服までを弾けさせた。
葛城を助ける…その一点のみに意識を集約させていた初月は、それを避けることも防ぐことも、出来なかった。
「がッ……！」

「初月!?」
瞬間のことで、状況を飲み込めないでいた比叡であったが、それでも初月が大破し、吹き飛んだことだけは判った。
そもそも何故初月が葛城の方へと走ったのかも、不明瞭なままな比叡であったが、爆炎が晴れるにつれ、すぐに事態を理解する。
ヲ級の周りには、新たな艦載機が渦を巻いて飛び回っていたからだ。
「な、なん…で……!?」
「アハハハハ、アーア……ヨク頑張ッタンダケドナァ……」
破片か何かで傷を負ったのか、若干ではあるが出血の見られるヲ級が、そう笑っては、千切れかけてぶらりと垂れた己の左小指を、ばきりと噛み千切った。
「アンマリ時間モ残ッテ無イケドサァ……ソコノボロ船片付ケタラ、相手シテヤルヨ」
小指と共に吐き捨てた、時間が残っていないという、理解の外にある言葉を聞きつつも、比叡は既に主砲をヲ級へと向けていた。
葛城は立って項垂れたまま微動だにしておらず、流星改もいつの間にかその姿を消していた。それは彼女の意識が途切れているか、あるいはその寸前であるか、だ。
呉からの援軍が来るとは言え、あのヲ級の暴力ならば、残った四隻を殺しきることなど、赤子の手をひねるよりも容易いことだろう。それを為したあとで、逃げるなり戦うなりすることも出来る。
それだけはさせてなるものか、と、比叡は主砲を一斉発射した。
「フン……物覚エノ悪イ奴ダナァ」
だが、徹らない。
徹甲弾をシールドで防ぎつつ、ヲ級はそう呟き、大量の艦載機を比叡に向けて射出する。一機一機が必殺の威力を持つ、殺意の具現化である。
「くっ……!」
「オマエハソイツラト遊ンデナ……」
ヲ級は比叡にそう言って笑いかけると、立ったままの葛城に近づい

ていく。
殺すだけならば艦載機をぶつければいい。しかしそれをしないのには、何か理由があるのか。比叡はもはや声の体を為していない叫びをあげ、葛城の覚醒を促す。
しかし、葛城まであと数メートル、といったところで、ヲ級の足が止まる。
「アァ……？　マダ生キテンノカ、オマエ」
「やら…せるか……！」
ボロボロになった初月が、ヲ級の足にしがみ付いて、その歩みを止めている。
轟沈のステータスは出ていないものの、艤装は大部分が破壊され、もはや障壁を展開させることも出来ない。しかしそれでも、初月は葛城を護るべく、ヲ級に食らいついていた。
「…ソンナ余力ガアッタナラ、トットト逃ゲリャアイイモノヲサァ……ナニ？　自己犠牲ッテヤツ？　友情ッテノ？　デモ意味ナクナイ？　死ヌ順番ガ変ワルダケジャナイ？　コウイウ風ニ……サァ！」
次の瞬間、ヲ級の蹴りが初月の腹にめり込む。鍛えているとはいえ、むき出しになった白い腹に蹴りを受ければ、ただでは済まない。初月は吐瀉物をまき散らし、腹と、灼ける喉の痛みに悶絶した。
そして、更にもう一発。
「あ…ぐッ…！」
「艦載機……タクサン落トシテクレタッケナァ、オマエ……生意気ナ顔シチャッテマァ……」
次は顔面。足の甲で鼻っ柱を強打され、鼻血が迸る。
艤装が発生させる浮力が働き、水中に沈んで威力を殺すことは出来ない。ヲ級はそれをいいことに、初月を何度も何度も蹴り、踏みつけては、その髪の毛を掴んで引きずり上げる。
殺すだけならば、頭蓋なり頚骨なりを踏み砕けばよいものを、ヲ級がそれをしないのは、初月の小賢しい業で、己の艦載機が数多落とされた恨みがあるからだろう。
「げぇっほ……げほッ！」

「アトデチャアント、殺シテヤルカラサァ…モウ、スッコンデロヨナ……ナンダッタラ、自沈シテモイインダゾ…」
「初月ィイイイイ!!!!」
比叡の絶叫を背に、ヲ級が何度目になるか判らない、歪んだ笑みを浮かべる。そして血と吐瀉物にまみれた初月を投げ捨てると、今度こそ葛城の方へと進みだした。
だが。
「やらせないって……言ってるんだ……」
「オマエ……!」
ヲ級の足首を掴んだ初月が、くぐもった声で言う。
ニヤニヤと笑っていたヲ級の顔から、笑顔が消え、怒りのそれへと変わってゆく。
「護るって……約束したんだ……僕は嘘つきになりたくない……だから……」
「ダ・カ・ラ？　ダカラナンダ？　嘘ツキニナリタクナキャ、オマエ、モウ死ネヨ」
もはや初月と言葉を交わすことに飽きたのか、ヲ級は手にした杖を振り上げ、尖った先端を初月の首目掛けて振り下ろす。
ぶつり、と。肉の裂ける音が漏れる。
傷口から、血があふれ出す。
黒い、黒い血が。
「ナニ……？」
ヲ級は振り下ろす手を止め、後ろを振り向いた。
「初月から……離れろ……クソ野郎……」
そこには、シールドの裏にマウントしていた打根（うちね）……矢を短くしたような形の投擲武器であるが、それを持った葛城が、いまだ闘志の衰えない碧い目でもって、ヲ級を睨みつけていた。
艤装は無事だが、機能は停止しているようだ。恐らくは『神経叢』が何らかの機能不全を起こし、艤装とのリンクが絶たれているのだろう。
そんな状態であるにも関わらず、ヲ級の杖が初月の首を貫くほんの

少し前に、葛城は打根を投擲し、ヲ級の右肩に突き刺したのだ。
「寝テタンジャナカッタノカ……」
ヲ級は初月を踵で蹴り飛ばすと、葛城に近づき、顔を覗き込んだ。
その隙を逃がすまいと、葛城はもう一本の打根を、ヲ級の顔面目掛けて突き出す。だが、それは叶わない。
杖の一撃が、その手を下から弾きあげていた。
「空母ガ白兵戦トカ、笑エル冗談ダナ、泥船野郎……」
「ハッ、ハッ、ハァ……ッ……」
激しく呼吸をしながら、葛城はそれでも、もう一度打根を振り下ろす。もはや武器はそれだけだ。艦載機も無く、撃ち出す為の梓弓も、その手を離れて後方に浮かんでいる。
「モウイイヨ、オマエサァ……」
ヲ級はそう言うと、打根をかわし左手で葛城の首を掴んだ。先ほど失った小指の辺りから、どす黒い霧のようなものが吹き出ているのがわかる。
「ぐ……く……」
「先ニ逝ッテロヨ。仲間モスグニ、送ッテヤルカラ、寂シクナイダロウ…？」
「負け…るか……アンタなんかに……」
圧迫され、苦しみながらも、葛城はヲ級の足を蹴る。しかしそんなものは、まるで効果がない。だが葛城は、それを止めようとはしない。
例え無様でも、血にまみれても、最後の最後まで、命尽きるまで…戦うと決めた、その覚悟は本物であった。
「アァ、ソウダナ……ジャア、死ネ」
艦載機が一機、葛城の直上につく。そのまま頭上からぶつかれば、頭蓋が割れ、おそらくは即死するだろう。
葛城の死が避けることの出来ない事実であると、そう認識した比叡と初月の絶叫が、雨音を超えて、海上に響き渡った。
剣呑な音を立て、艦載機が降下してゆく。比叡、初月の叫びが、神というものがいるのならば、救いをもたらせとばかりに轟く。
自分たちも深海棲艦たちを殺しているのだから、逆の立場になるこ

ともある。それは戦う者の覚悟として、胸にある。しかし彼女らは物言わぬ機械ではない。戦うだけの道具ではない。
たかだか２０年位しか生きていない自分たちが、人並みの暮らしを奪われ、ただ死んでいくなど、我慢ならないことだ。比叡たちの叫びには、言外にそういった思いも含まれる。
身勝手と言ってもよい。しかし、それが人間というものの業ではないだろうか。
「あ――――」
迫りくる艦載機は、ひどくゆっくりに見えた。
葛城は生まれてから今までのことを、おぼろげに思い出してはいたが、不思議と恐怖はなかった。
足柄が言ったように、やるだけやった。ここが自分の限界だと、そう悟った。死んだものの魂が何処へ行くのか、それは判らないが、ならば先にいって、掃除の一つでもしておいてやろう……葛城はそう考えた。
ごめん、みんな。ごめん、雲龍姉。不甲斐ない自分を許して欲しい。向こうでもし会えたら、いくらでも説教をされよう。
涙が一筋、葛城の頬をつたう。

――瞬間。
艦娘たち、特に空母たる者には憧れでもある、空気を揺さぶる爆音が、絶望の空に響き渡った。
それは『ハ４３―１１型発動機』のエキゾースト・ノート。
そして、翼に赤く刻まれた『空技廠』の文字と日の丸を、まるで長時間露出で撮影したかのような光跡とし、それは来た。
「れっ…ぷう…改……？」
葛城は初め、それをあの世からの使いだと認識した。
しかし、碧の瞳に映りこんだその深緑の戦闘機……烈風改は、彼女を護るかの如くヲ級艦載機のコースに割り込み、その翼でもって弾き飛ばしたのだ。
そして烈風改はそのままとんぼ返りをしつつ、翼内にある機銃で目

標を完全に粉砕する。
「ナ……ニ……!?」
ヲ級は信じられない、といった表情を浮かべ、葛城を海面に叩きつけつつ、烈風改が飛来した方角を見た。
望遠で捉えるその姿は、若葉色の上着と、花萌葱色の袴。頭には白い鉢巻をつけ、濃紺の髪をツインテールにまとめた、凛々しい立ち姿である。
「アイツ……!」
「そう……りゅう……先輩……!」
その者の名は正規空母・蒼龍。呉鎮守府の誇る、正規空母であった。
規則正しい方陣を組み突撃していく烈風改を見つめ、彼女は一分の緩みも無い姿勢のまま、更に矢を番える。斜面打起しと呼ばれるその型は、力強く、そして美しい。
「目標、敵空母ヲ級……艦載機隊、発艦続け!」
「オマエラ……援軍ナンゾ……オマエラァァァァァ!!」
激昂するヲ級をよそに、蒼龍は第二射を放った。それは葛城のものと同じ流星改となって、ヲ級目掛け突撃してくる。
「クソァァ!」
ヲ級は怒声を吐きつつ、すぐにその場を離れ、回避運動に入る。だが、そのコースを、複数の雷跡が塞いでいた。
いつの間に。誰が。初月はそう思いつつも、この時ばかりは神に感謝した。何であろうが、葛城が助かるのならば、これ以上の僥倖はあるまいと。
直後、ヲ級のすぐ側の海面が爆発する。すんでの処で気付いたヲ級が、ユニットから艦載機を吐き出しては、魚雷目掛けて突撃させたからだ。四つ発生した爆発により、海面が泡立ち、波が生まれる。
「ありゃ、外した……!? い、いやその神通さん、あれはミスじゃないよ?」
「わかっています、敷波。あれはおそらく、艦載機を直接ぶつけたんでしょう……なるほど、先日蒼龍さんをやったのは、ああいうカラクリだったと……」

蒼龍の左前方に位置して、雷撃を行った二隻が、なるほど、と頷き合う。
呉鎮守府の戦闘隊長、軽巡洋艦・神通と、駆逐艦・敷波である。
「ガアアア!!　忌々シイ!　忌々シイ奴等ダナァアアアア!!!　ゴミミタイナ人間風情ガッ!!!」
ヲ級の目的はまだはっきりとは判っていないものの、葛城達を倒すことが本懐であるならば、それを邪魔されればこうもなるだろう。最初の内に見せていた余裕のようなものは既に掻き消え、ヲ級は錯乱気味に怒声、罵声の類を垂れ流す。
そしてその内に、ヲ級は比叡へと標的を変えた。増援が現れ、葛城を殺すことは難しくなったが、比叡だけはいまだ孤立し艦載機の群れと格闘していたからだ。
ヲ級は杖を振り上げ、比叡へと向ける。
「比叡……さんッ!」
うずくまっていた初月が、声を絞り出す。届くはずもないが、そのような考えは彼女の頭にはない。
葛城もその場に膝をつき、荒く息をするだけだ。
「蒼龍さん……お願いだ……比叡さんを……」
「心配要らないよ、初月」
その独り言をマイクが拾ったのか、初月の耳元で蒼龍の凛々しくも優しい声が響く。
「え……」
「あの子が、いるからね」
その通信が終わるか終わらないかのうち、比叡の後方から、全速で突撃してくる者の姿が、初月の目に映る。
鉢巻に縫い付けられた『第六十一駆逐隊』の文字。長い黒髪。特徴的な艤装……
初月が心から敬愛する、同じ型の艦娘。
「防空駆逐艦・秋月っ!　これより対空迎撃を行います!」
「あき…秋月姉さん!」

秋月は極めて無駄の無い動作で比叡の周囲を駆け巡り、長１０ｃｍ砲による対空砲火によって、瞬く間にヲ級の艦載機を撃墜してゆく。無数の火花が散り、残骸が落ちていくさまは、一種の芸術にも似たなにかを感じさせる。

初月が見せた対空迎撃よりも、更に精度の高いその手腕に、ヲ級の顔は更なる憤怒に染まって、紅潮しているようにすら思えた。

「あ、秋月……！」

「はい！　ご安心下さい！　私が必ず、護ってみせますから！」

限界を迎えていた比叡の言葉に、秋月は力強く頷いて、再び対空迎撃を開始した。

比叡すら殺せない、と悟ったヲ級の顔はもう、怒りを通り越して虚無にも似た表情へと変わっていたが、やがてふ、と笑いを浮かべて、戦場を睥睨する。

間もなく、神通と敷波の攻撃も始まるだろう。鹿屋の部隊を絶体絶命の状況にまで追い込んだヲ級であったが、今度は己がその状態であることを理解するのに、そう時間はかからなかった。

「チッ……潮時……ッテ、ヤツカ」

ぼろりと溶け落ちる左薬指を見て、ヲ級はそう呟いた。数瞬前まで、激昂していたとは思えないほど、彼女は落ち着いている。

そして、足下の海面に目を向ける。すると海面が盛り上がり、そこから四隻の駆逐イ級が出現、艦娘達に威嚇の唸り声を上げた。

増援か、あるいは初めから待機させていたか、それは定かではないが、ともかくイ級は間髪入れずに、神通達へと突撃を敢行する。

「神通さん！」

「時間稼ぎ…か。ヲ級は撤退する気ね…」

更に、秋月と蒼龍が掃討していた艦載機群が、一斉に引き上げてヲ級の元へと戻っていく。

秋月と蒼龍、そして敷波と神通のコンビ。そのどちらも、ヲ級に対し一瞬で決定的なダメージを与える装備は無い。

「あーマズったな、流星は最低限しか持ってきてない！」

「雷撃はおそらくイ級に防がれますね」

「く、呉の人たちは……四隻で来たの…？」
飛び込んでくる会話を拾い、比叡がそう尋ねる。無論それを咎めている訳ではない。
神通はその問いに対し首を振り、笑顔を見せた。
「残りの二隻は、隼鷹さんを快速艇に収容し、その護衛に付いています。霞さんがこちらに来ようともしましたが、万が一を考えて残ってもらっています」
「隼鷹は、隼鷹は無事なの？」
「ええ、艤装は完全に大破していましたが、生命には別条ありません」
そこまで言った神通に、一隻のイ級が跳ね上がって、襲い掛かる。砲ではなく、体当たり、あるいは噛みつきによる直接攻撃を狙ったものだろう。
「神通！」
比叡の叫びが響くが、神通は特に動じる様子も無く、腰にマウントされた魚雷発射管から、一本の魚雷を引き抜いては、くるりと身を躱した。
ガチン、という、イ級の咬合音が響き、その後に着水。すると、急旋回して再び突撃せんとしていたイ級の体が膨れ上がり、大爆発を起こした。
一瞬の交錯の際、神通は魚雷をイ級の口の中にある砲塔へと突き刺してから、身を躱したのだ。
「ヲ級を倒すのも重要ですが、まずは怪我人を退避させる事が肝要です。敷波、左舷」
「わかってます……ってえ！」
時間差で飛び込んできた次のイ級に対し、敷波は腰を落とし、左手を前に突き出しては構え、渾身の右上段回し蹴りを叩きこんだ。
もちもちの頬っぺたと、短めのポニーテールが同期して揺れる。ちなみにパンツは白だ。
そして敷波は、蹴り足から僅かに遅れて射出された魚雷の尻を、今度は左後ろ回し蹴りでもって蹴りつける。

吹き飛んだイ級は着水する間も無く、即席のミサイルと化した魚雷を受けて爆散した。
「っしゃあ！　見たか、水上防衛術・敷波因果雷撃蹴！」
「はしゃがない。さて、残りのイ級は私が片付けます。蒼龍さんは四時方向に浮いている足柄さんを、秋月は初月を、敷波は葛城をそれぞれ護衛して下さい」
「了解だよ。けどさ神通…ヲ級、何かするんじゃないの」
「私ならば、あの艦載機を己の周囲に旋回させ、そのまま逃げ果せますが…どうでしょうね」
「変なこと言わないでよ神通さ……あ！」
困り顔で言った敷波が、声を上げる。
正に今神通が言った通り、ヲ級は艦載機を己の周りに張り巡らせて、そのまま後退してゆく。神通が威嚇とばかりに主砲を撃ち込むが、それはやはり防がれて効果がない。
「コラー！　逃げんのかー！」
「よしなさい敷波。言った通り、まずは怪我人を」
神通の静かではあるが、鋭い視線が、ヲ級のそれとちらりと合う。
戦う意思を無くしたか、あるいは別の策がまだあるのか。しかしどちらにせよ、負けるつもりはない…神通の目はそう言っているようでもあった。
「いいんですか神通さん、ここで逃がしたら…また」
「その心配はここですべきでは無いでしょう。さて、まずはイ級を片付けねば……」
神通はそう言うと、攻めあぐねて周囲を旋回するイ級に対し、柔らかな笑みを見せた。
その目の奥にうっすらと見え隠れする、鋭利な刃物の如き殺意を感じて、敷波はぶるりと背筋を震わせた。

午後１４：１７
『こちら呉鎮守府第一艦隊、旗艦神通です』

「……寒村です。どうでしたか…!?」
『ご安心下さい寒村中佐。間に合いました』
モニターに齧りつかんばかりの勢いで通信を待っていたサムソンが、神通の言葉を聞いて大きく息を吐く。
そして安堵の表情。すぐ傍で聞いていた叢雲、矢矧も同様の表情を浮かべ、互いに笑い合う。
「あ、ああ、申し訳ない…」
『いえ、お気持ちお察しします。こちらはヲ級を退けましたが、撃破には至っておりません。隼鷹さん、足柄さん、初月の三隻が大破、比叡さんが小破ながらも疲労困憊、葛城はほぼ無傷ですが戦闘不能状態でしたので、私の判断でそちらの処置を優先しました』
大敗北と言ってよい結果ではあったが、奇跡的に戦死者は出なかった。それだけでも十分だと、サムソンは深く深く頭を下げる。そしてすぐ、司令官たる立場の顔に戻っては、改めて神通の顔を見た。
「して、ヲ級はどの方角に」
『おそらくはバシー海峡でしょう。我々は今から、そちらの負傷者を連れて、鹿屋まで戻ります。ですので、先ほど伺った作戦概要から判断しますに、そちらの第一艦隊が追撃する、というのがよろしいのではないでしょうか」
「ええ、元よりそうするつもりです」
淀みなく語る神通に、サムソンは塚原に意趣返しをチラつかせて焚きつけた事を、今更ながら恥じていた。
彼女とて、自分たちに土をつけた相手に対して、一切の感情を抱いてないはずがない。しかし神通は、こちらの負傷者を最優先として、あくまで支援に徹するつもりである。
「……すまない神通さん。あなた達にはどれだけ感謝をしても足りません。己の見込み違い、浅はかな考えが恥ずかしい」
『勝負とは水物です。起きてしまったことを悔やむより、先のことを考えるべきだと、塚原司令は常に仰いますので……あまり気になさらないで下さい。それに……』
神通は少しだけ笑みを見せると、風になびく髪を直して、言った。

『『艦娘は助け合いだ』と、常日頃から仰っている方がいるそうですよ。私たちも先日、そちらの部隊に助けられました…とてもいい言葉だと、私はそう思います』
「……！　はい…」
『では、今から鹿屋へと戻ります。快速艇の定員は六隻ですので、そのまま鹿屋の六隻を収容して、私たちは護衛につきます』
「わかりました。お手数おかけします」
『では、これで。通信終わります」
通信が切れ、サムソンはゆっくりと席を離れて、壁に背を預ける。
その目には僅かではあるが、光るものが滲んでいる。
「提督…？」
「あ、ああ、いや。気にしないでくれ。それより叢雲、第一艦隊とは通信出来るかい」
「ええ、さっきから繋がってるわ。ただ、大分ノイズが混じるわね……ヲ級の奴、やっぱりＥＣＭ的なモンを使えるんでしょう」
そうか、とサムソンは答え、叢雲からインカムを受け取っては装着する。
「こちらは司令部だ。摩耶、聞こえるか」
『おう！　何とかな！」
「第二艦隊は手ひどくやられたが、全員無事だ。呉の救援が間に合ったんでね」
沈黙。そしてしばしの間を置いて、摩耶の大声がサムソンの鼓膜に響く。
『そうか！　そんで!?　ヲ級の野郎はどうなった!?』
「呉の部隊からの報告によれば、ヲ級は単独で南西方面へと向かったらしい。いや、待て……ビーコン……？　矢矧、解析！」
会話を遮り、サムソンが第二艦隊側をモニターしていた矢矧に指示を出す。
彼が急にそうしたのは、司令室の大型スクリーンに映し出された現況図に、赤々と灯る一つの光点が現れたからだ。
『どうした、どうした』

「これは……葛城の艤装周波数だわ」
「移動してる…わね。つまり……」
「摩耶、僕はもう一度呉の部隊と連絡を取る。君達は警戒しつつ、叢雲の指示に従って進んでくれ」
『よくわからねーがわかったぜ！　叢雲、しっかり案内しろよ！』
「任せて」

午後１４：３８
沖縄近海。
「快速艇がもう間もなく来ます。あなた達を収容したら、そのまま鹿屋までお送りしますから」
応急処置キットの蓋を閉じ、神通が言った。
比叡は既に気力を取り戻し、初月も顔面を絆創膏まみれにしながらも、自力で立ち上がっている。そうこうしている内に、足柄も目を覚まし、敷波に手当を受けていた。
「葛城、調子はどう」
「……蒼龍、先輩……」
鼻と右目からの出血は止まっていたが、葛城の顔色は良くない。偵察機などを脳波コントロールし、感覚をリンクさせることはあっても、それはあくまで少数であるから、さしたる影響はない。だが今回葛城は、艦戦を、しかも相当数の数を無理矢理に従わせて、操ったのであるから、それが体に与えた影響は計り知れない。
蒼龍は気を抜けば倒れてしまいそうな葛城を向かい合って抱き留め、その大きな胸に埋めさせるようにして支えていた。
「汚れちゃいます、血で。服が」
「何言ってんの、この子は。そんな事気にしないでいいんだよ」
葛城の背中をぽんぽんと叩きながら、蒼龍は笑う。先ほどまでの戦闘で服が濡れたため、血は乾かず、確かに蒼龍の上着にべっとりと染みを作っていた。葛城にはそれが我慢ならなかったが、しかし伝わってくる蒼龍の体温と、それによってもたらされる安心感が、彼女の

末っ子気質を刺激すれば、離れるという選択肢もまた離れていく。
「先輩、わたし」
「うん？」
「私なりに、がんばったんです」
「うん」
蒼龍は、葛城の体が小刻みに震えているのを感じていた。艤装は復帰し、ヒーターも機能している筈であるが、そうではない。
葛城は、大粒の涙をこぼしながら、嗚咽を上げ始めた。
「だのに、あいつにはかなわなかった。皆、死んじゃうと思った」
「うん」
「怖かったけど、足柄さんや、皆のことを考えたら、やれると思った。でも、かなわなかった……かなわなかったんです」
涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔で、葛城は続ける。
「くやしい。くやしいよう……わたし……」
「そうだね。でも、誰も死ななかった。それはどうしてだと思う」
「それは、蒼龍先輩たちが来てくれたから……」
蒼龍はにっこりと笑って、首をふる。葛城は子供の様な表情で、わからない、といった素振りをし、蒼龍の目を見つめた。
「確かにそうかもしれない。けど、私たちが間に合ったのは、どうしてだと思う？」
「それは……」
「そう。あなたが……ううん、戦っていた皆が、最後まで諦めずに、投げ出さずに戦ったからだよ。だから時間が稼げた。私たちが着いて、ヲ級を射程に捉えるまでの時間を稼げた」
取り出したハンカチで葛城の涙を拭い、蒼龍は言った。怯える子供を安心させるかのような、穏やかで優しい口調に、葛城の涙は拭っても拭っても、あふれ出してくる。
「それは、誰のものでもない、葛城たちのしたことでしょう。奇跡とか、天祐なんてものじゃなくて…、何て言うのかな、諦めずに戦って、努力して、色んなものを積み重ねたから手に入れられた、当然の結果だよ」

「せん……ぱい……」
「だから悔しくても、それをいつまでも気にしちゃあダメだよ。次、悔しい思いをしないように、また色んなものを積み重ねていくのが大事だと、私は思うな」
言葉はなかった。葛城は蒼龍の胸に顔を埋め、しばらくの間、泣いた。
雨は止み、いつしか雲間から、僅かではあるが、陽光が差し込みつつあった。
「初月も、よく頑張ったわね」
「どうかな、必死だったからよく覚えてない」
「ありがとう敷波、大分楽になったわ」
「任せてよ！　いっつも神通さんに折檻されてるかんね、応急手当のやり方はばっちりだよ！」
「あはははっ、そりゃ大変だあ」
「何が折檻ですか。あれは愛の鞭というものです」
「ヒエッ!?　じ、神通さんは裏表のない素敵な人です！」
そこここで、笑い声が起きる。本来ならば厳粛に行わなければならない作戦行動ではあるが、それを今、この状況で強いるのは酷というものだろう。生きて命を繋げた喜びを、彼女らは他愛のない会話をすることで実感出来ているのだから。
そんな折、神通に通信が入る。先ほど終了した、鹿屋基地からであった。
「こちら神通。寒村中佐、どうなされました」
『すまない神通さん。ヲ級の足取りが正確に掴めました』
その言葉に、神通の表情が武人のそれになる。
「どういうことです？」
『葛城は傍にいますか？』
「ええ、います」
『葛城の艤装の一部が、ヲ級に付着、あるいは持ち去られている、ということはありますか』
拡散され各々のインカムに入ってくるサムソンの言葉に、葛城が

はっとした表情を見せた。そして、基地への通信を開く。
「矢矧さん！　提督！　私！　あいつに…ヲ級に、打根を刺しました！」
『……なるほどね。こちらの推測してたのとほぼ、一致するわね』
『艤装が一時ダウンしていて、その後復帰したから、リンクが確立したってことだね。葛城、お手柄だ』
ノイズ混じりではあるが、その会話を聞いて、なるほどと蒼龍が頷く。
つまり、葛城がヲ級に打ち込んだ打根が、簡易的ではあるが、マーカーの役目を果たして、ヲ級の位置を知らせているということだ。打根から葛城の艤装へ。そして艤装から鹿屋へ。
「しかし寒村中佐、これは推測ですが、ヲ級が再び重金属雲を展開させれば、その信号は途絶するのではないでしょうか」
『僕もそれを懸念していたところです。今、第一艦隊がヲ級へと進行していますが、ここは確実に接敵するまで、様子を見たい』
「了解しました。今しばらくここに留まって、信号の中継をした方がよいと」
『うちの部隊がほぼ戦えないというのは、わかっています。甘える様で申し訳ないが、護衛を頼めますか』
サムソンの言葉に、神通は是非もなく頷いた。理解が早いというのは、彼女が幾多の戦場を経験してきたことに裏付けされている。
逃がしてしまったが、あれをいつまでも放置していれば、また新たな被害が出るのは想像に難くない。意趣返しよりも鹿屋の救援を優先したとはいえ、神通とて内心穏やかではなかったのかもしれない。
「では、そちらの第一艦隊が接敵、ヲ級を撃滅するまでは、この場に留まります」
『頼みます。比叡、君たちは手負いだ、今後何かあっても、神通さんの指揮で動くように』
「はい、司令」
『それと、ヲ級の攻撃手段、戦術傾向など、気づいたことは全て知らせてくれ。逐次、摩耶達に伝えなければならないからね』

午後１４：４６
『と、いうことだ。ヲ級は単機だが、まずその膨大な数の艦載機を、攻防一体として使う。砲撃は徹らないと思って間違いないだろう』
第一艦隊は依然全速のまま、沖縄方面へと進んでいた。ヲ級に近づいている、というのは、葛城のマーカーで判っていたが、それは同時に、徐々に通信が弱まるということを意味していた。
それ故サムソンは、ヲ級に対する注意点を、出来る限り摩耶達に伝えている。
「徹甲弾すら弾かれるってんならよ、つまり艦載機をブチ落としてからじゃねえとダメってこったろ」
『そうだ。だが、そちらには三式弾があるから、まずは雲龍、千代田、山城で敵機の数を減らすしかない』
「なるほどな。んじゃあ逆に言えば、特に雲龍と千代田を護らねーことにゃ、こっちもやべえってことだ」
摩耶は首をゴキゴキと鳴らすと、サムソンの言葉に傾注している、後続の五隻を見た。己の役割を理解したのだろう、摩耶は不敵な笑みを浮かべて、拳を握りしめる。
『摩耶は対空防御に専念し、ともかく空母部隊を護ってくれ。夕立はどちらの直掩につくのがいいか……』
「朝のブリーフィングでは、あたしは雲龍さんにつけって言われたけど、そのままでいいっぽい？」
『うーん…ああ、ノイズが増えてきたな……千代田はどうだい』
「私はそれでいいと思うなァ。彩雲と流星な私より、烈風多めの雲龍を護るべきじゃない？」
千代田がそう言うと、皆が雲龍を見た。
しかし当の雲龍は、先ほどからずっと空を見上げて、正に上の空である。
「おい、雲龍。聞いておるのか」
「え、ああ……ごめんなさい。多分、だけど……雷雨になる」

「お天気お姉さんかお前は！　ったく、夕立をお前と千代田、どっちにつけるって話だよ、どうすんだ」
いまだ交戦状態になっていないにも関わらず、雲龍の雲のように白い頭髪には、碧い雷が、ほんの僅かであるが奔っていた。
雲龍が鹿屋に来てから、隼鷹と共に彼女の面倒を見ていた千代田が、ふむ、と注目する。そして口を開く。
「雲龍がこうやってさ、空ばっか見てる時って、何だか知らないけど、凄い力出すんだよね」
「あァ？　そうなのか？」
『そうなのかい？』
「そうなの？」
千代田の言に、摩耶やサムソンだけでなく当の雲龍までがそう問うのだから、千代田は往年のギャグマンガの如くずっこける……モーションを取った。
「そうなの！　雲の龍って言うくらいなんだからさ、なんかこう……クラウドファンディング的な……」
「何言ってるかまったくわからないっぽい」
「千代田はかしこさが全部胸とお尻に行っちゃうから」
「帰ったら熱を測ってやるでのー」
「う、うっさいよ！　とにかくさ、私は雲龍のフォローに回るよ。雲龍もそれでいいよね？」
ともあれ、雲龍は千代田の提案を受け入れた。陣形が変更され、対空防御に優れた輪形陣となった第一艦隊は、曇り空の下をひた進んだ。
『それと、ヲ級は増援を呼ぶ可能性もあるとのことだ。接敵するまでに、ある程度の援軍と合流しているかもしれない』
「ちッ、はしっこい奴だな？　だがいくら何でも、戦艦やら重巡やらをひっ連れてくるわけじゃあ、ねーだろ？」
『おそらくは、ね。ただ警戒はしていてくれ……いいかい、まず射程外からの不意打ち。増援。そしてヲ級自体の戦闘能力。それらには特に、だ』

いかなサムソンと言えど、ここを突破されれば、再びヲ級を捕捉するのが格段に難しくなる、ということは判っているようで、言外に含まれた思いは、その静かな口調からもひしと伝わってくる。
摩耶を始めとした第一艦隊は、背筋を伸ばして、一斉に「了解」の返答をし、そして前を見つめた。
午後１４：４９
第一艦隊　接敵予測

午後１４：５８
そして、ヲ級である。
ぶつぶつと支離滅裂なことを呟きつつ、彼女は南西の方角へと突き進んでいた。その顔は歪んだまま固着されて、ヒビが幾重にも浮き上がっているように見えた。
随伴するのは駆逐イ級が三隻のみである。その内に、イ級がなにがしかの音波を発し、ヲ級に何事かを告げた。
「アァ……？」
その報告に、ヲ級は己の右肩を見る。
葛城の放った打根が、依然突き刺さったままだ。法儀式により浄化、精錬された鉄鋼からなる艤装は、深海棲艦たちにとっては極めて不快で、忌避すべき波長のようなものを放っている。大げさに言えば、吸血鬼にとってのニンニクや十字架、鬼にとっての豆や柊、イワシの頭と同義である。
ヲ級は歪んだ表情のまま舌打ちをし、左手を肩に伸ばしては、それを引き抜こうとする。
しかし。
ヲ級の左手首から先が、ぼろり、と砕けては海面に消えた。
「……ビーコン、カ……フフ……ヒヒヒ……ナルホドナァ」
喪失した左手を惜しんだり、呆気に取られたりするでもなく、くぐもった笑いを漏らし、ヲ級はおもむろに杖を振り上げると、その先端をイ級の脳天とおぼしき場所に突き立てた。

ワ級がそうなったように、イ級も溶解し、黒い霧となってヲ級のユニットへと吸収されてゆく。
「面白イジャナイカ、最後ノ最後デ、マタ大暴レデキルッテノモ……」
そして、その視界が望遠で捉えるは、摩耶達、鹿屋基地第一艦隊。
ヲ級はとびきりの笑顔を顔中に張り付かせ、両手を広げた。艦載機が放出され、渦を巻く。まき散らされる重金属が空へと作用し、上空はにわかにかき曇ってゆく。
稲光が閃き、ゴロゴロと音を立てはじめる。
「散リヌベキ　時知リテコソ　世ノ中ノ　花モ花ナレ　人モ人ナレ……　誰ノ言葉ダッタカナ……マァ、イイカ……」
午後１５：００
第一艦隊　戦闘状態に突入。

碧雷（5）

嵐を纏って、それは来た。
第二艦隊からの報告通り、ヲ級は無数の艦載機を己の周囲に展開、回転させて、その隙間からこちらを睨みつけている。
異様な光景であった。数で優っているとはいえ、容易に勝てる相手ではないと、誰もが思った。
しかし。
「はン、御大層なもんだぜ」
摩耶は白い歯を見せて笑い、ヲ級の視線に対して真っ向から、ガンを飛ばす。
大敗を喫し、呉の面々が来なければ戦死者さえ出ていたかもしれない第二艦隊の意趣返し……摩耶の頭には、それしかなかった。
恐怖や迷いといった、後ろ向きな感情が入り込む隙など、まるでない。
「かッ…！　聞くのと見るのとではまるで違うの。しかし摩耶よ、やる気があるのはよいが、警戒はすべきじゃと思うが」
「そりゃそうだ。けどな利根ェ、あたしは今正直言ってな、あの羽虫みてぇな艦載機を、どうやって叩き落してやるか……それだけしか頭に無ェんだよ」
「うわ、怖い顔してるわ」
「やれやれ、お主に限っては、言っても無駄か。さればよ摩耶、任せるぞ」
低く笑う山城と、肩を竦め息を吐く利根。そして夕立は目を爛々と赤く輝かせて、今か今かと号令を待つ。
そして複縦陣の最後尾、千代田と雲龍が揃って、頷き合う。
間合いまで、あと２００メートル。
「雲龍、もし万が一の時は、夕立と私があなたを護るから、無理はしちゃあいけないよ」
「うん。けど、大丈夫」

「大丈夫じゃない。葛城のことを聞いて、あなたちょっと頭に来てたでしょう」
千代田１８歳、雲龍は推定２０代前半である。プライベートな話はしないのが不文律とはいえ、同じ空母同士、差しさわりのない範囲でそういった会話をすることもある。
配属時期の差と先任ということもあり、雲龍は年下の千代田と隼鷹を、血は繋がらないが、姉……といった風情で慕っていた。その千代田にそう指摘されれば、彼女とて頷かざるを得ない。
「まぁ、私だって正直、あいつぶっ飛ばしたい気持ちはあるよ。けどまずは生きて帰ることだよね」
「そうね……そう思う」
「だから、なおさら熱くなっちゃダメってことよ。さぁ、それじゃあ、やりますか！」
「……千代田」
「なに？」
「……ありがとう」
絡繰式飛行甲板を展開させた千代田が、その言葉を受けて微笑む。
雲龍もまた柔らかく笑って、手にした神社幟を構えた。掛け軸の如き飛行甲板が、艤装からのエネルギーを受けて、淡い色の紋様、鳥居型のオーラを発現させていく。

「向コウニモ……似タヨウナ……空母ガイルナ……匂イデワカル……同ジ、型カ……」
鼻をひくつかせ、ヲ級が呻くように言う。先行するイ級から、測距ならびに相手の編成などが上がってくるが、ヲ級は上の空で、ただその匂いの発生源を探している。
だがそれもすぐに止め、ヲ級は艦載機の回転半径を徐々に広げて、航行速度を落とした。待ち構えるつもりだろう。
「サァテ……ドウ出ルカ……グッ……!?」
そのヲ級が、顔を顰めてはうめき声を上げる。彼女の腹の辺りにひび割れが走り、そこから黒い霧が噴出を始めたのだ。

ダメージの蓄積か、あるいは別の何かかは判らないが、第二艦隊との交戦がヲ級に影響を与えているのだとすれば、彼女らの奮戦にも意義があったと言えるだろう。
「壊死ガ始マッテルナ……ハハ、マァイイヤ……ナラ、一匹デモ多ク、道連レニシテヤルトスルカ…」
ヲ級は自嘲とも諦めともつかない様子でそう言うと、更に更にユニットを吐き出した。
先の戦いから察するに、ヲ級は仲間の体を融解させて吸収、艦載機として再構築できるのだろう。一般的な補給という概念をまったく無視した、常識では考えられない極めて強力な存在ということになる。
しかし、彼女の体はぼろぼろとひび割れ、崩壊を始めていた。恐らくはその戦術も、ノーリスクで使える程、都合よくは出来ていないのだろう。
「ン……あいつ、ダメージを受けてるっぽい！」
「いくら強くとも、第二とやりあって、無傷でいられなかったってことね……けど、艦載機は多いわ……千代田達が攻撃する前に、三式弾で数を減らすってのは、どう？」
「しかしな山城よ、奴の艦載機は徹甲弾すら防ぐという。生半な距離から撃ったところで大した効果は無かろう。我輩らはまず、イ級を蹴散らし、奴が補充など出来ぬようにするのが良いと判断するが」
確かにそうね、と山城は頷き、摩耶を除く三人もそれに同意した。イ級を減らせば、それだけヲ級は手数を失うことになるのだから、迷っている暇はないだろう。
「うし、確認するぞ。奴の攻撃は空母部隊とあたしで対処する。その隙に利根と山城、夕立はイ級をやれ……いいな」
「わりとざっくりしておるがまぁ…よかろう」
「了解」
「ぽい！」
「うん！」
「雲龍了解」

遠方の空に雷が走り、海上に落ちた。轟音が轟く。
そしてそれが、合図となる。
「間合いに入った！　攻撃隊、発艦よ！」
航空戦の間合いである。千代田は慣れた手つきで絡繰を操作し、艦載機へと変えて射出してゆく。
続いて雲龍も艤装に接続された御札入を手に取っては、中に詰まった式符を展開させたのち、幟に浮き上がった鳥居紋様を経由させてゆく。
「……第一次攻撃隊、発艦始め……お願いね」
まずは烈風が先行し、その後に流星が続いて高度を上げていく。対するヲ級はぶっきらぼうに杖を振り上げて、艦載機を射出した。隊列も何もない、乱れた陣形ではあるが、その数はやはり多い。
千代田はごくりと唾を飲みこみ、腰を落としてはその後の展開に備える。対する雲龍は、普段と特に変わる様子はなく、あくまで飄々としていて、決まった形を持たない雲のようでもあった。
「烈風が上空へ退避し、流星が攻撃したら、私たちが前に出るわ。フォローよろしく」
山城の声がインカムから聴こえてくる。部隊は速度を落としつつ、まっすぐヲ級へと向かう。
「交錯予想、あと4秒……」
「3、2、1……今！」
烈風とヲ級艦載機が火花を上げつつ、ドッグ・ファイトを開始した。雲龍は幟を掲げたり、回転させたりしながら、烈風隊へと細かな指示を伝え、千代田は流星隊の高度を上げ、その時に備えた。
そして、烈風は数多くの艦載機を落としたのち、旋回して雲龍の元へと戻っては、式符となって滞空する。
「ごめんなさい、敵機、結構残ってる……！」
「気にすんな、まるっきり通用しなかったワケじゃねえ！　千代田ァ！」
「わかってる！」
綻びの生じた防御網を確認し、千代田がすかさず流星を突撃させ

る。無数の爆弾が投下され、ヲ級の周囲に着弾、爆発した。
通常の相手であれば、撃沈ないし大破まで持っていけるはずだが、誰も気を緩めない。ヲ級が断末魔の悲鳴を挙げ、昏い海の底に還っていくまでは。
しかし、爆炎が晴れてもなお、ヲ級はそこにいた。何をどうやって防いだのかは、見当はつく。しかし目の当たりにしてみれば、その異様さが改めて彼女らの認識を揺さぶっていく。
「直撃でも倒せないっていうの……!?」
「ビビってんじゃねえ！　とりあえずイ級共を蹴散らせ！」
「言われるまでもない！」
利根と夕立がまず魚雷を投擲し、次いで主砲を斉射。続いて山城が巨大な艤装を稼働させ、狙いをつける。二人の砲撃による夾挟弾ないし至近弾でイ級の動きを制限し、最大威力の主砲を直撃させる算段なのだろう。
しかしそれを見たヲ級は一歩も動かず、まずは艦載機で雷撃を処理。次いで前方に別の艦載機を射出し、利根と夕立の砲弾を相殺しては攻撃へと転化する。
そしてイ級もイ級で、次々と砲撃を開始し、戦場は次第に荒れ始めてゆく。
「あいつの艦載機、ずるくない!?」
「ずるいっぽい！」
魚雷や砲撃を瞬く間に無効化されれば、そうも言いたくなるだろう。憤慨する夕立と山城を見て、摩耶も若干血圧が上がるが、そこは旗艦たる役目をすぐに思い出し、深呼吸をひとつする。
「山城、まだ撃つな！」
摩耶の指示に従い、山城は副砲へとコントロールを切り替えて、腰を落とす。すぐに大きな声で次の指示が飛んでくる筈だ。
しかし摩耶はそれをせず、大きく息を吸い込むと、気合と共に前に飛び出した。
「墜ちやがれ!!」
初月や秋月とはまるで違う、荒々しい動きである。狙いもそこまで

精密という訳ではない。
しかしその代わり、猛烈な火勢で唸りを上げる、Ｂｏｆｏｒｓ４０ｍｍ四連装機関砲の砲撃密度は生半可なものではなかった。初月達が艦載機を捕捉して撃ち落としていく『点』の攻撃であるならば、摩耶のそれは『面』といってもよい。重巡洋艦の積載量を活かした、物量任せの豪快な戦術である。
その勢いの前には、いかなヲ級の艦載機とは言え成す術もなく墜落していった。
摩耶は手を緩めず、すぐに２０．３ｃｍ（２号）連装砲へと装備を切り替えると、一番近くにいたイ級に対して砲撃を開始する。
「オマエモ……迎撃ガ上手インダナ……驚イタヨ……」
「そうか、喋れるんだったな、てめェ……あたしの仲間を随分と可愛がってくれたそうじゃねえか」
「別ニ……誰デアロウト関係ナイ……敵ハ沈メル。ソレダケダ」
「そりゃそうだ。そんならあたしもやる事は一つ……てめェをぶち殺すだけよ」
急に話しかけてきたヲ級を、怯えも物怖じも無いまっすぐな目で見つめて、摩耶はそう吐き捨てた。
とは言えヲ級の艦載機の数はいまだ衰える様子を見せず、摩耶は再び対空防御へと専念せざるを得ない。
「ち、あのイ級め、突撃は仕掛けてこんのか！」
「小口径とは言え当たれば面倒ね。雲龍、千代田はまだ時間がかかる」
お互いの状況は反航戦から同航戦へと変わり、そこで摩耶の指示が飛ぶ。
「頭を抑えんぞ！　全艦、速度一杯！」
「了解！」
「待って！」
速度を上げ進もうとしていた摩耶が、その声に動きを止める。
発したのは雲龍だ。
「どうした雲龍、余裕はねえぞ！」

「来る……全員、対ショック姿勢！」
何が来るのか、それも判らないまま、しかしそれでも全員が身を低くし、障壁を展開する。
その様子を見咎めたヲ級はぎたりと笑い、艦載機を突撃させた。
が、しかし。
第一艦隊とヲ級との間に、凄まじい音を轟かせて、一条の雷光が奔った。
「う……!?」
戦艦の主砲もかくや、といった衝撃と閃光が弾け、ヲ級の艦載機が巻き込まれては砕け散っていく。
「ら、落雷……!?」
「ここは雷雲の真下……すぐに移動をしないと」
「ち、そういうことか！　全艦速度そのまま、一度離れるぞ！」
「障壁じゃ防げないの!?」
艤装が展開する障壁には、物理攻撃を防ぐという役割の他に、深海棲艦が発する重金属粒子の無害化や電波の安定化などといった機能が備わっている。
そして、こういった荒天下での落雷による感電事故を防ぐ、いわゆるアースの役割も果たしている。本来ならば地面に電流、電圧による負荷を流して安全を確保するアースが、海上で機能するのは、正に人類の叡智の結晶たる艤装の面目躍如である。
しかし大自然の力のというものは時として、そんな小細工など何するものぞ、と言わんばかりに荒れ狂い、強大な暴力となって訪れる。
艦娘がもし万が一落雷の直撃を受けたとして、その負荷に耐えられるのは、おそらく一度きりだという計算がなされている。それ以上は艤装のキャパシティを超えて、着装する人体に被害を及ぼすだろうとも。
落雷を受けて死なない人間などまずいないのだから、つまり雷雲の下での戦闘は、死というものをより一層意識せざるを得なくなる。
「けど、チャンスじゃない!?　あいつは落雷なんて受けたら、無事じゃ済まないっぽい！　こっちは最低でも一度は防げるんでしょう

!?」
「馬鹿もん、それはあくまで理論上の話じゃ！　雷雲の真下でドンパチやった部隊なんぞ、我々が初だろうよ！」
そこかしこに、落雷が始まる。ヲ級やイ級の吐き出した重金属粒子と、雷雲が交わり、肥大化して、極めて巨大な災厄と化したのは想像に難くない。利根は後方に落ちた雷に身を震わせつつ、摩耶を見た。
「待て。雲龍、お前はなんで雷が落ちるってわかった？」
「……なんでだろう。説明は出来ない……けど、わかる。雷が落ちるところに、予兆みたいなものが見えるから」
「つまりよ、雲龍の指示で動けば、ある程度は安全ってこったろ？」
「正気なの!?」
普段は物静かな山城までが、大きな声で摩耶にそう問うた。雷鳴と雨で、声が聴きとりづらいということもあるが、彼女もかなり焦っているのだろう。
「……部隊を二つに分ける。あたしと夕立、雲龍が仕掛けるから、お前たちは落雷に遭わないよう動きながら砲撃で牽制しろ」
「しかしだな！」
「あたしはお前らがびびってるとは思わない。慎重にならざるを得ないってのもよくわかる……けどな、ここであいつを逃がすワケにゃいかねえ、そうだろ。だから、部隊をわける。
「摩耶……」
「それに二つに分かれりゃ、片方になんかあった時、逃げるのも、戦うのもやりやすいはずだ」
そう言われてしまえば、利根たちも納得せざるを得ない。これだけの人員を動員してなお、逃がしました、倒せませんでしたでは申し訳が立たない。生きて帰ることが出来れば御の字とはいえ、彼女らとてプライドはある。
そこからの動きは早かった。摩耶、夕立、雲龍の組と、利根、山城、千代田の組は二手に分かれ、ヲ級の左右についた。お互いの射線がぶつからないよう位置取りをする彼女らを見て、ヲ級が何事か呟く。
「……落雷ヲ警戒シテイルノカ……マァ、妥当ナ判断ダナ……サテ、

ドウスル」
対するヲ級は落雷など意にも介していないようだ。と言うよりは死ぬことなど微塵も恐れていないように思える。
どこから来てどこへ消えていくのか、不明瞭なことが多い深海棲艦であるから、その精神のつくりもこちらからでは推し量ることはできない。
そしてそれが、深海棲艦の強さでもあった。
「左右カラ挟撃カ……アノデッカイ艤装ノ奴ガ一番火力ヲ出セソウダナ……」
ヲ級側も、そこからは早かった。ヲ級は艦載機の一群を摩耶達にけしかけ、自分はイ級と共に利根達の方へと突撃を仕掛けてきた。おそらくは接近戦。膂力が強く、また変幻自在の艦載機攻撃を使うとなれば、もはやヲ級は空母というカテゴリーではない。別の何かだろう。
「こっちに来る！」
「落ち着け千代田、我輩らがどうにかする！　山城、ヲ級を狙え！」
「了解！」
周囲を廻る艦載機によって、ヲ級の姿はまるで見えなくなるが、その中心にいるのであれば、する事は一つだ。
山城は砲塔を向け、一斉に砲撃を開始した。
利根も利根で、猛スピードで突撃してくるイ級に砲撃を仕掛ける。
「あいつ、接近戦でも仕掛けるの……？」
「艦載機をああやって使うんだ、そんくらいは出来るんだろうよ！艦載機落としたら援護に向かうぞ！」
「了解っぽい！」
山城の砲撃が炸裂し、艦載機の竜巻は幾分薄くなる。しかしゼロになった訳ではない。次弾を装填しつつ、利根達は後退して距離を取る。
しかしヲ級という暴風は存外に早く、徐々に距離を詰められていく。
「あ、あれに巻き込まれたら……！」
イ級の砲撃を回避しつつ、千代田が不安げな声をあげた。通常の海

戦では考えられない、まるで遠心破砕機のような攻撃を仕掛けてくる相手とぶつかるのは、過去に例の無いことで、今回のケースが初めてである。
それ故対策はどうしても後手に回ってしまう。おまけに落雷がいつ、どこに落ちてくるか判らない状況でもあるから、焦るな、不安になるなという方が無茶である。
「利根、三式弾を使うわ！」
「……それしかあるまい。しかしこれ以上距離を詰められると、十分な効果は得られんはずじゃ！　千代田、ありったけの艦戦で山城を護れ！」
「し、紫電改がちょっとしか無いけど……！」
「何もせぬよりはマシじゃ！」
「わ、わかった！」
それを見透かしたかの様に、一隻のイ級が魚雷を発射した。利根達は左舷に舵を切りつつ、それをギリギリのところで回避。装填を済ませた山城が腰を落として、三式弾を発射する体勢になる。
そして千代田の展開させた紫電改は、上空で旋回しつつ待機。三式弾がうまく効果を発揮すれば、いくらヲ級の護りとはいえ綻びを見せるだろう。利根はその瞬間を待った。
「――！　摩耶さん！　あっち、イ級！」
「あぁ!?」
「一匹しかいない！」
夕立の声が利根達に届く。しかし、それが何を意味しているのか、気づくよりも早く、三式弾が発射された。
大量の弾子と可燃性の油脂が、炸裂した三式弾からばら撒かれる。
それらは竜巻に吸い込まれては連鎖的に爆発、炎上して、凄まじい音と共に火柱となった。圧倒的な破壊力、制圧力である。
しかし。
「右舷！」
誰の声かは判別がつかないが、ともかく右舷である。ヲ級の傍にいたイ級が跳ね上がり、一番前にいた利根に襲い掛かった。

そこで初めて、利根達はもう一匹のイ級がまるで見当たらないことに気が付いた。
「まさか……！」
利根が足を思い切り踏ん張り、イ級の下顎に障壁を纏わせた拳を繰り出す。
渾身のアッパーカットであった。イ級の船体を構成する金属と、利根の障壁のぶつかる鈍い音が響き、吹き飛んだイ級が海面に叩きつけられる。
第二艦隊の報告にもあったように、ヲ級ははじめ、ワ級の腹を裂いて出てきたのだ。竜巻の中ならば、鹿屋の部隊からの目も隠すことが出来る。それを利用して再び、イ級の中に潜行している……という可能性も、否定は出来ない。
つまり、奇襲も逃走も思いのまま、ということだ。
「てェ！」
利根は殴り抜いたその姿勢のまま艤装を稼働、狙いをつけては主砲を発射した。
イ級は粉々に砕け散り、海の藻屑と化す。だが、ヲ級らしきものは見当たらない。利根はすぐに周囲を見回したのち、大声で
「もう一匹！　探せ！」
と、叫んだ。
降りしきる雨。方々で落ちてくる雷。巻き上がる火柱。
摩耶達に纏わりつく艦載機群がいまだ健在なところを見るに、ヲ級はまだ生きている。普通に考えれば火柱の中であろうが、油断は出来ない。先ほどから姿を見せない、最後のイ級を確認するまでは。
「！　感あり！　摩耶、後ろ！」
その時、千代田が叫んだ。摩耶達の後方から、海を切り裂いて迫るものがいる。
「夕立！」
「了解ッ！」
対空迎撃を続けていた摩耶の声に、夕立が反転し、雲龍を護る様にして立った。

ヲ級のやれること、してきたことを総合して考えるのであれば、ヲ級はどこからでも、艦載機による不意打ちを仕掛けてくることが出来る。そしていまだ回転を続ける艦載機の竜巻も不気味だ。
しかし油断はない。何が来ようとも、対応してみせる……夕立はそう心に決めると、艶めかしい舌先をちろりと覗かせ、唇をなめた。赤い双眸は爛々と燃えたままだ。
「夕立、注意して……前方、落雷する」
「了解っぽい！　大丈夫、雲龍さんは私が護るよ！」
ずどん、と雷が落ち、辺りは眩い光に包まれ、轟音が響き渡る。
それを対閃光防御で凌いだ夕立に、海面から飛び上がった何かが襲い掛かる。砲や魚雷ではなく、噛みつきによる破砕攻撃だ。
「その手は食わないっぽい！」
夕立はそう叫び、体を大きくのけ反らせてはそれの真下に滑り込み、手にした連装砲を発射した。がちん、と響く咬合音。そして砲撃音。
火力特化のチューニングを施された夕立の砲の威力は凄まじく、衝撃で相手の船体は空中で真っ二つに裂け、泣き別れする。
「やったッ！」
しかし、それが弾けて消えるよりも早く、
『それ』はその船体を『無数の艦載機』へと分解させ、四方八方に飛び散った。
「え……!?」
カウンターめいた一撃を受けた夕立は爆発に巻き込まれて吹き飛び、摩耶の足元あたりにまで転がっていく。
艤装はぼろぼろに破壊され、もはや戦うことは出来ないだろう。
「夕立ッ！」
「な、なに……？　なんで……？」
「今の、イ級じゃない……！」
炸裂した艦載機群の数は少なく、すぐに摩耶が処理したが、夕立は何が起きたかわかっていないようだ。
「艦載機……艦載機を、イ級の形に構成していたんだわ……」

「はァア!?　ざっけんな、何でもありじゃねえか！　スイミーかってんだよ！」
レオ・レオニの児童文学書はともかくとして、恐るべきはヲ級の応用能力だろう。
だが今は戦闘中で、そんなものにいちいち驚いたり分析している暇はない。雲龍は摩耶と夕立を庇うように前に出て、御札入から式符を取り出す。
「と、いう事は……まだイ級が一隻、どこかにいる……」
「ちッ、おい利根、山城、千代田ァ！　そっちも警戒してろ！」
「わかっとるわ！　しかしキャンプファイアーでもあるまいし、いつまで燃えとるの…か…」
利根がそう呟いた瞬間、まるでその言葉を察知したかのように、火柱が弾けて全方位に飛び散った。
炎上した艦載機が、猛烈なスピードで迫る。あまりの速さに迎撃など出来る筈もなく、各々が障壁を全開にして耐える。
「ぐッ……！」
攻撃自体の精度は低く、また持続時間も長いものではなかったが、それでもまるっきり無傷、という訳にはいかない。
足元の夕立を庇った摩耶は小破、山城はその大きな艤装が災いして中破となる。その後ろにいた千代田は無事であったが、問題は利根であった。
「しくじったわ……おのれ」
「利根さん！」
「慌てるでない、戦うことは出来なくなったが……向こうももう、丸裸じゃ！」
大破した利根は、血の混じった唾をぺっと吐き捨てると、気丈に立ち上がり、火柱が弾けたあたりを指さした。
しかし、何も。
そこには誰も、いない。
今度こそ決着を、と思い描いていた第一艦隊の面々を苛むように、雨足が強まる。

「いない……!?」
「はァア!? どうなってんだこりゃあ!」
「逃げたってこと……!?」
各々がそれぞれの思惑を口にする中、ただ一人雲龍だけが、鼻をひくつかせては空を見上げ、そして後方の海面を見た。
それは始め、ただの波紋の様に思えたが、徐々に渦をなし、そして顕現を始めた。
無論、渦潮ではない。
「まずい……!」
雲龍はそれだけ言うと、海面を蹴って、その渦へと向かってゆく。
「あ、おい!?」
「雲龍さん!」
追いすがろうとする摩耶を手で制し、雲龍は頷いて見せた。
「あいつ……海の中から出てくる。深海棲艦だものね、潜ることくらい出来るわよね……」
まるで洗濯機のような渦を発生させているのは、高速で回転する艦載機群であった。あれだけ発艦させ、その都度潰してきたというのに、いまだ尽きないその数は、悪夢のようでもある。
そしてその渦の中心から浮上してくるのは、空母ヲ級。
「な……にィ!? くそ、おい千代田、山城! 援護しろ、あたしが突っ込む!」
「りょ、了解!」
「アハハハハハハハハ」
不気味な笑い声が、各員のインカムに響く。
次いで、雲龍の後を追おうとしていた摩耶の目の前に、艦載機の壁が出現する。先ほどと同じ要領ではあるが、その速度は段違いに速い。
「くっ……!?」
そして高速回転する艦載機は、ヲ級と雲龍を包み込むようにその回転半径を狭めてゆき、外界からの干渉を遮断せしめた。
雲龍は竜巻が形成する暴風の結界、その内部へと囚われたかたちと

なる。
「雲龍！」
返事はない。摩耶は無駄と判っていても、その暴風へと砲撃を敢行するが、砲弾は弾かれて無効化されてしまう。
恐らくは最後のイ級を吸収、艦載機へと転化したのだろう。ヲ級の最後の悪足掻きなのだろうが、そこに雲龍が自ら飛び込んでいくなど、予想出来たものはいなかった。
相手は例え相討ちであっても、こちらを一人でも殺せればいいのだろう。今まで味わってきた殺意溢れる攻撃と、保身を考えない動きから、それがわかる。しかしこちらはどうだ。
誰一人として失わずに、最後の日まで戦いたいと、誰もがそう思っている。そう出来ると信じて疑わない。
だから、ここで雲龍を失う訳にはいかない。
「くそッ、雲龍の野郎勝手に突っ込みやがって……山城！　三式弾は撃てねェのか！」
「この状態じゃ満足に撃てない！　通常弾頭なら何とかする！」
「よしやれ！　千代田は艦載機、何でもいいからあの竜巻を弱めろ！　あたしが無理にでも突っ込んでヲ級を仕留めるからよ！」
「んもー、雲龍ってば！」
それがわかっているから、誰もかれも諦めずに足掻く。不様で泥臭くとも、そんなものは構わない。
勝って帰る、生きて戻る。その決意が、彼女らを動かす力である。

午後１５：２１
暴風結界内部
既に左腕を完全に欠損したヲ級であるが、その闘志は衰えていないようである。回転半径にしておよそ１０ｍといったところの結界内に、どれほどの殺害手段が存在しているのか、雲龍には計りかねた。
しかし雲龍は怯えるでも、逆に闘志を燃やすでもなく、ただヲ級をじっと見つめている。

「オ前ラガウロタエテルノヲ見テタラ、何ダカオカシクナッチャッテサァ……不思議ナコトニナ」
「深海棲艦にも、感情ってものがあるとは知らなかったわ。案外、話が通じる相手だったりしてね」
人語を理解するのだから、感情、あるいはそれに近いものがあるのではないかと分析される彼女らであるが、それを試そうというものは今までにいなかった。問答無用で攻撃を仕掛けてくるのだから当然なのであるが…しかし今、雲龍の目の前にいるヲ級は、闘志はあれど、不思議なことに動く気配はない。
「モウ艦載機モコレ以上出セナイ。距離ヲ取ラレテ、時間ヲ稼ガレタラ……私ノ体ハ崩レテ、オ前達ノ勝チダッタンダ。ケド……オ前ハコッチニ来タ。来ルモンダト、思ッテタヨ……何デダロウナ？」
「何でかしらね？　私も、あなたを見た時……上手く言えないのだけど、不思議な気分になったわ」
穏やかな口調ではある。この一連の事件が、話し合いによって解決してしまうのではないか、といった雰囲気さえあった。
しかし雲龍とてそこまでのんびりとはしていない。御札入に手を添え、式符をゆっくりと放出してゆく。
「きっと、私の仲間や、妹にしたことを……許せないからだと思う」
「ソレハ不思議ナ気分ジャナクテサ……殺意トカ、敵意トカッテ言ウンジャナイノカ」
そう言うと、ヲ級は何の前触れも無く、結界を構成する艦載機を一機、雲龍へと突撃させる。
しかし雲龍もまた、その一撃に対し烈風を形成、ぶつけて対消滅させた。
「それとは別に……何だか、遠い昔……どこかで……あなたと会っている、そんな気分……」
「酔ッパラッテンノカ、オ前」
次々と単発の艦載機攻撃を繰り出しつつ、ヲ級は半ば崩れた顔面を残った右手で覆う。竜巻の中心、いわゆる台風の目のようになっているところから、いまだ雷を孕んだ空が見える。

雲龍は空を見上げつつも、徐々に苛烈さを増していく艦載機の突撃を防ぐが、攻撃を仕掛けることはない。もともと烈風を多めに積んできたということもあるが、ここで焦って流星を仕掛けても、撃墜されてしまえば、打つ手が無くなるからだ。

だから、彼女はひたすら防御に徹し、チャンスを待った。しかし狭いフィールドゆえ回避は難しく、更にどこから艦載機が飛び出してくるか判らない。徐々に雲龍の障壁は削れていく。

「ねぇ……あなたはどうして、私たちに接触してきたの」

「ソンナモノ、私ガ知ルモンカヨ。身体ヲ弄ラレテ、気ガツイタラ、オ前達ヲ殺セ、倒セッテ思ッテタダケダ」

「そう……じゃあ、ここで私を殺せれば、それで本望なの？」

左右同時に突撃してきた艦載機を、雲龍は両手に持った式符を変化させて防ぐ。雲龍の周り、四方八方に展開した式符は、本来であれば幟を経由して艦載機となるのだが、今はまったくのウェイトを挟まずに、その姿を変えて彼女を護っていた。

何故そうなるのか、ということは判らない。しかし雲龍の持つ力は、明らかに他の艦娘とは違っている。

雲龍は再び空を見上げると、ヲ級にゆっくりと近づいてゆく。

「あなたは生きていたくないの？　自我とか感情とか、あるのでしょう？」

「クソミタイナ議論ハヤメロヨナ……私ハ兵器ダ。タマタマ仮初ノ自我ッテヤツヲ得タ、チョットダケ上等ナ兵器ニ過ギナイ」

「だからって、敵を倒すだけ倒して死んでいくなんて、寂しいと思う」

「オ前ラハソウ思ウカモシレンガナ、私ハソウ思ワナイッテダケダ。話ス余地ナンテモンハ最初ッカラ無インダヨ」

そう吐き捨てたところで、ヲ級の体が大きく揺らぐ。足元…右膝から先が、砕けては消えたからだ。

味方の命を吸って、更には自分の命までをも捨てて、強大な力を振るったヲ級は今、この世界から消えようとしているのだ。

「――！」

その姿を見た雲龍が、悲しみとも哀れみともつかない表情を浮かべ、隙を見せる。ヲ級はそれを見逃すことなく、背後から艦載機を突撃させた。
一瞬の隙に出来た防禦の壁をすり抜けて、一撃が雲龍の背に叩き込まれる。
障壁は機能したが、ダメージは殺し切れない。艤装は中破状態にまで破壊され、盾であり剣でもある御札入からも式符が散逸して、ばらばらと散っていく。
また彼女の被服や、長い三つ編みを束ねる髪留めは弾け、砕け散った翡翠のかけらが、雷光を受けてキラキラと輝いた。
「ぐッ……!」
「私ノ心配シテル場合カヨ、オ前サァ……頭オカシインジャナイノカ」
「何でかしらね……本当……いつもならこんなこと、無いのだけれど……あなたを最初見たときから、ずっと感じてた」
「気持チ悪イ……人間ッテノハ敵同士、女同士デモソウナルッテノカ？　非生産的ダナ……マァ、イイヤ。ソロソロ死ネヨ、一緒ニ地獄へ行コウジャナイカ」
ヲ級はそう言うと、竜巻の半径を狭くしてゆく。このまま己と雲龍を粉砕して果てるつもりであるのなら、最後まで邪魔の入らない、手の込んだ自決であるとも言える。
だが雲龍は慌てず騒がず、ゆっくりと立ち上がって、長い三つ編みの毛先…それを括っている短い紐を解いた。
雷光が天を走る。
「それはお断りさせて貰うわ。私はまだ、生きていたい……あなたにもう一度、会いたいもの……ねぇ、天城……」
首を振る雲龍。
ばらりとほぐれる三つ編み。
風に煽られ波を打つウェーブヘアから、碧い雷光をまとって顕現したのは、中に織り込まれていた、大量の式符であった。
「……!」

「ズルいだなんて言わないでよね。あなただって似た様なことをしているのだし……」
仲間を素材として艦載機に再生できるヲ級に対し、雲龍のそれは一度きりの緊急措置である。式符は雲龍の周囲を護るように廻り、やがて艦載機へと姿を変えてゆく。
更に言えば何かの制約があるのか、変化する艦載機のグレードはどれも低い。
だがそれらは各々、凄まじい機動力を得て雲龍の周囲を旋回する。
「理屈はわからないけれど、あなたは天城の……妹の魂を捕らえているのでしょう？　姉妹艦だけがわかる、何ていうのかな……魂の匂いで……そう感じるわ」
「アマ……ギ……？　何ヲ……言ッテル……？」
九七式艦攻へと姿を変えた式符は、雲龍が指さす先、ヲ級目掛けて突撃。
そして大量の爆弾を投下する。
「グッ……！」
目もほとんど見えなくなっていたヲ級であったが、それでも空気の流れや、音の推移で攻撃を察知したのか、すぐに迎撃をする。しかし先ほど雲龍にダメージを与えた時とは逆に、己の動揺をつかれたせいもあって、完全に防ぎきることは出来ていない。
「ハハハ……ヤリャアデキルンジャナイカ、オ前モサ……ベラベラクッチャベッテナイデ、サッサトトドメヲ刺シタラドウナンダ」
「そうね……」
頭部のユニットは完全に破壊され、ヲ級は左腕と右足を欠損した、ただの人間のような姿へと変わり果てていた。
それでも手にした杖を頼りに立ち上がり、雲龍を挑発してくるあたり、もはや何の恐怖も逡巡もないのだろう。恐らくは痛覚さえも彼女を阻むことはない。
しかし、結界を形成する艦載機の竜巻も、もうその勢いを保てていない。これが無くなれば、千代田と摩耶の攻撃が始まる筈だ。
「ドウシタ……私ハマダ……生キテルゾ……」

「……」
散発的に突撃させる艦載機ももう、雲龍の防禦を破るほどの力は無い。勝負はついた……そう思ったのか、雲龍はゆっくりとヲ級に近づき、その顔をまじまじと見た。
表情は先ほどと同じように、哀れみとも悲しみともつかない、複雑な表情である。対するヲ級は不敵な笑みを浮かべ、青白い歯を覗かせる。
ゴロゴロと空が鳴り、叩きつける雨が二人の間にも容赦なく降り注ぐ。
「アマギ……トカ言ッタナ、思イ出シタヨ……サッキ殺シ損ネタ、葛城ッテ泥船ノ仲間カ……ソシテ、オ前トモ関係ガアル艦ダロウ……ナァ、雲龍トカ言ウノ……」
「返してもらうわ、その魂……」
「ダカラサッサトヤレッッッテンダヨ……負ケタ奴ガ何モカモ奪ワレルナンテノハ、何処ノ世界デダッテアリフレテル話ダロ」
ヲ級は完全に戦意を失ったのか、艦載機も方々に散っては崩壊してゆく。
インカムに飛び込んでくる摩耶たちの声。しかし雲龍とヲ級が近づき過ぎているせいか、砲撃は来ない。
雲龍は無言で頷くと、上空に待機していた九七式艦攻に目をやった。降下が始まる。
その瞬間。
ヲ級が残った左足を崩壊させつつも、雲龍目掛けて飛び込んできた。口をまるでイ級の如く大きく開いて、雲龍の肩の辺りにぶつりと歯を立てる。
肉が裂け、鮮血が迸る。
「……くッ」
それを引きはがすでもなく、雲龍は空を仰いだ。降下を始めた九七式はコントロールを失って式符へと戻り消滅する。
「……惜しかったわね……動脈はこっち……」
最後の最後まで足掻いたヲ級。それに対し、雲龍は空を見上げ、ヲ

級を抱き留めては静かにそう呟いた。
そして肩に刺さったままだった葛城の打根を引き抜き、ヲ級の左目にそれを突き立てる。
「ガッ……！」
「われねがいたてまつる――九天応現雷声普化天尊――」
そこで、空を仰いだヲ級、そして雲龍の直上にある雷雲が光を放つ。
ひどくゆっくりとした認識の中で、それが落雷だとわかった瞬間にはもう、碧い雷が、二人の体を……その通り、雲燿の速さで。
駆け抜けていた。

午後１５：４５
「あーこちら摩耶だ。ヲ級は倒したぜ……ただ怪我人も出てるから、そうさっさとは戻れない。対応してくれ」
『ご苦労だった。色々と聞きたいこともあるし、処理しなければいけないこともあるが、まずはよくやってくれたと、そう言わせてくれ……本当に』
「よせよ気持ち悪イ！　あたしらは自分の仕事をしたってだけだ！」
ヲ級を倒してほどなく、雷雲は去り、雨も小雨となっていた。
落雷の直撃を受けた雲龍であったが、艤装のアースが上手く働いたようで、気を失いはしたものの、命に別状は無かった。
いや、実際のところは精密検査をせねばなるまいが、ともかく心拍があり呼吸もしているのだからとりあえず無事、という素人判断である。
対するヲ級は原型を留めずに崩壊、散華している。残っていた艦載機もそれと同じくして霧散。ここにヲ級討伐作戦は鹿屋・呉連合艦隊の勝利となったわけだ。
「それで、だ……提督。ヲ級の奴、『魂』を捕らえていやがった」
『ああ、こちらでも確認した……艤装経由でこちらにきたら、すぐに大本営に照合をしてもらうよ。結果はわかり次第連絡する』

散華したヲ級がいた場所に、ゆらゆらと揺蕩う青白い火の玉のようなもの。
さほど目にする機会はないが、かと言ってゼロでもないそれは、やがて雲龍を介抱していた千代田の艤装に溶け込み、そのまま消えてゆく。
「それはいいや。帰ったらゆっくり聞くさ、ああ。それじゃ……通信終わり」
摩耶はそう言ってインカムを切ると、改めて仲間たちを見た。
山城は夕立を支え、利根も疲労はあるようだが自分の足で海面に立って、周囲を警戒している。このまま敵の増援などが無ければ、沖縄近海に留まっている呉の部隊とも合流出来るだろうし、あるいは第三艦隊が曳航しにやってくるかもしれない。
あれほどの強敵を相手にして、死者が出ずに済んだのは幸運と言えるだろう。葛城、初月あたりは相当に危険だったとのことだが、それでもそうはならなかった。
摩耶は空を見上げて、ため息を一つつく。
生きているということを確かめるように、舌を伸ばして、雨粒を舐める。
「……疲れたなァ……」
肉体的な疲労もそうだが、精神的にも疲労が大きい。
何でもない海域の、何でもない相手だと高をくくっていた、朝の自分に文句を言ってやりたい。摩耶はそう考えていた。
「摩耶ー、雲龍起きたよ!」
しかしその耳に、千代田の安心しきったような声が届けば、考えにふける暇もなくなる。摩耶はおう！　と元気よく答え、二人のもとへと急いだ。

午後１７：２０
「改めまして、呉の皆さん。本当にお世話になりました」
神通、敷波、蒼龍、秋月、大潮、名取。呉の救援部隊六隻の前で、サ

ムソンは深々と頭を下げた。
彼女らがいなければ、最悪の事態になっていたかもしれないのだから、頭などいくら下げても足りないだろう。放っておけば土下座までしそうなサムソンを神通がなだめ、頭を上げさせる。
「以前、撤退支援をして頂いたのですから、貸し借りはありませんし、それに――そんなものが無くとも私たちは、出来ることならば何でも助け合っていければと、そう思います」
「理屈ではわかっています。しかし、それでも私は、あなた達に感謝をしてもし足りない」
「たっはー！　寒村中佐はちょっと真面目すぎるんじゃないの!?　じゃあさじゃあさ、あたしお礼にトンカツ食べたいなー！　なんて言ったらおぐっ!?」
場の空気を和ませようとしたのか、敷波が砕けた調子で言い出すが、すぐに神通の肘がその脇腹に突き刺さる。
くすくすと笑う呉の面々を見て、サムソンはようやく重苦しい表情を解き、僅かに笑みを見せた。
「これは気になさらないで下さい。呉の中でも屈指のお調子者ですから」
「いえ、頼もしいことです。今夜はここで休んで、明朝、呉まで戻っていただければと思います」
「そう、ですね……今から戻るとなると、ちょっとくたびれますねぇ」
蒼龍が確かに、と笑う。いくら可愛い後輩の血といえど、一張羅に付着しているのだから、洗い落としたいところだろう。
サムソンは一同を見回して頷いたのち、マイクを取っていくつか指示を出す。
「食事と、風呂。部屋。その他諸々用意させますので……大したもてなしでもありませんが、ぜひ」
「トンカツある!?」
「ええ、足柄がやる気満々ですんで、恐らくは食べきれないくらい出るかと思いますよ」

「やったよ大潮、秋月！　アゲアゲだよ！」
「それ私のセリフだよ！」
なんやかんやで司令室を出ていく呉の部隊を見送り、サムソンは椅子に深く座り込んでは、大きく息を吐いた。
入れ替わりに戻ってきた叢雲が、お疲れ様、と声をかける。
「色々と事後処理はあるけれど、まずは何からやるのかしら」
「そうだね……まず塚原少将にお礼を言って……呉の部隊の艤装メンテナンスと補給は今夜中……歓待は足柄たちに任せたけど、彼女本当に大丈夫なのかな」
大破して気絶までした足柄であったが、戻ってくるなり「祝勝会よ！」などと言いだすものだから、サムソンはその勢いに負けて、その全てを足柄に委任してしまっていた。
もっとも、矢矧や霞などといったしっかり者をつけたので、破綻するようなことはあるまいが、それでも不安は残る。
「ま、その辺は私も見ておくから安心して。それで、大本営は？　解放された魂についてはなんて？」
「ああ、どうも照合には時間がかかるらしくて、明日まで待ってくれって」
「そう……雲龍に聞いた方が早いかしらね」
手にしたタブレットとサムソンを見比べつつ、叢雲が言う。
その雲龍は戻るなり精密検査のため入渠ドックへとぶち込まれている。本人は平気だと言っていたのだが、独断専行の罰と、落雷に遭ってまともでいられる筈がない、と摩耶が判断したためだ。
「とりあえず、呉の面々がお風呂に入ってる間に、色々済ましちゃいましょ」
「ああ、そうしよう。しかし今日は本当に、長い一日になりそうだな……」
サムソンはそう言うと姿勢を正し、キーボードに手をかけた。

午後２２：０８

「……雲龍姉」
「あ、葛城。初月も」
壮絶な宴会から抜け出してきた葛城と初月が、ドック併設の医務室でぼーっとしていた雲龍を訪ねたのは、午後２２時を回ったところであった。
当の葛城も大事をとって修復剤を使用したが、精密検査の結果異常なしということが分かったので、祝勝会に参加していた。そこで初月と共に、雲龍を訪ねることにしたのだという。
「あなた達が無事でよかったわ」
「雲龍さんこそ。ヲ級にとどめを刺したってきいたよ」
持ってきた水を渡しつつ、初月が笑う。ヲ級に手ひどくやられた彼女だったが、サムソンが惜しみなく投入した修復剤のおかげで、もはや傷一つ残っていない。
「たまたま、落雷に助けられたってだけ。運がよかったってことね」
「なるほど……けど、運も実力の内だよね。やっぱり雲龍さんは凄いや」
談笑する姉と初月を見て、黙っていた葛城が口を開く。
「私は……かなわなかった」
「……え？」
「あいつに、勝てなかった。雲龍姉に、あれだけでかい口叩いておいて、勝てなかった」
昼間、蒼龍に吐露した思いを、葛城は再び口にした。
それは昨晩、言い争いになった時のことを言っているのだろう。しかし雲龍は何も言わず、葛城をただ見つめる。
「私が間違ってた。結局、自分ひとりじゃ何も出来ない、やれない……それなのに、調子に乗って……自分が恥ずかしい」
「それは、」
言いかけた初月を、雲龍が手で制する。そして立ち上がって、私物の入ったカゴから、何かを取り出して戻る。
「さっき、私が勝てたのは運だって、そう言ったけれど……それは違うわ。多分、これが守ってくれたからだと思う」

そう言って雲龍が差し出したのは、葛城の打根であった。黒く焼け焦げてはいるものの、原型は留めたままだ。
「それ……！」
「気絶しても手放さなかったんだって。つい、持って帰ってきちゃったわ」
「打根……、それでヲ級を？」
「と、言うより……これに、雷が落ちたの。だから、私はぎりぎりのところで、直撃を避けられた……葛城のおかげでね」
その言葉に、葛城がはっとした表情を見せ、そしてくしゃりと顔を歪めた。
「あなたが私を護ってくれたって、そう思えたわ。一人じゃないって、思った」
「雲龍姉……」
「それに、その葛城を護ってくれたのは、他の皆と…初月、あなたもでしょう。だから、一人ひとりの力は及んでいなくても……皆が必死になって、力を合わせて頑張ったから、私はある意味、こうしてここで話をしていられる」
葛城も初月も、言葉はない。しかし何を言いたいか、何を訴えたいかは最早、言わずともわかる。
「一人で何も出来なくても、皆といれば何かは出来る、そうでしょ。だからあまり、自分を責めるのはよしなさい」
「うん……うん」
「それでいいわ。きっとあの子も……そんな葛城を見たら、喜ぶと思う」
涙を必死で堪える葛城、そしてその背に手を添えて微笑む初月が、雲龍の言葉にそうだ、と口を開いた。
『魂』を解放したとあれば、その『魂』はサルベージされた船体のもとへ戻り、そして艤装として出力される。一体どの艦が……？　と、二人はそう尋ねた。
「確実にそう、だとは言えないけれど……きっと……天城……」

暗雲を払い、吹き飛ばした鹿屋に、新たな風が吹こうとしている。

それが吉となるか、凶となるかは、まだ誰にもわからない。

クリスマスだよ全員集合

クリスマスである。
アフリカでは一分に６０秒が経過しているというが鹿屋でもそれは同じだ。よってクリスマスは来る。
のちに「ヲ級改・甲型」と命名された強敵との戦いを終え、いつも通りの日々へと戻っていた鹿屋基地と艦娘たち、そしてサムソンも、クリスマスとあれば否が応でもテンションが上がっていく。
そして１２／２４の朝。
「飾りつけ担当は朝霜、清霜、矢矧と千代田。料理は足柄、山城、雲龍、霞、叢雲。買い出しは雪風、時津風、初月、比叡、隼鷹。磯風、夕立、摩耶、葛城、利根は状況に応じて各所の手伝い…と」
「しかし数日前にヲ級とやりあったばかりだっていうのに、もう皆やる気に満ち満ちてるなァ」
「私たちに気を使って、今年のクリスマスは無しです、って言い出したら、それこそ暴動でも起きるんじゃないかしら」
鹿屋基地の喫煙室で、クリスマスパーティの計画書を片手に、サムソンは煙草に火を点けた。
隣には足柄がいて、その計画書を覗き込んでいる。
「な、なんで……？」
「何だかんだ言っても、こういうイベントは大事でしょう。特に、クリスマスみたいな大イベントは」
「それは、わかるけども」
艦娘たちは深海棲艦に奪われた、ごくありふれた日常を取り戻す為に戦っていると言っても過言ではない。
戦いだけの日常もやむなしだとは考えるが、それでもせめて、節目節目のイベントくらいは楽しみたいと思うものだ。
ましてや遊びたい盛りの年齢を、お国のために捧げているのであるから、そこを鑑みてやるのもサムソンの務めだろう。
「ま、やるって言った以上腹を決めなさいな。それより、利根がサンタの恰好するって言ってたのは聞いた？」

「あァ、言ってたね……じゃ、サンタはサンタらしく、夜中に駆逐艦たちにプレゼントを配ってもらおう。去年は比叡にやってもらったし」
「そこは提督の役目じゃないの」
足柄が顔を背け、煙を吐き出しつつそう言った。サムソンは苦笑しつつも、上を向いて煙を吐く。
「足柄は僕を犯罪者にでもしたいのかい」
「それ毎年言ってるわね。けど彼女らだって、性犯罪者とサンタの区別くらいつくでしょうよ」
「まるで僕が性犯罪を犯すような言い方はやめてくれ。君だから言うが、小さい子に欲情するような性癖は持っていないよ」
足柄とサムソンの距離は、意外と近い。彼もわりと遠慮なしに下ネタを言うし、足柄もそれを嫌悪の対象にしたりすることはない。同じ喫煙者同士、こうやって喫煙室で打ち合わせをしていればそうもなろう。
しかしサムソンは、駆逐艦は勿論のこと、部下に手出しするほど迂闊な人間ではないのだ。甲斐性がないとも言える。
「小さい子ねぇ……確かに、アサキヨや雪風ときつ、霞なんかはそうでしょうけど。叢雲はあれで結構オンナの体してるし、磯風や夕立は脱ぐと結構出るとこ出てるわよ」
「そういう情報はいいよ……で？　君はどうなんだ、彼氏の一人でもいないのかい」
「う、うるさいわねぇ……私は任務が恋人なのよ。それに、鹿屋基地の風紀を乱す要素は極力排除しないと」
艦娘とて人間であるから、当然恋愛感情というものはある。外部との接触が全くない、というならともかく、休日に市街地へ出たりも出来る関係上、恋人の一人やふたり、出来ても不思議ではない。
だがここ鹿屋に限って言えば、そういった浮ついた話がある者は一人もいなかった。一般人に見る目がないのか、あるいは艦娘だからと遠慮しているのか、彼女らがそうしないだけなのか、それは判らない。サムソンもサムソンで、必要以上にプライベートに踏み込むことが無

いので、この件はそれ以上の発展が無いのである。
「別に、節度を守った交際なら、禁止はしていないんだよ」
「まだ続けるのその話……やめやめ、はい、おしまいおしまい！　んで？　プレゼントは用意したの？」
「そりゃあね。全員分と、プレゼント交換用の」
サムソンが配るものは、不平等にならないよう、全員に同じ物を用意する。そしてそれとは別に、プレゼント交換用にサムソンズチョイスが一品。
これが艦娘達の間では秘かに評判がいい。一昨年は『人間をダメにする座椅子』であったし、去年は美肌成分の出る加湿器であった。それぞれ摩耶と叢雲がゲットし、大いに喜んだという実績がある。
「そ、ならいいんだけど。去年貰った手帳、ちゃんと使ってるわよ」
「それは何よりだ。さて、今日は仕事も早々に切り上げて、準備をしなきゃあな」
「つっても提督はする事無いわよ」
「だからって尻で椅子を磨いてるのもな……買い出しの車を出そうか」
「比叡がもうトラック野郎になって出てったわよ」
それを聞いたサムソンは一瞬動きを止め、目を天井へと向けて煙を吐く。
足柄もわかっているのだろう、所在なさげに髪の毛をいじる。
「……安全には気を付けるよう、きつく言っておいたから、平気よ」
「……だといいんだが」
※その頃の比叡たち
「ヒャッハァアアアア!!　１８０km出せェエエエアアア!!!」
「そーれシフトアップシフトアップ！　魂まで風になれェエエエエエ!!」
「ねー雪風ー、こういう時、何て言うんだっけ？」
「サラマンダーより、ずっとはやい！」
「……！」
初月は気絶した。

そして夕方。
厨房は大わらわであった。
「カツは１００枚でいいかしら、いいわよね！」
「いい訳ないでしょうが！　２１人で割ると一人５枚計算になるじゃない！」
「でも冷凍しとけばいいし…」
「だったら冷凍庫に入ってるトンカツ使いなさいよ！　呉の子達が持って帰ったって、まだ５０枚くらいあるんだから！」
「冷凍は非常用なんだけどなァ……」
から揚げを仕込む霞と、業務用のサラダ油を抱えた足柄がやり合う横で、山城は黙々とふかしたジャガイモを潰している。
叢雲と雲龍はケーキのスポンジやクリームの仕込み、フルーツのカットに忙しいらしく、その騒ぎには加わらない。
「霞、丸鶏がオーブンに入ってるからね。から揚げもそこまで大量には要らないわよ」
「わかってるわ、ていうか山城もそんなにジャガイモ要らなくない？」
「ポテトサラダは美味しいからいいのよ」
「その理屈が通るならトンカツだっていいじゃない？　トンカツとはトンに且つ…即ち己に且つことよ？　それを食べちゃうのだからつまり、何かに勝った気になれ」
「足柄うるさい」
キウイフルーツの皮を剥く叢雲の一言で、足柄は一旦黙る。しかし数分後にはもう、冷凍庫からトンカツを取り出しては、サラダ油を熱し始めた。
「山城は本当、料理が上手よね」
ケーキの下ごしらえを一区切りさせた雲龍が、ポテトサラダに投入するタマネギやニンジンを刻みつつ、そう尋ねた。
山城はふふ、と軽く笑い、オーブンの扉を開けては、中を覗き込ん

だ。そして焼け具合を確認して、立ち上がる。
「実家がね、レストランやってるのよ」
「へぇー……って、言っていいの、それ」
「別に隠すことじゃないから。父親と兄も料理人でね、ついでに言うとお爺ちゃんも」
「そうなんだ。道理で何作っても美味しい訳だわ」
凄まじい速度で形成されるタマネギとニンジンの山を見つつ、山城は笑った。足柄は揚げ物専門だし、霞と叢雲はそこまで専門的な料理を作れる訳ではない。雲龍もどちらかと言うと仕込みが上手いだけで、山城には及んでいない。
だが山城はそれを誇ったりはせず、皆でこうして料理が出来るということを、常に楽しんでいるようだ。
「まぁ、食べさせる男の人が、提督だけっていうのがちょっと寂しい気もするけどね」
「おッ、山城先生はフリーなのかしら」
「山城は美人なんだし、本気出せば男の一人や二人、いちころころりなんじゃないの」
提督、というワードに反応し、足柄や叢雲が話に乗ってくる。規律や風紀がどうのと言っても、何だかんだでそこは女子であった。霞や雲龍もそれに乗じて、普段は物静かで落ち着きのある山城をいじり始めた。
「別に、そういうのはいいわ……今は」
「今は？　ふふン、アレかぁ、『私この戦争が終わったらケッコンするんだ…』ってやつ？」
「縁起でもないこと言うんじゃないわよ足柄！　アンタはおとなしくカツ揚げてなさいな！」
「ヒャアゆるしがでた！　あげるわ！　めっちゃ揚げるわ！」
言質をとったとばかりに足柄は笑い、目を輝かせてフライヤーにサラダ油を投入し始めた。
「そう言えば話は変わるけれど、天城……どうなの？」
ふと、山城が雲龍に尋ねた。

そこにいた全員が手を止め、雲龍を見る。先のヲ級討伐戦において、鹿屋の部隊は一つの『魂』を解放している。未だ顕現していない艤装はいくつかあるが、照合している筈の大本営から、それがどの艦艇であるかという報せは、届いていない。

「正式に情報が届くまでは、はっきりとは言えないけど……私は、天城だと思う。違ったら謝るしかないけれど」

「や、別にそんな事は言わないわよ。あなたや葛城が来た時は、案外すぐに結果がわかったから、おかしいなって」

雲龍と葛城の両名の艤装が、『建造』ではなく『解放』で顕現しているのは以前にも述べたが、その時は大本営からの答申がすぐに戻ってきたことを、山城は記憶していた。

彼女はそれを考慮した上で、雲龍に尋ねているのだろう。

「なにか、不具合があったのかしら」

「うーん……どうだろう。でも、待つしかないわね」

「それもそうね……さて、それじゃあちゃっちゃと仕上げちゃいましょ」

鹿屋基地・大食堂。

「矢矧さん、高いとこお願い！」

「任せて。じゃあ清霜はツリーに飾りをつけて頂戴」

「はーい！　ツリーを戦艦にしちゃおう！」

様々な飾りを、今朝届いたモミの木に括り付けていく清霜。金メッキでコーティングされた徹甲弾、三式弾のレプリカや、電探や艦載機、魚雷などの飾りが楽しい。

そこにテーブルなどの飾りつけを終えた朝霜と千代田が加わって、場は更に賑やかになる。

「いやー、あたい正直ドキドキしてたんだよ。一昨日ヲ級とやりあったばかりでさ、皆ボロボロで帰ってきたろ？」

「クリスマスが中止になるんじゃないかって？」

ミニチュアの流星でブンドドしていた清霜と千代田が、その言葉に

反応して振り返る。
確かに艦隊が受けた被害は無視できないものであったが、それでも戦死者は出なかったし、重篤な後遺症が残った者もいない。であればいつも通りの日常に戻るのが道理であろう。
朝霜はそれが嬉しいようで、興奮しつつテーブルを拭く。
「そうだよぉ。あたいだって馬鹿じゃないさ、そういう雰囲気じゃなかったら、おとなしくしてるつもりだったんだ」
「まぁ、ね。でも皆楽しみにしてるし、やれてよかったよね」
「でもさー、そのヲ級みたいなのが、これから先も出てくるかもしれないんでしょ？　それってしんどくない？」
この四人の中で実際に対峙したのは千代田だけであるが、皆記録映像で見ているので、ヲ級の強さ、理不尽さについてはある程度の理解を得ていた。
今までそういった強敵が攻勢を仕掛けてくるのは、いわゆる大規模作戦の折だけであったのに、これからはもっと本土に近い海域においても、強力な敵が出てくるのではないかという、清霜の懸念ももっともだろう。
しかし千代田は大丈夫だよ、と前置きをして、清霜の頭を撫でた。
「皆や司令官も言ってることだけどさ、全員で力を合わせてやれば、きっと大丈夫だよ」
「そりゃア、そうだろうけど」
「だからまぁ、今はそのことは置いておいて、そろそろ出来上がってくる料理の味見と行きたいところだね」
人一倍食いしん坊な千代田がそう言えば、食べ盛りの清霜と朝霜も、これから先のことなど途端に忘れて、目を光らせる。
だが真面目な矢矧がそれを見逃すはずもなく、一同は粛々と飾りつけの続きをすることになる。

「さて、と……」
書類の束を整理し、サムソンは一人呟いた。

必要なデータを大本営に送信し、ＰＣをシャットダウンする。司令室はがらんとして寂しいものだが、今夜はクリスマスパーティである。ヲ級の件もあってどこか張り詰めていた空気も、酒やら料理やらで、いくらかは柔らかくなるだろうか。

サムソンはそう考えつつ、人数分のプレゼントを入れた段ボールと、プレゼント交換用のプレゼントを持ち上げる。

「う、意外と重い」

サムソンはすぐに段ボールを机に置き、一息つく。腰というのは一度やるとクセになるため、細心の注意を払う必要がある。

彼の腰は幸いにしてまだ平常であるが、それでも３０代半ばに差し掛かろうとしている肉体を抱え、臆病になるのも無理のない事であった。

「よっこら……晴嵐！」

しょうもないダジャレを言いつつ、サムソンは段ボールを持ち上げる。腰に異常は無い。

そんな折、司令室のドアが開いては、磯風が入ってきた。おそらくは準備が出来たのだろう。

「提督、準備が整ったようだぞ」

「ああ、今行こうとしてたんだ。すまんが磯風、この上に乗ってる……小箱を持ってくれるかい」

「いいのか？　それはプレゼント交換用の一品だろうに」

「なにか問題が？」

磯風はにやりと笑い、小箱を手に取る。そして僅かに振ったり、眺めたり、匂いを嗅いだりと怪しげな動きを見せた。

「……重さは約１ｋｇといったところか……梱包がしっかりされており、匂いも無いところを見ると、洋服や食品の類ではないな」

「あ、そ、そういうことか！　推理するんじゃないよ！」

「デジタル系の何かと見たがどうかな……」

「当たった人に聞くんだね。何だったら磯風が当ててもいい」

「ほう……」

磯風は再び笑うと、サムソンが抱える荷物からもう一つを手に取

り、よっこら晴嵐、と肩に担ぎ上げた。
「功徳を積んでおくとしようか」
「現金な子だよまったく！」

その後のクリスマスパーティはつつがなく、賑やかに行われた。恒例となった物真似や歌なども大層盛り上がり、基地の士気は否が応にも高まりを見せた。
そして件のプレゼント、サムソンズチョイスな一品はというと、急遽積まれた功徳が功を奏したのか、本当に磯風が引き当ててしまうという離れ業をみせる。
「ウホッホッーイ！　どうだこの引き！　頂点は常に一人！　この磯風だッ！　依然変わりなくッ！」
「ジョジョ好きそうな声しやがってよー！　んで？　何入ってんだよソレ、開けろ開けろ」
「結構小さいからのー、おそらくはデジカメとか、タブレットあたりのデジタルな何かじゃなかろうかの？」
「わからないわよ、一日外出券だったりして」
「申請出せば外出させてるでしょ！」
はやし立てる中で、磯風はうやうやしく包み紙を開け、中から箱を取り出していく。
「こっこれは……！」
「……なに？」
「ＰＳＰＧＯ……!?」
場の空気が一瞬で凍り付く。
その後に向けられる、冷たい視線。いや、それが何であるかわかっていない艦娘もそれなりにはいて、残酷とまでは行かないものの、それでも世界はサムソンに対して辛辣で酷薄であった。
「え、いや……それ結構レアなものでね……僕が学生の頃、買ったままにしておいたものを……だね……」
「……提督よ」

「大丈夫大丈夫、ちゃんと動くから……ソフトも入れておいたからね。えーっと何だっけこれ……」
「オイオイオイ　いくらなんでもＰＳＰＧＯはねぇだろ提督ゥー！　今の何だっけ？　最新機種ならともかくさ」
「そうよね……」
だがそこで、磯風が今までに見せたことのない表情で、サムソンの肩を叩く。
「……い、磯風？　悪気はないんだ。でも期待させたのだったら……」
「ありがとう提督サンタよ……。ずっと欲しかったんだ、これ……」
満面の笑みを浮かべた磯風を見て、一同が……サムソンですら、呆気に取られる。
そうか、欲しかったか……欲しかったのなら何も言うまい……そんな優しくも生暖かい空気の中、クリスマスパーティは終了となった。

皆が引き上げ、残った年長組とサムソンは後片付けを済ませて、一息つく。
「しかし、今年もパーティやれてよかったな」
「そうだね。さて、それじゃあ改めて、君達年長組には知らせておくけれど……」
コーヒーの入ったマグカップを置き、サムソンが摩耶、利根、隼鷹、比叡、足柄、雲龍を見る。
それまでとは違った雰囲気のサムソンに、皆が背筋を伸ばして静まる。おそらくは、と予想はしているようであるが、聞くまではわからない。
「大本営から通達があった。先日ヲ級を倒したことにより解放された、艦魂の正体だが」
「ああ、やっぱもう来てたのか」
「そうだ。雲龍の話の通り、雲龍型航空母艦・天城……だそうだ」
その言葉に、雲龍がうんうんと、とても嬉しそうに、頷く。

しかしサムソンの表情は冴えない。何か、含むところがあるようにも見える。
「慣例により、天城はうちで預かることになる。しかし、だ……武蔵ももうすぐ、ここ鹿屋へとやってくる訳でね」
「なにか問題があるとでも？」
「ああ。戦力が集中しすぎる」
そこまで聞いて、一同が顔を見合わせては、あれやこれやと話を始める。
そして、まさか、と。
「戦力の足りていない、他の基地、泊地へと……こちらの人員を回すことになる」
「ふむ……」
「え、ってことは……」
「そうだ。都合三隻、鹿屋から転属させることが、決まった」
それはクリスマスプレゼントと言うには残酷で、辛いものだ。
しかし、軍属の定めでもある。
過去に鹿屋から転属していったもの、また鹿屋へと編入されてきたものもいるが、だからといって別れの辛さが無くなる訳ではない。
「そうか……」
「人選は、どうなっているんです？」
「大本営から示されたモデルケースとしては、千代田、隼鷹、山城または比叡。この三名が望ましいと……いうことだ」
２０ＸＸ年も、残すところ一週間。
出会いと別れの風が、吹こうとしていた。

おさいじゃったもんせ、鹿屋基地・前編

これまでのあらすじ
大和型戦艦二番艦・武蔵の着任が決まった鹿児島県は鹿屋基地。
代わりに転籍していった山城、隼鷹、千代田との別れ。そして春を待つ鹿屋の艦娘達……彼女らの日常は穏やかに、時に激しい。

◇

「フゥ――――ン!!」
各鎮守府に贈られてきた、ダイキャスト製の瑞雲でブンドドする、本日の秘書艦である朝霜。
瑞雲がそんな動きをしてたまるか、といったマヌーバをしながら、朝霜は作戦室を走り回る。
「清霜のヤツは戦艦になりたがるけどよぉ、アタイは瑞雲になりたいと感じるな」
「ン……夢のある話だな……それはそうと朝霜君、危ないから走り回るんじゃあないよ」
「艦娘がコケたりぶつかったりした程度でケガするかよぉー!」
「家具が壊れるからね!? あんまり落ち着きがないと摩耶を呼んでくるけど……」
「はー!? なんでそういう事言うかねえ提督はさぁ! アタイが摩耶さんにびびって大人しくなるって、出会ってからもう結構経ってンのにさ、ワンパよワンパ!」
良くも悪くも子供らしい朝霜が、瑞雲を宙返りさせつつ、サムソンに噛みつく。
こういった艦娘達の相手は、彼女の言う通り慣れたものであるが、だからといって毎度毎度効果的に諌めることは出来ない。サムソンは手元の受話器を無言で取り上げ、ニヤリと笑った。
「あ、ちょ! 良くないぜ提督、良くないと思うぜアタイはさ!」

「ワンパですまんね。まぁ別に足柄でもいいんだけどさ」
「ガミガミオババとの二択かよ！　わかった、わかったよ……はい、瑞雲着水しましたよーっと」
さすがに足柄と摩耶の威力には怯えたのか、朝霜は瑞雲を所定の位置に戻しては、己の席についた。
しかし彼女に、秘書艦としての仕事を完璧にこなす技量はない。手紙を読んだり、片付けなどは出来るものの、それだけである。
だがサムソンは、固定の秘書艦を用いることはしていない。多少の不便があっても、それを踏まえて、皆と仕事をする……それが彼の信条でもあった。
「オババとか言うんじゃないよ、彼女まだ若いんだから」
「そうかねえ？　アタイらピチピチのギャルからしてみりゃ、あのくらいのチャンネーは皆オババだろ」
「それ僕以外に言うんじゃないぞ……血尿出るまで訓練させられるよ」
「うへえ」
そうこうしているうちに、日は傾き、日中業務が終わる。
朝霜は迎えにきた清霜と連れ立って、風呂へと行ってしまった。サムソンは胸ポケットから煙草を取り出してはくわえ、喫煙室へと歩いて行く。
そして途中すれ違った利根、天城らと二言三言交わして、室内へと入った。
「ふー……」
「ぺェ～ポニ～みんななかまなぁんだぁ～……っと、あら提督」
「何その歌……」
入ってきた足柄はその問いには答えず、加熱式タバコの吸い口を銜える。
「ふぅ……」
「天城は大分、慣れてきたみたいだね」
「あァ、そうね。雲龍と葛城に面倒見て貰ってるから、まぁ正空としての仕上がりはまずまずになるんじゃないかしら」

「隼鷹たちの抜けた穴は、そこまで心配せずともいいか？」
「ン……私には断言できかねるけど、ね。雲龍型三姉妹、はべらせてンだから、ドンと構えておきゃあいいのよ」
意図してのことか、あるいは天然か。足柄の言葉に、サムソンが若干ではあるが眉根を寄せる。
「侍らせてる、っていうのは心外だな……」
「そお？　提督だっていつまでも着任したてのボウヤじゃないんだから、ある程度は図太く生きてもいいんじゃないの」
今日の足柄はどこか意地悪な物言いをする。こういう時は波風を立てず、穏やかに返すのがサムソンのやり方である。
彼は部下、あるいは大事な戦友である艦娘達の扱いについては、細心の注意を払って接してきた。
「僕はそういうガラじゃないって、長い付き合いなんだからわかるだろう」
「甲斐性なしともいえるわね。女ってのは意外と、グイグイ行く男も嫌いじゃないのよ」
「……君もか？」
足柄はふうっと煙を吐き出しては、目の前にいる男を見た。
「そうねえ……この戦いがいつ終わるか、それは判らないけれど……もしそうなったら、提督の横に立っていたいって気持ちはあるわ。それがこの先、膨らんでいくのか、萎んでいくのかは……判らないけど」
「あ、うん……そ、そうか」
迂遠なのか、直球なのか、ともあれ足柄の表情に嘘は感じられない。サムソンは若干どもって、答えるのが精いっぱいであった。
「ふふン……なんちゃってね。はぁさて、今日は演習だなんだで疲れちゃったから、部屋に戻るわ。また明日ね、提督」
「ああ……お疲れ様、足柄」
サムソンは腕を組んで、中空を見据える。
この基地において、男性は彼一人だ。出入りの業者はあれど、艦娘を口説くといった行為に及ぶものは、今のところ報告されていない。

禁止されているわけでもないのだが、艦娘は皆、国防の為に身を捧げた乙女たちであるから、手を出そうものならおっかない憲兵さんたちがやってくるのだと、そう思われているのだろう。
「ふふ、僕がそういうガラかね」
下世話な言い方をすれば、ハーレムである。
だが女というものは怖い。誰か一人を重用し、あるいは恋愛関係などにもつれこんだとして、それがどんな悪影響を及ぼすか。
さればこそ細心の注意を払って彼女らと接するわけである。
そんなサムソンの心に、足柄の言葉は不思議な波紋を起こした。
いつの間にか燃え尽きていた煙草を捨て、彼は喫煙室から出る。
冬の空はいつしか暮れて、星が瞬き始めていた。

◇

翌朝。
「さて、今朝みんなに集まってもらったのは他でもない」
「ボーナスでもくれるのか？」
磯風の言葉に苦笑しつつ、サムソンは部屋の灯りを消し、手元のPCをいじってスクリーンに映像を映し出した。
「お……？」
「見て貰えばわかると思うが……」
「まさか、それが武蔵……か？」
「マジで!? えっちょっと待って超かっこよくない!?」
「すごい服装っぽい！」
映し出された一人の艦娘の姿に、皆思い思いの反応を示す。
確かに、露出された豊かな胸部はさらしが巻かれているだけだし、スカートの丈も長門や陸奥もかくや、といった短さだ。
しかし背負った艤装は並大抵のものではなく、それについて隣の者と話す艦娘もいる。
「はいはい静かに。ともかく、これが武蔵だ。僕もつい先日この資料を貰って見て、まぁそれは驚いたよ」

「眼鏡褐色サラシ巨乳巨女とかちょっと盛りすぎじゃない？」
「いや巨乳に関してはうちには雲龍がいるから大丈夫だろ」
「……なに言ってるの摩耶さん？」
「ていうか摩耶もデカいじゃろ」
「あたしはそこまでデカくねえよ！　こんなタッパもねえよ！」
女子が一堂に会せばこの騒ぎである。サムソンは再び制しつつ、続ける。
「大和型超弩級戦艦二番艦・武蔵。佐世保での基礎訓練がもうすぐ……今週中には終わるとのことだ。あとは艤装の最終調整を済ませれば、晴れてこちらへの着任とあいなる」
「聞いちゃいたけど、いざ本番となると、やっぱりこう……わくわくするわね」
「疋田司令によれば、彼女は何というか、武人のような性格らしい。しかしその性能を鼻にかけたり、周囲を下に見るようなことはないという。まァ、どこだってそうだろうが、協調性は大事だからね」
サムソンは語りながら画像を切り替えていく。
「これは模擬戦の様子だ。４６砲が標準装備であるから、超長距離からの砲撃が期待できる」
「マジかよすっげえな!!」
「比叡さんと二隻体制でいけるね？」
「ひぇ～……負けないようにしないと」
そんなこんなで全ての映像を見たのち、サムソンは灯りをつけ、着席する。
「さて、それで……だ。全て終えた武蔵は、本来ならば軍の輸送機でこちらに来る手筈となっていたんだが、僕は一つ提案をしたんだ」
「どんなー？　佐世保土産持ってきてー？　とか？」
「佐世保名物って何だろう……？」
「バッカおめえ初月、佐世保バーガーに決まってんだろ？」
「レモンステーキも有名ですよね」
あれ食べたいこれ食べたいの応酬になりそうなところを大げさなリアクションで制し、サムソンは無理矢理に話を続ける。

「佐世保からこの鹿屋まで、海路で来てもらうことさ」
「ほうほう」
「船あったっけ？」
「何処の基地にも高速艇はあるでしょ」
「いやいや……君ら、艦娘だろう？」
「ああ、なるほど！」
「そう。戦艦ゆえ遠征に出て貰うことはそう無いだろうけども、それでも慣熟訓練は必要だ。だから、佐世保で艦隊を組織したのち、ここらの海域に明るい君達が先導して、ここまで戻ってくる」
その提案に、皆がざわめく。
無茶なことではないが、前例があるかと言われればそうでもない。
「疋田司令にその旨伝えたところ、是非やるべきだと言ってくれた。一足先に、武蔵と我々の交流にも役立つだろう」
「なるほどなぁー」
「だが、ぞろぞろと皆で行ったところで意味は無いから、武蔵を含めて4隻。つまり僕の佐世保行きに、君達の中から3名同行してもらうことになる」
察しのいい者はなるほど、と首肯したのち、やがて足柄が眼を輝かせて立ち上がった。
「……日帰りじゃないわよね？」
「疋田司令曰く、ささやかではあるが、歓待の用意をするとのことだ。つまりまァ、一泊二日だね」
「期せずして佐世保旅行ってことですか！」
「遊びではないけどもね！」
今までで一番の盛り上がりを見せる一同。しかし、サムソンは『3名』の部分を強調しては釘を刺す。
このままでは全員が佐世保に行くと言い出しかねないからだ。
「じゃあじゃあ、どうやって決めるっぽい？」
「ンなもん腕相撲に決まってんだろ」
「はい摩耶勝手に決めない。提督が選ぶの？」
「いや、僕が選んでは不公平だ。ここは公平に、くじ引きでいいかと

思うが」
そこで皆が、ある一人を注視する。
そう、雪風である。
「え、あの……？」
「くじ引き無敗の女雪風は内定として……」
「雪風はパーでチョキに勝つからのー」
「雪風がチョコボール買わないのは金のエンゼルを見飽きたからだからね」
「雪風はガリガリ君で外れたことがないからな」
こと運が絡む事象に、雪風は無類の強さを発揮する。
彼女が魂を受け継いだ駆逐艦のことを考えれば、得心のいくことではあるが。
しかしそれをあまり意識しない雪風は、周囲の羨望混じりのからかいに、目を白黒させてサムソンに助けを求める。
「こらこら！　雪風を困らせるんじゃないよ君達ィ！　はいじゃあ、今からクジ作るから！　この紙をこうして切って……それぞれの名前を書いて……と。霞は岩川に出向中でちょっと残念だね」
サムソンは書いた紙片をボードに張り付け、皆に確認させる。
比叡　足柄　摩耶　利根　雲龍　天城　葛城
矢矧　朝霜　清霜　雪風　夕立　若葉　磯風
初月　叢雲　時津風
鹿屋所属の艦娘たちは現在１７名。強敵であるヲ級改・『甲型』との戦いののち加入した天城。そして転籍していった山城、千代田、隼鷹のかわりに、武蔵が参加することが決定しているわけだ。
「以上１７名。漏れはないね」
「この磯風は異名を２５６通り程持っているのだが」
「漏れはないね！　はいじゃあこれをえーと……何か入れ物……」
「箱ティッシュならあるけど」
「カイジかよ」
ティッシュは満載だったので、サムソンはとりあえず己の軍帽にその紙片を四つ折りにして入れ、がさごそと振り回したのち、机に置い

た。
「はい、じゃあこれを誰か……手の空いてる妖精さんに引いてもらおうか」
程なくして、家具担当の妖精さんがとことことやってきて、ふわりと机の上に乗る。
彼女は皆の期待の眼差しを受け、初めは戸惑っていたものの、サムソンから説明を受け、笑顔で頷いた。
「はい、ではよろしくね。まずは一人目から――」
佐世保へと向かうのは、果たしていずれの艦娘か。